

新しいラテン語文法

Cornell University, Goldwin Smith Professor of Latin

CHARLES E. BENNETT 著

*Quicquid praecipies, esto brevis, ut cito dicta
Percipiant animi dociles teneantque fideles:
Omne supervacuum pleno de pectore manat.*
— ホラティウス *Ars Poetica*

序

この本は、1908年に刊行された前版を改訂したものです。小さな変更はいくつかありますが、大きな差し替えはありません。ラテン語の起源と発展に関する導入を書き足しました。意欲の高い学生が面白く読め、ためになれば幸いです。本の最後には、構文の章で使った例文の引用元の索引をつけました。

C.E.B.

ITHACA, NEW YORK,

1918年5月4日

第二版序

この本は、もともと 1895 年に刊行された拙著「ラテン語文法」の改訂版です。より正確で詳細な言い方が可能なところは、そのように努めました。音節分割の規則は、ローマ人たちが使っていた、一般的なやり方に沿うように変更しました。接続法完了能動態の語尾 *-is*, *-imus*, *-itis* は、長母音の記号をつけました。語尾 *-gnus*, *-gna*, *-gnum* の前の母音の長さについての規則と、*j* の前の母音の長さについての規則は廃止しました。構文の章では、随伴の奪格という区分を一つ加えました。また初版にあった、禁止の時制の意味合いの原則は、削除しました。上記のほかは、本質的でない小さな修正だけです。この本の基本の流れはそのままです。

ITHACA, NEW YORK,

1907 年 10 月 16 日

初版序より

この本の目的は、ラテン語文法の「本質的な部分」を、直接的に、簡潔に、そして学問的な標準に沿う最小の範囲で解説することです。主な対象読者は中等学生ですが、大学生の需要も無視せず、学部課程で通常要求される程度の文法を盛り込むようにしました。

近年、外国の教育においては、ラテン語の学校文法の量を制限する方向にあり、250 ページの小型の教科書にラテン語の主要な規則を詰め込むという需要が生じました。ここ 10 年、これを対象にした文法書が海外でいくつか現れました。そしてそれらは、この厳しい要求に十分に応えています。

この国においても、今、同じ意図・対象を持った文法書を刊行することは、十分理にかなっていると思います。近年刊行されているすべての古典の本は、特別な慣用句の文法と個々の作家に固有の流儀を最初にまとめてくれているからです。ですから学生に文法を教えるときには、たくさんの「細かな」事項を列挙することは省略可能です。

韻律論の章において、ホラーティウスとカトゥルスの韻律の特別な扱いを、私は意図的に省きました。喜劇作家の韻律についても同様です。この国で標準的なすべての古典の本は、韻律形式について完全な解説を行ってくれています。ですからここで別に解説を繰り返すことは、冗長に思えます。

ITHACA, NEW YORK,

1894 年 12 月 15 日

目次

はじめに — ラテン語	11
第 1 章 インド・ヨーロッパ語族	11
1.1 アジアのインド・ヨーロッパ語族	11
1.2 ヨーロッパのインド・ヨーロッパ語族	12
第 2 章 インド・ヨーロッパ語族の発祥の地	13
第 3 章 ラテン語の発展	14
第 4 章 ラテン語のその後	17
第 I 部 発音、アクセント、音節の長さなど	18
第 5 章 発音、アクセント、音節の長さ	19
5.1 アルファベット	19
5.2 音の分類	19
5.3 文字の発音	20
5.4 音節	21
5.5 音節の長さ	21
5.6 アクセント	22
5.7 母音の変化	22
5.8 子音の変化	23
5.9 正書法の注意点	24
第 II 部 屈折	25
第 6 章 曲用	27
6.1 名詞	27
6.2 形容詞	46
6.3 代名詞	60
第 7 章 活用	66
7.1 動詞の語幹	67

7.2	四種類の活用	67
7.3	sum の活用	68
7.4	第一活用 (ā-活用)	69
7.5	第二活用 (ē-活用)	73
7.6	第三活用 (子音活用)	77
7.7	第四活用 (ī-活用)	81
7.8	-iō で終わる第三活用動詞	85
7.9	異態動詞	88
7.10	半異態動詞	89
7.11	迂言的活用形	90
7.12	活用の注意点	91
7.13	動詞の語幹の作り方	92
7.14	重要な動詞とその主要形	94
7.15	不規則動詞	107
7.16	欠如動詞	114
7.17	非人称動詞	117
 第 III 部 不変化詞		 118
第 8 章	副詞	120
第 9 章	前置詞	121
第 10 章	接続詞・間投詞	123
 第 IV 部 語形成		 124
第 11 章	派生語	125
11.1	名詞	125
11.2	形容詞	127
11.3	動詞	128
11.4	副詞	129
第 12 章	複合語	130
 第 V 部 構文		 132
第 13 章	文	134
13.1	文の分類	134
13.2	疑問文の形	134
13.3	主語と述語	135
13.4	単文と複文	135

第 14 章	名詞の構文	136
14.1	主語	136
14.2	述語名詞	136
14.3	同格語	137
14.4	格	137
第 15 章	形容詞の構文	159
15.1	形容詞の一致	159
15.2	形容詞の名詞的用法	160
15.3	副詞的な意味をもつ形容詞	161
15.4	比較級・最上級	161
15.5	そのほかの留意点	161
第 16 章	代名詞の構文	163
16.1	人称代名詞	163
16.2	所有代名詞	163
16.3	再帰代名詞	164
16.4	相互代名詞	164
16.5	指示代名詞	165
16.6	関係代名詞	166
16.7	不定代名詞	168
16.8	代名詞的形容詞	168
第 17 章	動詞の構文	170
17.1	一致	170
17.2	態	171
17.3	時制	171
17.4	法	176
17.5	動詞の名詞形・形容詞形	200
第 18 章	不変化詞	209
18.1	等位接続詞	209
18.2	副詞	211
第 19 章	語順と文構造	212
19.1	語順	212
19.2	文構造	215
第 20 章	ラテン語的なスタイル	216
20.1	名詞	216
20.2	形容詞	217
20.3	代名詞	218
20.4	動詞	218
20.5	対格の注意事項	219

20.6	与格の注意事項	219
20.7	属格の注意事項	220
第 VI 部 韻律論		221
第 21 章 韻律論		223
21.1	母音の長さ・音節の長さ	223
21.2	詩の構造	225
第 22 章 文法への補足事項		228
22.1	ユリウス暦	228
22.2	固有名詞	229
22.3	文法と修辞法の変則	230

はじめにーラテン語

第 1 章

インド・ヨーロッパ語族

ラテン語は、インド・ヨーロッパ語族¹という大きな語族の中の、一つの語派に属しています。このインド・ヨーロッパ語族は、以下のような語派を含んでいます。

1.1 アジアのインド・ヨーロッパ語族

a. サンスクリット語派: サンスクリット語は、古代インドで使われていた言語です。この言語にはいくつかの時代区分があります。最古のものはベータ語と呼ばれ、ベータ賛美歌に使われていた言語です。この賛美歌は、インド・ヨーロッパ語族の全ての分枝の中で、知られている最古の文学作品です。これは堅実に見積もっても紀元前 1500 年までさかのぼります。それより 1000 年以上前、つまり紀元前 2500 年より昔のものだろうという学者さえいます。

サンスクリット語は、形を変えながらもインドですっと話されてきました。今日では、サンスクリット語を祖先とするたくさんの方言が派生しています。それらの言語は、現在でも非常に多くの人々に使われています。

b. イラン語派: イラン語は、古代ペルシャで使われていた言語です。サンスクリット語と近い関係にあります。イラン語派は、古イラン語とアヴェスター語に大きく分かれます。古イラン語は宮廷での公式な言語でした。たくさんの、いわゆるくさび形文字²の碑文に現れます。そのうち一番古いものはダリウス一世の頃 (紀元前六世紀) のものです。イラン語のもう一方の分枝、アヴェスター語³は、アヴェスター、すなわちパーシ人の聖典の言語です。パーシ人は、拝火教 (教祖ツァラトウストウラ) の信者でした。この聖典の一部は、紀元前 1000 年の昔にさかのぼると言われています。現代ペルシャ語は、古イラン語の現在の形です。当然のことながら時代とともに多くの修正を経ており、特にアラビア語から多くの語彙が流入しています。

c. アルメニア語派: アルメニア語は、黒海とコーカサス山脈にほど近いアルメニアの地で話されていた言葉です。イラン語と近い関係にあり、以前はイラン語派に分類されていました。しかし現在は独立した語派と認められています。アルメニア語の最古の文学作品は、西暦 4・5 世紀です。この時期の作品は、経典の翻訳や古代アルメニアの年代記などです。アルメニア語は現在でも使われている生きた言語ですが、話されている地域はばらばらです。アルメニア人の居住地域が今日分散してしまったからです。

d. トカラ語派: トカラ語はつい最近発見され、インド・ヨーロッパ語族であると認められたばかりです。カスピ海の東 (現在のトルキスタン) で使われていました。トカラ語は上で挙げた 3 つのアジアの語派とある点では近い関係にあるのですが、また別の点ではヨーロッパの諸語派に近いです。トカラ語の文学は、明らかになっている限りでは、サンスクリット語の聖典の翻訳が主です。これらは西暦 7 世紀にさかのぼります。

¹ アーリア語族、インド・ゲルマン語族とも呼ばれます。

² 文字の筆画が V 字形なのでこの呼び名があります。

³ ゼンドと呼ばれることがあります。

1.2 ヨーロッパのインド・ヨーロッパ語族

e. ギリシャ語派: ギリシャ語は明らかになっている限りで紀元前 1500 年ほどの昔には、すでにギリシャと小アジアで長く使われていました。実際にこの地域にギリシャ語がもたらされたのは、おそらくもっとずっと前です。最古の作品はホメロスのイリアドとオデュッセイアで、ほぼ確実に紀元前 9 世紀のものだと思われます。紀元前 6 世紀より後、ギリシャ語の文学が絶えたことはありません。現代ギリシャ語は紀元前 4・5 世紀の古典ギリシャ語と比べて、その時間的な隔たりからすれば驚くほど変わっていません。

f. イタリア語派: イタリア語派にはウンブリア語、ラテン語、オスカ語が含まれます。ウンブリア語はイタリア半島の北部(古代ウンブリア)で使われ、ラテン語は中部(ラティウム)、オスカ語は南部(サムニウム、カンパーニア、ルーカーニアなど)で使われていました。マルシー語、ウォルスキー語など、これ以外にもいくつかの小規模な方言がありました。これらの言語は(ラテン語を除けば)現在では小さな碑文が少し残っているくらいで、後は何も残っていません。ラテン語の文学は紀元前 250 より少し後、リウィウス、アンドロニクス、ナエウィウス、プラウトゥスの作品から始まります。ただし、もっと昔の時代の短い碑文が少数見つかっています。

g. ケルト語派: 歴史が残っている時代のうちでもっとも初期のころ、ケルト人はイタリア北部の大部分とヨーロッパ中部の一定の地域を占領していました。しかし紀元前 2 世紀以降、ケルト人はガッリアとブリテン島にしか見られません。ケルト語派に属する主な言語は、ガッリア語(古代ガッリアで使われていた)、ブルターニュ語(現代のフランス、ブルターニュ地域で今も使用されている)、アイルランド語(アイルランドで今も一般に広く使われている)、ゲール語(高地スコットランド)です。

h. チュートン語派: チュートン語派に含まれる言語は非常に多いです。最古のものはゴート語で、ゴート司教ウルフィラス(西暦 375 年ごろ)の手による経典の翻訳が残っています。この語派にはほかにも、古ノルド語(スカンジナビアで昔使われていた。現代のアイスランド語、ノルウェー語、スウェーデン語、デンマーク語はここから派生)、ドイツ語、オランダ語、アングロ・サクソン語(現代の英語の源流)が含まれます。

i. バルト・スラヴ語派: この語派は東ヨーロッパに分布しています。バルト語派のほうには、バルト海の東岸に住む人々が今日使っているリトアニア語、レット語があります。これらの言語のもっとも古い文学作品は、16 世紀からです。スラヴ語派のほうは、たくさんの言語があります。そのなかで一番重要なのは、ロシア語、ブルガリア語、セルビア語、ボヘミア語、ポーランド語です。これらの言語は、いずれも文学が発達したのが遅いです。もっとも古いのは古ブルガリア語で、19 世紀に聖書の翻訳が見られます。

j. アルバニア語派: アルバニアと、ギリシャ、イタリア、シキリアの一部で使われています。バルト・スラヴ語派と非常に近縁です。ラテン語、トルコ語、ギリシャ語、スラヴ語からのたくさんの借用語を用いるのが特徴です。17 世紀になるまで文学は始まりませんでした。

第 2 章

インド・ヨーロッパ語族の発祥の地

上に挙げた語派のさまざまな言語は、外見上は多くの違いがあります。しかしその構造と語彙を詳細に調べると、実は緊密に関係していることが示されます。そして驚くべきことに、共通の祖先をもっていることがわかるのです。ですから、上に挙げた全ての言語の祖先たる同じ一つの言語を話す部族が、あるときどこかに存在したのだ、ということになります。この太古の部族がどこに住んでいたのか、正確に知ることはできません。中央アジアはヒマラヤ山脈の北だろうと長いあいだ考えられてきましたが、根拠がないとしてずいぶん前に棄却されました。この想定は、サンスクリット語の重要性が長い間誇張されていたことに由来します。最古の文学はサンスクリット語(ベダ賛歌)ですから、インド人がインド・ヨーロッパ語族の始まった地点に地理的に近いだろう、と考えられていたのです。ですから、その北の高地に発祥の地があるだろうと考えられたのです。今日では、インド・ヨーロッパ語族の祖語が生まれたのは中央もしくは南ヨーロッパ、とするほうがもっともらしいです。それでもこの難しい問題についての論理的な証明は、ほとんど期待できません。

インド・ヨーロッパ語族の祖先の言語を使っていた元々の部族の人口的、地理的規模については、推測するしかありません。おそらくは大きくなかったでしょう。そして人種的、言語的に小さくまとまっていた時期は、おそらく数百年、ひよっとすると数千年続いたと思われます。

インド・ヨーロッパ祖語の統一性が失われ、さまざまな個々の言語が独立し始めた時期も、やはり闇の中です。サンスクリット語が独立したのが紀元前 2500 年以前だと考えると、インド・ヨーロッパ祖語が話されていた時期は、紀元前 5000 年、もしかするともっと前までさかのぼると考えるのが自然です。

第 3 章

ラテン語の発展

現在残っている最古のラテン語は、非常に古い碑文に見られます。そのうち最も古いものは、紀元前 6 から 7 世紀のもので、ローマの文学が始まったのは、それより数世紀後、つまり紀元前 3 世紀の中盤より少し後です。ラテン語とその文学には、以下のような目立った時期がありました。

a. 前文学時代: 最古の時代から紀元前 240 年、リーウィウス・アンドロニクスが最初の劇を書いた年までです。この時期のラテン語は、昔から失われずに残っている小さな碑文からしか、ほぼ知ることができません。そのような碑文の中で、少しでも長さのあるものは少数です。

b. 黎明期: リーウィウス・アンドロニクス (紀元前 240 年) からキケロー (紀元前 81 年) までです。この時期においてすでに、ラテン語は表現の媒体として高度に発達していました。何人かの天才たちの手によって、この言語は力と美を帯びるようにすなりました。しかしこの時代のラテン語は簡潔で、後世のもっと洗練された言葉づかいと対照をなしています。この時期には以下のような人がいました。

- Livius Andronicus (275 頃 - 204 B.C.) (ホメロスのオデュッセイアの翻訳、悲劇)
- Plautus (250 頃 - 194 B.C.) (喜劇)
- Naevius (270 頃 - 199 B.C.) (「ポエニ戦争」、喜劇)
- Ennius (239 - 169 B.C.) (「年代記」、悲劇)
- Terentius (190 頃 - 159 B.C.) (喜劇)
- Lucilius (180 - 103 B.C.) (風刺)
- Pacuvius (220 - 130 B.C. 頃) (悲劇)
- Accius (170 - 85 B.C. 頃) (悲劇)

c. 黄金期: キケロー (紀元前 81 年) からアウグストゥス没 (西暦 14 年) まで。この時期ラテン語の文体は、特にキケローの手によって高度な完成を見ました。ただしその語彙は、まだ量も範囲も最大に達したわけではありませんでした。黎明期の言葉づかいの痕跡がところどころに見られます。特に詩において顕著でした。それは詩が必然、昔の言葉づかいに立ち返ることで効果を探るものだからです。この時期、特にアウグストゥス時代の素晴らしい詩において、文学は頂点に達しました。この時期には以下のような人がいました。

- Lucretius (95 頃 - 55 B.C.) (エピクロス哲学の詩)
- Catullus (87 - 54 B.C. 頃) (詩人)
- Cicero (106 - 43 B.C.) (弁論、修辞学、書簡)
- Caesar (102 - 44 B.C.) (ガッリア戦記、市民戦記)
- Sallustius (86 - 36 B.C.) (歴史家)
- Nepos (100 頃 - 30 B.C. 頃) (歴史家)

- Vergilius (70 – 19 B.C.) (「アエネーイス」「農耕詩」「牧歌」)
- Horatius (65 – 8 B.C.) (頌歌、風刺詩、書簡)
- Tibullus (54 頃 – 19 B.C.) (詩人)
- Propertius (50 頃 – 15 B.C. 頃) (詩人)
- Ovidius (43 B.C. – 17 A.D.) (「変身物語」、その他詩).
- Livius (59 B.C. – 17 A.D.) (歴史家).

d. 白銀期: アウグストゥス没(西暦 14 年)からマルクス・アウレーリウス没(西暦 180 年)まで。この時期の特徴は、それまでの正確さへの過剰な心配りに対する反動が見られたことです。これまで、標準化された表現型にあまりにも多くの注意を払うことが常習化していました。そして個々の作家に残された遊びはほとんどありませんでした。この形式主義に対する健全な反動の中で、この時期、より自由な表現が目立ってきました。たくさんの詩的な単語や言い回しに加え、口語から語彙を取り入れたことも注意しておきます。以下の作家が言及に値します。

- Phaedrus (40 A.D. 頃活躍) (詩形式の物語)
- Velleius Paterculus (30 A.D. 頃活躍) (歴史家).
- Lucanus (39 – 65 A.D.) (市民戦争についての詩).
- Seneca (1 頃 – 65 A.D.) (悲劇、哲学).
- 大 Plinius (23 – 79 A.D.) (博物誌).
- 小 Plinius (62 – 115 A.D. 頃) (「書簡集」).
- Martialis (45 頃 – 104 A.D. 頃) (警句).
- Quintilianus (35 頃 – 100 A.D. 頃) (弁論・教育論).
- Tacitus (55 頃 – 118 A.D. 頃) (歴史家).
- Juvenalis (55 頃 – 135 A.D. 頃) (風刺家).
- Suetonius (73 頃 – 118 A.D. 頃) (「皇帝伝」).
- Minucius Felix (160 A.D. 頃活躍) (キリスト教の最初の護教論者).
- Apuleius (125 – 200 A.D. 頃) (「変身物語」あるいは「黄金のロバ」).

e. 復古期: この時期は、紀元前 2 世紀から 1 世紀にかけての黎明期を意識的に模倣したのが特徴です。白銀期と時期的に被っており、文学的な視点よりむしろ言語的な視点で重要です。復古調が最も目立っていた人で言及するならば、まずアントーニウス・ピウス帝とマルクス・アウレーリウス帝への書簡が残っているフロンティヌス、それから「アッティカの夜」を著したアウルス・ゲッリウスです。二人とも西暦 2 世紀の後半に活躍しました。

f. 斜陽期: 西暦 180 年から 6 世紀に文学活動が終了するまで。この時期の特徴は、言語が急速に根本的に変化していったことです。社会下層民の口語の特徴が、文学を侵食してきました。同時に、ガッリア、スペイン、アフリカ等、遠くの地方において、ラテン語はその土地土地に即した特殊性を受け入れました。この時期を代表する人は以下の通りです。

- Tertullianus (160 頃 – 240 A.D. 頃) (キリスト教作家).
- Cyprianus (200 頃 – 258 A.D.) (キリスト教作家).
- Lactantius (300 A.D. 頃活躍) (キリスト教の擁護).
- Ausonius (310 頃 – 395 A.D. 頃) (詩人).
- Hieronymus (340 – 420 A.D.) (聖書の翻訳).
- Ambrosius (340 頃 – 397) (キリスト教教父).
- Augustinus (354 – 430) (キリスト教教父 – 「神の国」).
- Prudentius (400 A.D. 頃活躍) (キリスト教詩人).
- Claudianus (400 A.D. 頃活躍) (詩人).

- Boëthius (480 頃 - 524 A.D.) (「哲学の慰め」).

第 4 章

ラテン語のその後

西暦 6 世紀以降、ラテン語は二つの全く違う流れに分かれました。そのうちの一つは、宮廷や教会、学会の中で維持されました。これはもはや一般人の言語ではなくなり、時とともにどんどん人工的になりました。もう一方の流れは一般人の口語です。これは最終的にその土地土地で、今のいわゆるロマンス諸語になりました。つまりイタリア語、スペイン語、ポルトガル語、フランス語、プロヴァンス語 (フランス南部のプロヴァンスで使用)、ラエト・ロマンス語 (スイスのグラウビュンデン州で使用)、それから今のルーマニアとその近隣で使われているルーマニア語です。これら全てのロマンス諸語とラテン語との関係は、インド・ヨーロッパ語族の諸語派とインド・ヨーロッパ祖語との関係に同じです。

第1部

発音、アクセント、音節の長さなど

第 5 章

発音、アクセント、音節の長さ

5.1 アルファベット

1. ラテン語のアルファベットは、英語と同じです。ただし *w* は使いません。

1. *k* が使われるのは、*Kalendae* のほか数語だけです。 *y, z* は紀元前 50 年頃にギリシャ語から導入されたもので、外来語 (おもにギリシャ語) にしか現れません。
2. ローマ人は通例、大文字だけを使っていました。そして *I, V* は母音と子音の両方を表していました。しかし私たちにとっては、母音を *i, u*、子音を *j, v* と区別して書くほうが便利です。ただし母音・子音両方に *i, u* を用いるのが好きな学者もいます。

5.2 音の分類

2. 1. *a, e, i, o, u, y* は母音です。他の文字はすべて子音です。二重母音には *ae, oe, ei, au, eu, ui* があります。
2. 子音はさらに黙音、流音、鼻音、摩擦音に分類できます。
3. 黙音は *p, t, c, k, q; b, d, g; ph, th, ch* です。このうち:
 - (a) *p, t, c, k, q* は無声音^{*1}です。つまり、声 (声帯の振動) を伴わずに調音します。
 - (b) *b, d, g* は有声音^{*2}です。つまり、声 (声帯の振動) を伴います。
 - (c) *ph, th, ch* は有気音です。これが使われるのは、ギリシャ語からの借用語にほぼ限られます。その音は、*p+h, t+h, c+h* と等価です。つまり、対応する無声黙音に続いて息を吐きます。「プフ、トゥフ、クフ」のような音になります。
4. 黙音は、以下のようにも分類できます。

唇音	<i>p, b, ph</i>
歯音	<i>t, d, th</i>
喉音 (口蓋音)	<i>c, k, q, g, ch</i>
5. 流音は *l, r* です。有声音です。
6. 鼻音は *m, n* です。有声音です。 *n* は通常の音のほか、後ろに喉黙音が続くときは別の音 (ガ行鼻濁音の子音) になりました。いわゆる *n adulterinum* です。

<i>anceps</i> (二頭の)	<i>angceps</i> のように発音
---------------------	-----------------------
7. 摩擦音は *f, s, h* です。無声音です。

^{*1} 英語では voiceless, surd, hard, tenuis。

^{*2} 英語では voiced, sonant, soft, media。

8. *j, v* は半母音です。有声音です。
9. *x, z* は二重子音です。このうち *x* は *cs* と等価です。*z* がどういう音だったかは、確定していません。(§3,3)
10. 子音同士の関係をまとめると、以下の表のようになります。

	無声	有声	有気	
黙音	p	b	ph	(唇音)
	t	d	th	(歯音)
	c, k, q	g	ch	(喉音)
流音		l, r		
鼻音		m, n		
摩擦音	f			(唇音)
	s			(歯音)
	h			(喉音)
半母音		j, v		

(a) 二重子音 *x, z* は複合音なので、上記の表には分類できません。

5.3 文字の発音

3. 以下の発音 (ローマ式) はローマ人たちの文明が最も繁栄していたころ、つまり紀元前 50 年頃から西暦 50 年頃にかけて、実際に行われていたものです。

1. 母音

ā アー *ă* ア
ē エー *ĕ* エ
ī イー *ĭ* イ
ō オー *ŏ* オ
ū ウー *ŭ* ウ
y ユ (フランス語の *u*、ドイツ語の *ü*)

2. 二重母音

ae アエ *eu* エウ
oe オエ *ui* ウイ (ほぼ *cui, huic* のみ)
ei エイ
au アウ

3. 子音

- **b, d, f, h, k, l, m, n, p, q** は英語と同じ音です。ただし、**bs, bt** は *ps, pt* のように発音します。
- **c** の音は常に力行です。
- **t** は常にタ行です。英語の *oration* のようなシャ行にはなりません。
- **g** は常にガ行の音です。**ngu** + 母音 のときは、**gu** は唇を丸めて発音します: **anguis, languidus**
- **j** はヤ行の音です。
- **r** はおそらく、舌先を少し震わせて発音されていました。
- **s** は常にサ行で、濁ることはありません。**suādeō, suāvis, suēscō** とこれらの複合語・派生語では、**su** は唇を丸めて発音します。
- **v** はワ行の音です。

- **x** は常に *ks* の音です。英語と違って「グズ」のように濁ることもないですし、「ズ」と発音されることもありません。
- **z** の音はわかっています。英語の *zd* の音かもしれませんが、*z* かもしれません。後者をお勧めします。
- 有気音 **ph, ch, th** は英語の強勢のある *p, c, t* の音ととても似ています。ですから実用上、そのように発音すればいいでしょう。
- 文字を重ねて **ll, mm, tt** などと書かれているときは、促音「ッル、ツム、ットウ」になります。

5.4 音節

4. ラテン語の一つの単語は、母音・二重母音の数と同じだけの音節に分けられます。単語を音節に分けるには以下のようになります。

1. 一つだけの子音は、後ろの母音にくっつけます: **vo-lat, ge-rit, pe-rit, a-dest**
2. 重子音 (**tt, ss** など) は、常にその間で分割します: **vit-ta, mis-sus**
3. その他の子音の組み合わせが連続しているときは、通例最初の子音だけ前の母音にくっつけて、分割します: **ma-gis-trī, dig-nus, mōn-strum, sis-te-re**
4. ただし、黙音 + 流音 (**pl, cl, tl; pr, cr, tr** など) の組み合わせのときは例外です。この場合、通例両方の子音を二つとも後ろの母音にくっつけます: **a-grī, vo-lu-cris, pa-tris, mā-tris**。しかし、もし **l, r** が複合語の後ろ側の部分の始まりであるときは、二つの子音を分割します: **ab-rumpō, ad-lātus**
5. 二重子音 **x** は、前の母音にくっつけます: **ax-is, tēx-ī**

5.5 音節の長さ

5.1. 母音の長さ

母音は、発音される時間によって「長い」と「短い」ものがあります。ラテン語の母音の長さを推測する絶対的な規則はありません。この知識は、大部分は経験によって知るしかありませんが、以下の原則が役に立ちます。

(a) 以下の場合、母音は長い³です。

- i. **nf, ns** の前: **īnfāns, īnferior, cōnsūmō, cēnseō, īnsum**
- ii. 縮約の結果: **nilum** (もとは **nihilum**)

(b) 以下の場合、母音は短いです。

- i. **nt, nd** の前: **amant, amandus**。ただし、複合語の場合、例外が少しあります。複合語の前側の部分の母音が長いときです: **nōndum (nōn dum)**
- ii. ほかの母音の前、もしくは **h** の前: **meus trahō**。例外もありますが、それらはおもにギリシャ語からの固有名詞です: **Aenēās**

2. 音節の長さ

音節は、発音するのにかかる時間によって「長い」と「短い」ものに区別されます。

(a) 長い音節⁴:

- i. 長い母音を含むもの: **māter, rēgnum, dīus**

³ この本では、長い母音はマクロン $\bar{}$ ($\bar{a}, \bar{i}, \bar{o}$ など) で指示します。マクロンがついていない母音は、短いです。ただし短いことを改めて強調するときは、ブレーヴェ $\`$ ($\`e, \`u$ など) で指示します。

⁴ 音節の長さは、表示しません。母音の長さで混乱するからです。

ii. 二重母音を含むもの: **causae, foedus**

iii. 母音は短くても、後ろに **x, z** もしくは任意の二つの子音が続くもの (黙音 + **l, r** は除く): **axis, gaza, restō**

(b) 短い音節:

母音が短くて、かつ後ろに母音か一つだけ子音が続くもの: **mea, amat**

(c) 音節の長さが場合によって変わることも時々あります。母音が短くて、後ろに黙音 + **l, r** (**pl, cl, tl; pr, cr, tr** など) が続くときです: **āgrī, volūcris**⁵⁵。このような音節を、「共通」と呼びます。散文では共通の音節は通例短いですが。しかし詩では、詩人の選択によっては長いとみなすこともできます。

注意: この「長い」音節と「短い」音節の区別は、純粋に自然なものであって、恣意的なものでも人工的なものでもありません。短い母音の後ろに二つの子音、たとえば **ng** が続くような音節は、発音するのに「長い」時間がかかるから「長い」のです。逆に、短い母音の後ろに子音が一つだけ続くような音節は、発音するのにあまり時間がかかりませんから、「短い」のです。共通の音節の場合は、黙音と流音がとても素早く発音されて一つの音のようになるので、子音が一つの場合と発音にかかる時間が変わりません。しかし詩の場合、二つの要素を分けて (例: **ag-ri**) 発音することでこのような音節を長くすることができるというわけです。

5.6 アクセント

6.1. 二音節語は、一つめの音節にアクセントがあります: **tēgit, mō' rem**

2. 三音節語の場合、もし後ろから二番目の音節 (**paenultima**) が長いならば、そこにアクセントがあります。もしその音節が短ければ、後ろから三番目の音節 (**antepaenultima**) にアクセントがあります: **amā'vī, amántis, míserum**

3. 前接語 **-que, -ne, -ve, -ce, -met, -dum** が単語にくっついた場合、もし前接語の直前の音節が長ければ (もともと長い場合と、前接語がくっついて長くなる場合がある) そこにアクセントを置きます: **miseró'que, homínisque**。もし前接語の直前の音節が、前接語がくっついたあとも短いままならば、もともとのアクセントが **antepaenultima** にある場合のみ、前接語の直前の音節にもアクセントを置きます: **pórtaque, míseraque**

4. **-ne, -ce** の最後の **-e** が消えてしまうことが時々ありますが、その場合でもアクセントの位置は変わりません: **tantó'n, istí'c, illū'c**

5. **utrá'que** (各々) と **plērā'que** (非常に多くの) では、**-que** は正確には前接語ではありません。しかしこれらの語のアクセントは **paenultima** にあります。ほかの格 (**utérque, utrúmque, plérúmque**) に影響されてのことです。

5.7 母音の変化⁵⁶

7.1. 複合語で:

(a) **ě** は、後ろに一つだけ子音が続くとき **ī** になります。

colligō (con-legō)

(b) **ǎ** は、後ろに一つだけ子音が続くとき **ī** になります。

adigō (ad-agō)

(c) **ǎ** は、後ろに二つの子音が続くとき **ě** になります。

expers (ex-pars)

⁵⁵ ただし複合語の中で、**l, r** が後ろの部分の始まりであるときは、その直前の音節は常に長いです: **abrumpō**。

⁵⁶ ここで取り上げるのは、簡単に明白なもののみです。

(d) **ae** は **i** になります。

conquīrō (con-quaerō)

(e) **au** は **ū** になります。 **ō** になることもあります。

conclūdō (con-claudō)

explōdō (ex-plaudō)

2. 縮約: 連続する母音は、しばしば一つの長い母音に縮約されます。はじめの母音が通例優先されます。

trēs (tre-es) cōpia (co-opia)

mālō (ma(v)elō) cōgō (co-agō)

amāstī (amā(v)istī) cōmō (co-emō)

dēbeō (dē(h)abeō) jūnior (ju(v)enior)

nīl (nihil)

3. 寄生母音: 流音と鼻音の周りでは、時々寄生母音が生じます。

vinculum (初期の形: vinclum)

perīculum, saeculum も同様です。

4. 語中音消失: 語中音消失によって母音が消えることが時々あります。

ārdor (āridor より, aridus と比較)

valdē (validē より, validus と比較)

5.8 子音の変化^{*7}

8.1. ロータシズム: 母音にはさまれた **s** は、**r** になります。

arbōs 属格 arboris (arbosis より)

genus 属格 generis (genesis より)

dirimō (dis-emō より)

2. **dt, tt, ts** は **s** か **ss** になります。

pēnsūm (pend-tum)

versūm (vert-tum)

mīles (mīlet-s)

sessus (sedtus)

passus (pattus)

3. 語尾の子音は、しばしば省略されます。

cor (cord より)

lac (lact より)

4. 子音の同化: 子音は、しばしば後ろに続く音に同化します。**accurrō (adc-)**、**aggerō (adg-)**、**asserō (ads-)**、**allātus (adl-)**、**apportō (adp-)**、**attulī (adt-)**、**arrideō (adr-)**、**afferō (adf-)**、**occurrō (obc-)**、**suppōnō (subp-)**、**offerō (obf-)**、**corruō (comr-)**、**collātus (coml-)** 等。

5. 部分同化: 同化が部分的にしか起きないこともあります。

(a) **b** は、後ろに **s, t** が続くとき **p** になります。

scrīpsī (scrīb-sī), scriptum (scrīb-tum)

(b) **g** は、後ろに **s, t** が続くとき、**c** になります。

^{*7} ここで取り上げるのは、簡単で明白なもののみです。

āctus (*āg-tus*)

(c) m は、後ろに歯音か喉音が続くとき、n になります。

eundem (*eum-dem*), *prīnceps* (*prīm-ceps*)

5.9 正書法の注意点

9. 正書法が一定しない単語は、たくさんあります。

1. 正書法に揺らぎがある場合、異なる形はラテン語の異なる時期に対応することがあります。例えば *quom*, *voltus*, *volnus*, *volt* 等は、アウグストゥスの時代までほぼ優勢な形でしたが、それ以降は *cum*, *vultus*, *vulnus*, *vult* 等となりました。同様に、*optumus*, *maxumus*, *lubet*, *lubīdō* 等は同じころまで優勢でしたが、それ以降は *optimus*, *maximus*, *libet*, *libīdō* 等となりました。
2. 正書法が同じ一つの時代においても定まらないものもあります。例えば *expectō* と *expectō*、*existō* と *existō*、*epistula* と *epistola*、*adulēscēns* と *adolēscēns*、*paulus* と *paullus*、*cottidiē* と *cotīdiē* です。特に複合語の前置詞部分は、語源に沿った綴りがよく行われました。

ad-gerō または *aggerō*

ad-serō または *asserō*

ad-liciō または *alliciō*

in-lātus または *illātus*

ad-rogāns または *arrogāns*

sub-moveō または *summoveō*

他多数。

3. *iaciō* の複合語は、普通 *ēiciō*, *dēiciō*, *adiciō*, *obiciō* 等と書かれますが、発音はおそらく *adjiciō*, *objiciō* 等だったと思われます。
4. 語尾が *-quus*, *-quum*; *-vus*, *-vum*; *-uus*, *-uum* の形容詞・名詞は、キケローの時代まで古い形 *-quos*, *-quom*; *-vos*, *-vom*; *-uos*, *-uom* を保っていました: *antīquos*, *antīquom*; *saevos*; *perpetuos*; *equos*; *servos*。同様に、動詞の直説法三人称複数現在形は、同じ時期まで *-quont*, *-quontur*; *-vont*; *-vontur*; *-uont*; *-uontur* の形を保っていました: *relinquont*, *loquontur*; *vīvont*, *metuont*。
古いほうの綴りは、プラウトゥスとテレンティウスの作品では一般的に用いられますが、私たちが散文を書く場合は使いません。

第 II 部

屈折

10. ラテン語の品詞は、英語と同じです。つまり、名詞、形容詞、代名詞、動詞、副詞、前置詞、接続詞、間投詞です。ただし、ラテン語には冠詞がありません。

11. この八個の品詞のうち、はじめの四つは屈折します。屈折とは、語形を変化させて意味に修正を加えることです。名詞、形容詞、代名詞については、この行為を曲用と言います。また動詞については、これを活用と言います。

第 6 章

曲用

6.1 名詞

12. 名詞とは人、場所、もの、性質の名前です。例えば **Caesar** (カエサル)、**Rōma** (ローマ)、**penna** (羽)、**virtūs** (勇気) などです。

1. 名詞は、固有名詞と普通名詞に分けられます。固有名詞は、人や場所に付けられた、永続的な名前のことです: **Caesar, Rōma**。普通名詞は、その他の名詞です: **penna, virtūs**。
2. また名詞は、具象名詞と抽象名詞に分けられます。
 - (a) 具象名詞とは、個々の物体を名指すものです: **mōns** (山)、**pēs** (足)、**diēs** (日)、**mēns** (心)。集合名詞も具象名詞に分類されます: **legiō** (軍隊)、**comitātus** (随行者)。
 - (b) 抽象名詞とは、性質を指すものです: **cōstantia** (不変)、**paupertās** (貧困)。

6.1.1 名詞の性

13. 名詞には男性、女性、中性の、三つの性があります。ラテン語では、名詞の性は自然性の場合と文法性の場合があります。

自然性

14. 性別に基づいた名詞の性を、自然性といいます。自然性は、人を指す名詞に限られます。

1. 男の人を指す名詞は、男性です。
nauta (船乗り)、**agricola** (農夫)
2. 女の人を指す名詞は、女性です。
māter (母)、**rēgīna** (女王)

文法性

15. 文法性は、性別に基づきません。単語の一般的な語義か、単数主格形の語尾か、どちらかによってきまります。文法性により、ものや性質はその語義や語尾にのみ基づいて、男性になったり女性になったりします。文法性を決める一般原則を以下にあげます。

A. 語義に基づく性

1. 「川」「風」「(暦の)月」は、男性です。

Sēquana (セーナ川)、**Eurus** (東風)、**Aprilis** (四月)

2. 「木」と、**-us** で終わる「町」「島」は女性です。

quercus (オーク)、**Corinthus** (コリントス)、**Rhodus** (ロドス島)

その他の「町」「島」の性は、語尾によって決まります。(下の B. を参照)

Delphī (中性)、**Leuctra** (中性)、**Tibur** (中性)、**Carthāgō** (女性)

3. 不変化名詞と、不定詞(句)は中性です。

nihil (何も...ない)、**nefās** (忌まわしいもの)、**amāre** (愛すること)

注意: 上の原則には、時々例外があります: **Allia** (川の名前・女性)

B. 単数主格形の語尾に基づく性 その他の名詞の性は、単数主格形の語尾で決まります*¹。

注意:

1. 通性: 場合に応じて男性だったり女性だったりする名詞が存在します。例えば、**sacerdōs** は「祭司」「巫女」のどちらの意味にもなります。そして「祭司」の場合は男性、「巫女」の場合は女性になります。同様の単語には、**cīvis** (市民)、**parēns** (親) などがあります。そのような名詞の性を、「通性」と言います。
2. 動物の名前は、普通文法性で、単数主格形の語尾で決まります。ただし、オスとメスが両方同じ語尾の形で(すなわち同じ文法性で)表されることもあります。

ānser 男性・(オス・メスにかかわらず) ガチョウ

vulpēs 女性・(オス・メスにかかわらず) キツネ

aquila 女性・(オス・メスにかかわらず) ワシ

6.1.2 数

16. ラテン語の名詞には、二つの数があります。単数と複数です。単数は一つの物体、複数は一つ以上の物体を指します。

6.1.3 格

17. ラテン語の名詞には、六つの格があります。

- 主格: 「～は」「～が」
- 属格: 「～の」
- 与格: 「～に」「～のために」
- 対格: 「～を」
- 呼格: 「～よ」(呼びかけ)
- 奪格: 「～から」「～によって」「～を使って」「～において」

1. 処格: 町の名前や、その他少数の単語では、処格(～において)の名残が現れます。
2. 斜格: 属格・与格・対格・奪格をまとめて斜格と呼びます。
3. 語幹と格語尾: それぞれの格は、名詞の基本となる部分「語幹*²」に、ある「格語尾」をくっつけて作ります。例

*¹ ラテン語の名詞の大部分がこれに当てはまります。性別を決める原則は、曲用の型別に学びます。

*² 語幹は、さらに原始的な部分(語根)から派生していることがよくあります。たとえば、語幹 **porta-** の語根は **per-**, **por-** です。語根は普通、

例えば **portam** (門を・対格) は、語幹 **porta-** に格語尾 **-m** をつなげたものです。ただしほとんどの場合、語幹の最後の母音が本来の格語尾と癒着してしまって、本来の格語尾は多少わかりづらくなっています。そうやってできた「見た目の格語尾」は終端と呼びます。

6.1.4 五種類の曲用

18. ラテン語の名詞には、語幹の最後の文字によって異なる五種類の曲用が存在します。曲用の種類は、単数属格の終端によって区別することもできます。

曲用	語幹の末尾	属格の終端
一	ā	-ae
二	ō	-ī
三	ī / 子音	-īs
四	ŭ	-ūs
五	ē	-ēī / -ēī

形と同じ格

19. 1. 呼格は通例主格と同じ形です。ただし、第二曲用名詞 **-us** の単数形を除きます。
2. 複数与格と複数奪格は、常に同じ形です。
3. 中性名詞の対格と主格は常に同じ形です。中性名詞の複数主格・対格は、**-ā** で終わります。
4. 第三・四・五曲用では、複数対格と複数主格は通例同じです。

6.1.5 第一曲用

ā-幹

20. 第一曲用の純粋なラテン語名詞は通例、単数主格が **-ā** で終わります。これは **-ā** が弱化したものです。第一曲用の名詞は、通例女性です。以下のように曲用します。

porta (門): 語幹 portā-					
格	単数		複数		意味
		終端		終端	
主	porta	-a	portae	-ae	門は
属	portae	-ae	portārum	-ārum	門の
与	portae	-ae	portīs	-īs	門に
対	portam	-am	portās	-ās	門を
呼	porta	-a	portae	-ae	門よ
奪	portā	-ā	portīs	-īs	門から

1. ラテン語には冠詞がありませんので、英語のような *a gate* と *the gate* の区別はありません。

単音節です。語根から語幹を作るために付加される部分を、接尾辞といいます。たとえば、**porta-** における接尾辞は **-ta** です。

第一曲用名詞の注意事項

21. 1. 例外的な性: 第一曲用でも、男の人をさす名詞は男性です: **nauta** (船乗り)、**agricola** (農夫)。また、**Hadria** (アドリア海) も男性です。
2. まれにでてくる格語尾:
- (a) 単数属格の古い形 **-ās** が **pater familiās** (一家の長) の組み合わせで出てきます。 **māter familiās**, **filius familiās**, **filia familiās** も同様です。ただし、これらの句であっても、普通の属格形 **-ae** を使ってかまいません: **pater familiae**
 - (b) 詩では属格が **-āi** の形になることもあります: **aulāi**
 - (c) 単数処格は **-ae** です: **Rōmae** (ローマで)
 - (d) 複数属格が **-ārum** の代わりに **-um** になることも時々あります: **Dardanidum** (= **Dardanidārum**)。この終端 **-um** は **-ārum** の縮約形ではありません。まったく違う格語尾を表しています。
 - (e) **dea** (女神) と **filia** (娘) の複数与格・奪格は、普通 **-is** ではなく **-ābus** になります。特にこれらと対になる名詞 **deus** (男神)、**filius** (息子) と区別したいときにそうなります。他にも同様の名詞がいくつかあります: **libertābus** (**liberta** 女の自由民) ... **libertis** (**libertus** 男の自由民) と区別したいとき / **equābus** (**equa** 雌馬) ... **equis** (**equus** 雄馬) と区別したいとき。

ギリシャ語の名詞

22. ギリシャ語からの借用語は、**-ē** (女性) もしくは **-ās**, **-ēs** (男性) で終わります。複数形では、これらの名詞はラテン語の普通の第一曲用と同じように曲用します。単数の曲用は以下ようになります。

	Archīās アルキアース	epitomē 概略	comētēs 彗星
主	Archīās	epitomē	comētēs
属	Archiae	epitomēs	comētae
与	Archiae	epitomae	comētae
対	Archiam (-ān)	epitomēn	comētēn
呼	Archīā	epitomē	comētē (-ā)
奪	Archīā	epitomē	comētē (-ā)

1. ただし、**-ē** で終わるギリシャ語名詞は、そのほとんどが普通のラテン語名詞 **-a** になります: **grammatica** (文法)、**mūsica** (音楽)、**rhētorica** (修辞)。その場合、曲用は **porta** と同じです。
2. 特に詩においては、他にもいくつか特異なことが起きます。

6.1.6 第二曲用

ō-幹

23. 純粋なラテン語の、第二曲用名詞は **-us**, **-er**, **-ir** (男性)、**-um** (中性) で終わります。もともとは、男性主格の **-us** は **-os** でした。中性主格の **-um** は **-om** でした。対格も同様です。

-us, **-um** で終わる名詞は、以下のように曲用します。

	hortus (庭): 語幹 hortō-		bellum (戦争): 語幹 bellō-	
	単数			
		終端		終端
主	hortus	-us	bellum	-um
属	hortī	-ī	bellī	-ī
与	hortō	-ō	bellō	-ō
对	hortum	-um	bellum	-um
呼	horte	-e	bellum	-um
奪	hortō	-ō	bellō	-ō
	複数			
		終端		終端
主	hortī	-ī	bella	-a
属	hortōrum	-ōrum	bellōrum	-ōrum
与	hortīs	-īs	bellīs	-īs
对	hortōs	-ōs	bella	-a
呼	hortī	-ī	bella	-a
奪	hortīs	-īs	bellīs	-īs

-er, -ir で終わる名詞は、以下のように曲用します。

	puer (少年) 語幹 puerō	ager (土地) 語幹 agrō	vir (男) 語幹 virō	
	単数			終端
主	puer	ager	vir	なし
属	puerī	agrī	virī	-ī
与	puerō	agrō	virō	-ō
对	puerum	agrū	virum	-um
呼	puer	ager	vir	なし
奪	puerō	agrō	virō	-ō
	複数			
主	puerī	agrī	virī	-ī
属	puerōrum	agrōrum	virōrum	-ōrum
与	puerīs	agrīs	virīs	-īs
对	puerōs	agrōs	virōs	-ōs
呼	puerī	agrī	virī	-ī
奪	puerīs	agrīs	virīs	-īs

1. **puer**, **vir** のような名詞は、単数主格・呼格で語幹の最後の母音が消えることに注意してください。
ager の単数主格・呼格では、さらに語幹の **r** の前に **e** が挿入されます。
2. **puer** と同じように曲用する **-er** 型の名詞には、**adulter** (姦夫)、**gener** (婿)、**Liber** (リーベル神)、**socer** (舅)、**vesper** (晩)、などがあります。また、**signifer**, **armiger** のように **-fer**, **-ger** で終わる複合語も **puer** と同じように曲用します。

-vus, -vum, -quus 型の名詞

24. 単数主格が -vus, -vum, -quus で終わる名詞は、初期と後期で二種類の屈折がありました。

初期の屈折 (カエサル、キケロを含む)			
	servos 男性「奴隷」	aevom 中性「年齢」	equos 男性「馬」
単数			
主	servos	aevom	equos
属	servī	aevī	equī
与	servō	aevō	equō
対	servom	aevom	equom
呼	serve	aevom	eque
奪	servō	aevō	equō
後期の屈折 (キケロより後)			
単数			
主	servus	aevum	equus
属	servī	aevī	equī
与	servō	aevō	equō
対	servum	aevum	equum
呼	serve	aevum	eque
奪	servō	aevō	equō

1. これらの名詞の複数形は、通常どおりです。どの時期でも同じ形になります。

第二曲用名詞の注意事項

25. 1. -ius で終わる固有名詞は通例、単数属格を (-iī の代わりに) -ī とします。また、単数呼格も (-ie の代わりに) -ī とします。例えば (Vergilii, Vergilie の代わりに) Vergili (ウエルギリウスの、ウエルギリウスよ) となります。そのような単語では、アクセントは後ろから二番目の音節に来ます。その音節が短くても、です。-ajus, -ejus で終わる名詞の単数属格は、-aī, -eī となります: Pompejus, Pompeī.
2. -ius, -ium で終わる普通名詞も、アウグストゥス即位 (紀元前 31 年) の後までは、通常単数属格を (-iī の代わりに) -ī としました:

主 ingenium filius
属 ingeni filii

そのような単語では、後ろから二番目の音節が短くても、そこにアクセントが来ます。

3. filius の単数呼格は -ie ではなく -ī です: fili (息子よ)
4. deus (神) には単数呼格がありません。また、複数形は以下のように屈折します。

主	dī	(deī)
属	deōrum	(deum)
与	dīs	(deīs)
对	deōs	
呼	dī	(deī)
奪	dīs	(deīs)

5. 単数処格は **-ī** です: **Corinthī** (コリントスにて)

6. 複数属格は、以下の場合 **-ōrum** の代わりに **-um** になります。

- (a) お金・単位を表す単語: **talentum** (タレントゥム [重さの単位] の)、**modium** (モディウス [乾量単位] の)、**sēstertium** (セステルティウス [銀貨] の)
- (b) **duumvir, triumvir, decemvir** で: **duumvirum**
- (c) 他の語も時々 **-um** になります: **liberum** (子供たちの)、**socium** (味方の)。

例外的な性をもつ第二曲用名詞

26. 1. 以下の名詞は、**-us** で終わりますが、例外的に女性です。

- (a) 「町」「島」「木」の名前 (§15,2)。また、いくつかの国の名前 (例: **Aegyptus** エジプト)。
- (b) 以下の 5 語:

alvus お腹
carbasus 亜麻布
colus 糸巻棒
humus 大地
vannus 唐箕

(c) いくつかのギリシャ語の女性名詞:

atomus 原子
diphthongus 二重母音

2. 以下の名詞は **-us** で終わりますが、中性です。

pelagus 大海原
vīrus 毒
vulgus 大衆

第二曲用のギリシャ語名詞

27. 第二曲用のギリシャ語名詞は、**-os, -ōs** (男性・女性) もしくは **-on** (中性) で終わります。主に、固有名詞です。これらは以下のように曲用します。

barbitos (男・女性「豎琴」)	Androgeōs (男性「アンドロゲオース」)	Īlion (中性「トロイ」)
主 barbitos	Androgeōs	Īlion
属 barbitī	Androgeō, -ī	Īliī
与 barbitō	Androgeō	Īliō
对 barbiton	Androgeō, -ōn	Īlion
呼 barbite	Androgeōs	Īlion
奪 barbitō	Androgeō	Īliō

1. **-os** で終わる名詞は、単数対格が **-on** の代わりに **-um** になることがあります: **Dēlum** (デーロスを)。
2. ギリシャ語名詞の複数形は、普通は通常通りです。
3. ギリシャ語名詞には他にもまれな形がありますが、辞書を参照してください。

6.1.7 第三曲用

28. 第三曲用名詞は、**-a, -e, -ī, -ō, -y, -c, -l, -n, -r, -s, -t, -x** で終わります。第三曲用は、語幹の違いによっていくつかに分類できます。

- I. 純粋な子音幹
- II. **i**-幹
- III. 子音幹だけれども、**i**-幹の曲用型が一部混じったもの
- IV. 長母音・二重母音で終わる語幹 (ごく少数)
- V. 不規則名詞

I. 子音幹

29. 1. 子音幹の名詞は、すべての斜格において語幹がそのままの形で現れます。ですから本当の格語尾を明らかに見ることができます。
2. 子音幹は、語幹の最後が黙音、流音、鼻音、摩擦音のいずれであるかによって、さらに細かく自然な分類をすることができます。

A. 黙音幹

30. 黙音幹は、以下のどれかの音で終わります:

1. 唇音 (**p**): **prīncep-s**
2. 喉音 (**g, c**): **rēmex (rēmeg-s), dux (duc-s)**
3. 歯音 (**d, t**): **lapis (lapid-s), mīles (mīlet-s)**

1. 唇黙音 (**p**) 幹

31. **prīnceps** (男性「指導者」)

	単数	(終端)	複数	(終端)
主	prīnceps	-s	prīncepēs	-ēs
属	prīncepis	-is	prīncepum	-um
与	prīncepī	-ī	prīncepibus	-ibus
対	prīncepem	-em	prīncepēs	-ēs
呼	prīnceps	-s	prīncepēs	-ēs
奪	prīncepe	-e	prīncepibus	-ibus

2. 喉黙音 (**g,c**) 幹

32. この場合、単数主格の終端 **-s** は喉音とくっついて、**-x** になります。

	rēmex (男性「漕ぎ手」)		dux (通性「指導者」)	
	単数	複数	単数	複数
主	rēmex	rēmigēs	dux	ducēs
属	rēmigis	rēmigum	ducis	ducum
与	rēmigī	rēmigibus	ducī	ducibus
对	rēmigem	rēmigēs	ducem	ducēs
呼	rēmex	rēmigēs	dux	ducēs
奪	rēmige	rēmigibus	duce	ducibus

3. 歯音音 (d,t) 幹

33. この場合、単数主格の -s が付くと、語幹の最後の d,t は消えてしまいます。

	lapis (男性「石」)		mīles (男性「兵士」)	
	単数	複数	単数	複数
主	lapis	lapidēs	mīles	mīlitēs
属	lapidis	lapidum	mīlitis	mīlitum
与	lapidī	lapidibus	mīlitī	mīlitibus
对	lapidem	lapidēs	mīlitem	mīlitēs
呼	lapis	lapidēs	mīles	mīlitēs
奪	lapide	lapidibus	mīlite	mīlitibus

B. 流音幹

34. 流音幹は、-l か -r で終わります。

	vigil (男性「夜警」)	victor (男性「征服者」)	aequor (中性「海」)
	単数		
主	vigil	victor	aequor
属	vigilis	victōris	aequoris
与	vigilī	victōrī	aequorī
对	vigilem	victōrem	aequor
呼	vigil	victor	aequor
奪	vigile	victōre	aequore
	複数		
主	vigilēs	victōrēs	aequora
属	vigilum	victōrum	aequorum
与	vigilibus	victōribus	aequoribus
对	vigilēs	victōrēs	aequora
呼	vigilēs	victōrēs	aequora
奪	vigilibus	victōribus	aequoribus

1. 流音幹の男性・女性名詞は、単数主格・呼格に終端がありません。
2. 流音幹の中性名詞は、単数主格・呼格に加えて単数対格にも終端がありません。

C. 鼻音幹

35. 鼻音幹は **-n** で終わります^{*3}。この **-n** は、単数主格ではしばしば落ちます。

	leō (男性「ライオン」)		nōmen (中性「名前」)	
	単数	複数	単数	複数
主	leō	leōnēs	nōmen	nōmina
属	leōnis	leōnum	nōminis	nōminum
与	leōnī	leōnibus	nōminī	nōminibus
対	leōnem	leōnēs	nōmen	nōmina
呼	leō	leōnēs	nōmen	nōmina
奪	leōne	leōnibus	nōmine	nōminibus

D. s-幹

36.

	mōs (男性「習慣」)	genus (中性「人種」)	honor (男性「名誉」)
	単数		
主	mōs	genus	honor
属	mōris	generis	honōris
与	mōrī	generī	honōrī
対	mōrem	genus	honōrem
呼	mōs	genus	honor
奪	mōre	genere	honōre
複数			
主	mōrēs	genera	honōrēs
属	mōrum	generum	honōrum
与	mōribus	generibus	honōribus
対	mōrēs	genera	honōrēs
呼	mōrēs	genera	honōrēs
奪	mōribus	generibus	honōribus

1. 語幹の最後の **s** が、斜格では (母音にはさまれて) **r** に変化することに注意してください。 **honor, color** のように、斜格の **r** が主格にも影響を及ぼし、**s** にとってかわってしまった単語もたくさんあります。ただし、もともとの形 **honōs, colōs** も、特に初期のラテン語や詩においてはよく登場します。

II. ī-幹

A. 男性・女性の ī-幹

37. 男性・女性の ī-幹名詞は、単数主格が **-is** で終わります。そして複数属格は常に **-ium** です。もともとは、単数対格は **-im**、単数奪格は **-ī**、複数対格は **-īs** でした。しかしこれらの語尾は、大部分が子音幹の **-em, -e, -ēs** に変わりました。

38. ^{*3} **-m** で終わる鼻音幹も一つだけ存在します: **hiems, hiemis** 「冬」です。

	tussis (女性「咳」) 語幹 tussi-	ignis (男性「火」) 語幹 igni-	hostis (通性「敵」) 語幹 hosti-	
	単数			終端
主	tussis	ignis	hostis	-is
属	tussis	ignis	hostis	-is
与	tussī	ignī	hostī	-ī
対	tussim	ignem	hostem	-im, -em
呼	tussis	ignis	hostis	-is
奪	tussī	ignī, -e	hoste	-ī, -e
	複数			終端
主	tussēs	ignēs	hostēs	-ēs
属	tussium	ignium	hostium	-ium
与	tussibus	ignibus	hostibus	-ibus
対	tussīs, -ēs	ignīs, -ēs	hostīs, -ēs	-īs, -ēs
呼	tussēs	ignēs	hostēs	-ēs
奪	tussibus	ignibus	hostibus	-ibus

1. 同じ種類の単語には、以下があります。

apis 蜂	crātis 編み細工	†*secūris 斧
auris 耳	*febris 熱	sēmentis 種まき
avis 鳥	orbis 円	†*sitis 喉の渇き
axis 車軸	ovis 羊	torris 燃えている木
*būris すきの柄	pelvis たらい	†*turris 塔
clāvis 鍵	puppis 船尾	trudis 突き棒
collis 丘	restis 綱	vectis てこ

* の付いた単語は、通例対格が -im です。† の付いた単語は、通例奪格が -ī です。何も付いていない語でも、-im, -ī はよく現れます。-is で終わる町・川の名前は、通例 -im, -ī になります。

- is で終わるからといって、ī 幹とは限りません。純粋に子音幹名詞であるものもあります。そのような語では、いつも普通の子音幹の終端が使われます。代表的なものに canis (犬)、juvenis (青年) があります⁴。
- ī 幹名詞であっても、単数主格が -is でなくなってしまうものがあります。pars (部分, par(ti)s より)、anas (カモ, ana(ti)s より)、mors (死)、dōs (持参金)、nox (夜)、sors (くじ)、mēns (知性)、ars (技術)、gēns (氏族) など。

B. 中性の ī 幹

39. 中性の ī 幹名詞は、単数主格が -e, -al, -ar で終わります。単数奪格は常に -ī です。複数主格・対格・呼格は -ia、複数属格は -ium になります。このことからわかるとおり、男性・女性の ī 幹名詞よりも ī 幹的な特徴に忠実です。

⁴ mēnsis ((暦の)月) は、もともと子音幹 (mēns-) ですが、複数属格は mēnsium, mēnsium のどちらも使われます。複数対格は mēnsēs です。

	sedīle (中性「椅子」) 語幹 sedili-	animāl (中性「動物」) 語幹 animāli-	calcar (中性「拍車」) 語幹 calcāri-	
	単数			終端
主	sedīle	animāl	calcar	-e, なし
属	sedīlis	animālis	calcāris	-is
与	sedīlī	animālī	calcārī	-ī
对	sedīle	animāl	calcar	-e, なし
呼	sedīle	animāl	calcar	-e, なし
奪	sedīlī	animālī	calcārī	-ī
	複数			終端
主	sedīlia	animālia	calcāria	-ia
属	sedīlium	animālium	calcārium	-ium
与	sedīlibus	animālibus	calcāribus	-ibus
对	sedīlia	animālia	calcāria	-ia
呼	sedīlia	animālia	calcāria	-ia
奪	sedīlibus	animālibus	calcāribus	-ibus

1. この種類の単語は、語幹の最後の **-i** が単数主格で消えることが多いです。消えない場合は **-e** に変化します。
2. 固有名詞の場合、単数主格が **-e** のものは単数奪格も **-e** になります: **Sōracte** (ソーラクテ山)。また、時に **mare** (海) も単数奪格が **-e** になります。

III. **i**-幹が混じった子音幹

40. 本当は子音幹名詞なのですが、**i**-幹名詞のように複数属格が **-ium**、複数対格が **-is** になってしまったものが多くあります。しかし単数対格が **-im** になったり、単数奪格が **-ī** になったりは決してしないことから、本来は子音幹であることがうかがえます。この種類の単語の例を下に挙げます。

	caedēs (女性「殺人」) 語幹 caed-	arx (女性「砦」) 語幹 arc-	linter (女性「ボート」) 語幹 lintr-
	単数		
主	caedēs	arx	linter
属	caedis	arcis	lintris
与	caedī	arcī	lintrī
对	caedem	arcem	lintrem
呼	caedēs	arx	linter
奪	caede	arce	lindre
	複数		
主	caedēs	arcēs	lintrēs
属	caedium	arcium	lintrium
与	caedibus	arcibus	lintribus
对	caedēs, -is	arcēs, -is	lintrēs, -is
呼	caedēs	arcēs	lintrēs
奪	caedibus	arcibus	lintribus

1. ここに分類される名詞は、以下のようなものがあります。

- (a) 単数主格 -ēs、単数属格 -is の名詞: nūbēs, aedēs, clādēs など。
- (b) 一つ以上の子音 + -s, -x で終わる単音節語の多く: urbs, mōns, stirps, lanx。
- (c) -ns, -rs で終わる名詞のほとんど: cliēns, cohors
- (d) ūter, venter; fūr, lis, mās, mūs, nix。複数形で: faucēs, penātēs, Optimātēs, Samnitēs, Quiritēs。
- (e) 単数主格 -tās、単数属格 -tātis の名詞が時々: cīvitās, aetās。なお cīvitās は普通 cīvitātium とします。

IV. -ī, -ū, 二重母音で終わる語幹

41.

	vīs (女性「力」) 語幹 vī-	sūs (通性「豚」) 語幹 sū-	bōs (通性「牛」) 語幹 bou-	Juppiter (男性「ユピテル」) 語幹 Jou-
	単数			
主	vīs	sūs	bōs	Juppiter
属	—	suis	bovis	Jovis
与	—	suī	bovī	Jovī
対	vim	suem	bovem	Jovem
呼	vīs	sūs	bōs	Juppiter
奪	vī	sue	bove	Jove
	複数			
主	vīrēs	suēs	bovēs	
属	vīrium	suum	bovum, boum	
与	vīribus	suibus, subus	bōbus, būbus	
対	vīrēs	suēs	bovēs	
呼	vīrēs	suēs	bovēs	
奪	vīribus	suibus, subus	bōbus, būbus	

1. sūs の斜格は、語根の音節が ū と短くなることに注意してください。
2. grūs は sūs と同じように曲用します。ただし、複数与格・奪格は、必ず gruibus となります。
3. Juppiter は Jou-pater のつづまった形です。ですから語幹は Jov-is, Jov-i,... と同じになります。

nāvis はもともと au- で終わる二重母音幹でしたが、ī-幹に変化しました。奪格は -ī になることが多いです。

V. 不規則な名詞

42.

	senex (男性「老人」)	carō (女性「肉」)	os (中性「骨」)
	単数		
主	senex	carō	os
属	senis	carnis	ossis
与	senī	carnī	ossī
对	senem	carnem	os
呼	senex	carō	os
奪	sene	carne	osse
	複数		
主	senēs	carnēs	ossa
属	senum	carnium	ossium
与	senibus	carnibus	ossibus
对	senēs	carnēs	ossa
呼	senēs	carnēs	ossa
奪	senibus	carnibus	ossibus

1. *iter, itineris* (中性「道」) は、語幹 *itiner-* から通常の曲用をします。
2. *supellex, supellectilis* (女性「家具」) は、単数形のみです。斜格は語幹 *supellectil-* から作られます。奪格は *-ī, -e* どちらにもなります。
3. *jecur* (中性「肝臓」) は、斜格を二つの語幹から作ります: *jecor-* か *jecinor-* です。例えば、属格は *jecoris* か *jecinoris* のどちらかになります。
4. *femur* (中性「腿[もも]」) は、普通斜格を語幹 *femor-* から作ります。ですが時々 *femin-* から作られることもあります。例えば属格は *femoris* か *feminis* になります。

第三曲用名詞の性の原則

43. 1. *-ō, -or, -ōs, -er, -ēs* の形の名詞は男性です。
 2. *-ās, -ēs, -is, -ys, -x, -s* (子音に続いて); *-dō, -gō* (属格 *-inis*); *-iō* (抽象名詞・集合名詞); *-ūs* (属格 *-ātis, -ūdis*) の形の名詞は女性です。
 3. *-a, -e, -i, -y, -o, -l, -n, -t, -ar, -ur, -ūs* の形の名詞は中性です。

例外的な性を持つ第三曲用名詞

44. 男性名詞の原則に反する例外

1. *-ō* の形の名詞:
 - (a) 女性: *carō* (肉)
2. *-or* の形の名詞:
 - (a) 女性: *arbor* (木)
 - (b) 中性: *aequor* (海)、*cor* (心)、*marmor* (大理石)
3. *-ōs* の形の名詞:
 - (a) 女性: *dōs* (持参金)
 - (b) 中性: *ōs (ōris)* (口)

4. -er の形の名詞:

- (a) 女性: **linter** (小舟)
 (b) 中性: **cadāver** (死体)、**iter** (道)、**tūber** (こぶ)、**ūber** (乳房)。また、植物の名前で -er のものも中性です: **acer** (カエデ)。

5. -ēs の形の名詞:

- (a) 女性: **seges** (穀物畑)

45. 女性名詞の原則に反する例外

1. -ās の形の名詞:

- (a) 男性: **vās** (保証人)
 (b) 中性: **vās** (容器)

2. -ēs の形の名詞:

- (a) 男性: **ariēs** (雄羊)、**pariēs** (家の壁)、**pēs** (足)

3. -is の形の名詞:

- (a) 男性: **-nis**、**-guis** の形のすべての名詞: **amnis** (川)、**ignis** (火)、**pānis** (パン)、**sanguis** (血)、**unguis** (爪)。
 また以下の語も男性です。

axis 車軸	piscis 魚
collis 丘	postis (戸口の) 側柱
fascis 束	pulvis 塵
lapis 石	orbis 円
mēnsis (暦の) 月	sentis イバラの茂み

4. -x の形の名詞:

- (a) 男性: **apex** (先端)、**cōdex** (木の幹)、**grex** (群れ)、**imbrex** (中空の瓦)、**pollex** (親指)、**vertex** (渦)、**calix** (杯)

5. 子音 + -s の形の名詞:

- (a) 男性: **dēns** (歯)、**fōns** (泉)、**mōns** (山)、**pōns** (橋)

6. -dō の形の名詞:

- (a) 男性: **cardō** (蝶番)、**ōrdō** (列)。

46. 中性名詞の原則に反する例外

1. -l の形の名詞:

- (a) 男性: **sōl** (太陽)、**sāl** (塩)

2. -n の形の名詞:

- (a) 男性: **pecten** (櫛 [くし])

3. -ur の形の名詞:

- (a) 男性: **vultur** (ハゲワシ)

4. -ūs の形の名詞:

- (a) 男性: **lepus** (ウサギ)

ギリシャ語の第三曲用名詞

47. ギリシャ語の第三曲用名詞について、主な特記事項を以下に挙げます。

1. 単数対格は -ā です: **aetherā** (上天の精気)、**Salamīnā** (サラミス島を)

2. 複数主格は **-ēs** です: **Phrygēs** (ブリュギア人たちは)
3. 複数対格は **-ās** です: **Phrygās** (ブリュギア人たちを)
4. **-ās** (属格 **-antis**) の形の固有名詞は、単数呼格が **-ā** です: **Atlās** (**Atlantis**)、呼格 **Atlā** (アトラスよ)
5. **-ma** (属格 **-matis**) の形の中性名詞は、複数与格・奪格が **-ibus** ではなく **-is** になります: **poēmatis** (詩に)
6. **Orpheus** のように **-eus** で終わる固有名詞は、単数呼格が **-eu** です (**Orpheu** 等)。ただし、散文においては他の格は普通第二曲用になります: **Orpheī**, **Orpheō** 等。
7. **Periclēs** のように **-ēs** で終わる固有名詞は、単数属格が **-is** になったり **-ī** になったりします: **Periclis** もしくは **Pericliī**。
8. **-ō** の形の女性の固有名詞は、属格が **-ūs** になり。他の格はすべて **-ō** になります。

主	Didō
属	Didūs
与	Didō
対	Didō
呼	Didō
奪	Didō
9. ギリシャ語名詞に普通のラテン語の終端がつくこともよくあります。

6.1.8 第四曲用

ŭ-幹

48. 第四曲用名詞は、**-us** (男性) もしくは **-ū** (中性) で終わります。これらは以下のように曲用します。

	frūctus (男性「果物」)		cornū (中性「つの」)	
	単数	複数	単数	複数
主	frūctus	frūctūs	cornū	cornua
属	frūctūs	frūctuūm	cornūs	cornuum
与	frūctūī	frūctibus	cornū	cornibus
対	frūctum	frūctūs	cornū	cornua
呼	frūctus	frūctūs	cornū	cornua
奪	frūctū	frūctibus	cornū	cornibus

第四曲用名詞の注意点

49. 1. **-us** で終わる第四曲用名詞は、特に初期のラテン語では、単数属格が **-ī** になることがあります。第二曲用名詞 **-us** からの類推です: **senātī**, **ōrnātī**。プラウトゥスとテレンティウスでは、普通 **-ī** になります。
2. **-us** で終わる第四曲用名詞も、単数与格が **-uī** でなく **-ū** になることが時々あります: **frūctū** (**frūctūī** の代わりに)。
3. 以下の語は、複数与格・奪格が **-ibus** ではなく **-ubus** になります: **artūs** (複数形「四肢」)、**tribus** (部族)、**-cus** の形の二音節語。例えば **artubus**, **tribubus**, **arcubus**, **lacubus** のようにです。ただし **tribus** を除けば、これらの単語も **-ibus** の形がかまいません。
4. **domus** (家) は第四曲用に従って曲用しますが、以下のように第二曲用の形にもなります:

domī 家で (処格)
domō 家から

domum 家へ (単数)

domōs 家へ (複数)

5. 中性の第四曲用名詞で一般的に用いられるのは、**cornū** (つの)、**genū** (ひざ)、**verū** (焼き串) だけです。

例外的な性をもつ第四曲用名詞

50. 以下の第四曲用名詞は、**-us** の形をしていますが女性です: **acus** (針)、**domus** (家)、**manus** (手)、**porticus** (柱廊)、**tribus** (部族)、**Īdūs** (暦の月の 15 日もしくは 13 日)、木の名前 (§15,2)。

6.1.9 第五曲用

ē-幹

51. 第五曲用名詞は **-ēs** で終わり、以下のように曲用します。

	diēs (男性「日」)		rēs (女性「物」)	
	単数	複数	単数	複数
主	diēs	diēs	rēs	rēs
属	diēi	diērum	rēi	rērum
与	diēi	diēbus	rēi	rēbus
对	diem	diēs	rem	rēs
呼	diēs	diēs	rēs	rēs
奪	diē	diēbus	rē	rēbus

第五曲用名詞の注意点

52. 1. 単数属格・与格は、子音の後ろでは **-ēi** ではなく **-ēi** となります: **spēi, rēi, fidēi**
2. **plēbēs** (= **plēbs**) は、**tribūnus plēbi** (護民官)、**plēbi scītum** (平民法) の表現で属格語尾が **-i** (**-ēi** ではなく) になります。この形の属格は、他の単語でも時々見られます。
3. 属格・与格が **-ē** になることも時々あります: **aciē**
4. **diēs, rēs** を除いて、ほとんどの第五曲用名詞は複数形になりません。**aciēs, seriēs, speciēs, spēs** ほか数語が複数主格・対格になるのみです。

第五曲用名詞の性

53. **diēs** (日) **merīdiēs** (正午) を除けば、第五曲用名詞は通例女性です。また **diēs** も単数形では、特に「特定の日」を指す場合は、女性になることもあります。

6.1.10 欠如名詞

54. 欠如名詞とは:

1. 単数形だけで使われる名詞
2. 複数形だけで使われる名詞
3. いくつかの格だけで使われる名詞
4. 曲用しない名詞

のことです。

単数形だけで使われる名詞

55. 意味する内容が複数になるような性質ではないために、通例単数形でのみ使われる名詞がたくさんあります。

1. 固有名詞: **Cicerō** (キケロー)、**Italia** (イタリア)
2. 物質を表す名詞: **aes** (銅)、**lac** (牛乳)
3. 抽象名詞: **ignōrantia** (無罪)、**bonitās** (善)
4. ただし以上のような名詞であっても、時々複数形になることがあります。
 - (a) 固有名詞: 同じ一族の人々をさすとき、また、ある類型の代表として名指すとき: **Cicerōnēs** (キケロー一族)、**Catōnēs** (カトーのような人たち)
 - (b) 物質を表す名詞: その物質でできた物をさすとき、また、その物質のさまざまな種類をさすとき: **aera** ((複数の) ブロンズ像)、**ligna** (いろいろな木)
 - (c) 抽象名詞: その性質の実例を表すとき: **ignōrantiae** (複数の) 無罪判決

複数形だけで使われる名詞

56. 以下のような名詞です。

1. 多くの地名: **Thēbae** (テーバイ)、**Leuctra** (レウクトラ)、**Pompejī** (ポンペイイー)
2. 多くの祭りの名: **Megalēsia** メガレーシアの祭り
3. 他にも特別な語がたくさんあります。そのうち重要なものを挙げると以下ようになります。

angustiae 細道	mānēs 亡霊
arma 武器	moenia 都市の城壁
dēliciae 喜び	minae 脅迫
divitiae 富	nūptiae 結婚
Īdūs 毎月 13 日または 15 日	posterī 子孫
indūtia 休戦	reliquiae 残り
insidiae 待ち伏せ	tenebrae 闇
majōrēs 祖先	verbera 打撃

また、古典の散文では以下のものも通例複数形だけで用いられます。

cervicēs 首	nārēs 鼻
fidēs 豎琴	viscera 内臓

いくつかの格だけで使われる名詞

57. 1. 一つの格だけで使われる名詞: 第四曲用の名詞には、単数奪格だけが使われるものが多くあります: **jussū** (命令によって)、**injussū** (無断で)、**nātū** (生まれながら)
2. 二つの格だけで使われる名詞:
 - (a) **fors** 「偶然」単数主格、**forte** 単数奪格
 - (b) **spontis** 「自由意志」単数属格、**sponte** 単数奪格
3. 三つの格だけで使われる名詞: **nēmō** 「だれも...ない」(主格) は、与格 **nēminī** と対格 **nēminem** を持ちます。しかし属格と奪格は **nūllus** の対応する格で補われ、**nūllius**, **nūllō** となります。
4. **impetus** は単数主格・対格・奪格と、複数主格・対格を持ちます: **impetus**, **impetum**, **impetū**, **impetūs**
5. (a) **precī**, **precem**, **prece** には単数主格・属格がありません。

(b) *vicis, vicem, vice* には単数主格・与格がありません。

6. *opis, dapis, frūgis* には単数主格がありません。

7. 第三曲用の単音節語には、複数属格がないことがよくあります: *as, cor, lūx, sōl, aes, ōs (ōris), rūs, sāl, tūs*

曲用しない名詞

58. 以下の語は、曲用しません:

<i>fās</i> 正しいこと	<i>nefās</i> 犯罪
<i>īnstar</i> 同等のもの	<i>nihil</i> 何も...ない
<i>māne</i> 朝	<i>secus</i> 性別

1. この表に挙がった名詞は、単数主格・対格でのみ使われる、単なる中性名詞です。ただし *māne* だけは、奪格「朝に」としても使われます。

不規則曲用

59. 以下に挙げる名詞は、格によって曲用型が異なります。

1. いくつかの名詞は、単数形と複数形で曲用型が異なります。

vās, vāsīs 「碗(わん)」 複数 *vāsa, vāsōrum, vāsīs, ...*

jūgerum, jūgerī 「(面積の単位)」 複数 *jūgera, jūgerum, jūgeribus, ...*

2. いくつかの名詞は、主として一つの曲用型に従いますが、特定の格が別の曲用のものになります。

(a) *-ia* で終わる第一曲用の名詞には、主格・対格が第五曲用にもなるものがあります: *māteriēs, māteriem* 「材料」(*māteria, māteriam* でもよい)

(b) *famēs* (飢え) は通例第三曲用ですが、奪格は第五曲用の *famē* になります。

(c) *requiēs, requiētis* (休憩) は通例第三曲用ですが、対格は *requiētem* だけでなく第五曲用の *requiem* になることがあります。

(d) *plēbs, plēbis* (平民) は第三曲用ですが、第五曲用の *plēbēs, plēbeī (plēbī* でもよい、§52,2 参照) にもなります。

不規則性

60. 不規則性名詞は、性が一つに定まりません。

1. 第二曲用の名詞には、男性 *-us* と中性 *-um* の二つの形をもつものがあります: *clipeus, clipeum* (盾)、*carrus, carrum* (荷車)。

2. 単数形と複数形で性の違う名詞があります:

単数	複数
<i>balneum</i> (中性「風呂」)	<i>balneae</i> (女性「浴場」)
<i>epulum</i> (中性「饗宴」)	<i>epulae</i> (女性「饗宴」)
<i>frēnum</i> (中性「馬勒」)	<i>frēnī</i> (男性(まれに <i>frēna</i> 中性)「馬勒」)
<i>jocus</i> (男性「悪戯」)	<i>joca</i> (中性(<i>jocī</i> 男性とも)「悪戯」)
<i>locus</i> (男性「場所」)	<i>loca</i> (中性「地域」)、 <i>locī</i> (男性「段落」)、
<i>rāstrum</i> (中性「熊手」)	<i>rāstrī</i> (男性(<i>rāstra</i> 中性とも)「熊手」)

(a) 不規則性名詞は、同時に不規則曲用であることがあります。上記の初めの二例がそうです。

複数形になると意味が変わる名詞

61. 以下の名詞は、単数形と複数形で意味が異なります。

単数	複数
aedēs 神殿	aedēs 家
auxilium 助け	auxilia 援軍
carcer 牢	carcerēs 馬房 (馬小屋の仕切り)
castrum 砦	castra 陣営
cōpia 豊かさ	cōpiae 軍隊、資源
finis 終端	finēs 国境
fortūna 幸運	fortūnae 資産、富
grātia (人から受ける) 親切	grātia 感謝
impedimentum 妨害	impedimenta 荷物
littera 文字	litterae 書簡、文学
mōs 習慣	mōrēs 性格
opera 奉仕	operae 労働者
(ops) opis 力	opēs 資源
pars 部分	partēs 政党、役割
sāl 塩	sālēs 機知

6.2 形容詞

62. 形容詞は、「性質」を表します。形容詞は名詞と同じように曲用し、二種類に分類できます。

1. 第一・第二曲用の形容詞
2. 第三曲用の形容詞

6.2.1 第一・第二曲用の形容詞

63. この形容詞は、男性のとき **hortus**, **puer**, **ager** と同じ曲用をします。また女性のときは **porta** と同じ曲用になり、中性のときは **bellum** と同じ曲用になります。たとえば、男性が **hortus** 型になるような形容詞の曲用は、以下のようになります。

bonus 良い

	単数		
	男性	女性	中性
主	bonus	bona	bonum
属	bonī	bonae	bonī
与	bonō	bonae	bonō
対	bonum	bonam	bonum
呼	bone	bona	bonum
奪	bonō	bonā	bonō
	複数		
主	bonī	bonae	bona
属	bonōrum	bonārum	bonōrum
与	bonīs	bonīs	bonīs
対	bonōs	bonās	bona
呼	bonī	bonae	bona
奪	bonīs	bonīs	bonīs

1. **-ius** の形の形容詞の男性・中性の単数属格は、**-ī** です (名詞と違って **-ī** にはなりません: §25,1;2)。また、この形の形容詞の単数呼格も **-ie** であって **-ī** にはなりません。たとえば **eximius** の属格は **eximii**、呼格は **eximie** です。
2. 配分数詞 (§78,1,c) の男性・中性複数属格は通例 **-um** になり、**-ōrum** ではありません (§25,6 と比べてください): **dēnum centēnum**。ただし、**singulōrum** は常にこの形です。

64. 男性が **puer** 型になるような形容詞の曲用は以下ようになります。

tener 柔らかい

	単数		
	男性	女性	中性
主	tener	tenera	tenerum
属	tenerī	tenerae	tenerī
与	tenerō	tenerae	tenerō
対	tenerum	teneram	tenerum
呼	tener	tenera	tenerum
奪	tenerō	tenerā	tenerō
	複数		
主	tenerī	tenerae	tenera
属	tenerōrum	tenerārum	tenerōrum
与	tenerīs	tenerīs	tenerīs
対	tenerōs	tenerās	tenera
呼	tenerī	tenerae	tenera
奪	tenerīs	tenerīs	tenerīs

65. 男性が **ager** 型になるような形容詞の曲用は以下ようになります。

sacer 神聖な

	単数		
	男性	女性	中性
主	sacer	sacra	sacrum
属	sacrī	sacrae	sacrī
与	sacrō	sacrae	sacrō
対	sacrum	sacram	sacrum
呼	sacer	sacra	sacrum
奪	sacrō	sacrā	sacrō
	複数		
主	sacrī	sacrae	sacra
属	sacrōrum	sacrārum	sacrōrum
与	sacrīs	sacrīs	sacrīs
対	sacrōs	sacrās	sacra
呼	sacrī	sacrae	sacra
奪	sacrīs	sacrīs	sacrīs

- er の形の形容詞は、そのほとんどが **sacer** と同じ曲用をします。しかし以下の形容詞は **tener** と同じ活用です：
asper (荒い)、**lacer** (切り裂かれた)、**liber** (自由な)、**miser** (不幸な)、**prōsper** (成功した)、**-fer**、**-ger** の形の複合語。また、**dexter** (右の) も時々 **tener** 型になります。
- satur** (満腹な) は **satur**, **satura**, **saturum** と曲用します。

9 つの不規則形容詞

66. 以下の形容詞のことです：

alius 別の	alter 他方の
ūllus どれも	nūllus どれも...ない
uter どちらかの	neuter どちらも...ない
sōlus 単独の	tōtus 全体の
ūnus 一つの	

これらは以下のように曲用します。

	単数					
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	alius	alia	aliud	alter	altera	alterum
属	alterīus	alterīus	alterīus* ⁵	alterīus	alterīus	alterīus
与	aliī	aliī	aliī	alterī	alterī* ⁶	alterī
対	alium	aliam	aliud	alterum	alteram	alterum
呼	—	—	—	—	—	—
奪	aliō	aliā	aliō	alterō	alterā	alterō

	単数					
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	uter	utra	utrum	tōtus	tōta	tōtum
属	utrīus	utrīus	utrīus	tōtīus	tōtīus	tōtīus
与	utrī	utrī	utrī	tōtī	tōtī	tōtī
对	utrum	utram	utrum	tōtum	tōtam	tōtum
呼	—	—	—	—	—	—
奪	utrō	utrā	utrō	tōtō	tōtā	tōtō

1. これらの形容詞には、すべて呼格がありません。また、複数形は規則通りです。
2. **neuter** は **uter** と同じように曲用します。

6.2.2 第三曲用の形容詞

67. 第三曲用の形容詞は、三種類に分類できます。

1. 単数主格の終端が三種類のもの: 三つの性によって終端が違います。
2. 単数主格の終端が二種類のもの。
3. 単数主格の終端が一種類のもの。

(a) 比較級と §70,1 で述べる少数の例外を除いて、第三曲用の形容詞はすべて *i*-幹の屈折をします。つまり、単数奪格は *-ī*、複数属格は *-ium*、男性・女性の複数対格は *-īs* (*-ēs* でもよい)、中性の複数主格・対格は *-ia* です。

三種類の終端をもつ形容詞

68. 三種類の終端をもつ形容詞は以下のように曲用します。

⁴⁵ これは、属格 *alius* の代わりに事実上常に用いられます。

⁴⁶ 女性単数与格 *alterae* も使われます。

ācer とがった

	単数		
	男性	女性	中性
主	ācer	ācris	ācre
属	ācris	ācris	ācris
与	ācrī	ācrī	ācrī
対	ācrem	ācrem	ācre
呼	ācer	ācris	ācre
奪	ācrī	ācrī	ācrī
	複数		
主	ācrēs	ācrēs	ācria
属	ācrium	ācrium	ācrium
与	ācribus	ācribus	ācribus
対	ācrēs, -īs	ācrēs, -īs	ācria
呼	ācrēs	ācrēs	ācria
奪	ācribus	ācribus	ācribus

1. ācer と同じように曲用する形容詞は、**alacer** (活発な)、**campester** (平らな)、**celeber** (混んでいる)、**equester** (騎手の)、**palūster** (沼地の)、**pedester** (徒歩の)、**puter** (腐った)、**salūber** (健康に良い)、**silvester** (森の)、**terrester** (陸の)、**volucer** (飛べる) などです。また、-ber で終わる月の名前 (**September** など) もこの型の曲用です。
2. **celer, celeris, celere** (速い) は r の前の e を保持しますが、複数属格のときだけ e が落ちます。
3. この種類に属する形容詞は、単数主格の女性形が男性にも使われることが時々あります。**salūbris, silvestris, terrestris** が当てはまります。上で挙げた他の語では、女性形を男性として用いることは主に初期・後期ラテン語と詩に限られます。

二種類の終端をもつ形容詞

69. 二種類の終端をもつ形容詞は以下のように曲用します。

	fortis 強い		fortior もっと強い	
	単数			
	男性・女性	中性	男性・女性	中性
主	fortis	forte	fortior	fortius
属	fortis	fortis	fortiōris	fortiōris
与	fortī	fortī	fortiōrī	fortiōrī
対	fortem	forte	fortiōrem	fortius
呼	fortis	forte	fortior	fortius
奪	fortī	fortī	fortiōre	fortiōre
	複数			
主	fortēs	fortia	fortiōrēs	fortiōra
属	fortium	fortium	fortiōrum	fortiōrum
与	fortibus	fortibus	fortiōribus	fortiōribus
対	fortēs, -is	fortia	fortiōrēs, -is	fortiōra
呼	fortēs	fortia	fortiōrēs	fortiōra
奪	fortibus	fortibus	fortiōribus	fortiōribus

1. **fortior** は **fortis** の比較級です。比較級は、通例全て同じように曲用します。複数対格が **-is** になることはまれです。

一種類の終端をもつ形容詞

70.

	fēlix 幸せな		prūdēns 熟達した	
	単数			
	男性・女性	中性	男性・女性	中性
主	fēlix	fēlix	prūdēns	prūdēns
属	fēlicis	fēlicis	prūdentis	prūdentis
与	fēlicī	fēlicī	prūdentī	prūdentī
対	fēlicem	fēlix	prūdentem	prūdēns
呼	fēlix	fēlix	prūdēns	prūdēns
奪	fēlicī	fēlicī	prūdentī	prūdentī
	複数			
主	fēlicēs	fēlicia	prūdentēs	prūdentia
属	fēlicium	fēlicium	prūdentium	prūdentium
与	fēlicibus	fēlicibus	prūdentibus	prūdentibus
対	fēlicēs, -is	fēlicia	prūdentēs, -is	prūdentia
呼	fēlicēs	fēlicia	prūdentēs	prūdentia
奪	fēlicibus	fēlicibus	prūdentibus	prūdentibus

	vetus 古い		plūs もっとたくさん	
	単数			
	男性・女性	中性	男性・女性	中性
主	vetus	vetus	—	plūs
属	veteris	veteris	—	plūris
与	veterī	veterī	—	plūrī
対	veterem	vetus	—	—
呼	vetus	vetus	—	plūs
奪	vetere	vetere	—	plūre
	複数			
主	veterēs	vetera	plūrēs	plūra
属	veterum	veterum	plūrium	plūrium
与	veteribus	veteribus	plūribus	plūribus
対	veterēs	vetera	plūrēs, -īs	plūra
呼	veterēs	vetera	—	—
奪	veteribus	veteribus	plūribus	plūribus

- 御覧のように、**vetus** は純粋な子音幹として曲用します。つまり単数奪格は **-e**、複数属格は **-um**、中性複数主格は **-a** で、男性・女性複数対格は **-ēs** のみです。同じように曲用するものには、**compos** (支配している)、**dives** (裕福な)、**particeps** (関与している)、**pauper** (貧しい)、**prīnceps** (最初の)、**sōspes** (無事な)、**superstes** (生き残っている) があります。ただし、**dives** の中性複数には必ず **ditia** です。
- inops** (貧乏な)、**memor** (心に留めている) の単数奪格は **inopī**, **memorī** ですが、複数属格は **inopum**, **memorum** になります。
- 分詞 **-āns**, **-ēns** は **i**-幹の曲用に従います。ただし、奪格が **-ī** になるのは形容詞として使われているときだけです。分詞として、あるいは名詞的用法で使われているときは、**-e** になります。
ā sapientī virō 賢い男によって
ā sapiente 賢者によって
Tarquiniō rēgnante タルキニイー人の治世において
- plūs** は単数では必ず名詞になります。
- 名詞的用法の形容詞は、単数奪格のとき
 - 通常は形容詞と同じ曲用形です。
aequālis (同年代の人) 奪: **aequālī**
cōsulāris (前執政官) 奪: **cōsulārī**
 月の名前も同じです: **Aprīlī** (四月に)、**Decembrī** (十二月に)。
 - しかし、固有名詞として使われる形容詞は、単数奪格が **-e** になります: **Celere** (ケレルから)、**Juvenāle** (ユウェナーリスから)。
 - ās**, **-ātis** もしくは **-īs**, **-ītis** の形の不完全形容詞は、場所を意味するとき通例 **-ī** になります: **in Arpīnātī** (アルピーヌムの地にて)。しかし人を意味するときは **-e** になります: **ab Arpīnāte** (アルピーヌムの住民によって)。
- 曲用しない形容詞がほんの少しだけあります。重要なものは **frūgī** (質素な)、**nēquam** (無価値の) です。
- 詩では、**-ns** で終わる形容詞と分詞は、時々複数属格が **-ium** でなく **-um** になります: **venientum** (やってくる人々の)

6.2.3 形容詞の比較形

71. 1. 形容詞には比較の度合いが三種類存在します – 原級、比較級、最上級です。
 2. 比較級は通例、原級の語幹から最後の母音を取り除いたものに **-ior** (中性: **-ius**) をくっつけて作ります。最上級は **-issimus** (**-a**, **-um**) をくっつけて作ります。

altus 高い altior もっと高い altissimus 最も高い
 fortis 強い fortior もっと強い fortissimus 最も強い
 fēlix 幸運な fēlicior もっと幸運な fēlicissimus 最も幸運な

分詞も、形容詞として使われるときは同じように原級、比較級、最上級を作ります。

doctus 学識のある doctior doctissimus
 egēns 貧しい egentior egentissimus

3. **-er** で終わる形容詞の最上級は、原級の主格に **-rimus** をくっつけて作ります。比較級は規則どおりです。

asper 粗い asperior asperrimus
 pulcher 美しい pulchrior pulcherrimus
 ācer とがった ācior ācerrimus
 celer 速い celerior celerrimus

(a) **mātūrus** は **mātūrior**, **mātūrissimus** もしくは **mātūrrimus** となります。

4. 以下の五つの **-ilis** で終わる形容詞の最上級は、原級の語幹から最後の母音を取り除いたものに **-limus** をくっつけて作ります。比較級は規則どおりです。

facilis たやすい facilior facillimus
 difficilis 難しい difficilior difficillimus
 similis 似ている similior simillimus
 dissimilis 違っている dissimilior dissimillimus
 humilis 低い humilior humillimus

5. **-dicus**, **-ficus**, **-volus** の形の形容詞の比較級と最上級は、**-dicēns**, **-ficēns**, **-volēns** から作ったかのようになります。

maledicus 中傷的な maledicentior maledicentissimus
 magnificus 豪華な magnificentior magnificentissimus
 benevolus 善意の benevolentior benevolentissimus

(a) **-dicēns**, **-volēns** の形の原級も、初期ラテン語に見られます: **maledicēns**, **benevolēns**。

6. **dives** の比較級は **dīvitior** もしくは **dītior**、最上級は **dīvitissimus** もしくは **dītissimus** です。

不規則な比較形

72. いくつかの形容詞は、比較形で語幹が替わります。

bonus 良い melior optimus
 malus 悪い pejor pessimus
 parvus 小さい minor minimus
 magnus 大きい major maximus
 multus 多い plūs plūrimus
 frūgī 質素な frūgālior frūgālistissimus
 nēquam 無価値な nēquior nēquistissimus

不完全な比較形

73. 1. 原級が全く欠けているもの:

(cf. prae ~の前に)	prior より前の	prīmus 最初の
(cf. citrā ~のこちら側に)	citerior より近い	citimus 最も近い
(cf. ultrā ~を超えて)	ulterior もっと遠い	ultimus 最も遠い
(cf. intrā ~の内部に)	interior 内側の	intimus 最も奥の
(cf. prope ~の近くに)	propior より近い	proximus 最も近い
(cf. dē ~から下に)	dēterior より低い	dēterrimus 最低の
(cf. potis (古)~できる)	potior より良い	potissimus 最も優れた

2. 原級がいくつかの格でのみ存在するもの:

posterō diē, annō,... 次の日、次の年、...	posterior より後の	postrēmus 最後の
posterī 子孫		postumus 最後に生まれた
exterī 外人	exterior より外側の	extrēmus, extimus 最も外側の
nātiōnēs exterae 外国の人々		
inferī 冥界の住人	inferior より下の	īnfirmus, -īmus 最も下の
Mare Īnferum テレニア海		
superī 天上の神々	superior より高い	suprēmus 最後の
Mare Superum アドリア海		summus 最も高い

3. 比較級がないもの:

vetus 古い	— ^{*7}	veterrimus
fīdus 誠実な	—	fīdissimus
novus 新しい	— ^{*8}	novissimus ^{*9} 最後の
sacer 聖なる	—	sacerrimus
falsus 間違った	—	falsissimus

ここに上げたのはよく使われるものだけです。比較級のない形容詞は他にもあります。

4. 最上級のないもの:

alacer 活発な	alacrior	—
ingēns 巨大な	ingentior	—
salūtāris 健康に良い	salūtārior	—
juvenis 若い	jūnior	— ^{*10}
senex 年老いた	senior	— ^{*11}

(a) **-ālis, -īlis, -īlis, -bilis** の形の多くの形容詞は、やはり最上級を欠きます。そのほかにも少数存在します。

magis, maximē による比較形

74. 語尾変化による比較形を作れない形容詞が多く存在します。そのような形容詞は、**magis** (もっと), **maximē** (最も) を冠することで比較級・最上級を表現します。以下のような形容詞が当てはまります。

^{*7} **vetustior** (**vetustus** の比較級) が代わりに用いられます。

^{*8} **recentior** が代わりに用いられます。

^{*9} 「一番新しい」の意味では **recentissimus** が用いられます。

^{*10} **minimus nātū** で補われます。

^{*11} **maximus nātū** で補われます。

1. **-ālis, -āris, -idus, -īlis, -icus, -imus, -īmus, -ōrus** で終わる多くの形容詞。
2. 母音 + **us** で終わる形容詞: **idōneus** (ふさわしい)、**arduus** (険しい)、**necessārius** (必要な)。
 - (a) **-quus** の形の形容詞は、これには当たりません。なぜなら、ひとつめの **u** は子音であって母音ではないからです。

比較ができない形容詞

75. 1. 表している意味の性質からして、比較することができない形容詞がたくさんあります: **hodiernus** (今日の)、**annuus** (年の)、**mortālis** (死ぬ運命の)。
2. そのほか、いくつかの語は比較形をつくりません: **mīrus, gnārus, merus**。

6.2.4 副詞の作り方と比較形

76. 副詞はその大部分が形容詞から派生したものです。そのような副詞の比較形は、もとの形容詞の比較形から作ります。

1. 第一・第二曲用の形容詞から派生する副詞の原級は、元の形容詞の単数属格から語尾の **-ī** をとり、**-ē** をくっつけて作ります。第三曲用の形容詞から派生する副詞の原級は、元の形容詞の単数属格から語尾の **-is** をとり、**-iter** をくっつけて作ります。

cārus	cārē	高い値段で
pulcher	pulchrē	美しく
ācer	ācriter	鋭く
levis	leviter	そっと

- (a) ただし、**-ns** の形の形容詞と他少数の語は、**-iter** ではなく **-er** を使って副詞を作ります。

sapiēns	sapienter	賢明に
sollers	sollerter	巧妙に

注意: **audāx** は **audācter** (大胆に) になります。

2. 副詞の比較級は、全て形容詞の中性単数対格になります。また、副詞の最上級は全て、形容詞の最上級の単数属格の **-ī** を **-ē** に替えて作ります。

(cārus)	cārē	高い値段で	cārius	cārissimē
(pulcher)	pulchrē	美しく	pulchrius	pulcherrimē
(ācer)	ācriter	鋭く	ācrius	ācerrimē
(levis)	leviter	軽く	levius	levissimē
(sapiēns)	sapienter	賢明に	sapientius	sapientissimē
(audāx)	audācter	大胆に	audācius	audācissimē

作り方・比較形が特殊な副詞

77. 1.

benē 良く	melius	optimē
malē 悪く	pejus	pessimē
magnopere 大いに	magis	maximē
multum 多く	plūs	plūrimum
nōn multum 少し	minus	minimē
parum 少し		
diū 長い間	diūtius	diūtissimē
nēquiter 無駄に	nēquius	nēquissimē
saepe しばしば	saepius	saepissimē
mātūrē 折よく	mātūrius	mātūrrimē, mātūrissimē
prope 近くに	propius	proximē
nūper 少し前に	—	nūperrimē
—	potius むしろ	potissimum 特に
—	prius 以前に	primum まず
secus 別のふうに	sētius より少なく	—

2. 第一・第二曲用の形容詞には、-ē でなく -ō を使って副詞になるものがいくつか存在します。

crēbrō 頻繁に	falsō 誤って
continuō すぐに	subitō 突然
rārō まれに	...など

(a) cito (すばやく) の -ō は短いです。

3. 形容詞の中性単数対格を副詞の原級とするものが少数あります。

multum 大いに	paulum 少し	facile 簡単に
------------	-----------	------------

4. 第一・第二曲用の形容詞に -iter をつけて副詞にするものが少数あります。

firmus, firmiter しっかりと	hūmānus, hūmāniter 人間らしく
largus, largiter 豊富に	alius, aliter 他の方法で

(a) violentus の副詞形は violenter です。

5. 副詞を作る接尾辞は他にもいろいろあります。その中で重要なものは、たとえば -tus, -tim です: antiquitus (昔から)、paulātim (少しずつ)。

6.2.5 数詞

78. 数詞は以下のように分類できます。

1. 数形容詞:

- (a) 基数詞: ūnus (一)、duo (二) など。
 (b) 序数詞: prīmus (一つめ)、secundus (二つめ) など。
 (c) 配分数詞: singuli (一つずつ)、binī (二つずつ) など。

2. 数副詞: semel (一回)、bis (二回) など。

79. 数形容詞・数副詞一覧

	基数	序数	配分数	副詞
1	<i>ūnus, ūna, ūnum</i>	<i>prīmus</i> 一つめ	<i>singulī</i> 一つずつ	<i>semel</i> 一度
2	<i>duo, duae, duo</i>	<i>secundus</i> 二つめ	<i>bīnī</i> 二つずつ	<i>bis</i> 二度
3	<i>trēs, tria</i>	<i>tertius</i> 三つめ	<i>terni (trīnī)</i>	<i>ter</i>
4	<i>quattuor</i>	<i>quārtus</i> 四つめ	<i>quaternī</i>	<i>quater</i>
5	<i>quīnque</i>	<i>quīntus</i> 五つめ	<i>quīnī</i>	<i>quīnquiēs</i>
6	<i>sex</i>	<i>sextus</i>	<i>sēnī</i>	<i>sexiēs</i>
7	<i>septem</i>	<i>septīmus</i>	<i>septēnī</i>	<i>septiēs</i>
8	<i>octō</i>	<i>octāvus</i>	<i>octōnī</i>	<i>octiēs</i>
9	<i>novem</i>	<i>nōnus</i>	<i>novēnī</i>	<i>noviēs</i>
10	<i>decem</i>	<i>decimus</i>	<i>dēnī</i>	<i>deciēs</i>
11	<i>ūndecim</i>	<i>ūndecimus</i>	<i>ūndēnī</i>	<i>ūndeciēs</i>
12	<i>duodecim</i>	<i>duodecimus</i>	<i>duodēnī</i>	<i>duodeciēs</i>
13	<i>tredecim</i>	<i>tertius decimus</i>	<i>ternī dēnī</i>	<i>terdeciēs</i>
14	<i>quattuordecim</i>	<i>quārtus decimus</i>	<i>quaternī dēnī</i>	<i>quaterdeciēs</i>
15	<i>quīndecim</i>	<i>quīntus decimus</i>	<i>quīnī dēnī</i>	<i>quīnquiēs deciēs</i>
16	<i>sēdecim, sexdecim</i>	<i>sextus decimus</i>	<i>sēnī dēnī</i>	<i>sexiēs deciēs</i>
17	<i>septendecim</i>	<i>septīmus decimus</i>	<i>septēnī dēnī</i>	<i>septiēs deciēs</i>
18	<i>duodēvīgintī</i>	<i>duodēvīcēsīmus</i>	<i>duodēvīcēnī</i>	<i>octiēs deciēs</i>
19	<i>ūndēvīgintī</i>	<i>ūndēvīcēsīmus</i>	<i>ūndēvīcēnī</i>	<i>noviēs deciēs</i>
20	<i>vīgintī</i>	<i>vīcēsīmus</i>	<i>vīcēnī</i>	<i>vīciēs</i>
21	<i>vīgintī ūnus</i> <i>ūnus et vīgintī</i>	<i>vīcēsīmus prīmus</i> <i>ūnus et vīcēsīmus</i>	<i>vīcēnī singulī</i> <i>singulī et vīcēnī</i>	<i>vīciēs semel</i>
22	<i>vīgintī duo</i> <i>duo et vīgintī</i>	<i>vīcēsīmus secundus</i> <i>alter et vīcēsīmus</i>	<i>vīcēnī bīnī</i> <i>bīnī et vīcēnī</i>	<i>vīciēs bis</i>
30	<i>trīgintā</i>	<i>trīcēsīmus</i>	<i>trīcēnī</i>	<i>trīciēs</i>
40	<i>quadrāgintā</i>	<i>quadrāgēsīmus</i>	<i>quadrāgēnī</i>	<i>quadrāgiēs</i>
50	<i>quīnquāgintā</i>	<i>quīnquāgēsīmus</i>	<i>quīnquāgēnī</i>	<i>quīnquāgiēs</i>
60	<i>sexāgintā</i>	<i>sexāgēsīmus</i>	<i>sexāgēnī</i>	<i>sexāgiēs</i>
70	<i>septuāgintā</i>	<i>septuāgēsīmus</i>	<i>septuāgēnī</i>	<i>septuāgiēs</i>
80	<i>octōgintā</i>	<i>octōgēsīmus</i>	<i>octōgēnī</i>	<i>octōgiēs</i>
90	<i>nōnāgintā</i>	<i>nōnāgēsīmus</i>	<i>nōnāgēnī</i>	<i>nōnāgiēs</i>
100	<i>centum</i>	<i>centēsīmus</i>	<i>centēnī</i>	<i>centiēs</i>

	基数	序数	配分数	副詞
101	centum ūnus centum et ūnus	centēsimus prīmus centēsimus et prīmus	centēnī singulī centēnī et singulī	centiēs semel
200	ducentī, -ae, -a	ducentēsimus	ducēnī	ducentiēs
300	trecentī	trecentēsimus	trecēnī	trecentiēs
400	quadringentī	quadringentēsimus	quadringēnī	quadringentiēs
500	quīngentī	quīngentēsimus	quīngēnī	quīngentiēs
600	sescentī	sescentēsimus	sescēnī	sescentiēs
700	septingentī	septingentēsimus	septingēnī	septingentiēs
800	octingentī	octingentēsimus	octingēnī	octingentiēs
900	nōngentī	nōngentēsimus	nōngēnī	nōngentiēs
1000	mille	mīllēsīmus	singula mīlia	mīliēs
2000	duo mīlia	bis mīllēsīmus	bīna mīlia	bis mīliēs
100,000	centum mīlia	centiēs mīllēsīmus	centēna mīlia	centiēs mīliēs
1,000,000	deciēs centēna mīlia		deciēs centēna mīlia	
		deciēs centiēs mīllēsīmus		deciēs centiēs mīliēs

注意: -ēsīmus, -iēs の代わりに -ēnsīmus, -iēns と書かれることもよくあります。

基数詞の曲用

80. 1. ūnus の曲用は §66 で述べました。
2. duo は次のように曲用します:

主	duo	duae	duo
属	duōrum	duārum	duōrum
与	duōbus	duābus	duōbus
对	duōs, duo	duās	duo
奪	duōbus	duābus	duōbus

(a) ambō (両方) も同じように曲用します。ただしこちらは -ō が長いです。

3. trēs は次のように曲用します。

主	trēs	tria
属	trium	trium
与	tribus	tribus
对	trēs (tris)	tria
奪	tribus	tribus

4. 200, 300, ..., 900 (100 を除く) は、bonus の複数形と同様に曲用します。
5. mille は、形容詞としては通例単数で使われ、曲用しません。複数形が現れるのは、名詞的用法においてです (数えるものが属格で後ろに続きます: §201,1)。複数形は次のように曲用します。

主	mīlia
属	mīlium
与	mīlibus
对	mīlia
呼	mīlia
奪	mīlibus

たとえば、単数形の形容詞として **mīlle hominēs** (千人の人)、複数形の名詞的用法として **duo mīlia hominum** (人々のうちの二千、二千人) のように言います。

(a) 単数形の **mīlle** も、しばしば属格を従えます: **mīlle hominum**。

6. これら以外の基数は曲用しません。序数と配分数は、第一・第二曲用の形容詞のように曲用します。

数詞を使うときの注意点

81. 1. 21 から 99 までの数は、十の位から言っても一の位から言ってもかまいません。ただし、一の位から言うときは **et** を挟みます。

trīgintā sex または **sex et trīgintā** (36)

2. 90 未満の数で一の位が 8 か 9 のものは、引き算で表現することがよくあります。

duodēvīgintī (20 - 2 = 18) (ただし **octōdecim** とってもよい)

ūndēquadrāgintā (40 - 1 = 39) (ただし **trīgintā novem**, **novem et trīgintā** とってもよい)

3. 100 を超える数は、通例高いほうの位から **et** を挟まずに言っていきます。

centum vīgintī septem (127)

annō octingentēsimō octōgēsīmō secundō (882 年に)

ただし、最後の数が一桁か、もしくは十の倍数のときは、**et** を挟んでも構いません。

centum et septem (107)

centum et quadrāgintā (140)

4. 配分数は次のように使います。

(a) 「いくつずつ」かを表します。

bīna talenta eīs dedit. 彼は彼らに 2 タレントゥムずつ与えた。

(b) 普通は複数形で単数の意味をあらわす名詞を、複数の意味で使うときに用います。

bīnae litterae 二つの手紙

ただしこの意味で使うときは、通例 1 を表すのに **ūnī** (*singulī* でない) を用い、3 を表すのに **trīnī** (*ternī* でない) を用います。

ūnae litterae 一つの手紙

trīnae litterae 三つの手紙

(c) 掛け算において、掛けられる数を表します。

bis bīna sunt quattuor (2 × 2 = 4)

(d) 詩においては、よく基数の代わりに使われます。

bīna hastilia 二本の槍

6.3 代名詞

82. 代名詞とは、名前を使わずにものを指し示す単語です。

83. 代名詞には以下の種類があります。

- | | |
|------------|-------------|
| I. 人称代名詞 | V. 強意代名詞 |
| II. 再帰代名詞 | VI. 関係代名詞 |
| III. 所有代名詞 | VII. 疑問代名詞 |
| IV. 指示代名詞 | VIII. 不定代名詞 |

6.3.1 I. 人称代名詞

84. 人称代名詞は、「わたし、あなた、彼、彼女、それ」にあたります。以下のように曲用します。

	第一人称	第二人称	第三人称
	単数		
主	ego (わたし)	tū (あなた)	is (彼), ea (彼女), id (それ) (曲用は §87 参照)
属	meī	tuī	
与	mihi ^{*12}	tibi ^{*12}	
对	mē	tē	
呼	—	tū	
奪	mē	tē	
	複数		
主	nōs (わたしたち)	vōs (あなたたち)	
属	nostrum, nostrī	vestrum, vestrī	
与	nōbīs	vōbīs	
对	nōs	vōs	
呼	—	vōs	
奪	nōbīs	vōbīs	

1. 詩では、単数与格 *mī* が現れることがあります。
2. 強調形 **-met** がしばしば現れます: **egomet** (私自身が)、**tibimet** (君自身に)。ただし、**tū** の強調形は **tūte** か **tūtemet** (**tūtimet** と書かれる) です。
3. 初期ラテン語において、対格・奪格が **mēd**, **tēd** になることがあります。

6.3.2 II. 再帰代名詞

85. 再帰代名詞とは、それが使われている文・節の主語を指し示すものです。「私は自分を見た」の「自分」にあたります。再帰代名詞は次のように曲用します。

^{*12} 詩では、最後の *i* が時々長くなります。

	第一人称 ego の斜格を用いる	第二人称 tū の斜格を用いる	第三人称
属	meī	tūi	suī
与	mihi	tibi	sibi ^{*12}
対	mē	tē	sē, sēsē
呼	—	—	—
奪	mē	tē	sē, sēsē

1. 第三人称の再帰代名詞は、全ての性に共通で、単数・複数両方に使われます。
2. 再帰代名詞は、どれも「相互に」の意味合いを持つことがあります。

inter sē pignant. 彼らは互いに戦いあっている。

3. 初期ラテン語では、対格・奪格に **sēd** が現れることがあります。

6.3.3 III. 所有代名詞

86. 所有代名詞は、正確に言えば形容詞です。第一・第二曲用の形容詞として振舞います。

第一人称	第二人称	第三人称
meus, -a, -um 私の	tuus, -a, -um あなたの	suus, sua, suum 自分の
noster, nostra, nostrum 私たちの	vester, vestra, vestrum あなたたちの	suus, sua, suum 自分たちの

1. **suus** は再帰的にのみ用いられます。

pater liberōs suōs amat. 父は自分の子供を愛している。

再帰的でない「彼(女)の、そのの」の意味を表したいときは、**is** の属格を用います。すなわち **ejus** (彼(女)の、そのの)、**eōrum, eārum** (彼(女)の、そのの)。

2. **meus** の男性単数呼格は **mī** です。
3. 前接語 **-pte** を所有代名詞の単数奪格にくっつけて、強調を表すことができます。特に **suō, suā** から **suōpte, suāpte** ということは多いです。

6.3.4 IV. 指示代名詞

87. 指示代名詞は、ここ(そこ・あそこ)にあるもの、もしくは以前に述べたものを指し示します。以下のものがあります。

hic これ(私のところにあるもの)

iste それ(あなたのところにあるもの)

ille あれ(話者から離れたところにあるもの)

is あれ(**ille** より弱い)

īdem (それと) 同じ

したがって、**hic, iste, ille** はそれぞれ第一人称・第二人称・第三人称の指示代名詞だということになります。

hic これ

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	hic	haec	hoc	hi	hae	haec
属	hujus ^{*13}	huius	huius	horum	harum	horum
与	huic	huic	huic	his	his	his
对	hunc	hanc	hoc	hos	has	haec
奪	hoc	hac	hoc	his	his	his

iste それ

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	iste	ista	istud ^{*14}	isti	istae	ista ^{*14}
属	istius	istius	istius	istorum	istarum	istorum
与	isti	isti	isti	istis	istis	istis
对	istum	istam	istud	istos	istas	ista ^{*14}
奪	isto	ista	isto	istis	istis	istis

ille (古形 **olle**) (あれ、あの人) の曲用は **iste** と同様です^{*15}。

is あれ、これ、彼

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	is	ea	id	eī, iī, (i)	eae	ea
属	eius	eius	eius	eōrum	eārum	eōrum
与	eī	eī	eī	eīs, iīs	eīs, iīs	eīs, iīs
对	eum	eam	id	eōs	eās	ea
奪	eō	eā	eō	eīs, iīs	eīs, iīs	eīs, iīs

idem それと同じ

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	idem	eadem	idem	eīdem, iīdem	eaedem	eadem
属	eiusdem	eiusdem	eiusdem	eōrundem	eārundem	eōrundem
与	eīdem	eīdem	eīdem	eīsdem	eīsdem	eīsdem
对	eundem	eandem	idem	eōsdem	eāsdem	eadem
奪	eōdem	eādem	eōdem	eīsdem	eīsdem	eīsdem

男性複数主格は **idem** であることもあります。複数与格・奪格は **isdem, iisdem** であることもあります。

^{*13} **hic** の曲用形のうち、**-s** で終わるものは、強調のために **-ce** が付加されることがあります: **hujusce** (ここにあるこの)、**hoscce, hisce**。 **-ne** を付加するときは、**-c, -ce** は **-ci** になります: **huncine, hoscine**。

^{*14} **istud** の代わりに **istuc** が現れることが時々あります。 **ista** の代わりに **istaec** が現れることが時々あります。

^{*15} **illud** の代わりに **illuc** が現れることが時々あります。

6.3.5 V. 強意代名詞

88. ラテン語の強意代名詞は **ipse** です。「私自らが」「彼自らが」の「～自ら」にあたります。

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	ipse	ipsa	ipsum	ipsī	ipsae	ipsa
属	ipsīus	ipsīus	ipsīus	ipsōrum	ipsārum	ipsōrum
与	ipsī	ipsī	ipsī	ipsīs	ipsīs	ipsīs
対	ipsum	ipsam	ipsum	ipsōs	ipsās	ipsa
奪	ipsō	ipsā	ipsō	ipsīs	ipsīs	ipsīs

6.3.6 VI. 関係代名詞

89. 関係代名詞は **quī** (そしてその人は) です。曲用は以下ようになります。

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主	quī	quae	quod	quī	quae	quae
属	cūjus	cūjus	cūjus	quōrum	quārum	quōrum
与	cui	cui	cui	quibus ^{*16}	quibus	quibus
対	quem	quam	quod	quōs	quās	quae
奪	quō ^{*17}	quā ^{*17}	quō	quibus ^{*16}	quibus	quibus

6.3.7 VII. 疑問代名詞

90. 疑問代名詞は、**quis** (だれが?) (名詞) と **quī** (どんな?) (形容詞) です。

1. **quis** (だれが?)

	単数		複数
	男性・女性	中性	
主	quis	quid	複数形はまれ。 曲用は関係代名詞と同じ
属	cūjus	cūjus	
与	cui	cui	
対	quem	quid	
奪	quō	quō	

2. **quī** (どんな?) の曲用は、関係代名詞とまったく同じです: **quī, quae, quod** など。

(a) **quī** 「どのように?」「なぜ?」は、奪格の古い形です。

(b) 間接疑問文では、**quis** の代わりに **quī** が使われることが時々あります。

(c) **quis** が形容詞的に、人を表す単語を修飾することが時々あります。ただし、そのような場合 **quī homō** (どんな人が) に対して **quis homō** (どの人が) の意味になります。

^{*16} **quis** が時々現れます。

^{*17} **quīcum** (その人と一緒に) では、奪格形 **quī** が現れます。

(d) **quis, quī** は、**-nam** をくっつけることで強調することができます。

名詞: **quisnam** (いったい誰が)、**quidnam** (いったい何が)

形容詞: **quīnam, quaenam, quodnam** (いったいどんな)

6.3.8 VIII. 不定代名詞

91. 不定代名詞とは、概して「どれか」「どれでも」という意味を持つもののことです。

名詞			形容詞		
男性・女性	中性		男性	女性	中性
quis だれか・なにか	quid		quī	quae, qua	quod 何らかの
aliquis ある人・あるもの	aliquid		aliquī	aliqua	aliquod ある
quisquam だれか・なにか	quidquam		quisquam	quidquam 何らかの(まれ)	
quispiam だれか・なにか	quidpiam		quispiam	quaepiam	quidpiam 何らかの(まれ)
quisque 各々	quidque		quisque	quaeque	quodque 各々の
quīvis quīlibet だれでも・何でも	quaevis quaelibet	quidvis quidlibet	quīvis quīlibet	quaevis quaelibet	quodvis quodlibet 何でも
quīdam とある人、とあるもの	quaedam	quiddam	quīdam	quaedam	quoddam

1. 不定代名詞は、関係(疑問)代名詞の形をしている部分だけが曲用します。たとえば単数属格は **alicūjus, cūjuslibet** などになります。
2. **aliquī** の女性単数主格と、中性複数主格・対格は **aliqua** なので注意してください。**quī** も同じ格で **qua** になることが多いです。
3. **quīdam** の単数対格は **quendam, quandam**、複数属格は **quōrundam, quārundam** となります。**m** が **d** の前で **n** になっています。
4. **aliquis** が形容詞的に使われることがあります。また、**aliquī** はしばしば名詞的に使われます。
5. **nē, sī, nisi, num** とともに用いる場合、**quis** と **quī** はどちらも名詞的に使えます: **sī quis, sī quī**。
6. **ecquis** (いったいだれ) は、正確にいえば不定代名詞なのですが、一般的には疑問詞的な意味合いを持ちます。名詞形と形容詞形の両方がある、**ecquis, ecquid** (名詞)、**ecquī, ecquae (ecqua), ecquod** (形容詞) です。
7. **quisquam** が複数形で使われることはありません。
8. 不定関係代名詞というものが二つ存在します。**quicumque** と **quisquis** (~の人はだれでも) です。**quicumque** は最初の部分だけが曲用しますが、**quisquis** は両方の部分が曲用します。ただし、一般的に使われるのは **quisquis, quidquid, quōquō** のみです。

6.3.9 代名詞的形容詞

92. 以下の形容詞は、しばしば代名詞的な意味を帯びます。

1.

alius 他の人

alter もう一方

uter (二つのうちの) どちら (疑問)、どちらでも (関係)

neuter どちらも...ない

ūnus 一人

nūllus 一人も...ない

2. 以下の複合語で:

uterque, utraque, utrumque 二つのうちどちらも

utercumque, utracumque, utrumcumque 二つのうちどちらが...であれ

uterlibet, utralibet, utrumlibet どちらでも好きなほう

utervīs, utravīs, utrumvīs どちらでも好きなほう

alteruter, alterutra, alterutrum 二つのうちのどちらか片方

これらの複合語では、**uter** の部分だけが曲用し、残りの部分は変化しません。ただし、**alteruter** はどちらの部分も曲用することができます:

主	alteruter	altera utra	alterum utrum
属	alterius utrius	

第7章

活用

93. est 「(彼は)...だ」や amat 「(彼は)...を愛している」などの意味を表す単語を動詞と言います。動詞の屈折を活用と言います。

94. 動詞は、「態」「法」「時制」「数」「人称」によって活用します:

1. 2つの態 — 能動態・受動態
2. 3つの法 — 直説法・接続法・命令法
3. 6つの時制 —
 現在 完了
 未完了 過去完了
 未来 未来完了

ただし、接続法には未来時制と未来完了時制はありません。また、命令法は現在時制と未来時制のみです。

4. 2つの数 — 単数・複数
5. 3つの人称 — 第一人称・第二人称・第三人称

95. 以上の組み合わせの活用形を、定形動詞と言います。これに加えて、動詞には以下の名詞形・形容詞形があります:

1. 名詞形 — 不定詞・動名詞・目的分詞
2. 形容詞形 — 分詞(動形容詞を含む)

96. 動詞の人称語尾はいつも決まっています、以下の表のようになります。

		能動態	受動態
単数	1.	-ō; -m; -ī (直説法完了)	-r
	2.	-s; -stī (直説法完了) -tō, - (命令法)	-rīs, -re -re, -tor (命令法)
	3.	-t; -tō (命令法)	-tur; -tor (命令法)
複数	1.	-mus	-mur
	2.	-tis; -stis (直説法完了) -te, -tōte (命令法)	-minī
	3.	-nt; -erunt (直説法完了) -ntō - (命令法)	-ntur -ntor (命令法)

7.1 動詞の語幹

97. 動詞の活用は、語幹に語尾をくっつけることで行います。屈折形が全てそろっている動詞には、語幹が三つ存在します。

1. 現在幹: 現在幹からは以下の活用形が作られます。
 - (a) 直説法現在・未完了・未来
 - (b) 接続法現在・未完了
 - (c) 命令法
 - (d) 現在不定詞
 - 以上は能動態・受動態どちらも当てはまります。
 - (e) 能動現在分詞、動名詞、動形容詞
2. 完了幹: 完了幹からは以下の活用形が作られます。
 - (a) 直説法完了・過去完了・未来完了
 - (b) 接続法完了・過去完了
 - (c) 完了不定詞
 - 以上の能動態。
3. 分詞幹: 完了幹からは以下の活用形が作られます。
 - (a) 完了分詞
 - (b) 直説法完了・過去完了・未来完了
 - (c) 接続法完了・過去完了
 - (d) 完了不定詞
 - 以上の受動態。

目的分詞、能動未来分詞、能動・受動未来不定詞の語幹は、上の三つと見かけ上は同じですが、もともとの起源は異なります。

7.2 四種類の活用

98. ラテン語には、規則的な活用が四種類存在します。活用の種類は、下の表のように能動現在不定詞の終端の母音で区別されます。

活用	不定詞の終端	母音
I	-āre	ā
II	-ēre	ē
III	-ĕre	ĕ
IV	-īre	ī

99. 主要形: 直説法現在、現在不定詞、直説法完了、完了分詞^{*1}の四つをラテン語動詞の主要形といいます。主要形は現在幹・完了幹・分子幹をすべて含んでいるため、ここからすべての活用形を導出することができます。

^{*1} 完了分詞が存在しない場合、能動未来分詞があれば、それを主要形として挙げます。

7.3 sum の活用

100. **sum** 「～だ」は不規則動詞ですが、どの動詞の活用を考えるとときにも非常に重要になります。ですからまず **sum** の屈折から始めましょう。

主要形

直説法現在	現在不定詞	直説法完了	未来分詞 ^{*2}
sum	esse	fuī	futūrus

直説法

現在	
単数	複数
sum 私は...だ es あなたは...だ est 彼は...だ	sumus 私たちは...だ estis あなたたちは...だ sunt 彼らは...だ
未完了	
eram 私は...だった erās あなたは...だった erat 彼は...だった	erāmus 私たちは...だった erātis あなたたちは...だった erant 彼らは...だった
未来	
erō 私は...だろう eris あなたは...だろう erit 彼は...だろう	erimus 私たちは...だろう eritis あなたたちは...だろう erunt 彼らは...だろう
完了	
fuī 私は...だった fuisti あなたは...だった fuit 彼は...だった	fuius 私たちは...だった fuistis あなたたちは...だった fuērunt, fuēre 彼らは...だった
過去完了	
fueram 私はすでに...だった fuerās あなたはすでに...だった fuerat 彼はすでに...だった	fuerāmus 私たちはすでに...だった fuerātis あなたたちはすでに...だった fuerant 彼らはすでに...だった
未来完了	
fuerō 私はすでに...だろう fueris あなたはすでに...だろう fuerit 彼はすでに...だろう	fuerimus 私たちはすでに...だろう fueritis あなたたちはすでに...だろう fuerint 彼らはすでに...だろう

^{*2} **sum** には完了分詞が存在しません。

接続法^{*3}

現在	
単数	複数
sim 私は...だ sis あなたは...だ sit 彼は...だ	sīmus 私たちは...だ sītis あなたたちは...だ sint 彼らは...だ
未完了	
essem ^{*4} 私は...だった essēs ^{*4} あなたは...だった esset ^{*4} 彼は...だった	essēmus 私たちは...だった esētis あなたたちは...だった esent ^{*4} 彼らは...だった
完了	
fuerim 私は...だった fueris あなたは...だった fuerit 彼は...だった	fuerīmus 私たちは...だった fuerītis あなたたちは...だった fuerint 彼らは...だった
過去完了	
fuissem 私はすでに...だった fuissēs あなたはすでに...だった fuisset 彼はすでに...だった	fuissēmus 私たちはすでに...だった fuissētis あなたたちはすでに...だった fuissent 彼らはすでに...だった

命令法

現在	es あなたは...になれ	este あなたたちは...になれ
未来	estō あなたは後で...になれ estō 彼を後で...にしる	estōte あなたたちは後で...になれ suntō 彼らを後で...にしる

不定詞

現在	esse ...であること
完了	fuisse ...だったこと
未来	futūrus esse ^{*5} ...であろうこと

分詞

未来	futūrus ^{*6} ...であろう [連体形]
----	-------------------------------------

7.4 第一活用 (ā-活用)

101. 能動態 – amō (愛する)

主要形

直説法現在	現在不定詞	直説法完了	受動完了分詞
amō	amāre	amāvī	amātus

^{*3} 接続法の各時制の意味は多様です。特に従属節中では様々な意味になります。ここではその一つ一つを挙げることはできません。より詳しいことは、構文の部を参照してください。

^{*4} *essem, essēs, esset, essent* の代わりに、*forem, forēs, foret, forent* が使われることが時々あります。

^{*5} *futūrus esse* の代わりに *fore* が使われることがよくあります。

^{*6} *bonus, -a, -um* と同様の曲用をします。

直説法

現在	
単数	複数
amō 私は愛する amās あなたは愛する amat 彼は愛する	amāmus 私たちは愛する amātis あなたたちは愛する amant 彼らは愛する
未完了	
amābam ^{*7} 私は愛していた amābās あなたは愛していた amābat 彼は愛していた	amābāmus 私たちは愛していた amābātis あなたたちは愛していた amābant 彼らは愛していた
未来	
amābō 私は愛するだろう amābis あなたは愛するだろう amābit 彼は愛するだろう	amābimus 私たちは愛するだろう amābitis あなたたちは愛するだろう amābunt 彼らは愛するだろう
完了	
amāvī 私は愛した amāvistī あなたは愛した amāvit 彼は愛した	amāvimus 私たちは愛した amāvistis あなたたちは愛した amāvērunt, amāvēre 彼らは愛した
過去完了	
amāveram 私はすでに愛していた amāverās あなたはすでに愛していた amāverat 彼はすでに愛していた	amāverāmus 私たちはすでに愛していた amāverātis あなたたちはすでに愛していた amāverant 彼らはすでに愛していた
未来完了	
amāverō 私はすでに愛しているだろう amāveris あなたはすでに愛しているだろう amāverit 彼はすでに愛しているだろう	amāverimus 私たちはすでに愛しているだろう amāveritis あなたたちはすでに愛しているだろう amāverint 彼らはすでに愛しているだろう

^{*7} 未完了時制は、「愛した」の意味にもなります。

接続法

現在	
単数	複数
amem 私は愛する amēs あなたは愛する amet 彼は愛する	amēmus 私たちは愛する amētis あなたたちは愛する ament 彼らは愛する
未完了	
amārem 私は愛していた amārēs あなたは愛していた amāret 彼は愛していた	amārēmus 私たちは愛していた amārētis あなたたちは愛していた amārent 彼らは愛していた
完了	
amāverim 私は愛した amāveris あなたは愛した amāverit 彼は愛した	amāverīmus 私たちは愛した amāverītis あなたたちは愛した amāverint 彼らは愛した
過去完了	
amāvīsem 私はすでに愛していた amāvīssēs あなたはすでに愛していた amāvīssēt 彼はすでに愛していた	amāvīssēmus 私たちはすでに愛していた amāvīssētis あなたたちはすでに愛していた amāvīssēt 彼らはすでに愛していた

命令法

現在	amā あなたは愛しろ	amāte あなたたちは愛しろ
未来	amātō あなたは後で愛しろ amātō 彼に後で愛させる	amātōte あなたたちは後で愛しろ amantō 彼らに後で愛させる

不定詞

現在	amāre 愛すること
完了	amāvisse 愛したこと
未来	amātūrus esse 愛するだろうこと

分詞

現在	amāns ^{*8} (属格 amantis) 愛している [連体形]
未来	amātūrus 愛するだろう [連体形]

動名詞

属	amandī 愛することの
与	amandō 愛することに
对	amandum 愛することを
奪	amandō 愛することで

目的分詞

对	amātum 愛するために
奪	amātū 愛するために

102. 受動態 – amor (愛される)

^{*8} amāns の曲用は §70,3 を参照。

主要形

直説法現在	現在不定詞	直説法完了
amor	amārī	amātus sum

直説法

現在「愛される」	
単数	複数
amor	amāmur
amāris	amāminī
amātur	amantur
未完了「愛されていた」	
amābar	amābāmur
amābāris, -re	amābāminī
amābātur	amābantur
未来「愛されるだろう」	
amābor	amābimur
amāberis, -re	amābiminī
amābitur	amābuntur
完了「愛された」	
amātus (-a, -um) sum^{*9}	amātī (-ae, -a) sumus
amātus es	amātī estis
amātus est	amātī sunt
過去完了「すでに愛されていた」	
amātus eram^{*9}	amātī erāmus
amātus erās	amātī erātis
amātus erat	amātī erant
未来完了「すでに愛されているだろう」	
amātus erō^{*9}	amātī erimus
amātus eris	amātī eritis
amātus erit	amātī erunt

^{*9} **sum, es,...** の代わりに **fui, fuisti,...** を時々使います。同様に、**eram, erās,...** の代わりに **fueraam, fuerās, erō,...** の代わりに **fuerō,...** を時々使います。

接続法

現在「愛される」	
単数	複数
amer amēris, -re amētur	amēmur amēminī amentur
未完了「愛されていた」	
amārer amārēris, -re amārētur	amārēmur amārēminī amārentur
完了「愛された」	
amātus sim ^{*10} amātus sis amātus sit	amātī simus amātī sītis amātī sint
過去完了「すでに愛されていた」	
amātus essem ^{*10} amātus essēs amātus esset	amātī essēmus amātī essētis amātī essent

命令法

現在	amāre あなたは愛される ^{*11}	amāminī あなたたちは愛される
未来	amātor あなたは後で愛される amātor 彼が後で愛されるようにしろ	amantor 彼らが後で愛されるようにしろ

不定詞

現在	amārī 愛されること
完了	amātus esse 愛されたこと
未来	amātum irī 愛されるだろうこと

分詞

完了	amātus 愛された [連体形]
動形容詞	amandus 愛されるべき [連体形]

7.5 第二活用 (ē-活用)

103. 能動態 – moneō (忠告する)

主要形

直説法現在	現在不定詞	直説法完了	受動完了分詞
moneō	monēre	monuī	monitus

^{*10} sim の代わりに fuerim を時々使います。同様に essem の代わりに fuissem を時々使います。

^{*11} 受動態命令法が実際に使われるのは、異態動詞 (§112) のみです。

直説法

現在「忠告する」	
単数	複数
monēo	monēmus
monēs	monētis
monet	monent
未完了「忠告していた」	
monēbam	monēbāmus
monēbās	monēbātis
monēbat	monēbant
未来「忠告するだろう」	
monēbō	monēbimus
monēbis	monēbitis
monēbit	monēbunt
完了「忠告した」	
monuī	monuimus
monuistī	monuistis
monuit	monuērunt, monuēre
過去完了「すでに忠告していた」	
monueram	monuerāmus
monuerās	monuerātis
monuerat	monuerant
未来完了「すでに忠告しているだろう」	
monuerō	monuerimus
monueris	monueritis
monuerit	monuerint

接続法

現在「忠告する」	
単数	複数
moneam	moneāmus
moneās	moneātis
moneat	moneant
未完了「忠告していた」	
monērem	monērēmus
monērēs	monērētis
monēret	monērent
完了「忠告した」	
monuerim	monuerīmus
monueris	monuerītis
monuerit	monuerint
過去完了「すでに忠告していた」	
monuissem	monuissēmus
monuissēs	monuissētis
monuisset	monuissent

命令法

現在	monē あなたは忠告しろ	monēte あなたたちは忠告しろ
未来	monētō あなたは後で忠告しろ monētō 彼に後で忠告させる	monētōte あなたたちは後で忠告しろ monentō 彼らに後で忠告させる

不定詞

現在	monēre 忠告すること
完了	monuisse 忠告したこと
未来	monitūrus esse 忠告するだろうこと

分詞

現在	monēns (属格 monentis) 忠告している [連体形]
未来	monitūrus 忠告するだろう [連体形]

動名詞

属	monendī 忠告することの
与	monendō 忠告することに
对	monendum 忠告することを
奪	monendō 忠告することで

目的分詞

对	monitum 忠告するために
奪	monitū 忠告するために

104. 受動態 - moneor (忠告される)

主要形

直説法現在	現在不定詞	直説法完了
moneor	monēri	monitus sum

直説法

現在「忠告される」	
単数	複数
moneor	monēmur
monēris	monēmini
monētur	monentur
未完了「忠告されていた」	
monēbar	monēbāmur
monēbāris, -re	monēbāmini
monēbātur	monēbantur
未来「忠告されるだろう」	
monēbor	monēbimur
monēberis, -re	monēbimini
monēbitur	monēbuntur
完了「忠告された」	
monitus sum	monitī sumus
monitus es	monitī estis
monitus est	monitī sunt
過去完了「すでに忠告されていた」	
monitus eram	monitī erāmus
monitus erās	monitī erātis
monitus erat	monitī erant
未来完了「すでに忠告されているだろう」	
monitus erō	monitī erimus
monitus eris	monitī eritis
monitus erit	monitī erunt

接続法

現在「忠告される」	
単数	複数
monear	moneāmur
moneāris, -re	moneāminī
moneātur	moneantur
未完了「忠告されていた」	
monērer	monērēmur
monērēris, -re	monērēminī
monērētur	monērentur
完了「忠告された」	
monitus sim	monitī sīmus
monitus sīs	monitī sītis
monitus sit	monitī sint
過去完了「すでに忠告されていた」	
monitus essem	monitī essēmus
monitus essēs	monitī essētis
monitus esset	monitī essent

命令法

現在	monēre あなたは忠告される	monēminī あなたたちは忠告される
未来	monētor あなたは後で忠告される monētor 彼が後で忠告されるようにしろ	monentor 彼らが後で忠告されるようにしろ

不定詞

現在	monērī 忠告されること
完了	monitus esse 忠告されたこと
未来	monitum īrī 忠告されるだろうこと

分詞

完了	monitus 忠告された [連体形]
動形容詞	monendus 忠告されるべき [連体形]

7.6 第三活用 (子音活用)

105. 能動態 – **regō** (指揮する)

主要形

直説法現在	現在不定詞	直説法完了	受動完了分詞
regō	regere	rēxī	rēctus

直説法

現在「指揮する」	
単数	複数
regō	regimus
regis	regitis
regit	regunt
未完了「指揮していた」	
regēbam	regēbāmus
regēbās	regēbātis
regēbat	regēbant
未来「指揮するだろう」	
regam	regēmus
regēs	regētis
reget	regent
完了「指揮した」	
rēxī	rēximus
rēxistī	rēxistis
rēxit	rēxērunt, rēxere
過去完了「すでに指揮していた」	
rēxeram	rēxerāmus
rēxerās	rēxerātis
rēxerat	rēxerant
未来完了「すでに指揮しているだろう」	
rēxerō	rēxerimus
rēxeris	rēxeritis
rēxerit	rēxerint

接続法

現在「指揮する」	
単数	複数
regam	regāmus
regās	regātis
regat	regant
未完了「指揮していた」	
regerem	regerēmus
regerēs	regerētis
regeret	regerent
完了「指揮した」	
rēxerim	rēxerīmus
rēxeris	rēxerītis
rēxerit	rēxerint
過去完了「すでに指揮していた」	
rēxissem	rēxissēmus
rēxissēs	rēxissētis
rēxisset	rēxissent

命令法

現在	rege あなたは指揮しろ	regite あなたたちは指揮しろ
未来	regitō あなたは後で指揮しろ regitō 彼に後で指揮させる	regitōte あなたたちは後で指揮しろ reguntō 彼らに後で指揮させる

不定詞

現在	regere 指揮すること
完了	rēxisse 指揮したこと
未来	rēctūrus esse 指揮するだろうこと

分詞

現在	regēns (属格 regentis) 指揮している [連体形]
未来	rēctūrus 指揮するだろう [連体形]

動名詞

属	regendī 指揮することの
与	regendō 指揮することに
对	regendum 指揮することを
奪	regendō 指揮することで

目的分詞

对	rēctum 指揮するために
奪	rēctū 指揮するために

106. 受動態 - regor (指揮される)

主要形

直説法現在	現在不定詞	直説法完了
regor	regī	rēctus sum

直説法

現在「指揮される」	
単数	複数
regor	regimur
regeris	regimini
regitur	reguntur
未完了「指揮されていた」	
regēbar	regēbāmur
regēbāris, -re	regēbāmini
regēbātur	regēbantur
未来「指揮されるだろう」	
regar	regēmur
regēris, -re	regēmini
regētur	regentur
完了「指揮された」	
rēctus sum	rēctī sumus
rēctus es	rēctī estis
rēctus est	rēctī sunt
過去完了「すでに指揮されていた」	
rēctus eram	rēctī erāmus
rēctus erās	rēctī erātis
rēctus erat	rēctī erant
未来完了「すでに指揮されているだろう」	
rēctus erō	rēctī erimus
rēctus eris	rēctī eritis
rēctus erit	rēctī erunt

接続法

現在「指揮される」	
単数	複数
regar	regāmur
regāris, -re	regāminī
regātur	regantur
未完了「指揮されていた」	
regerer	regerēmur
regerēris, -re	regerēminī
regerētur	regerentur
完了「指揮された」	
rēctus sim	rēctī sīmus
rēctus sis	rēctī sītis
rēctus sit	rēctī sint
過去完了「すでに指揮されていた」	
rēctus essem	rēctī essēmus
rēctus essēs	rēctī essētis
rēctus esset	rēctī essent

命令法

現在	regere あなたは指揮される	regimini あなたたちは指揮される
未来	regitor あなたは後で指揮される regitor 彼が後で指揮されるようにしろ	reguntor 彼らが後で指揮されるようにしろ

不定詞

現在	regī 指揮されること
完了	rēctus esse 指揮されたこと
未来	rēctum iri 指揮されるだろうこと

分詞

完了	rēctus 指揮された [連体形]
動形容詞	regendus 指揮されるべき [連体形]

7.7 第四活用 (i-活用)

107. 能動態 - audiō (聞く)

主要形

直説法現在	現在不定詞	直説法完了	受動完了分詞
audiō	audīre	audīvī	audītus

直説法

現在「聞く」	
単数	複数
audiō	audīmus
audīs	audītis
audit	audiunt
未完了「聞いていた」	
audiēbam	audiēbāmus
audiēbās	audiēbātis
audiēbat	audiēbant
未来「聞くだらう」	
audiam	audiēmus
audiēs	audiētis
audiet	audient
完了「聞いた」	
audivī	audivimus
audivistī	audivistis
audivit	audivērunt, audivēre
過去完了「すでに聞いていた」	
audiveram	audiverāmus
audiverās	audiverātis
audiverat	audiverant
未来完了「すでに聞いているだらう」	
audiverō	audiverimus
audiveris	audiveritis
audiverit	audiverint

接続法

現在「聞く」	
単数	複数
audiam	audiāmus
audiās	audiātis
audiat	audiant
未完了「聞いていた」	
audirem	audirēmus
audirēs	audirētis
audiret	audirent
完了「聞いた」	
audiverim	audiverimus
audiveris	audiveritis
audiverit	audiverint
過去完了「すでに聞いていた」	
audivissem	audivissēmus
audivissēs	audivissētis
audivisset	audivissent

命令法

現在	audi あなたは聞け	audīte あなたたちは聞け
未来	auditō あなたは後で聞け auditō 彼に後で聞かせろ	auditōte あなたたちは後で聞け audiuntō 彼らに後で聞かせろ

不定詞

現在	audire 聞くこと
完了	audivisse 聞いたこと
未来	auditurus esse 聞くだろうこと

分詞

現在	audiens (属格 audientis) 聞いている [連体形]
未来	auditurus 聞くだろう [連体形]

動名詞

属	audiendī 聞くことの
与	audiendō 聞くことに
对	audiendum 聞くことを
奪	audiendō 聞くことで

目的分詞

对	auditum 聞くために
奪	auditū 聞くために

主要形

直説法現在	現在不定詞	直説法完了
audior	audīrī	audītus sum

直説法

現在「聞かれる」	
単数	複数
audior	audīmur
audīris	audīminī
audītur	audiuntur
未完了「聞かれていた」	
audiēbar	audiēbāmur
audiēbāris, -re	audiēbāminī
audiēbātur	audiēbantur
未来「聞かれるだろう」	
audiar	audiēmur
audiēris, -re	audiēminī
audiētur	audientur
完了「聞かれた」	
audītus sum	audītī sumus
audītus es	audītī estis
audītus est	audītī sunt
過去完了「すでに聞かれていた」	
audītus eram	audītī erāmus
audītus erās	audītī erātis
audītus erat	audītī erant
未来完了「すでに聞かれているだろう」	
audītus erō	audītī erimus
audītus eris	audītī eritis
audītus erit	audītī erunt

接続法

現在「聞かれる」	
単数	複数
audiar	audiāmur
audiāris, -re	audiāminī
audiātur	audiantur
未完了「聞かれていた」	
audīrer	audīrēmur
audīrēris, -re	audīrēminī
audīrētur	audīrentur
完了「聞かれた」	
auditus sim	auditī simus
auditus sis	auditī sitis
auditus sit	auditī sint
過去完了「すでに聞かれていた」	
auditus essem	auditī essēmus
auditus essēs	auditī essētis
auditus esset	auditī essent

命令法

現在	audire あなたは聞かれる	audimini あなたたちは聞かれる
未来	auditor あなたは後で聞かれる auditor 彼が後で聞かれるようにしろ	audiuntor 彼らが後で聞かれるようにしろ

不定詞

現在	audiri 聞かれること
完了	auditus esse 聞かれたこと
未来	auditum iri 聞かれるだろうこと

分詞

完了	auditus 聞かれた [連体形]
動形容詞	audiendus 聞かれるべき [連体形]

7.8 -iō で終わる第三活用動詞

109. 1. -iō で終わる第三活用の動詞は、活用形の一部が第四活用の語尾になります。そのような活用形とは、現在幹で、かつ第四活用において語尾に二つの連続母音があるものです。
2. 以下のような動詞があります。
- (a) **capiō** (つかむ)、**cupiō** (切望する)、**faciō** (作る)、**fodiō** (掘る)、**fugiō** (逃げる)、**jaciō** (投げる)、**pariō** (生む)、**quatiō** (振り動かす)、**rapiō** (強奪する)、**sapiō** (味がする)。
- (b) **laciō**, **speciō** (どちらも古典期より前) の複合語: **alliciō** (誘う)、**cōspiciō** (見つめる)。
- (c) 異態動詞 **gradior** (歩く)、**morior** (死ぬ)、**patior** (こうむる)。

110. 能動態 - capiō (つかむ)

主要形

直説法現在	現在不定詞	直説法完了	受動完了分詞
capiō	capere	cēpi	captus

直説法

現在	
単数	複数
capiō	capimus
capis	capitis
capit	capiunt
未完了	
capiēbam	capiēbāmus
capiēbās	capiēbātis
capiēbat	capiēbant
未来	
capiam	capiēmus
capies	capiētis
capiet	capient
完了	
cēpi	cēpimus
cēpisti	cēpistis
cēpit	cēpērunt, cēpēre
過去完了	
cēperam	cēperāmus
cēperās	cēperātis
cēperat	cēperant
未来完了	
cēperō	cēperimus
cēperis	cēperitis
cēperit	cēperint

接続法

現在	
単数	複数
capiam	capiāmus
capias	capiātis
capiat	capiant
未完了	
caperem	caperēmus
caperēs	caperētis
caperet	caperent
完了	
cēperim	cēperimus
cēperis	cēperitis
cēperit	cēperint
過去完了	
cēpisse	cēpissēmus
cēpissēs	cēpissētis
cēpisset	cēpissent

命令法

現在	cape	capite
未来	capitō	capitōte capiuntō

不定詞

現在	capere
完了	cēpisse
未来	captūrus esse

分詞

現在	capiēns
未来	captūrus つかむだろう [連体形]

動名詞

属	capienti
与	capiendo
对	capendum
奪	capendo

目的分詞

对	captum
奪	captū

111. 受動態 – capior (つかまれる)

主要形

直説法現在	現在不定詞	直説法完了
capior	capī	captus sum

直説法

現在	
単数	複数
capor	capimur
caperis	capimini
capitur	capiuntur
未完了	
capiebar	capiebāmur
capiebāris, -re	capiebāmini
capiebātur	capiebantur
未来	
capiar	capiemur
capieris, -re	capiemini
capientur	capientur
完了	
captus sum	capti sumus
captus es	capti estis
captus est	capti sunt
過去完了	
captus eram	capti erāmus
captus erās	capti erātis
captus erat	capti erant
未来完了	
captus erō	capti erimus
captus eris	capti eritis
captus erit	capti erunt

接続法

現在	
単数	複数
capiar	capiamur
capiaris, -re	capiamini
capiantur	capiantur
未完了	
caperer	caperemur
capereris, -re	caperemini
caperentur	caperentur
完了	
captus sim	capti simus
captus sis	capti sitis
captus sit	capti sint
過去完了	
captus essem	capti essemus
captus essēs	capti essētis
captus esset	capti essent

命令法

現在	capere	capimini
未来	capitor	capiuntor

不定詞		分詞	
現在	capī	完了	captus
完了	captus esse	動形容詞	capiendus
未来	captum irī		

7.9 異態動詞

112. 異態動詞は概して、能動・中動の「意味」を持ちながら受動態の「形」をしています。ただし

1. 次のものは能動の形になります: 未来不定詞、現在分詞、未来分詞、動名詞、目的分詞。
2. 次のものは受動の意味になります: 動形容詞(必ず)、受動完了分詞(時々)。

sequendus 続かれるべき

adeptus 獲得された

113. 異態動詞の活用は、通常の動詞と同じように分類できます:

- 第一活用 **mīror, mīrārī, mīrātus sum** (驚く)
- 第二活用 **vereor, verērī, veritus sum** (畏敬する)
- 第三活用 **sequor, sequī, secūtus sum** (ついて行く)
- 第四活用 **largior, largīrī, largītus sum** (気前よく与える)
- 第三 (-ior) **patior, patī, passus sum** (こうむる)

直説法

	第一活用	第二活用	第三活用	第四活用	第三 (-ior)
現在	mīror mīrārī mīrātur mīrāmur mīrāminī mīrantur	vereor verērī verētur verēmur verēminī verentur	sequor sequeris sequitur sequimur sequiminī sequuntur	largior largīris largītur largīmur largīminī largiuntur	patior pateris patitur patimur patiminī patiuntur
未完了	mīrābar	verēbar	sequēbar	largiēbar	patiēbar
未来	mīrābor	verēbor	sequar	largiar	patiar
完了	mīrātus sum	veritus sum	secūtus sum	largītus sum	passus sum
過去完了	mīrātus eram	veritus eram	secūtus eram	largītus eram	passus eram
未来完了	mīrātus erō	veritus erō	secūtus erō	largītus erō	passus erō

接続法

	第一活用	第二活用	第三活用	第四活用	第三 (-ior)
現在	mīrer	verear	sequar	largiar	patiar
未完了	mīrārer	verērer	sequerer	largīrer	paterer
完了	mīrātus sim	veritus sim	secūtus sim	largītus sim	passus sim
過去完了	mīrātus essem	veritus essem	secūtus essem	largītus essem	passus essem

命令法

	第一活用	第二活用	第三活用	第四活用	第三 (-ior)
現在	mīrāre など	verēre など	sequere など	largire など	patere など
未来	mīrātor など	verētor など	sequitor など	largītor など	patitor など

不定詞

	第一活用	第二活用	第三活用	第四活用	第三 (-ior)
現在	mīrārī	verērī	sequī	largīrī	patī
完了	mīrātus esse	veritus esse	secūtus esse	largītus esse	passus esse
未来	mīrātūrus esse	veritūrus esse	secūtūrus esse	largītūrus esse	passūrus esse

不定詞

	第一活用	第二活用	第三活用	第四活用	第三 (-ior)
現在	mīrārī	verērī	sequī	largīrī	patī
完了	mīrātus esse	veritus esse	secūtus esse	largītus esse	passus esse
未来	mīrātūrus esse	veritūrus esse	secūtūrus esse	largītūrus esse	passūrus esse

分詞

	第一活用	第二活用	第三活用	第四活用	第三 (-ior)
現在	mīrāns	verēns	sequēns	largiēns	patiēns
未来	mīrātūrus	veritūrus	secūtūrus	largītūrus	passūrus
完了	mīrātus	veritus	secūtus	largītus	passus
動形容詞	mīrandus	verendus	sequendus	largiendus	patiendus

動名詞

	第一活用	第二活用	第三活用	第四活用	第三 (-ior)
属	mīrandī	verendī	sequendī	largiendī	patiendī
与	mīrandō	verendō	sequendō	largiendō	patiendō
など	など	など	など	など	など

目的分詞

	第一活用	第二活用	第三活用	第四活用	第三 (-ior)
对	mīrātum	veritum	secūtum	largītum	passum
奪	mīrātū	veritū	secūtū	largītū	passū

7.10 半異態動詞

114. 1. 半異態動詞は、現在形を能動態で作り、完了形を受動態で作ります。受動態の形をしていても、意味は能動のままです。半異態動詞には以下のようなものがあります、

audeō **audēre** **ausus sum** ...する気がする

gaudeō **gaudēre** **gāvīsus sum** 喜ぶ

soleō **solēre** **solitus sum** ...する習慣だ

fido **fidere** **fīsus sum** 信賴する

2. 以下の動詞は、受動完了分詞が能動の意味になります。

adolēscō 成長する	adultus 成熟した
cēnāre 正餐をとる	cēnātus 食事を済ませた
placēre 喜ばせる	placitus 好ましい
prandēre 昼食をとる	prānsus 昼食を済ませた
pōtare 飲む	pōtus 酒に酔った
jūrāre 誓う	jūrātus 誓約した

(a) **jūrātus** は受動態の意味にもなります。

3. **revertor, dēvertor** は通例、完了形が能動態の形になります。

revertor	reverti (不定詞)	revertī (完了)	引き返す
dēvertor	dēverti (不定詞)	dēvertī (完了)	遠ざかる

7.11 迂言的活用形

115. 迂言的活用形とは以下の能動態のもの、受動態のもの二種類を指します。能動態のものは能動未来分詞 + **sum**、受動態のものは動形容詞 + **sum** で作ります。

7.11.1 能動態の迂言的活用

直説法

現在	amātūrus (-a, um) sum 私は愛するだろう
未完了	amātūrus eram 私は愛しようとしていた
未来	amātūrus erō 私は愛するところだろう
完了	amātūrus fuī 私は愛するところだった
過去完了	amātūrus fueram 私はすでに愛しようとしていた
未来完了	amātūrus fuerō 私はすでに愛しようとしているだろう

接続法

現在	amātūrus sim 私は愛するだろう
未完了	amātūrus essem 私は愛しようとしていた
完了	amātūrus fuerim 私は愛するところだった
過去完了	amātūrus fuissem 私はすでに愛しようとしていた

不定詞

現在	amātūrus esse 愛するだろうこと
完了	amātūrus fuisse 愛するところだったこと

7.11.2 受動態の迂言的活用

直説法

現在	amandus (-a, um) sum 私は愛されるべきだ
未完了	amandus eram 私は愛されるべきだった
未来	amandus erō 私は愛されるべき人になるだろう
完了	amandus fuī 私は愛されるべきだった
過去完了	amandus fueram 私はすでに愛されるべきだった
未来完了	amandus fuerō 私はすでに愛されるべき人になっているだろう

接続法

現在	amandus sim 私は愛されるべきだ
未完了	amandus essem 私は愛されるべきだった
完了	amandus fuerim 私は愛されるべきだった
過去完了	amandus fuisset 私はすでに愛されるべきだった

不定詞

現在	amandus esse 愛されるべきこと
完了	amandus fuisse 愛されるべきだったこと

7.12 活用の注意点

116. 1. **-āvī, -ēvī, -ivī** の完了形から派生した形は、**r, s** で始まる終端の前で **ve, vi** が落ちることがよくあります。 **nōvī** (**nōscō** の完了) や、 **mōvī** (**moveō** の完了) の複合語でも同じです。

amāvistī	amāstī	dēlēvistī	dēlēstī
amāvisse	amāsse	dēlēvisse	dēlēsse
amāvērunt	amārunt	dēlēvērunt	dēlērunt
amāverim	amārim	dēlēverim	dēlērim
amāveram	amāram	dēlēveram	dēlēram
amāverō	amārō	dēlēverō	dēlērō
nōvistī	nōstī	nōverim	nōrim
nōvisse	nōsse	nōveram	nōram
audīvistī	audīstī	audīvisse	audīsse

- 第三活用・第四活用の動名詞・動形容詞は、終端が **-endus, -endi** の代わりに **-undus, -undi** になることがよくあります: **faciundus, faciundi**
- dicō, dūcō, faciō** の命令形は **dīc, dūc, fāc** になります。ただし、**faciō** の複合語の命令形は **-fice** です (例: **cōnfice**)。また、**dico, dūco** の複合語の命令形は、アクセントが最後の音節にあります (例: **edū'c, edī'c**)。
- 古い形、詩における形:
 - 受動現在不定詞の語尾が **-ier** になることがあります: **amārier, monērier, dīcier** (**amārī, monērī, dīcī** の代わりに)。
 - 第四活用の未完了 **-iēbam** の代わりに **-ibam**、未来 **-iam** の代わりに **-ibō** が使われることがあります: **sciābam, sciābō** (**sciēbam, sciām** の代わりに)。
 - dixistī, scripsistis, surrexisse** のような完全な形の代わりに、**dixtī, scripstis, surrexe** などが現れることが時々あります。
 - 少数の接続法では、終端 **-am, -ās** などの代わりに **-im, -is** が現れます: **edim** (食べる)、**duint, perduint**。
- 能動未来不定詞・受動完了不定詞では、助動詞 **esse** がしばしば省略されます: **āctūrum** (**āctūrum esse** の代わりに)、**ējectus** (**ējectus esse** の代わりに)。

7.13 動詞の語幹の作り方

7.13.1 現在幹の作り方

117. 多くの動詞は、動詞幹をそのまま現在幹に用います^{*12}: **dicere, amāre, monēre, audire**。動詞幹に修正をほどこして現在幹を作る場合は、以下のようにします。

1. 母音 **ā, ē, ī** を後ろに付加します。

現在幹 動詞幹

juvāre **juvā-** **juv-**

augēre **augē-** **aug-**

vincīre **vincī-** **vinc-**

2. **i** を後ろに付加します。

capiō: 現在幹 **capi-**, 動詞幹 **cap**

3. 動詞幹の最後の子音の直前に **n** を挿入します (唇黙音の前では **m** を挿入します)。

fundō: 動詞幹 **fud-**

rumpō: 動詞幹 **rup-**

4. 動詞幹の後ろに **n** を付加します。

cern-ō, pell-ō (**pel-nō** より)

5. 動詞幹の後ろに **t** を付加します。

flect-ō

6. 動詞幹の後ろに **sc** を付加します。

crēsc-ō, scīsc-ō

7. 重音を行います。つまり、動詞幹の最初の子音 + **i** を前に冠します。

gi-gn-ō (語根 **gen-**), **si-st-ō** (語根 **sta-**)

7.13.2 完了幹の作り方

118. 完了幹は、動詞幹から以下のようにして作ります。

1. (母音幹の場合) 後ろに **v** を付加します。

amāv-ī, dēlēv-ī, audīv-ī

2. (子音幹の場合) 後ろに **u** を付加することがあります (が、3. の場合がほとんどです)。

strepu-ī, genu-ī, alu-ī

3. (子音幹の場合) 後ろに **s** を付加することがほとんどです。

^{*12} 厳密に言えば、現在幹は常に幹母音 (ē, ō) で終わります: **dic-ē-, di-cō-**; **amā-ē-, amā-ō-**。ですが、多数の音声変化が関わってきますので、ここでこのテーマを系統だてて扱うことはできません。拙著「ラテン語」をご覧ください。

完了

carp-ō **carps-ī**
scrib-ō **scrips-ī** (**scrib-sī** より)
rīd-eō **rīs-ī** (**rīd-sī** より)
sent-iō **sēns-ī** (**sent-sī** より)
dic-ō **dīx-ī** (**dic-sī** より)

(a) 終端 **-sī** が後ろにつくと、歯音 **t, d** は消えます。喉音 **c, g** は **s** と一緒になって **x** になります。唇音 **b** は **p** になります。

4. 後ろに何かを付加する以外の方法。これには三種類あります。

(a) 最初の子音 + 後続の母音 (もしくは **e**) を前に冠することで、重音を行います。

完了

currō **cu-currī**
poscō **po-poscī**
pellō **pe-pulī**

i. 複合語になった場合、重音するのは **dō, stō, sistō, discō, poscō** だけです。それ以外の複合語では、重音は省かれます: **com-pulī, re-poposcī**。

ii. **sp, st** で始まる動詞は、二つの子音を両方重ねます。そして、語幹のほうからは **s** を取ります: **spondeō, spo-pondī; stō, steti**

(b) 動詞幹の短母音を伸ばします。

legō, lēgī; agō, ēgī

この場合は、**ă** は **ē** に変わります。

(c) 動詞幹をそのまま用います。

vertō, vertī; minuō, minui

7.13.3 分詞幹の作り方

119. 分詞幹は、受動完了分詞から **-us** を取ったものです。受動完了分詞の作り方は以下のようにします。

1. 現在幹か動詞幹の後ろに **-tus** を付加します。

受動完了分詞

amā-re **amā-tus**
dēlē-re **dēlē-tus**
audī-re **audī-tus**
leg-ere **lēctus**
scrib-ere **scrip-tus**
sentī-re **sēn-sus** (**sent-tus** より)
caed-ere **cae-sus** (**caed-tus** より)

(a) **g** は、**t** が後ろに続くと **c** になります (§8.5)。また **b** は **p** になります。**dt, tt** は **ss** になり、さらに短くなって **s** になることも多いです (§8.2)。

2. **sēnsus, caesus** など、音声変化で完了分詞が **-sus** になるような動詞からの類推で、ほかの動詞幹でも **-tus** でなく **-sus** を付加する場合があります。

受動完了分詞

lāb-ī lāp-sus

fig-ere fī-xus

-sus を付加する場合は、完了形を作るために -si を付加する場合 (§118,3,a) と同じ子音の変化が起きます。

3. 完了分詞が -itus の形になるものが少数存在します。

受動完了分詞

domā-re dom-ītus

monē-re mon-ītus

4. 能動未来分詞は普通、受動完了分詞から -us を取り除き、かわりに -ūrus を付加して作ります。amā-tus, amātūrus; moni-tus, monitūrus。しかし以下のものは例外です。

受動完了分詞 能動未来分詞

juvā-re jūtus juvātūrus^{*13}

lavā-re lautus lavātūrus

par-ere partus paritūrus

ru-ere rutus ruitūrus

secā-re sectus secātūrus

fru-ī fructus fruitūrus

mor-ī mortuus moritūrus

orī-rī ortus oritūrus

7.14 重要な動詞とその主要形

7.14.1 第一活用 (ā- 活用)

120. 1. 完了形が -vī のもの

amō amāre amāvī amātus 愛する

第一活用の動詞は通例上の形です。

pōtō pōtare pōtāvī pōtus 飲む

2. 完了形が -uī のもの

crepō crepāre crepuī crepitūrus ガラガラ鳴る

cubō cubāre cubuī cubitūrus 横たわる

domō domāre domuī domitus 飼いならす

fricō fricāre fricuī frictus, fricātus こする

micō micāre micuī — 激しく動く

dīmicō dīmicāre dīmicāvī dīmicātum (est)^{*14} 戦う

ex-plicō explicāre explicāvī (-cuī) explicātus (-itus) ほどく

im-plicō implicāre implicāvī (-cuī) implicātus (-itus) 絡ませる

secō secāre secuī sectus 切る

sonō sonāre sonuī sonātūrus 鳴る

tonō tonāre tonuī — 雷が鳴る

vetō vetāre vetuī vetitus 禁止する

^{*13} ただし、juvō の複合語は、時々 -jūtūrus の形の能動未来分詞を持ちます: adjūtūrus。

^{*14} 使われるのは、非人称的にのみです。

3. 語幹の母音を伸ばし -i を添えて完了形を作るもの

juvō juvāre jūvī jūtus 助ける

lavō lavāre lāvī lautus 洗う

4. 重音で完了形を作るもの

stō stāre stetī stātūrus 立つ

5. 異態動詞

第一活用の異態動詞はすべて規則的に **mīror, mīrārī, mīrātus sum** と同じようになります。

7.14.2 第二活用 (ē- 活用)

121. 1. 完了形が -vī のもの。

dēleō dēlere dēlēvī dēlētus 破壊する

fleō flēre flēvī flētus 泣く

com-pleō^{*15} complēre complēvī complētus 満たす

aboleō abolēre abolēvī abolitus 破壊する

cieō^{*16} ciēre civī citus 動かす

2. 完了形が -uī のもの。

(a) -eō, -ēre, -uī, -itus 型

arceō	arcēre	arcuī	—	遠ざける
coerceō	coercēre	coercuī	coercitus	包囲する
exerceō	exercēre	exercuī	exercitus	訓練する
caleō	calēre	caluī	calitūrus	熱い
careō	carēre	caruī	caritūrus	...が欠けている
doleō	dolēre	doluī	dolitūrus	嘆き悲しむ
habeō	habēre	habuī	habitus	持っている
dēbeō	dēbere	dēbuī	dēbitus	負債がある
praebēō	praebēre	praebuī	praebitus	差し出す
jaceō	jacēre	jacuī	jacitūrus	横たわっている
mereō	merēre	meruī	meritus	稼ぐ
moneō	monēre	monuī	monitus	忠告する
noceō	nocēre	nocuī	nocitum (est)	傷つける
pāreō	pārēre	pāruī	pāritūrus	服従する
placeō	placēre	placuī	placitūrus	喜ばれる
taceō	tacēre	tacuī	tacitūrus	黙る
terreō	terrēre	terruī	territus	恐がらせる
valeō	valēre	valuī	valitūrus	体力がある

注意 1: 以下のものには分詞幹がありません。

^{*15} impleō, expleō も同様。^{*16} 複合語は第四活用になります: acciō, accīre など。

egeō	egēre	eguī	—	…を欠いている
ēmineō	ēminēre	ēminuī	—	突出する
flōreō	flōrēre	flōruī	—	花咲く
horreō	horrēre	horruī	—	身震いする
lateō	latēre	latuī	—	気づかれない
niteō	nitēre	nitūi	—	輝く
oleō	olēre	oluī	—	匂いがする
palleō	pallēre	palluī	—	青ざめている
pateō	patēre	patuī	—	開いている
rubeō	rubēre	rubuī	—	赤い
sileō	silēre	siluī	—	黙っている
splendeō	splendēre	splenduī	—	輝く
studeō	studēre	studuī	—	専念する
stupeō	stupēre	stupuī	—	呆然とする
timeō	timēre	timuī	—	恐れる
torpeō	torpēre	torpuī	—	麻痺している
vigeō	vigēre	viguī	—	元気だ
vireō	virēre	viruī	—	緑だ

他。

注意 2: 以下のものは現在幹のみ存在します。

aveō	avēre	—	—	渴望する
frīgeō	frīgēre	—	—	寒い
immineō	imminēre	—	—	差しかかる
maereō	maerēre	—	—	悲しむ
polleō	pollēre	—	—	勢威をふるう

他

(b) -eō, -ēre, -uī, -tus (-sus) 型

cēnseō	cēnsēre	cēnsuī	cēnsus	見積もる
doceō	docēre	docuī	doctus	教える
miscēō	miscēre	miscuī	mixtus	混ぜる
teneō	tenēre	tenuī	—	しっかり持つ

contineō, sustineō も同様。ただし

retineō	retinēre	retinuī	retentus	保持する
obtimeō	obtinēre	obtinuī	obtentus	保つ
torreō	torrēre	torruī	tostus	焦がす

3. 完了形が -sī のもの。

augeō	augēre	auxī	auctus	増やす
torqueō	torquēre	torsī	tortus	ねじる
indulgeō	indulgēre	indulsī	—	好意的だ
lūceō	lūcēre	lūxī	—	輝いている
lūgeō	lūgēre	lūxi	—	悲しむ
jubeō	jubēre	jussī	jussus	命じる
per-mulceō	permulcēre	permulsī	permulsus	和らげる
rīdeō	rīdēre	rīsī	rīsum (est)	笑う
suādeō	suādēre	suāsī	suāsum (est)	助言する
abs-tergeō	abstergēre	abstersī	abstersus	ぬぐう
ārdeō	ārdēre	ārsī	ārsūrus	燃える
haereō	haerēre	haesī	haesūrus	付着している
maneō	manēre	mānsī	mānsūrus	とどまる
algeō	algēre	alsī	—	凍える
fulgeō	fulgēre	fulsī	—	きらめく
urgeō	urgēre	ursī	—	押しやる

4. 重音して -ī の完了形をもつもの。

mordeō	mordēre	momordī	morsus	噛む
spondeō	spondēre	spopondī	spōnsus	約束する
tondeō	tondēre	totondī	tōnsus	刈り取る
pendeō	pendēre	pependī	—	ぶら下がっている

5. 語幹の母音を伸ばして -ī の完了形をもつもの。

caveō	cavēre	cāvī	cautūrus	用心する
faveō	favēre	fāvī	fautūrus	好意を示す
foveō	fovēre	fōvī	fōtus	愛育する
moveō	movēre	mōvī	mōtus	動かす
paveō	pavēre	pāvī	—	恐がっている
sedeō	sedēre	sēdī	sessūrus	座る
videō	vidēre	vīdī	vīsus	見る
voveō	vovēre	vōvī	vōtus	誓約する

6. 重音せず、母音も伸ばさずに -ī の完了形をもつもの。

ferveō	fervēre	(fervī, ferbuī)	—	沸騰している
prandeō	prandēre	prandī	prānsus	昼食をとる
strideō	strīdēre	strīdī	—	キーキー鳴る

7. 異態動詞:

liceor	licēri	licitus sum	許されている
polliceor	pollicēri	pollicitus sum	確言する
mereor	merēri	meritus sum	稼ぐ
misereor	miserēri	miseritus sum	同情する
vereor	verēri	veritus sum	畏敬する
fateor	fatēri	fassus sum	告白する
cōnfiteor	cōnfitēri	cōnfessus sum	自白する
reor	rēri	ratus sum	思う
medeor	medēri	—	治療する
tueor	tuēri	—	見守る

7.14.3 第三活用 (子音活用)

122. 1. 現在幹が子音で終わるもの

(a) 完了形が *-sī* のもの

i. *-ō, -ēre, -sī, -tus* 型

carpō	carpere	capsī	carptus	もぎ取る
sculpō	sculperere	sculpsī	sculptus	彫る
rēpō	rēpere	rēpsī	—	這う
serpō	serpere	serpsī	—	這う
scribō	scribere	scripsī	scriptus	書く
nūbō	nūbere	nūpsī	nūpta (女性のみ)	嫁ぐ
regō	regere	rēxī	rēctus	指揮する
tegō	tegere	tēxī	tēctus	覆う
af-fligō	affligere	afflixī	afflictus	打ち付ける
dicō	dicere	dixī	dictus	言う
dūcō	dūcere	dūxī	ductus	導く
coquō	coquere	coxī	coctus	料理する
trahō	trahere	trāxī	trāctus	引く
vehō	vehere	vexī	vectus	運搬する
cingō	cingere	cīnxī	cīnctus	取り巻く
tingō	tingere	tīnxī	tīnctus	浸す
jungō	jungere	jūnxī	jūnctus	繋ぐ
fingō	fingere	fīnxī	fīctus	形作る
pingō	pingere	pīnxī	pīctus	彩色する
stringō	stringere	strīnxī	strictus	きつく締める
-stinguō ^{*17}	-stinguere	-stīnxī	-stīnctus	消す
unguō	unguere	ūnxī	ūnctus	油を塗る
vivō	vivere	vixī	victum (est)	生きている
gerō	gerere	gessī	gestus	運ぶ
urō	ūrere	ussī	ūstus	焼く
temnō	temnere	con-temptī	con-temptus	軽蔑する

ii. -ō, -ēre, -sī, -sus 型

^{*17} 活用形がそろっているのは、以下の複合語だけです: *extinguō*, *restinguō*, *distinguō*。

figō	figere	fixī	fixus	固定する
mergō	mergere	mersī	mersus	沈める
spargō	spargere	sparsī	sparsus	ばらまく
flectō	flectere	flexī	flexus	曲げる
nectō	nectere	nexuī(nexī)	nexus	織って作る
mittō	mittere	misī	missus	行かせる
rādō	rādere	rāsī	rāsus	削り取る
rōdō	rōdere	rōsī	rōsus	かじる
vādō	vādere	-vāsī ^{*18}	-vāsum (est) ^{*18}	進む
lūdō	lūdere	lūsī	lūsum (est)	遊ぶ
trūdō	trūdere	trūsī	trūsus	押す
laedō	laedere	laesī	laesus	傷つける
claudō	claudere	clausī	clausus	閉じる
plaudō	plaudere	plausī	plausum (est)	拍手する
explōdō	explōdere	explōsī	explōsus	追い出す
cēdō	cēdere	cessī	cessum (est)	退く
dividō	dividere	divisī	divisus	切り離す
premō	premere	pressī	pressus	圧する

(b) 完了形が、重音して -i のもの

ab-dō	abdere	abdidī	abditus	隠す
red-dō	red-dere	reddidī	redditus	返還する

addō, condō, dēdō, perdō, prōdō, tradō 等も同様

cōn-sistō	cōnsistere	cōnstītī	—	身を置く
resistō	resistere	restītī	—	抵抗する
circumsistō	circumsistere	circumstētī	—	取り巻く
cadō	cadere	cecidī	cāsūrus	落ちる
caedō	caedere	cecidī	caesus	殺す
pendō	pendere	pependī	pēnsus	はかりにかける
tendō	tendere	tetendī	tentus	伸ばす
tundō	tundere	tutudī	tūsus, tūnsus	叩く
fallō	fallere	fefelli	(falsus (形容詞))	騙す
pellō	pellere	pepulī	pulsus	押し動かす
currō	currere	cucurrī	cursum (est)	走る
parcō	parcere	pepercī	parsūrus	節約する
canō	canere	cecinī	—	歌う
tangō	tangere	tetigī	tāctus	触れる
pungō	pungere	pupugī	pūctus	刺す

注意: 以下の動詞の完了形は、もともと重音して作っていましたが、重音の音節を失ってしまいました。

^{*18} 以下の複合語のみ: *ēvādō, invādō, pervādō*。

per-cellō	percellere	perculī	perculsus	打ち倒す
findō	findere	fidī	fissus	割る
scindō	scindere	scidi	scissus	引き裂く
tollō	tollere	sus-tulī	sublātus	取り除く

(c) 完了形が、語幹の母音を伸ばして -ī のもの

agō	agere	ēgī	āctus	駆り立てる、行う
peragō	peragere	perēgī	perāctus	成し遂げる
subigō	subigere	subēgī	subāctus	服従させる
cōgō	cōgere	coēgī	coāctus	強制する、集める
frangō	frangere	frēgī	frāctus	粉碎する
perfringō	perfringere	perfrēgī	perfrāctus	粉々に砕く
legō	legere	lēgī	lēctus	読む、集める
perlegō	perlegere	perlēgī	perlēctus	読み通す
colligō	colligere	collēgī	collēctus	集める
dēligo	dēligere	dēlēgī	dēlēctus	選ぶ
dīligo	dīligere	dīlēxī	dīlēctus	愛する
intelligō	intelligere	intellēxī	intellēctus	理解する
neglegō	neglegere	neglēxī	neglēctus	無視する
emō	emere	ēmī	ēemptus	買う
coēmō	coēmere	coēmī	coēemptus	買い占める
redimō	redimere	redēmī	redēemptus	買い戻す
dirimō	dirimere	dirēmī	dirēemptus	切り離す
dēmō	dēmere	dēmpsī	dēemptus	取り去る
sūmō	sūmere	sūmpsī	sūmptus	手に取る
prōmō	prōmere	prōmpsī	(prōmptus (形容詞))	取り出す
vincō	vincere	vīcī	victus	勝つ
re-linguō	relinquere	reliquī	relictus	置いていく
rumpō	rumpere	rūpī	ruptus	破碎する
edō	ēsse (§128)	ēdī	ēsus	食べる
fundō	fundere	fūdī	fūsus	注ぐ

(d) 完了形が、重音せず、母音も伸ばさず -ī のもの

excūdō	excūdere	excūdi	excūsus	打ち延ばす
cōnsidō	cōnsidere	cōnsēdi	—	着席する
possidō	possidere	possēdi	possessus	手に入れる
accendō	accendere	accēdi	accēnsus	火をつける
a-scendō	ascendere	ascēdi	ascēsum (est)	登る
dē-fendō	dēfendere	dēfēdi	dēfēnsus	防ぐ
pre-hendō	prehendere	prehēdi	prehēnsus	引き留める
icō	icere	īci	ictus	打つ
vellō	vellere	velli	vulsus	引き抜く
vertō	vertere	vertī	versus	回す
pandō	pandere	pandī	passus	伸ばす
solvō	solvere	solvī	solūtus	ほどく
visō	visere	vīsī	vīsus	見に行く
volvō	volvare	volvī	volūtus	転がす
verrō	verrere	verrī	versus	掃き清める

(e) 完了形が **-uī** のもの

in-cumbō	incumbere	incubuī	incubitūrus	寄りかかる
gignō	gignere	genuī	genitus	産む
molō	molere	moluī	molitus	挽 [ひ] く
vomō	vomere	vomuī	vomitus	吐く
fremō	fremere	fremuī	—	どよめく
gemō	gemere	gemuī	—	嘆息する
metō	metere	messuī	messus	収穫する
tremō	tremere	tremuī	—	震える
strepō	streperere	strepuī	—	大きな音を立てる
alō	alere	aluī	altus (alitus)	養育する
colō	colere	coluī	cultus	耕す
incolō	incolere	incoluī	—	住む
excolō	excolere	excoluī	excultus	鍛える
cōnsulō	cōnsulere	cōnsuluī	cōnsultus	相談する
cōnserō	cōnserere	cōnseruī	cōnsertus	結びつける
dēserō	dēserere	dēseruī	dēsertus	見捨てる
disserō	disserere	disseruī	—	論ずる
texō	texere	texuī	textus	織る

(f) 完了形が **-vī** のもの

sino	sinere	sīvī	situs	放っておく
dēsinō	dēsinere	dēsīī	dēsitus	中止する
pōnō	pōnere	posuī	positus	置く
ob-linō	oblinere	oblēvī	oblitus	塗りたくる
serō	serere	sēvī	satus	種をまく
cōnserō	cōnserere	cōnsēvī	cōnsitus	植え付ける
cernō	cernere	—	—	ふるい分ける
discernō	discernere	discrēvī	discrētus	区別する
dēcernō	dēcernere	dēcrēvī	dēcrētus	判決する
spernō	spernere	sprēvī	sprētus	軽蔑する
sternō	sternere	strāvī	strātus	広げる
prō-sternō	prōsternere	prōstrāvī	prōstrātus	投げ倒す
petō	petere	petivī(petii)	petitus	探し求める
appetō	appetere	appetivī	appetitus	熱望する
terō	terere	trīvī	tritrus	こする
quaerō	quaerere	quaesivī	quaesitus	探す
acquīrō	acquīrere	acquīsivī	acquīsitus	獲得する
arcessō	arcessere	arcessivī	arcessitus	呼び寄せる
capessō	capessere	capessivī	capessitus	つかまえる
laccessō	laccessere	laccessivī	laccessitus	挑発する

(g) 現在幹のみのもの

angō	angere	—	—	喉を絞める
lambō	lambere	—	—	舐める
claudō	claudere	—	—	よるめいて歩く
furō	furere	—	—	狂乱する
vergō	vergere	—	—	下へ傾く

他少数の語。

2. 現在幹が -u で終わるもの

induō	induere	induī	indūtus	着用させる
imbuō	imbuere	imbuī	imbūtus	湿らせる
luō	luere	luī	—	清める
polluō	polluere	polluī	pollūtus	汚す
minuō	minuere	minuī	minūtus	小さくする
statuō	statuere	statuī	statūtus	立たせる
cōstituō	cōstituere	cōstituī	cōstitutus	定める
suō	suere	suī	sūtus	縫う
tribuō	tribuere	tribuī	tribūtus	配分する
ruō	ruere	ruī	ruitūrus	崩れ落ちる
dīruō	dīruere	dīruī	dīrutus	破壊する
obruō	obruere	obruī	obrutus	圧倒する
acuō	acuere	acuī	—	鋭くする
arguō	arguere	arguī	—	反駁する
congruō	congruere	congruī	—	同意する
metuō	metuere	metuī	—	恐れている
ab-nuō	abnuere	abnuī	—	首を横に振る
re-spuō	respuere	respuī	—	拒絶する
struō	struere	strūxī	strūctus	建てる
fluō	fluere	flūxi	(flūxus (形容詞))	流れる

3. 現在幹が -i で終わるもの

cupiō	cupere	cupivī	cupītus	切望する
sapiō	sapere	sapivī	—	味がする
rapiō	rapere	rapuī	raptus	強奪する
dīripiō	dīripere	dīripuī	dīreptus	略奪する
cōspiciō	cōspicere	cōspexī	cōspectus	見つめる
aspiciō	aspicere	aspexī	aspectus	注視する
illiciō	illicere	illexī	illectus	おびき寄せる
pelliciō	pellicere	pellexī	pellectus	籠絡する
ēliciō	ēlicere	ēlicuī	ēlicitus	おびき出す
quatiō	quatere	—	quassus	振り動かす
concutiō	concutere	concussī	concussus	揺り動かす
pariō	perere	peperī	partus	産む
capiō	capere	cēpī	captus	つかむ
accipiō	accipere	accēpī	acceptus	受け取る
incipiō	incipere	incēpī	inceptus	始める
faciō	facere	fēcī	factus	作る
afficiō	afficere	affēcī	affectus	働きかける

この受動態は afficior, affici, affectus sum です。他の前置詞との複合語 **perficiō, perficior; interficiō, interficior** なども同様です。ですが

assuefaciō assuefacere assuefēcī assuefactus 慣らす

の受動態は assuefiō, assueferī, assuefactus sum です。**patefaciō, patefiō, calefaciō, calefiō** など、前置詞

でないものとの複合語は、すべてこのようになります。

iaciō	jacere	jēcī	jactus	投げる
abiciō	abicere	abjēcī	abjectus	投げ捨てる
fodiō	fodere	fōdī	fossus	掘る
fugiō	fugere	fūgī	fugitūrus	逃げる
effugiō	effugere	effūgī	—	逃げる

4. -scō の形の動詞

(a) 単純な語根からなる -scō の動詞

poscō	poscere	poposcī	—	要求する
discō	discere	didicī	—	学ぶ
pāscō	pāscere	pāvī	pāstus	食べ物を与える
pāscor	pāscī	pāstus sum		草をはむ
crēscō	crēscere	crēvi	crētus	大きくなる
cōnsuēscō	cōnsuēscere	cōnsuēvī	cōnsuētus	慣れる
quiēscō	quiēscere	quiēvī	quiētūrus	休息する
adolēscō	adolēscere	adolēvī	adultus	成長する
obsolēscō	obsolēscere	obsolēvī	—	すたれる
nōscō	nōscere	nōvī	—	知る
ignōscō	ignōscere	ignōvī	ignōtūrus	大目に見る
agnōscō	agnōscere	agnōvī	agnitus	識別する
cognōscō	cognōscere	cognōvī	cognitus	知ようになる

(b) 他の動詞から派生した動詞

この種の動詞は普通、起動相 (§155,1) の意味になります。完了時制をもつときは、完了形は派生元の動詞と同じになります。

flōrēscō	flōrēscere	flōruī	花が咲き始める	(flōreō)
scīscō	scīscere	scīvī	可決する	(scīō)
ārēscō	ārēscere	āruī	乾く	(āreō)
calēscō	calēscere	caluī	温まる	(caleō)
cōnsenēscō	cōnsenēscere	cōnsenuī	衰える	(seneō)
extimēscō	extimēscere	extimuī	ひどく恐れる	(timeō)
ingemīscō	ingemīscere	ingemuī	うめき始める	(gemō)
adhaerēscō	adhaerēscere	adhaesī	くっつく	(haereō)

(c) 形容詞から派生した動詞。普通、起動相の意味になります。

obdūrēscō	obdūrēscere	obdūruī	堅くなる	(dūrus)
ēvanēscō	ēvanēscere	ēvinuī	消え去る	(vānus)
percrēbrēscō	percrēbrēscere	percrēbruī	普及する	(crēber)
mātūresco	mātūrescere	mātūruī	熟する	(mātūrus)
obmūtēscō	obmūtēscere	obmūtuī	口がきけなくなる	(mūtus)

5. 異態動詞

fungor	fungī	fūnctus sum	実行する
queror	querī	questus sum	不平を言う
loquor	loquī	locūtus sum	話す
sequor	sequī	secūtus sum	ついて行く
fruor	frui	fruitūrus	享受する
perfruor	perfrui	perfrūctus sum	十分に享受する
lābor	lābi	lāpsus sum	すべる
amplector	amplectī	amplexus sum	抱きしめる
nītor	nīti	nīsus (nīxus) sum	努力する
gradior	gradī	gressus sum	歩く
patior	patī	passus sum	こうむる
perpetior	perpetī	perpessus sum	(苦難を) 十分味わう
ūtor	ūtī	ūsus sum	使う
morior	mori	mortuus sum	死ぬ
adipīscor	adipīscī	adeptus sum	手に入れる
comminīscor	comminīscī	commentus sum	考案する
reminīscor	reminīscī	—	思い出す
nancīscor	nancīscī	nanctus (nactus) sum	手に入れる
nāscor	nāscī	nātus sum	生まれる
oblivīscor	oblivīscī	oblītus sum	忘れる
pacīscor	pacīscī	pactus sum	契約を結ぶ
proficīscor	proficīscī	profectus sum	出発する
ulcīscor	ulcīscī	ultus sum	復習する
irāscor	irāscī	(irātus (形容詞))	怒る
vescor	vescī	—	食べる

7.14.4 第四活用

123. 1. 完了形が -vī のもの

audiō audire audīvī auditus 聞く

第四活用の動詞は、通例上のように活用します。

sepeliō sepelire sepelīvī sepultus 埋葬する

2. 完了形が -uī のもの

aperiō aperire aperuī apertus 開く

operiō operire operuī opertus 閉じる

saliō salire saluī — 跳ぶ

3. 完了形が -sī のもの

saepiō	saepīre	saepsī	saeptus	垣をめぐらす
sanciō	sancīre	sānxī	sānctus	承認する
vinciō	vincīre	vinxī	vinctus	縛る
amiciō	amicīre	—	amictus	着せる
fulciō	fulcīre	fulsī	fultus	支える
referciō	refercīre	refersī	refertus	ぎっしり詰める
sarciō	sarcīre	sarsī	sartus	繕う
hauriō	haurīre	hausī	haustus	引き込む
sentīō	sentīre	sēnsī	sēnsus	知覚する

4. 完了形が、語幹の母音を伸ばして -ī のもの

veniō	venīre	vēnī	ventum (est)	来る
adveniō	advenīre	advēnī	adventum (est)	到着する
inveniō	invenīre	invēnī	inventus	出くわす

5. 完了形が重音を失ったもの

reperiō	reperīre	repperī	repertus	発見する
comperiō	comperīre	comperī	compertus	(調査して) 確認する

6. 現在形のみのももの

feriō	ferīre	—	—	叩く
ēsuriō	ēsurīre	—	—	飢えている

7. 異態動詞

largior	largīri	largitus sum	気前よく与える
---------	---------	--------------	---------

多くの語は上のように活用します。

experior	experīri	expertus sum	試す
----------	----------	--------------	----

opperior	opperīri	oppertus sum	待つ
----------	----------	--------------	----

ōrdior	ōrdīri	ōrsus sum	始める
--------	--------	-----------	-----

orior	orīri	ortus sum	昇る
-------	-------	-----------	----

orior は第三活用形の形になる活用形が多いです: **oreris, oritur, orimur; orerer** (接続法未完了); **orere** (命令)

mētior	mētīri	mēnsus sum	測る
--------	--------	------------	----

assentior	assentīri	assēnsus sum	賛同する
-----------	-----------	--------------	------

7.15 不規則動詞

124. いくつかの動詞は、不規則動詞と呼ばれます。その中で最も重要なものは、**sum, dō, edō, ferō, volō, nōlō, mālō, eō, fiō** です。これらの動詞の特殊なところは、多くの活用形において介母音を介さず、直接語幹に人称語尾を付加することです。たとえば **ferō** の二人称単数は **fer-s** (**fer-i-s** ではない) です。ラテン語には、かつてこの種の活用をするものがたくさんありました。現在、不規則動詞と呼ばれるものは、その名残りです。

125. **sum**: **sum** の屈折はすでに述べました。**sum** の複合語はいろいろありますが、どれも同じように屈折します。

absum abesse āfuī 不在である

現在分詞 absēns (absentis) 不在の

adsum adesse adfuī 居合わせる

dēsum deesse dēfuī ...が欠けている

insum inesse īnfuī 中にある

intersum interesse interfuī 間にある

praesum praeesse praefuī 管理する

現在分詞 praesēns (praesentis) いまここにある

obsum obesse obfuī 邪魔になる

prōsum prōdesse prōfuī 役立つ

subsum subesse subfuī 下にある

supersum superesse superfuī 残っている

注意: **prōsum** は **prōd** (**prō** の古形) と **sum** の複合語です。d は子音の前で消えます: **prōsumus**。ですが母音の前では残ります: **prōdestis**。

126. **possum**: 現在形 **possum** は、**pot-** (**pote** より「可能だ」) と **sum** の複合語です。完了形 **potuī** は、古形 **potēre** から来ています。

主要形

possum	posse	potuī	「...できる」
---------------	--------------	--------------	----------

直説法

	単数	複数
現在	possum, potes, potest	possumus, potestis, possunt
未完了	poteram	poterāmus
未来	poterō	poterimus
完了	potuī	potuimus
過去完了	potueram	potuerāmus
未来完了	potuerō	potuerimus

接続法

	単数	複数
現在	possim, possis, possit	possimus, possitis, possint
未完了	possem	possēmus
完了	potuerim	potuerīmus
過去完了	potuissem	potuissēmus

不定詞

現在	posse
完了	potuisse

分詞

現在	potēns (形容詞)
----	--------------

127. **dō** 「与える」:

主要形

dō	dāre	dedi	dātus
----	------	------	-------

能動態

直説法

	単数	複数
現在	dō, dās, dat	dāmus, dātis, dant
未完了	dābam など	dābāmus
未来	dābō など	dābimus
完了	dedi	dedimus
過去完了	dederam	dederāmus
未来完了	dederō	dederimus

接続法

	単数	複数
現在	dem	dēmus
未完了	dārem	dārēmus
完了	dederim	dederīmus
過去完了	dedissem	dedissēmus

命令法

	単数	複数
現在	dā	dāte
未来	dātō	dātōte
	dātō	dantō

不定詞

現在	dāre
完了	dedisse
未来	dātūrus esse

分詞

現在	dāns
未来	dātūrus

動名詞

dandi など

目的分詞

dātum, dādū

1. 受動態は、ă が短いことを除けば規則的に活用します: dārī, dātur, dārētur など。
2. 黎明期や詩においては、接続法現在が duim, duint, perduit, perduint などとなります。これは語根 da- から形成されたものではなく、似た意味を持つ傍系の別の語根 du- から来ています。

128. edō 「食べる」:

主要形

edō	esse	edi	ēsus
-----	------	-----	------

能動態

直説法

	単数	複数
現在	edō	edimus
	ēs	ēstis
	ēst	edunt

接続法

	単数	複数
未完了	ēssem	ēssēmus
	ēsēs	ēssētis
	ēsset	ēssent

命令法

	単数	複数
現在	ēs	ēste
未来	ēstō	ēstōte
	ēstō	eduntō

不定詞

現在	ēsse
----	------

受動態

直説法

接続法

三人称単数現在: ēstur

三人称単数未完了: ēssētur

1. ēs- の形するとき e が長いことに注意してください。esse 「...である」との区別は、そこだけです。
2. comedō, comēsse, comēdī, comēsus (comēstus) 「消費する」という複合語があります。
3. 接続法現在は edim, -is -it となることが多いです。edam, edās,... となることもあります。

129. ferō 「運ぶ」:

主要形

ferō	ferre	tulī	lātus
------	-------	------	-------

能動態

直説法

	単数	複数
現在	ferō, fers, fert	ferimus, fertis, ferunt ^{*19}
未完了	ferēbam	ferēbāmus
未来	feram	ferēmus
完了	tulī	tulimus
過去完了	tuleram	tulerāmus
未来完了	tulerō	tulerimus

^{*19} ferō の活用形には、介母音が挟まれるものもあることがわかつています。そういうもののうちのいくつか (ferimus, ferunt など) は、第三活用の規則動詞と同じ形をしています。

接続法

	単数	複数
現在	feram	ferāmus
未完了	ferrem	ferrēmus
完了	tulerim	tulerimus
過去完了	tulissem	tulissēmus

命令法

	単数	複数
現在	fer	ferite
未来	fertō	fertōte
	fertō	feruntō

不定詞

現在	ferre
完了	tulisse
未来	lātūrus esse

分詞

現在	ferēns
未来	lātūrus

動名詞

属	ferendī
与	ferendō
对	ferendum
奪	ferendō

目的分詞

对	lātum
奪	lātū

受動態

主要形

feror	ferrī	lātus sum	「運ばれる」
--------------	--------------	------------------	--------

直説法

	単数	複数
現在	feror, ferris, fertur	ferimur, feriminī, feruntur
未完了	ferēbar	ferēbāmur
未来	ferar	ferēmur
完了	lātus sum	lātī sunt
過去完了	lātus eram	lātī erāmus
未来完了	lātus erō	lātī erimus

接続法

	単数	複数
現在	ferar	ferāmur
未完了	ferrer	ferrēmur
完了	lātus sim	lātī sīmus
過去完了	lātus essem	lātī essēmus

命令法

	単数	複数
現在	ferre	ferimini
未来	fertor	—
	fertor	feruntor

不定詞

不定詞		分詞	
現在	ferri	完了	lātus
完了	lātus esse	未来	ferendus
未来	lātum iri		

以下の複合語も同様の活用になります:

afferō	afferre	attulī	allātus	持ってくる
auferō	auferre	abstulī	ablātus	持ち去る
cōnferō	cōnferre	contulī	collātus	比較する
differō	differre	distulī	dilātus	遅らせる
efferō	efferre	extulī	elātus	持ち出す
īnferō	īnferre	intulī	illātus	運び込む
offerō	offerre	obtulī	oblātus	差し出す
referō	referre	rettulī	relātus	持ち帰る

注意: **sustulī, sublātus** は **tollō** の活用形です。

130. volō, nōlō, mālō:

主要形

volō	velle	voluī	「欲する」
nōlō	nōlle	nōluī	「欲しない」
mālō	mālle	māluī	「むしろ...を好む」

直説法

現在	volō	nōlō	mālō
	vīs	nōn vīs	māvīs
	vult	nōn vult	māvult
	volumus	nōlumus	mālumus
	vultis	nōn vultis	māvultis
	volunt	nōlunt	mālunt
未完了	volēbam	nōlēbam	mālēbam
未来	volam	nōlam	mālam
完了	voluī	nōluī	māluī
過去完了	volueram	nōlueram	mālueram
未来完了	voluerō	nōluerō	māluerō

接続法

現在	velim, -is, -it など	nōlim	mālim
未完了	vellem, -ēs, -et など	nōllem	māllem
完了	voluerim	nōluerim	māluerim
過去完了	voluissem	nōluissem	māluissem

命令法

	単数	複数
現在	nōlī	nōlite
未来	nōlitō	nōlitōte
	nōlitō	nōluntō

不定詞

現在	velle	nōlle	mālle
完了	voluisse	nōluisse	māluisse

分詞

現在	volēns	nōlēns	—
----	--------	--------	---

131. fiō:

主要形

fiō	fieri	factus sum	「...になる」
------------	--------------	-------------------	----------

直説法

	単数	複数
現在	fiō, fis, fit	fimus, fitis, fiunt
未完了	fiēbam	fiēbāmus
未来	fiām	fiēmus
完了	factus sum	factī sumus
過去完了	factus eram	factī erāmus
未来完了	factus erō	factī erimus

接続法

	単数	複数
現在	fiam	fiāmus
未完了	fierem	fierēmus
完了	factus sim	factī sīmus
過去完了	factus essem	factī essēmus

命令法

	単数	複数
現在	fī	fite

不定詞

現在	fieri
完了	factus esse
未来	factum iri

分詞

完了	factus
動形容詞	faciendus

注意: fiō の複合語の孤立形が数例あります: **dēfit** (不足する)、**īnfit** (...し始める)。

132. eō:

主要形

eō	ire	ivī	itum (est)	「行く」
-----------	------------	------------	-------------------	------

直説法

	単数	複数
現在	eō, īs, it	īmus, itis, eunt
未完了	ībam	ībāmus
未来	ībō	ībimus
完了	īvī (ii)	ivimus (iimus)
過去完了	īveram (ieram)	īverāmus (ierāmus)
未来完了	īverō (ierō)	īverimus (ierimus)

接続法

	単数	複数
現在	eam	eāmus
未完了	īrem	irēmus
完了	īverim (ierim)	īverīmus (ierīmus)
過去完了	īvissem (iissem, īssem)	īvissemus (iissemus, īssemus)

命令法

	単数	複数
現在	ī	īte
未来	ītō	ītōte
	ītō	euntō

不定詞

現在	īre
完了	īvisse (isse)
未来	itūrus esse

分詞

現在	iēns (属格: euntis)
未来	itūrus, 動形容詞: eundum

動名詞 目的分詞

eundi など	itum, itū
----------	-----------

1. eō の複合語が他動詞の場合、受動態の屈折形もすべて揃います: **adeor, adiris, aditur** など。

7.16 欠如動詞

欠如動詞とは、いくつかの活用形が欠けている動詞です。重要なものを以下に挙げます。

133. 主に完了形のみが用いられる動詞:

	coepī 始めた	meminī 憶えている	ōdī 憎んでいる
	直説法		
完了	coepī	meminī	ōdī
過去完了	coeperam	memineram	ōderam
未来完了	coeperō	meminerō	ōderō
	接続法		
完了	coeperim	meminerim	ōderim
過去完了	coepissem	meminissem	ōdissem
	命令法		
	単数: mementō, 複数: mementōte		
	不定詞		
完了	coepisse	meminisse	ōdisse
未来	coepturus esse	—	ōsūrus esse
	分詞		
完了	coeptus (始まった)	—	ōsus
未来	coepturus	—	ōsūrus

1. **coepī** が受動不定詞を支配するときは、普通 **coeptus est** + 受動不定詞 になります: **amārī coeptus est** (彼は愛され始めた)。
2. **meminī, ōdī** は完了の形をしていますが、意味は現在です。注意してください。同様に、過去完了・未来完了は、未来完了・未来の意味になります: **memineram** (僕は覚えていた)、**ōderō** (僕は嫌うだろう)。

134. **inquam** 「言う」(直接話法の語句に挟まれて使われます):

直説法		
	単数	複数
現在	inquam	—
	inquis	—
	inquit	inquiunt
未来	—	—
	inquiēs	—
	inquiet	—

三人称単数完了: inquit

135. **ajō** 「言う」:

直説法

	単数	複数
現在	ajō	—
	aīs	—
	ait	ajunt
未来	ajēbam	ajēbāmus
	ajēbās	ajēbātis
	ajēbat	ajēbant
三人称単数完了: ait		

接続法

三人称単数完了: ajat

注意: aisne 「おまえは何を言ってるのかね?」は、ain というのが一般的です。

136. fārī 「話す」:

完了・過去完了・未来完了の活用形は、規則通りに屈折します。現在幹の活用形は、以下のものしかありません。

直説法

	単数	複数
現在	—	—
	—	—
	fātur	—
未来	fābor	—
	—	—
	fābitur	—
命令	fāre	
不定詞	fārī	
現在分詞	fantis, fanti, ...	
動名詞	属: fandī, 与奪: fandō	
動形容詞	fandus	

注意: fārī がそのままの形で使われることはまれです。それよりも、複合語の形でよく出てきます: affātur (彼は話しかける)、praefāmur (僕らは前もって言う)。

137. その他の欠如動詞:

1. queō. quīre, quīvī (...できる)、nequeō. nequīre, nequīvī (...できない) は eō と同様の屈折をしますが、主に現在時制で、特定の活用形のみが用いられます。
2. quaesō 「私は懇願する」、quaesumus 「私たちは懇願する」。
3. cedo (二人称単数命令)、cette (二人称複数命令) 「渡せ、言え」
4. salvē, salvēte 「やあ (挨拶)」, 不定詞 salvēre。
5. havē (avē), havēte 「やあ (挨拶)」, 不定詞 havēre。

7.17 非人称動詞

138. 非人称動詞とは、英語で言えば形式主語構文 *it snows, it seems* に相当します。非人称動詞は人を主語にとりません。その代わり、不定詞、節、中性代名詞を主語にとることができます: **mē pudet hōc fēcisse**. (僕には、これをしたことが恥ずかしい)、**hōc decet**. (これがふさわしい)。非人称動詞には以下のようなものがあります。

1. 天候に関する動詞:

fulget	fulsit	きらめく
tonat	tonuit	雷が鳴る
grandinat	—	雹が降る
ningit	ninxit	雪が降る
pluit	pluit	雨が降る

2. 特定の動詞:

paenitet	paenitēre	paenituit	残念がらせる
piget	pigēre	piguit	不快にする
pudet	pudēre	puduit	恥じ入らせる
taedet	taedēre	taedit	うんざりさせる
miseret	miserēre	miseruit	...に同情させる
libet	libēre	libuit	...に気に入らせる
licet	licēre	licuit	...することは自由だ
oportet	oportēre	oportuit	...するのが当然だ
decet	decēre	decurit	ふさわしい
dēdecet	dēdecēre	dēdecuit	不適當だ
rēfert	rēferre	retulit	重要だ

3. 特定の意味のときだけ非人称的な使われ方をするもの:

cōnstat	cōnstāre	cōnstitit	明白だ
praestat	praestāre	praestitit	...のほうがよい
juvat	juvāre	jūvit	喜ばせる
appāret	appārēre	appāruit	明白だ
placet	placēre	placuit (placitum est)	喜ばれる
accēdit	accēdere	accessit	さらに続いて生じる
accidit	accidere	accidit	(出来事が) 起こる
contingit	contingere	contigit	(出来事が) 降りかかる
ēvenit	ēvenire	ēvēnit	...の結果となる
interest	interesse	interfuit	重要だ

4. 自動詞の受動態:

itur	(直訳) それは行かれる	(意味) 誰かが行く
curritur	(直訳) それは走られる	(意味) 誰かが走る
ventum est	(直訳) それは来られた	(意味) 誰かが来た
veniendum est	(直訳) それは来られるべきだ	(意味) 誰かが来るべきだ
pugnāri potest	(直訳) それは戦われることができる	(意味) 誰かが戦うことができる

第 III 部

不变化詞

139. 不変化詞とは語尾変化をしない品詞のことです。副詞、前置詞、接続詞、間投詞の四種類があります。

第 8 章

副詞

140. 副詞は仕方、時間、程度を表します。ほとんどの副詞は格変化形を起源に持ち、使われているうちに形が固定されました。副詞の典型的な語尾はすでに (§76) 挙げました。次の相関表は大事です。

関係副詞・疑問副詞	指示副詞	不定副詞
ubi ~で、どこで	hic ここで istic (君の) そこで illic あそこで ibi (別に述べる) そこで	alicubi, usquam, uspiam どこかで
quō ~へ、どこへ	hūc ここへ istūc (君の) そこへ illūc あそこへ eō (別に述べる) そこへ	aliquō どこかへ
unde ~から、どこから	hinc ここから istinc (君の) そこから illinc あそこから inde (別に述べる) そこから	alicunde どこかから
quā ~を通過して、どこを通過して	hāc ここを通過して istāc (君の) そこを通過して illāc あそこを通過して eā (別に述べる) そこを通過して	aliquā どこかを通過して
cum ~のとき quandō いつ	nunc いま tum, tunc そのとき	aliquandō, umquam あるとき
quotiēns ~と同じ頻度で、どれくらいの頻度で	totiēns その頻度で	aliquotiēns 何回か
quam ~と同じ量で、どれくらいの量で	tam その量で	aliquantum いくらか

第9章

前置詞

141. 前置詞は、語同士の関係を表します。以下の前置詞は、対格を支配します。

ad へ	contrā に対して	post の後ろに
adversus に向かい合って	ergā の向かい側に	praeter のそばを通過して
adversum に向かって	extrā の外に	prope の近くに
に向かい合って	infrā の下に	propter の利益のために
ante の前に	inter の間に	secundum の後ろに
apud のそばに	intrā 以内に	subter の下に
circā の周りに	jūxtā のすぐそばに	super の上に
circiter の周りに	ob の利益のために	suprā の上に
circum の周りに	penes の所有で	trāns を超えて
cis のこちら側に	per を通って	ultrā の向こう側に
citrā のこちら側に	pōne の後ろで	versus の方向へ

1. *ūsque* は、よく *ad* の前に置かれて「～までも」という意味になります。

ūsque ad urbem 都市までも

2. *versus* は常に名詞の後ろに置きます。

Rōmam versus ローマに向かって

前置詞を前に置くこともできます。

ad urbem versus 都市に向かって

3. *prope* と同様、比較級の *propior*, *propius*、最上級の *proximus*, *proximē* が対格を支配することも時々あります。

Ubiū proximē Rhēnum incolunt. ウビイー人はレーヌス川のほとりに住んでいる。

propius castra hostium 敵陣にもっと近づいて

142. 次の前置詞は奪格を支配します。

<i>ā</i> , <i>ab</i> , <i>abs</i> によって	<i>cum</i> と一緒に	<i>prō</i> の前に
<i>absque</i> なしに	<i>dē</i> から (下に)	<i>sine</i> なしに
<i>cōram</i> の面前で	<i>ē</i> , <i>ex</i> から (外に)	<i>tenus</i> まで
	<i>prae</i> の前に	

1. *ā*, *ab*, *abs*: 母音もしくは *h* の前では、必ず *ab* を使います。子音の前では、*ā* もしくは *ab* を使います。ただし唇音 *b*, *p*, *f*, *v*, *m* や *c*, *g*, *q*, *t* の前では普通 *ā* を使います。*abs* は *tē* の前でのみ使うことができます。その場合で

も、*ā* を用いて構いません。

2. *ē, ex*: 母音もしくは *h* の前では、必ず *ex* を使います。子音の前では、*e* もしくは *ex* のどちらを用いても構いません。
3. *tenuis* は通例名詞の後ろに置きます: *pectoribus tenuis* (胸まで)。属格をとることもあります: *labrōrum tenuis* (唇まで)。
4. *cum* は一人称・二人称代名詞や再帰代名詞と一緒に使うとき、その後ろにくっつきます。普通、関係代名詞・疑問代名詞のときも同じです。

mēcum nōbīscum quōcum または *cum quō*

tēcum vōbīscum quācum または *cum quā*

sēcum quibusqum または *cum quibus*

quicum という形については §89 の脚注 17 を参照。

143. *in* (~の中へ、~の中で) と *sub* (~の下へ、~の下で) は対格をとる場合と奪格をとる場合の両方が存在します。対格をとると「動き」を表します。奪格をとると「静止」を表します。

in urbem 都市の中へ

in urbe 都市の中で

1. *subter, super* もしばしば奪格をとります。

144. 副詞と前置詞:

1. 前置詞は、もともと副詞でした。ですから前置詞の多くは副詞的な意味を保ち続けています: *post* (後で)、*ante* (以前に)、*contra* (他方で) など。
2. 逆に、普通は副詞の単語のうち、いくつかの語はよく前置詞として用いられます。

clam, pridie (+ 対格)

procul, simul, palam (+ 奪格)

3. 倒置 (*Anástrophe*) 前置詞が名詞の後ろに置かれることが時々あります。これを倒置と言います。

eī, quōs inter erat 彼の周りにいた人々 (英: *those among whom he was*)

倒置は主に二音節語の前置詞で起きます。

第 10 章

接続詞・間投詞

145. 1. 接続詞は、概念をつなげるために使われます。等位接続詞については、§341 以下を参照。従属接続詞については、従属節と一緒に学びます。
2. 間投詞は、感情を表現します。
- (a) 驚き
ēn, ecce, ō
- (b) 喜び
iō, euoe
- (c) 悲しみ・痛み
heu, ēheu, vae, prō
- (d) 呼びかけ
heus, eho

第 IV 部

語形成

第 11 章

派生語

146. 派生語は、動詞・名詞・形容詞の語幹に「接尾辞」と呼ばれる語尾をくっつけて作ります。

11.1 名詞

11.1.1 動詞から派生する名詞

147. 1. 接尾辞 **-tor (-sor), -trix** (女性) は「行為者」を表します。

victor, victrix 勝者 **dēfēnsor** 擁護者

注意: 接尾辞 **-tor** が名詞の語幹にくっつくこともよくあります。

glatiātor 剣闘士 (**gladius** より)

2. 接尾辞 **-or** (もともとは **-os**) は「活動」「状態」を表します。

amor 愛 **timor** 恐怖 **dolor** 痛み

3. 接尾辞 **-tiō, (-siō)** (属: **-ōnis**) と、**-tus (-sus)** (属: **-ūs**) は「進行中の行動」を指します。

vēnātiō 狩り **obsessiō** 包囲 **gemitus** 嘆息 **cursus** 走り

注意: 以下の接尾辞も同じ意味です。

(a) **-tūra, -sūra**

sepultūra 埋葬 **mēnsūra** 測定

(b) **-ium**

gaudium 喜び

(c) **-idō**

cupidō 欲望

4. 接尾辞 **-men, -mentum, -crum, -trum, -bulum, -culum** は行動の「手段」「場所」を表します。

lūmen (lūc-s-men) 光 **vocābulum** 名称

ōrnāmentum 装具 **documentum** 前例

sepulcrum 墓 **arātrum** 鋤

vehiculum 荷車

11.1.2 名詞から派生する名詞

148. 1. 指小辞:

• **-ulus (-ula, -ulum)**

• **-olus (-ola, -olum)** (母音の後)

- -culus (-cula, -culum)
- -ellus (-ella, -ellum)
- -illus (-illa, -illum)

nīdulus 小さな巣 (nīdus)

virgula 小枝 (virga)

oppidulum 小さな町 (oppidum)

filiolus 小さな息子 (filius)

opusculum 小さな仕事 (opus)

tabella 小さな板 (tabula)

lapillus 小石 (lapis)

注意 1: 上の例でわかるように、指小語は元の単語と性が同じです。

注意 2: -ellus, -illus は、原始的な指小辞 -lo- が変化したものです。

agellus 小さな地所 (ager-lus より)

lapillus 小石 (lapid-lus より)

2. 接尾辞 -ium は、人を表す名詞の後ろにくっついて、そのような人の「集まり」やその人の「職務」を表します。

collēgium 団体、同僚の集まり (collēga)

sacerdōtium 祭司職 (sacerdōs)

3. 接尾辞 -ārium, -ētum, -ile は、ものが「保管されている場所」やものが「たくさん見つかる場所」を表します。

columbārium ハト小屋 (columba)

olivētum オリーブ園 (olīva)

ovīle 羊小屋 (ovis)

4. 接尾辞 -ātus は「公的な地位」「称号」を表します。

cōnsulātus 執政官の職 (cōnsul)

5. 接尾辞 -ina は人を表す名詞にくっついて、「天職」やそれが「行われる場所」を表します。

doctrīna 教えること (doctor 教師)

medicīna 医術・診療所 (medicus 医者)

sūtrīna 靴づくり・靴屋の店舗 (sūtor 靴屋)

6. 「父称」とは、ギリシャ語の固有名詞で「～の息子」「～の娘」を表すものです。以下の接尾辞を用います。

(a) 男性名詞: -idēs, -adēs, -idēs

Priamidēs (Priamus の息子), Aeneadēs (Aenēas の息子), Pēlidēs (Pēleus の息子)

(b) 女性名詞: -ēis, -is, -ias

Nērēis (Nēreus の娘), Atlantis (Atlas の娘), Thaumantias (Thaumas の娘)

11.1.3 形容詞から派生する名詞

149. 接尾辞 -tās (-itās), -tūdō (-itūdō), -ia, -itia は、「質」を表す抽象名詞を作ります。

bonitās 高潔さ celeritās すばやさ magnitūdō 大きさ

audācia 勇敢さ amīcītia 親しさ

11.2 形容詞

11.2.1 動詞から派生する形容詞

150. 1. 接尾辞 **-bundus, -cundus** は、ほぼ現在分詞と似たような意味になります。

tremebundus ふるえている **jūcundus (juvō)** 好ましい

2. 接尾辞 **-āx, -ulus** は、「性向」「傾向」を表します。たいていの場合、好ましくないものです。

loquāx おしゃべりの **crēdulus** 馬鹿正直な

3. 接尾辞 **-idus** は、「状態」を表します。

calidus 熱い **timidus** 臆病な **cupidus** 熱望している

4. 接尾辞 **-ilis, -ibilis** は、「能力」を表します。普通、「～される」能力です。

fragilis 壊れやすい (壊されることができる)

docilis 教えやすい (教えられることができる)

11.2.2 名詞から派生する形容詞

一般名詞から

151. 1. 接尾辞 **-eus, -inus** は、物質や物体の名前に付加されます。

aureus (金の) **ferreus** (鉄製の) **fāginus** (ブナ材の)

2. 接尾辞 **-ius, -icus, -ilis, -ālis, -āris, -ārius, -nus, -ānus, -īnus, -ivus, -ēnsis** は、「～に属する」「～と関連する」という意味になります。

ōrātōrius 演説の **legiōnārius** 軍団の

bellicus 戦争の **paternus** 父の

civilis 市民の **urbānus** 都会の

rēgālis 王の **marīnus** 海の

cōsulāris 執政官の **aestīvus** 夏の

circēnsis 円形競技場の

3. 接尾辞 **-ōsus, -lentus** は、「充満」を意味します。

periculōsus 危険に満ちた **glōriōsus** 荣誉ある **opulentus** 裕福な

4. 接尾辞 **-tus** は、「～が備わっている」の意味です。

barbātus あごひげを生やした **stellātus** 星をちりばめた

固有名詞から

152. 1. 「人」の名前には、接尾辞 **-ānus, -iānus, -īnus** がつきます。

Catōniānus カトーに属する **Plautinus** プラウトゥスに属する

2. 「民族」の名前には、接尾辞 **-icus, -ius** がつきます。

Germanicus ゲルマーニアの **Thrācius** トラーキアの

3. 「場所」の名前には、**-ānus, -īnus, -ēnsis, -aeus, -ius** がつきます。

Rōmānus ローマの **Athēniēnsis** アテーナイの

Amerīnus アメリアの **Smyrnaeus** スミュルナの

Corinthius コリントスの

注意: 国の名前に *-ānus*, *-ēnsis* がついたものは、その国に「配置されている」「関連している」という意味です。その国土着の、という意味ではありません。

bellum Āfricānum アフリカで行われた戦争 (戦ったのはローマ人同士)

bellum Hispāniēse スペインで行われた戦争

legiōnēs Gallicānae ガッリアに配置されている部隊 (構成人員はローマ人)

11.2.3 形容詞から派生する形容詞

153. 指小辞 *-lus* が使われることが時々あります。

parvolus ちっちゃい

misellus (passer) 可愛そうな小さな (雀)

pauperculus 貧しい

11.2.4 副詞から派生する形容詞

154. 接尾辞 *-ernus* *-ternus*, *-tinus*, *tinus* をくっつけます。

hodiernus 今日の (*hodiē*)

hesternus 昨日の (*herī*)

intestinus 内部の (*intus*)

diūtinus 永続する (*diū*)

11.3 動詞

11.3.1 動詞から派生する動詞

155. 1. 起動相動詞: 現在幹に *-sco* をくっつけて作ります。「行動の開始」を意味します。

labāscō よろめきはじめる (*labō* より)

horrēscō 怖がるようになる (*horreō* より)

tremēscō 震えだす (*tremō* より)

obdormiscō 眠りにつく (*dormiō* より)

2. 反復相動詞 (強意動詞): 「繰り返して」もしくは「活発に」行われる行動を表します。分詞幹を使って作り、*-tō*, *-sō* で終わります。第一活用の動詞は *-itō* になります。(× *-ātō* にはならない)

jactō 振り回す (*jaciō* より)

cursō 走り回る (*currō* より)

volitō 飛び回る (*volō* より)

(a) 二重反復相になることもあります。

cantitō 何度も歌う (*cantō* より)

cursitō 走り回る (*cursō* より)

ventitō 足繁く来る (*ventō* より)

(b) **agitō** (動かす) は現在幹から作ります。

3. 願望動詞: 「～したい」という意味になります。分詞幹を使い、*-uriō* で終わります。

ēsuriō 食べたい・空腹だ (*edō* より)

parturiō 産みたい・妊娠している (*pariō* より)

11.3.2 名詞・形容詞から派生する動詞 (名詞由来動詞)

156. 名詞由来動詞のうち、第一活用のもものは大抵他動詞です。第二活用のもものは必ず自動詞です。第三・第四活用のものは、どちらともいえません。

1. 名詞からのもの:

fraudō 騙す (**fraus** より)

vestiō 着る (**vestis** より)

flōreō 花咲く (**flōs** より)

2. 形容詞からのもの:

liberō 解放する (**liber** より)

saeviō 怒り狂う (**saevus** より)

11.4 副詞

157. 1. 動詞から副詞を派生させるには、分詞幹に **-im** をくっつけます。

certātim 競って (**certō**)

cursim 急いで (**currō**)

statim その場で (**stō**)

2. 名詞・形容詞から副詞を派生させるには、以下の方法があります。

(a) 接尾辞 **-tim** (**-sim**), **-ātim** をくっつける。

gradātim 一歩一歩

paulātim 少しずつ

virītim 一人ずつ

(b) 接尾辞 **-tus** をくっつける。

antīquitus 古代から

rādīcitus 根元から

(c) 接尾辞 **-ter** をくっつける。

breviter 短く

第 12 章

複合語

158. 1. 複合語は、二つの単語をくっつけて作ります。その複合語の「本質的な意味」は、普通後ろ側の要素が担います。前側の要素は、その意味に何らかの「修正」を施します。
2. 複合するときに、母音変化が起きることが多いです。
- (a) 複合語の後ろ側の要素については §7.1 を参照。
- (b) 複合語の前側の要素の語幹の最後の母音は、*ō, ā* が期待されるところが *i* になることがよくあります。最後の母音が消失してしまうこともあります。子音幹の場合はよく *i* が挿入されます。

signifer 軍旗をかかげた
tubicen ラッパ吹き
magnanimus 度量の大きい
mātricīda 母殺し

159. 複合語の例:

1. 名詞

(a) 前置詞 + 名詞:

dē-decus 不名誉
pro-avus 曾祖父

(b) 名詞 + 動詞語幹:

agri-cola 農夫
frātri-cīda 兄弟殺し

2. 形容詞

(a) 前置詞 + 形容詞(名詞):

per-magnus とても大きい
sub-obscūrus ややあいまいな
ā-mēns 正気を失った

(b) 形容詞 + 名詞:

magn-animus 度量の大きい
celeri-pēs 足の速い

(c) 名詞 + 動詞語幹:

parti-ceps 関与している
morti-fer 死をもたらす

3. 動詞

以下のようなものが前側の要素になります。後ろの要素は常に動詞です。

(a) 名詞:

aedi-ficō 建物を作る

(b) 形容詞:

ampi-ficō 大きくする

(c) 副詞:

male-dicō 悪口を言う

(d) 別の動詞:

cale-faciō 暖かくする

(e) 前置詞:

ab-jungō 離す

re-ferō 持ち帰る

dis-cernō 区別する

ex-spectō 待つ

注意: 分離できない前置詞も、ここに含まれます。

ambi- (**amb-**) 周りに

dis- (**dir-**, **di-**) 離れ離れに

por- 前へ

red- (**re-**) 後ろへ

sēd- (**sē-**) 離れて

vē- 全くない

4. 副詞

いろんな形があります。

ant-eā それ以前に

i-licō (**in locō**) その場で

im-primīs とりわけ

ob-viam 行く手に

第 V 部

構文

160. 構文の部では、文の中で単語を取り扱う方法を学びます。

第 13 章

文

13.1 文の分類

161. 文は、以下のように分類できます。

1. 平叙文: 何かを述べる文。

puer scribit. 男の子は書いている。

2. 疑問文: 質問する文。

quid puer scribit? 男の子は何を書いていますか？

3. 感嘆文: 驚きの文。

quot librōs scribit! なんてたくさんの本を書いているのだろう！

4. 命令文: 命令や忠告を表す文。

scribe. 書きなさい。

13.2 疑問文の形

162. 疑問文には、語-疑問と文-疑問の二つがあります。

1. 語-疑問: 疑問代名詞や疑問形容詞で始まる疑問文。 **quis, quī, quālis, quantus, quot, quotiēns, quō, quā** など。

quis venit? 誰が来ますか？

quam diū manēbit? どれくらい彼は滞在しますか？

2. 文-疑問: 以下の形があります。

(a) **nōnne** で始まって、「はい」という答えを期待します。

nōnne vidētis? 君には見えないの？ (見えるだろう)

(b) **num** で始まって、「いいえ」を期待します。

num exspectās? 君は期待してるの？ (してないだろう)

(c) **-ne** を強調したい語の後ろにくっつけて (普通はその語を文頭に持ってくる)、単に質問を尋ねます。

vidēsne? 見えるかい？

-ne で作る疑問文は、文脈から特別な暗黙の意味を与えられることがあります。

sēnsistīne? 感じただろう？

(d) 特別な語を伴わない疑問。驚きや怒りを表すときが多いです。

tū in iudicū cōspectū venīre audēs? 裁判官たちの目の前に、よく来ようと思ったな？

3. 修辭疑問: 形だけは疑問文ですが、強い断定を意味します。

quis dubitat? 誰が疑おうか? (誰も疑わない)

4. 二重疑問: 以下の語を用います。

- **utrum ... an ...**
- **-ne ... an ...**
- **— ... an ...**
- 後ろの部分が否定のときは、**annōn (necne)** のときもある) を用います。

例:

utrum honestum est an turpe?	}	(これは) 立派ですか? 卑劣ですか?
honestumne est an turpe?		
honestum est an turpe?		

(a) **an** は元々二重疑問に限らず、単純な疑問文の先頭に使われることもありましたが。そのときの意味は **-ne, nōnne, num** と同じです。古典ラテン語にはこの使い方の痕跡が残っています。

Ā rēbus gerendis abstrahit senectūs. Quibus? An eis quae juventūte geruntur et vīribus? 年齢は、ものをなすことから (人を) 遠ざける。何から? 若さと力によってなす事柄から、(だけ) ではないか?

5. 応答

(a) 「はい」は **ita, etiam, vērō, sānē** で表します。もしくは動詞を繰り返してもかまいません。

‘visne locum mūtēmus?’ ‘sānē.’ 「場所を変えませんか?」「そうしましょう」

‘estisne vōs lēgātī?’ ‘sumus.’ 「君らは使者か?」「そうだ」

(b) 「いいえ」は **nōn, minimē, minimē vērō** で表します。もしくは否定文で動詞を繰り返してもかまいません。

‘jam ea praeteriit?’ ‘nōn.’ 「もう行ったか?」「まだです」

‘estne frāter intus?’ ‘nōn est.’ 「お兄さんは中にいる?」「いません」

13.3 主語と述語

163. 文の中には二つ重要な部分があり、主語と述語と言います。

主語は「それについて何かが述べられているもの」です。述語は「主語について述べられていること」です。

13.4 単文と複文

164. ひとつの主語とひとつの述語しか含まない文を単文と言います。二つ以上の主語・述語を含む文を複文と言います。たとえば、**puer librōs legit.** (男の子は本を読む) は単文ですが、**puer librōs legit et epistulās scribit.** (男の子は本を読んで手紙を書く) は複文です。複文の中の部分部分を、節と言います。

165. 等位節と従属節: 節と節が対等ならば、等位節と呼びます。一方の節がもう一方の節に寄りかかっているときは、従属節と言います。たとえば、**puer librōs legit et epistulās scribit.** では、二つの節は等位節です。ですが、**puer librōs legit quōs pater scribit.** (男の子は、父親の書く本を読む) では、二つめの節は一つめの節の従属節です。

第 14 章

名詞の構文

14.1 主語

166. 定形動詞 (直説法、接続法、命令法のどれか) の主語は、主格になります。

1. 主語になれるのは、以下の通り。

(a) 名詞・代名詞

puer scribit. 男の子は書いている。

hic scribit. 彼は書いている。

(b) 不定詞

decōrum est prō patriā mori. 祖国のために死ぬのは美しい。

(c) 節

opportūnē accidit quod vidistī. ちょうどよく君の見たことが起きた。

2. 人称代名詞の主語は普通、動詞で示されているので、わざわざ表示しません。

scribō. 私は書く。

videt. 彼は見る。

(a) しかし強調や対比のためになら、人称代名詞は表示します。

ego scribō et tū legis. 私が書いて、君が読む。

3. 動詞は文脈から容易に補完できるときに、ときどき省略されます。特に助動詞 **sum** が多いです。

rectē ille (facit). 彼は正しい(行いをした)。

consul profectus (est). 執政官は出発した。

14.2 述語名詞

167. 述語名詞とは、**sum** がそれに似た動詞で主語と関連付けられた名詞です。

168. 述語名詞は、主語と格が一致します*¹。

Cicerō orātor fuit. キケローは演説家だった。

Numa creatus est rex. ヌマは選ばれて王になった。

1. 可能なときは普通、述語名詞はその主語と、性も一致します。

philosophia est vitae magistra. 哲学は人生の師だ。

*¹ 叙事的属格については、§198,2; §203,5 を参照。

2. 述語名詞に伴う **sum** 以外の動詞でよく出てくるものは:

(a) **fiō, ēvādō, existō; maneō; videor**

Croesus nōn semper mānsit rēx. クロエスは王座にいつも留まっていたわけではない。

(b) **creor, appellor, habeor** のように、「作る、呼ぶ、扱う」動詞の受動態。

Rōmulus rēx appellatus est. ロームルスは王と呼ばれた。

habitus est deus 彼は神として扱われた。

14.3 同格語

169. 1. 同格語とは、同じ人や物を指している別の語を説明・定義する語です。

Cicerō cōsul 執政官、キケロー

urbs Rōma 都市ローマ

2. 同格語は、その主語と格が一致します。

opera Cicerōnīs ōrātōris 演説家キケローの作品

apud Hērodutum, patrem historiae 歴史の父ヘロドトスの著作にて

3. 可能なときは、同格語はその主語と性も一致します。

assentātiō adjūtrix vitiōrum 悪の助手たるお世辞

4. 処格は、**urbs** や **oppidum** の奪格を、同格語に取ることがあります。そのとき、前置詞は使うことも使わないこともあります。

Corinthī, Achāiae urbe または

Corinthī, in Achāiae urbe アカーイアの都市、コリントスにて

5. 部分同格語: 全体を指す名詞の後ろに、部分を指す同格語が続くことがよくあります。

militēs, fortissimus quisque, hostibus restitērunt. 兵隊たち、一人一人最強の皆が、敵に抵抗した。

14.4 格

14.4.1 主格

170. 主格は主語・同格語・述語名詞 (§166–§169) にしか使われません。

14.4.2 呼格

171. 呼格は、直接の呼びかけに用いられる格です。

crēdite mihi, iūdicēs. 私を信じてください、裁判官様。

1. 気を惹くための一種の方法として、呼格のかわりに主格を用いることがよくあります。特に詩や格式ばった散文に多いです。

audī tū, populus Albānus. 聞け、アルバの民よ。

2. 同様に、呼格の同格語を主格で示すことがあります。

nāte, mea magna potentia sōlus. 息子よ、私の唯一の、大きな力よ。

14.4.3 対格

172. 対格は、直接目的語の格です。

173. 直接目的語は、以下の二つの関係のうちのいずれかを表します。

A 行為によって影響を受ける人・物:

cōnsulem interfēcit. 彼は執政官を殺した。

legō librum. 私は本を読む。

B 行為によってなされた結果:

librum scrīpsī. 私は本を書いた。

templum struit. 彼は神殿を建てた。

174. 上記二つのいずれかの直接目的語をとる動詞を他動詞と言います。

1. いつもは直接目的語をとる動詞が、直接目的語なしで使われることがときどきあります。そのとき、その動詞は絶対的に用いられる、と言います。

rūmor est meum gnātum amare. 僕の息子が恋してるという噂がある。

影響を受ける人・物の対格

175. 1. これは一番頻度の高い対格の使用法です。

parentēs amāmus. 私たちは親を愛している。

mare aspicit. 彼は海を見つめている。

2. この種の対格をとる動詞で、以下のものは注意しておくといいいでしょう。

(a) 自動詞が前置詞と複合すると、他動詞になることが多いです。

i. **circum, praeter, trāns**

hostēs circumstāre 敵を取り囲む

urbem praeterīre 街を過ぎゆく

mūrōs trāscendere 壁を乗り越える

ii. **ad, per, in, sub** (上に比べて頻度は落ちます)

adīre urbem 都市を訪ねる

peragrāre Italiam イタリアじゅうを旅行する

inīre magistrātum 官職に就く

subire periculum 危険を被る

3. 感情を表現する動詞は、通常自動詞であっても、他動詞として使えることが多いです。

queror fātum. 私は運命を嘆く。

doleō ejus mortem. 私は彼の死を悲しむ。

rīdeo tuam stultitiam. 私は君の馬鹿さが可笑しい。

この他にも、**lūgeō, maereō** (嘆く)、**gemō** (うめく)、**horreō** (恐れる) などがあります。

4. 非人称動詞 **decet** (~にふさわしい)、**dēdecet** (~にふさわしくない)、**juvat** (~で嬉しい) は、影響を受ける人・物の対格をとります。

mē decet haec dicere. これを言うことが、私にはふさわしい。

5. 詩においては、ギリシャ語をまねて受動態の動詞を中動態として使い、対格の目的語をとることがあります。

galeam induitur. 彼はヘルメットをかぶっている。
cinctus tempora hederā ツタでこめかみを縛って
nōdō sinus collēcta 衣服をひとくくりにとめて

なされた結果の対格

176. 1. この種の対格は、典型的には以下のように使います。

librum scribō. 私は本を書く。

domum aedificō. 私は家を建てる。

2. 普段自動詞の動詞は、中性の代名詞 もしくは 中性の形容詞 を結果の対格としてとることが多いです。

(a) 中性の代名詞:

haec gemēbat. 彼はこんなため息をついた。

idem glōriārī 同じ自慢をする

eadem peccat. 彼は同じ間違いをしている。

(b) 中性の形容詞: 特に数や量の形容詞 **multum**, **multa pauca**, **nihil** など。

multa egeō. 私にはたくさん必要なものがある。

pauca studet. 彼は熱心さが足りない。

multum valet. 彼はとても強い。

nihil peccat. 彼はひとつも間違っていない。

ただし詩においては、どの形容詞でも自由にこの構文に使用します。

minitantem vāna 無駄な脅しをかけて

acerba tuēns 残忍な目をして

dulce loquentem 甘い口ぶりで

3. いくつかの中性代名詞と中性形容詞を副詞として用いるやりかたが、この対格から生じました。

multum sunt in vēnātiōne 彼らは狩りにとても夢中だ。

(a) **plūrimum** (とても)、**plērumque** (だいたい)、**aliquid** (ある程度)、**quid** (なぜ)、**nihil** (少しもない) なども同様です。

4. 時折自動詞が、語源的に近親関係にある結果の対格をとることがあります。これを同族対格と言います。同族対格は普通、形容詞に修飾されます。

sempiternam servitūtem serviat. 彼を永久にかしずかせなさい。

vītam dūram vīxī 私は厳しい人生を生きた。

(a) 同族対格は、語源的に関係がなくて意味が似ているだけの場合もあります。

stadium currit. 彼は競走する。

Olympia vincit. 彼はオリンピックで勝つ。

5. 結果の対格は、「味」や「におい」の動詞にも使います。

piscis mare sapit. 魚は海の味がする。

ōrātiōnēs antiqūitātem redolent. その演説は、過去のおいがする。

対格が二つあるとき: 直接目的語と述語対格

177. 1. 「作る、選ぶ、呼ぶ、証明する」のような動詞は、二つの対格をとることが多くあります。その片方は影響を受ける人・物の対格で、もう一つは述語対格です。

mē hērēdem fēcit. 彼は僕を相続人にした。

ここで *mē* は直接目的語、*hērēdem* は述語対格です。同様に

eum iudicem cēpēre. 彼らは奴を裁判官だと思った。

urbem Rōmam vocāvit. 彼は (その) 都市をローマと呼んだ。

sē virum praestitit. 彼は男を見せた。

2. 述語対格は名詞だけでなく、形容詞でも構いません。

hominēs caecōs reddit cupiditās. 欲は人をめくらにする。

Apollō Sōcratem sapientissimum iudicāvit. アポッローはソクラテースを最もかしこい人と判断した。

(a) *reddō* のようないくつかの動詞は、述語対格として形容詞のみをとります。

3. 受動態では、直接目的語は主語になりますから、述語対格も述語主格になります。

urbs Rōma vocāta est. その都市はローマと呼ばれた。

(a) 受動態にならない動詞もあります。たとえば *reddō* や *efficiō* は受動態になりません。

対格が二つあるとき: 人と物

178. 1. 動詞が二つの対格をとるとき、片方が影響を受ける人、もう片方がなされた結果の物であることがあります。

(a) 「要求」の動詞:

ōtium dīvōs rogat. 彼は神々に休暇を願った。

mē duās ōrātiōnēs postulās. 君は僕に二つの演説を依頼している。

ōrō, poscō, reposcō, exposcō, flāgitō も同様です。ですが、このうちのいくつかでは、人の対格よりも *ab* と奪格を使うほうが好ましいです。

opem ā tē poscō. 君に力を貸してほしい。

(b) 「教える」の動詞 (*doceō* とその複合動詞):

tē litterās doceō. 僕は君に読み書きを教える。

(c) 「質問」の動詞:

tē haec rogō. 僕は君にこれを訊いている。

tē sententiam rogō. 僕は君に意見を訊いている。

(d) 少数の特殊な動詞: *moneō, admoneō, commoneō, cōgō, accūsō, arguō* など。これらの動詞は、物の対格として中性名詞か形容詞しかとりません。

hōc tē moneō. このように僕は君に助言する。

mē id accūsās. 君はどのように僕をとがめる。

id cōgit nōs nātūra. 自然は僕らにそれを強要する。

(e) *cēlō* 「隠す」:

nōn tē cēlāvī sermōnem 君に話を隠していたわけじゃない。

2. 受動態では、人の対格が主語になり、そして物の対格はそのまま保たれます。

omnēs artēs ēdoctus est. 彼は全ての技術を教えられた。

rogātus sum sententiam. 私は意見を訊かれた。

multa ādmōnēmur. 僕らはたくさんの忠告をもらっている。

(a) 受動態になる動詞は少ないです。

対格が二つあるとき: 複合語

179. 1. *trāns* の複合他動詞は、二つの対格をとることがあります。その場合、一つは動詞によるもの、一つは前置詞によるものです。

militēs flūmen trānsportat. 彼は兵士たちに川を渡らせている。

2. 他の複合語では、この構文はまれです。
3. 受動態では、前置詞による対格はそのまま保たれます。

militēs flūmen trādūcēbantur. 兵士たちは、川を渡らされた。

提喩の対格 (ギリシャ語的対格)

180. 1. 提喩の対格 (ギリシャ語的対格) は、行為や属性が言及する 部分 を表します。

tremīt artūs. 彼は足が震えている。

nūda genū 膝がむきだしだ

manūs revinctus 手が縛られている

2. この構文は
 - (a) ギリシャ語からの借用です。
 - (b) 主に詩に限られます。
 - (c) 通常は、体の部分に言及します。
 - (d) 動詞だけでなく形容詞と一緒に使うこともあります。

時空の対格

181. 1. 時間の期間と空間の距離は、対格で表します。

quadrāgintā annōs vīxit. 彼は四十年生きた。

hic locus passūs sescentōs aberat. この場所は六百パッスス離れていた。

arborēs quīnquāgintā pedēs altae 五十ペースの高さの木々

abhinc septem annōs 七年前

2. 前置詞 **per** を使って強調することがあります。

per biennium labōrāvī 私は二年間ずっと働いた。

動作限定の対格

182. 1. 動作限定の対格は

- (a) 町、小島、半島の名前に使います。

Rōmam vēnī. 私はローマに来た。

Athēnās proficīscitur. 彼はアテーナイへ出かける。

Dēlum pervēnī. 私はデーロスに着いた。

- (b) **domum, domōs, rūs** に使います。

domum revertitur. 彼は家に帰る。

rūs ibō. 私は田舎に行こう。

domus が建物としての家を指すときは、前置詞を使います。

in domum veterem remigrāre 古い家に舞い戻る

2. 上に述べたもの以外の場所を指定するときは、動作限定に前置詞が必要です。

ad Italiam vēnit. 彼はイタリアに来た。

- (a) 町の名前と同格で **urbem** や **oppidum** が使われているときは、前置詞を使うことが慣習です。

Thalam, in oppidum magnum 大きな町、タラへ

Genāvam ad oppidum ゲナーワという町へ

(b) 動作限定を表している町の名前が、前置詞付きの国名などと一緒に使われることがあります。

Thūriōs in Italiam pervectus イタリアのトゥーリーまで運ばれて

cum Acēn ad exercitum vēnisset 彼がアケーの軍隊にやってきたとき

3. ~の方向に、~の近辺に、~の近辺で、というのを表すときは、**ad** を使います。

ad Tarentum vēnī. 私はタレントゥムのあたりにやってきた。

ad Cannās pugna facta est. カンナーイのあたりで戦闘が起きた。

4. 詩においては、場所を表す名詞の対格は、どれでも前置詞なしで動作限定を表せます。

Italiam vēnit. 彼はイタリアにやってきた。

5. 「目標」を表すことが、対格の元々の機能だと思われます。

この原初的傾向の痕跡が、**īnfitiās ire** (否定へ行く = 否定する) という言い方などに認められます。

感嘆の対格

183. 対格は通常、形容詞に修飾されて、感嘆に用いられます。

mē miserum! みじめな私!

Ō fallācem spem! ああ裏切りの希望!

不定詞の主語としての対格

184. 不定詞の主語は対格になります。

videō hominem abīre 人が去っていくのが見える。

対格のその他の用法

185. 1. 元々は同格語:

id genus (その種類の): **hominēs id genus** その種の人々

(元々は **hominēs, id genus hominum**)

virīle secus, muliebre secus (男性の、女性の)

meam vicem, tuam vicem,... (私としては、君としては、...)

bonam partem, magnam partem (大部分は)

maximam partem (ほとんどの部分は)

2. よくわからない起源の対格用法:

id temporis そのとき **quod si** しかもし

id aetātis そのとき **cētera** 他の点で

14.4.4 与格

186. 与格は概して、日本語の「~に、~のために」という関係を表します。

間接目的語の与格

187. 与格の最も一般的な使い方は、何かを与えたり、言ったり、したりを「誰にするか」を表すことです。

1. 対格と関連付けて、他動詞と一緒に:

hanc pecūniam mihi dat. 彼はこの金を僕にくれた。

haec nōbis dixit. 彼は僕らにこう言った。

- (a) この構文をとる動詞のうちのいくつかは、人に対格、物に奪格を使うこともできます。dōnō, circumdō など。

Themistocli mūnera dōnāvit. または

Themistoclem mūneribus dōnāvit. 彼はテミストクレスに贈り物をやった。

urbī mūrōs circumdat. または

urbem mūrīs circumdat. 彼は都市を囲んで壁を建てている。

2. 多くの自動詞とともに

nūllī labōrī cēdit 彼はどんな苦勞にも屈しない。

- (a) この使い方をする自動詞はたくさんあり、「好む」「助ける」「傷つける」「喜ばせる」「不快にさせる」「信じる」「疑う」「命じる」「従う」「かしく」「抵抗する」「耽溺する」「時間を割く」「許す」「うらやむ」「脅す」「怒る」「説得する」などなどの意味を表します^{*2}。

Caesar populāribus favet. カエサルは国民党に目をかけている。

amicis cōfidō. 私は友達に信用を置いている。

Orgetorix Helvētiis persuāsit. オルゲトリクスはヘルペーティア人を丸めこんだ。

bonis nocet quī malis parcit. 悪人を見逃す人は、善人を傷つけている。

注意: これらの動詞が間接目的語をとるのは、自動詞 だからです。同じような意味であっても、対格をとる他動詞も存在します。juvō, laedō, dēlectō など。

audentēs deus juvat. 勇気のある者を神は助ける。

nēmīnem laesit. 彼は誰も傷つけなかった。

- (b) 受動態では、これらの動詞は非人称でしか使われません。

tibi parcitur. あなたは見逃されている。

mihi persuādētur. 私は説得されている。

eī invidētur. 彼はうらやまれている。

- (c) 上述の動詞の中には、与格に関連した直接目的語をとれるものもあります。

mihi mortem minitātur 彼は私を殺すと脅している。

3. 多くの動詞は、前置詞 ad, ante, circum, com^{*3}, in, inter, ob, post, prae, prō, sub, super と複合語を作ります。

これらの動詞は主に二つのグループに分けられます。

- (a) 間接目的語の与格をとれない単純動詞の多くは、前置詞と複合することで与格をとれるようになります。

afflictis succurrit. 彼は苦しむ人を助ける。

exercitū praefuit. 彼は軍隊を指揮した。

intersum cōsiliis. 私は審議に参加する。

- (b) 直接目的語しかとれない他動詞の多くは、複合語になることで、間接目的語の与格をとることができるようになります。

pecūniae pudōrem antepōnit. 彼は恥より金をとる。

inicere spem amicis 友達に希望を与える

mūnitiōnī Labiēnum praefecit. 彼はラビエーヌスを要塞の指揮にした。

^{*2} 英語でもこれらの動詞は元々自動詞で、与格を支配していたことがありました。

^{*3} 前置詞 cum の元々の形です。

参照の与格

188. 1. 参照の与格は、「その発言が誰を参照しているか」「誰にとってそれは正しいのか」「誰がそれに興味があるのか」という、その人を表します。

mihi ante oculōs versāris. 私にとって、君は目の前をうろうろしている。(= 私の目の前で君はうろうろしている)

illī sevērītās amōrem nōn dēminuit. 彼にとって、厳しさは愛を損なわない。

interclūdere inimicīs commeātum 敵にとっての供給を断つ

- (a) **alicui interdīcere aquā et ignī** (ある人に水と火を禁止する = 法外者とする) という表現に注意。

注意: 参照の与格は、間接目的語の与格と違って、動詞ではなく文全体を修飾します。日本語では属格「~の」に当たるような場合もあります (第 1 例・第 3 例)。

2. 参照の与格には特別な変種があります。

- (a) 局所視点の与格: 通常は分詞です。

oppidum primum Thessaliae venientibus ab Ēpirō エーペイロスから来て最初の町、テッサリア

- (b) 心性的与格: 人称代名詞の与格が残りの文にほとんど関係ないような構文です。その与格を心性的与格と呼びます。

tū mihi istīus audāciam dēfendis? お前は、私に (教えてくれ)、そいつの蛮勇を撃退するか?

quid mihi Celsus agit? 我がセルススは何をやってるんだ?

- (c) 判断者の与格:

erit ille mihi semper deus. あいつは、僕にとって、ずっと神みたいなやつだろう。

quae ista servitūs tam clāro hominī! あれほどの傑物にとって、それはどれほどの服従だろう!

- (d) 分離の与格: 「取り去る」動詞、特に **ab, de, ex, ad** の複合語は、人の与格を支配することがあります。また頻度は落ちますが、物の与格のこともあります。

honōrem dētrāxērunt hominī. 彼らはその人から尊厳を奪った。

Caesar rēgī tetrarchiam ēripuit. カエサルは王から四分領主の地位を奪った。

silicī scintillam excūdit. 彼は石から火花を打ち出した。

行為者の与格

189. この与格は、「行為者」を示すために使います。

1. 動形容詞と一緒に使うのが普通です。

haec nōbīs agenda sunt これらは私たちがすべきだ。

mihi eundum est. それは私に行かれるべきだ = 私が行くべきだ。

- (a) あいまいさを避けるために、**ā + 奪格** を動形容詞とともにつかうことがあります。

hostibus ā nōbīs parcendum est. 敵は私たちに見逃されるべきだ。

2. 頻度は大分下がりますが、複合時制の受動態・受動完了分詞とともに用いられます。

disputātiō quae mihi nūper habita est 私が最近催した議論

3. まれに、受動態の単純時制とともに用いられます。

honestā bonīs virīs quaeruntur 高貴さが善い人々に探されている。

所有の与格

190. 所有の与格は、動詞 *esse* とともに、以下のように使われます。

mihi est liber. 私に本がある。

mihi nōmen est Mārcus 私にはマルクスという名前がある。

1. ただし *nōmen est* という表現では、名前は与格に引きつけられることが多いです。

mihi Mārcō nōmen est.

目的・方向の与格

191. 目的・方向の与格は、「行為の先の目的」「行為の向かう方向」を表します。

1. 他の与格を伴わずに使われる場合:

castrīs locum dēligere 陣地にするために場所を選ぶ

legiōnēs praesidiō relinquere 部隊を警護のために置いていく

receptuī canere 撤退のために合図を鳴らす

2. 他の与格を伴う場合。こちらのほうがよく出てきます。

(a) 特に、*esse* の変化形とともに:

fortūnae tuae mihi cūrae sunt. 君の運命が、僕にとって心配の的だ。

quibus sunt odiō. 彼らは誰にとって憎しみの的なのか？

cui bonō? 誰にとっていいことなのか？

(b) その他の動詞とともに:

hōs tibi mūnerī mīsit. 彼は君にこれらを贈り物として贈った。

Pausaniās Atticīs vēnit auxiliō. パウサニアースはアッティケー人たちを助けるために来た。

3. 動形容詞とともに:

decemvirī lēgibus scribundīs 法律を書くための十人委員会

mē gerendō bellō ducem creāvēre 彼らは戦争を行うために私を指揮官にした。

注意: 動形容詞と一緒に使うこの構文は、Livius まではあまり使われませんでした。

与格と形容詞

192. 与格を形容詞とともに使う用法は、与格を動詞とともに使う用法と、とてもよい対応関係にあります。

1. 間接目的語の与格に対応するように、与格は「仲良し」「仲違い」「似ている」「似ていない」「同じ」「近い」「関係がある」などの形容詞と一緒に使われます。

mihi inimīcus 私と敵対している

sunt proximī Germānīs. 彼らはゲルマン人たちの隣にいる。

noxiae poena pār estō. 罰は罪と等しくあれ。

(a) *propior*, *proximus* と対格の用法については §141 を参照。

2. 目的の与格に対応するように、与格は「ふさわしい」「適応して」の形容詞とともに用いられます。

castrīs idōneus locus 陣地にするのにふさわしい地

apta diēs sacrificiō 供犠にふさわしい日

注意: この種の形容詞は、*ad* + 対格 をとることがよくあります。

方向の与格

193. 詩において、与格はしばしば「動きの向き」を表すことがあります。

it clamor caelō. 叫び声は空に向かって行く。

cinerēs rivō fluentī jace 灰を流れている川に向かって撒け。

1. この構文を拡張して、詩人たちは与格を「動作の限定」に用いることがあります。

dum Latiō deōs inferret 彼がラティウムに神々を運んできていた間に

14.4.5 属格

194. 属格は、名詞、形容詞、動詞とともに用いられます。

属格と名詞

195. 名詞とともに使うとき、属格は「修飾される名詞の意味をもっと詳しく定義する」格になります。日本語では「～の」にあたります。名詞とともに使われる属格の種類は以下の通りです。

起源の属格	目的語の属格
物質の属格	全体の属格
所有の属格	同格の属格
主語の属格	性質の属格

196. 起源の属格:

Mārci filius マールクスの息子

197. 物質の属格:

talentum aurī 金 1 タレントウム

acervus frūmentī 穀物の山

198. 所有の属格:

domus Cicerōnis キケローの家

1. *causā* や *grātiā* とともに使われる属格は、この仲間です。属格のほうが必ず前にきます。

hominum causā 人類のために

meōrum amīcōrum grātiā 僕の友達のために

2. 所有の属格は、よく叙述的に使います。特に *esse* や *fieri* と一緒に使うことが多いです。

domus est rēgis. その家は王のものだ。

stultī est in errore manēre. 誤ったままでいることは、馬鹿のすることだ。

dē bellō iudicium imperātōris est, nōn militum. 戦争に関する判断は、将官のものであって、兵士のものではない。

(a) 所有の属格と所有の与格の意味合いの違いについては §359 を参照。

199. 主語の属格: 何かを「なす人」、何かを「感じる人」を表します。

dicta Platōnis プラトンの発言

timōrēs liberōrum 子供たちの(感じている)恐れ

200. 目的語の属格: 行為や感情の「向かう先」を表します。

metus deōrum 神への恐怖

amor libertātis 自由への愛

cōnsuētūdō bonōrum hominum 善人たちとの交流

1. この関係は、しばしば前置詞によって表現されます。

amor ergā parentēs 両親への愛

201. 全体の属格: ある部分を含んでいる「全体」を表します。

1. 名詞、代名詞、比較級、最上級、序数とともに:

magna pars hominum 人類の大部分

duo mīlia peditum 歩兵のうちの二千人

quis mortālium? どの人間だ?

major frātrum 兄弟のうちの大きいほう (=兄)

gēns maxima Germānōrum ゲルマン人の中で最大の部族

prīmus omnium 全てのうちで最初のもの

(a) 全体の属格の代わりに **ex, de** + 奪格 を使う例がよく見つかります。通常、基数や **quīdam** とともにでできます。

fidēlissimus de servīs 奴隷の中で一番信頼のおけるやつ

quīdam ex amicīs 友人たちのなかのある一人

ūnus ex mīlitibus 兵士の一人

(b) 英語では、「全体 - 部分」の関係がなくても *of* でつなぐことができますが、ラテン語はその場合、属格を使いません。

quot vōs estis? 君らは何人いますか? (英語では *How many of you are there?*)

trecentī conjūrāvīmus 私たちは三百人共謀した。 (*Three hundred of us have conspired.*)

2. 名詞的用法の形容詞や、代名詞の中性単数主格・対格とともに。また、副詞 **parum, satis, partim** の名詞的用法とともに。

quid cōnsili どんな意図だ?

tantum cibi それだけたくさんの食べ物

plūs auctōritātis もっとたくさんの権限

minus labōris もっと少ない労力

satis pecūniae 十分なお金

parum industriae 少なすぎる勤勉さ

(a) 第二曲用形容詞の名詞的用法を全体の属格にできます。

nihil bonī 一つのいいこともない

(b) ですが、第三曲用形容詞は修飾する名詞と直接一致させます。

nihil dulcius より甘いものは一つもない

3. 全体の属格が、場所の副詞を修飾することが時々あります。

ubi terrārum? ubi gentium? 世界のなかのどこ?

(a) この使い方を拡張して、**prīdie, postrīdie** を属格が修飾することができます。ただし、**prīdie ejus diēi** (その日の前日) **postrīdie ejus diēi** (その日の次の日) という慣用句だけです。

202. 同格の属格: 属格は時に同格の意味合いを持ちます。

nōmen rēgis 王という名

poena mortis 死という刑

ars scribendī 書くという技術

203. 性質の属格: 形容詞に修飾された属格は、性質を表します。この構文にはいくつかの種類があります。

1. 人や物に内在している性質や、人や物の永続的な性質を表します。

vir magnae virtūtis 徳の高い人

ratiōnēs ejus modī その種の勘定

(a) この構文に現れる形容詞は限られています。主に *magnus, maximus, summus, tantus, ejus* です。

2. 測度 (広さ・長さなど) を表します。

fossa quīndecim pedum 15 ペースの溝

exsilium decem annōrum 10 年の国外追放

3. *tantī, quantī, parvī, magnī, minōris, plūris, minimī, plūrimī, maximī* の属格は、性質の属格と等価です (起源はおそらく違います)。これらは叙述的に使って、「不定の価値」を表します。

nulla studia tantī sunt. どの研究もここまでの (価値) はない。

magnī opera ejus exīstimāta est. 彼の研究の評価は高かった。

4. 「価値」のイメージを拡張することで、*quantī, tantī, plūris, minōris* は「売り買い」の動詞と一緒に使われます。そのときこれらは「不定の価格」を表します。

quantī aedēs ēmistī? 君はどれくらいの価格で家を買ったの？

5. 上に挙げた性質の属格は、どれも叙述的に使えます。

tantae mōlis erat Rōmānam condere gentem ローマ民族を築くのはそれくらい困難だった。

属格と形容詞

204. 属格は多くの形容詞と一緒に用いられて、「その適用範囲」を表します。

1. 「欲望」「知識」「親密」「記憶」「参加」「力」「満杯」の意味の形容詞、もしくはその対義語と一緒に:

studiōsus discendī 学びたい

perītus bellī 戦争に熟達した

insuētus labōris 労働に慣れていない

immemor mandātī tuī あなたの命令を忘れている

plēna periculōrum est vita. 人生は危険でいっぱいだ。

(a) 形容詞的に用いられる分詞が、属格を従えることがあります。

diligēns vēritātis 真実を尊重している

amāns patriae 祖国を愛している

2. 時に *proprius, commūnis* と一緒に:

virī propria est fortitudō. 強さは男の特徴だ。

memoria est commūnis omnium artium. 記憶力はすべての職業に共通だ。

(a) *proprius, commūnis* は与格と一緒に使われます。

3. キケローでは、*similis* と一緒に使うとき、生き物は属格になることが多いです。

filius patris simillimus est. その子は父親にそっくりだ。

meī similis 私と似ている

vestrī similis あなたたちと似ている

物のときは、属格にも与格にもなります。

mors somnō (または **somnī**) **similis est**. 死は眠りに似ている。

4. 詩や後世の散文では、形容詞と一緒に用いる属格の用法が、初期よりも大きく拡張されました。

atrōx animī 気性の荒い

incertus cōnsili 目的の定まらない

属格と動詞

205. 属格は以下の種の動詞と一緒に用いられます。

Memini, Reminiscor, Obliviscor

206. 1. 人を参照して:

- (a) **meminī** は常に人称代名詞、再帰代名詞の属格をとります。

meī meminerīs. 私を忘れないで。

nostrī meminit. 彼は私たちを覚えている。

人を表すそれ以外の単語は、対格になります。属格になることはまれです。

Sullam meminī 私はスッラを覚えている。

vivōrum meminī 私は生ける者たちを覚えている。

- (b) **obliviscor** は普通、属格をとります。

Epicūrī nōn licet oblivisci エピクルスのことを忘れてはいけない。

2. 物を参照して: **meminī, reminiscor, obliviscor** は属格も対格もとります。意味の違いはありません。

animus praeteritōrum meminit. 心は過去を覚えている。

meministīne nōmina? 君は名前を覚えていますか？

reminiscere veteris incommodī 以前の災厄を思い出す

reminiscēns acerbitātem 苦しみを思い出している

- (a) ですが、中性名詞や名詞的用法の形容詞は、普通対格になります。

haec meminī 私はこれを覚えている。

multa reminiscor 私はたくさんの事柄を思い出す。

3. 慣用句 **mihi (tibi,...) in mentem venit** は、**meminī** からの類推で、属格をとります。

mihi patriae veniēbat in mentem 私は故郷を思い出した。

Admoneō, Commoneō, Commonefaciō

207. これらの動詞は、人の対格とともに物の属格をとることがあります。

tē veteris amicitiae commonefaciō. 私はあなたに昔の友情を思い出させる。

1. ですがこれらの動詞は、**dē + 奪格** を使うことが多いです (キケロではほぼこれしか出てきません)。

mē admonēs dē sorōre あなたは私に悲しみを思い出させる。

2. 中性代名詞・名詞的用法の形容詞は普通対格になります (§178,1,d)。

tē hōc admoneō わたしはあなたにこれを忠告する。

訴訟の動詞

208. 1. 「訴える」「判決を出す」「釈放する」動詞は、「罪」を属格でとります。

mē furti accusat. 彼は私を窃盗の罪で告訴する。

Verrem avāritiae coarguit. 彼はウェッレスを貪欲の罪で有罪にした。

impietātis absolūtus est. 彼は反逆罪を無罪になった。

2. 「刑を宣告する」動詞は

(a) 「罪」を属格でとります。

pecūniae pūblicaē condemnātus 公金 (の使い込み) で罰される

capitis damnātus 人頭税 (の不正) で罰される

(b) 「罰」を奪格でとります。

capite damnātus est. 彼は頭の罰 (=死刑) を宣告された。

mille nummīs damnātus est. 彼は 1000 セステルティウスの罰金刑を受けた。

3. 以下の慣用句に注意:

vōtī damnātus, vōtī reus 誓約で罰を受けた = 誓約を達成した

dē vī 暴行で (訴えられる、有罪になる、...)

inter sicāriōs 殺人で (訴えられる、有罪になる、...)

属格と非人称動詞

209. 1. 非人称動詞 **puget, paenitet, miseret, taedet, piget** は「影響を受ける人」の対格と、「感情が向かう先の人・物」の属格をとります。

puget mē tuī. 僕は君が恥ずかしい。

paenitet mē hūjus factī. 私はこの行動を後悔している。

eum taedet vītae. 彼は生きるのを嫌悪している。

pauperum tē miseret. 君は貧乏を嘆いている。

(a) 物の属格の代わりに、不定詞や中性代名詞が動詞の主語として使われることがあります。

mē paenitet hōc fēcisse. 私はこれをやったことを後悔している。

mē hōc puget. 私はこれが恥ずかしい。

2. **misereor** と **miserēscō** も属格をとります。

miserēminī sociōrum. 君らは仲間を嘆いている。

Interest, Rēfert

210. **interest** (関係がある) は、以下の 3 点を考慮しないとけません。

1. 「関係を持っている人」
2. そのひとが「何について関係しているか」
3. 「関係の度合」

211. 1. 「関係を持っている人」は普通属格です。

patris interest. 父に關係する。

(a) ですが、人称代名詞の属格 **meī, tuī, nostrī, vestrī** は使わず、その代わりに所有代名詞の女性単数奪格 (**meā, tuā,...**) を使います。

meā interest. 私に關係する。

2. 「何について関係しているか」は

(a) 中性代名詞を主語にして表します。

hōc rei pūblicaē interest これは国家に関係する。

(b) 不定詞で表します。

omnium interest valēre 健康でいることはすべての人に関係する。

(c) 間接疑問で表します。

meā interest quandō veniās 君がいつ来るかが私には重要だ。

3. 「関係の度合」は

(a) **magnī, parvī** などの属格で表します。(§203,3)

meā magnī interest. 私に大いに関係する。

(b) **magnope, magis, maximē** などの副詞で表します。

cīvium minimē interest. 市民にはほとんど関係しない。

(c) **multum, plūs, minus** などの中性形容詞で表します。

multum vestrā interest. 君らに大いに関係する。

4. **rēfert** は **interest** と同じですが、人の属格をとることがまれです。

meā rēfert 私に関係する。

(**illius rēfert** は稀)

属格とほかの動詞

212. 1. 「充分」「不足」を表す動詞が属格を支配することが時々あります。

pecūniae indigēs 君は金がない。

(a) ですが、これらの動詞は奪格 (§214-1) をとることのほうが多いです。属格を好むのは **indigeō** だけです。

2. **potior** は奪格を従えることが普通ですが、時々属格をとります。サルスティウスではほとんど属格です。通常、**potiri rērum** (世界をわがものにする) という慣用句で登場します。

3. 詩においては、ギリシャ語をまねていくつかの動詞が属格をとります。

dēsine querellārum 不満をやめる

operum solūtī 仕事から解放された

14.4.6 奪格

213. ラテン語の奪格は、以下の三つの格が一緒になったものです。これらは元々は形態も意味も区別されていました。

- 奪格「起点の格」
- 具格「道具の格」
- 処格「場所の格」

ですからラテン語の奪格の使用法は、本来の奪格のもの、具格のものと、処格のものに分かれます。

本来の奪格としての奪格

分離の奪格

214. 分離の奪格は、前置詞を伴うことも伴わないこともあります。

1. 以下の単語は普通、前置詞を伴わずに奪格をとります。

- (a) 「解放する」動詞: *liberō, solvō, levō*
 (b) 「奪う」動詞: *privō, spoliō, exuō, fraudō, nūdō*
 (c) 「欠乏」の動詞: *egeō, careō, vacō*
 (d) 上記に相当する形容詞や似た意味の形容詞: *liber, inānis, vacuus, nūdus*

cūrīs liberātus 介護から解放された

Caesar hostēs armīs exuit. カエサルは敵から腕を切り落とした。

caret sēnsū commūnī. 彼は常識を欠いている。

auxiliō eget. 彼は助けを必要としている。

bonōrum vīta vacua est metū. 善人の人生は不安がない。

注意 1: ですが、形容詞と *liberō* は *ab* を使っても構いません。人の奪格では、普通 *ab* を伴います。

urbem ā tyrannō liberārunt 彼らは都市を暴君から解放した。

注意 2: *indigeō* は普通属格をとります (§212,1,a)。

2. 「遠ざける」「取り除く」「撤退する」を意味する動詞は、*ab* を伴うものも、伴わないものもあります。伴っても伴わなくてもいい動詞もあります。

abstinēre cibō 食べ物に近づけない

hostēs finibus prohibuērunt. 彼らは国境から敵を遠ざけた。

praedōnēs ab insulā prohibuit. 彼は海賊を島から遠ざけた。

3. 他の分離の動詞は、*ab* + 奪格をとるのが普通です。特に *dis-*, *sē-* の複合語はそうです。

dissentiō ā tē 僕は君と意見が違う。

sēcernantur ā nobīs 彼らを僕らから離れさせよ。

4. 詩では *ab* は自由に取り去られます。

出所の奪格

215. 出所の奪格は、分詞 *nātus, ortus* (詩では *ēditus, satus* など) と一緒に使われて、「家系」「身分」を表します。

Jove nātus ヌーピテルの子

summō locō nātus 高い身分の生まれ

nōbilī genere ortus 高貴な一族の生まれ

1. 代名詞は普通 *ex* を伴います。

ex mē nātus 私の子供

2. 遠めの子孫であることを表すには、*ortus ab, oriundus (ab)* を使います。

ab Ulixē oriundus ウリクセスの子孫

行為者の奪格

216. *ab* + 奪格は、受動態の動詞と一緒に使われて、「行為者」を表します。

ā Caesare accūsātus est. 彼はカエサルに訴えられた。

1. 人に言及する集合名詞・人格化した抽象名詞は、行為者として使えます。

hostēs a fortunā dēserēbantur. 敵は運命に見放された。

ā multitudīne hostiū montēs tenēbantur. 敵の大群に山々が掌握されていた。

2. 動物の名前が同じ構文を許されることがあります。

ā canibus laniātus est 彼は犬に八つ裂きにされた。

比較の奪格

217. 1. 奪格は比較級と一緒に用いられて、しばしば「～よりも」の意味を表します。

melle dulcior 蜂蜜より甘い

patria mihi vitā cārīor est. 祖国は私にとって命より大切だ。

2. この構文は、**quam**(～よりも)+ 主格・対格の代わりにしか使えません。他の格では、**quam** を使わなければいけません。

tūī studiōsior sum quam illius 僕はあの子より君が好きだ。「君を好きな気持ちは、あの子を好きな気持ちより大きい」

―― **studiōsior illō** と言うと「僕が君を好きな気持ちは、あの子が君を好きな気持ちより大きい」の意味。

plūs quam, minus quam, amplius quam, longius quam の代わりに **plūs, minus, amplius, longius** が使われることが多いです。

amplius vīgintī urbēs incenduntur. 二十以上の都市が放火される。

minus quīnque mīlia prōcessit. 彼は5マイルも進まなかった。

3. **opiniōne** + 比較級に注意。

opiniōne celerius venit 彼は予想より早く来る。

具格としての奪格

手段の奪格

218. 奪格は「手段」「道具」を表すのに使われます。

Alexander sagittā vulnerātus est. アレクサンデルは矢で傷を負った。

手段の奪格には以下の特別な変種があります。

1. **ūtor, fruor, fungor, potior, vescor** とその複合語は奪格をとります。

divitiīs ūtitur 彼は財を使う。(彼は財で自分を潤す)

vitā fruitur 彼は人生を楽しむ。(彼は人生で自分を楽しませる)

mūnere fungor 私は義務を行う。(私は義務で自分を忙しくする)

carne vescuntur 彼らは肉を食う。(彼らは肉で自分を養う)

castrīs potītus est 彼は陣地を獲得した。(彼は陣地で自分を強くした)

(a) **potior** は属格をとることもあります。(§212,2)

2. **opus est** (まれに **ūsus est**) 「必要がある」とともに:

duce nōbīs opus est. 私たちに指導者が必要だ。

(a) 中性代名詞や形容詞は、しばしば述語 **opus** の主語として立ちます。

hōc mihi opus est. これは私に必要だ。

(b) 普通の名詞が主語に立つことはめったにありません。

(まれ: **dux nōbīs opus est.**)

(c) **opus est** とともに受動完了分詞を使うことがよくあります。

opus est properātō. 急がされることが必要だ (=急ぐ必要がある)。

3. **nītor, innixus, frētus** とともに:

nītitur hastā. 彼は槍に寄りかかっている。(彼は槍に支えられている)

frētus virtūte 美德を信頼する。(美德に支えられている)

4. **continērī, cōnsistere, cōnstāre** 「～で構成される」とともに:

nervīs et ossibus continentur. 彼らは筋肉と骨でできている。

mortālī cōnsistit corpore mundus 必滅の物質で世界はできている。

5. (欠落)

6. 次のような表現で:

quid hōc homine faciās? 君はこの人をどうするつもりかね?

quid meā Tulliolā fiet? 私のトゥッリオラはどうなるのだろう?

7. 以下の特別な慣用句で:

proeliō contendere, vincere 戦争で争う、戦争に勝利する

proeliō lacessere 戦争を誘発する

currū vehī 荷車に乗って

pedibus ire 徒歩で行く

castrīs sē tenēre 陣営に留まる

8. 「満たす」動詞、「たくさんある」形容詞とともに:

fossās virgultīs complērunt 彼らは溝を薪で埋めた。

(a) ただし **plēnus** は、属格をとることが普通です。 (§204,1)

9. 「手段」には「通り道の奪格」も含まれます。

vīnum Tiberī dēvectum チベリス川を下って運ばれたワイン

10. 手段は、物でなくて人であっても構いません。

mīlitibus ā lacū Lemannō ad montem Jūram mūrūm perdūcit. 彼は軍隊を使って、レマン湖からユーラ山まで壁を張り巡らせた。

原因の奪格

219. 奪格は原因を表すために使われます。

multa glōriae cupiditate fēcit. 彼はたくさんのことを名誉欲から行った。

1. 特に、心の状態を表す動詞 **dēlector, gāudeō, laetor, glōrior, fidō, cōnfido** や、**contentus** と一緒に使います。

fortūnā amīci gaudeō. 私は友の幸運を喜んでいる。

victōriā suā glōriantur. 彼らは自身の勝利を鼻にかけている。

nātūrā loci cōnfidēbant. 彼らは地域の性質を信じていた。

(a) **fidō, cōnfido** は、人の場合は必ず与格にします。 (§187,2,a) 物の場合でも時折与格になります。

2. **jussū**(命令によって)、**injussū**(無断で)、**rogātū** 等も、原因の奪格の一種です。

態度の奪格

220. **cum** + 奪格で、態度を表します。

cum gravitate loquitur. 彼は重々しく話す。

1. 奪格が形容詞に修飾される場合、**cum** はなくても構いません。

magnā gravitate loquitur. 彼はすごく重々しく話す。

2. 以下の表現には、通常 **cum** を使いません: **jūre, injūriā, jocō, vī, fraude, voluntate, fūrtō, silentiō.**

3. 「~に則って」というのも態度の奪格です。普通 **cum** を使いません。

meā sententiā 私の考えに従って

suīs mōribus 自分の習慣に従って

suā sponte 自発的に

eā condiōne その契約に従って

付帯状況の奪格

221. 奪格は、しばしば行為や出来事の「付帯状況」を表します。

bonīs auspiciīs 良い指揮のもとで

nūlla est altercātiō clāmōribus umquam habita majōribus. 今までこれ以上の歓呼のもとで行われた議論はない。

extinguitur ingentī lūctū prōvinciae. 彼は属州民に大きく悲しまれながら死ぬ。

longō intervāllō sequitur. 彼は長い間隔を置いて、後を追う。

随伴の奪格

222. **cum** + 奪格は移動の動詞と一緒に使って「随伴」を表します。

cum comitibus profectus est. 彼は仲間たちと一緒に出発した。

cum febrī domum rediit. 熱を出して彼は家に帰った。

1. 軍事の表現においては、奪格が数字以外の形容詞に修飾されるとき **cum** はなくても構いません。

omnibus cōpiīs, ingentī exercitū, magnā manū

(奪格だけのとき: **cum exercitū**, 修飾語が数字のとき: **cum duābus legiōnibus**)

結合の奪格

222A. 奪格はしばしば「つなぐ」「混ぜる」「くつつく」「交換する」動詞や **assuēscō**, **cōnsuēscō**, **assuēfaciō** などと一緒に用いて「結合」を表します。

improbītās scelere jūncta 犯罪と結びついた悪

āer calōre admixtus 熱と混じった空気

assuētus labōre 労働に慣れた

pācem bellō permūtant. 彼らは平和を戦争と取り換える。

差異の度合の奪格

223. 奪格は、比較級や比較を含む単語 (**post**, **ante**, **īnfrā**, **suprā**) と一緒に用いて、「差異の度合」を表します。

dimidiō minor 半分だけ小さい

tribus pedibus altior 3 ペースだけ高い

paulō post 少しあとで

quō plurā habēmus, eō cupimus ampliōra. 僕らはたくさんのもを持つほど、それだけたくさん欲しくなる。

性質の奪格

224. 奪格は形容詞に修飾されて、「性質」を表します。

puella eximiā fōrmā とびきり美しい少女

vir singulārī industriā 特別に勤勉な男

1. 性質の奪格は、叙述的に用いて構いません。

est magnā prūdentiā. 彼はすごく賢明だ。

bonō animā sunt. 彼らはいい度胸をもっている。

2. 形容詞の代わりに、属格に修飾される例が時折見つかります。

sunt speciē et colōre taurī. 彼らは牛の姿と色をしている。

3. 詩においては、性質の奪格が「物質」を表すことがあります。

scopulis pendentibus antrum 岩の垂れ下がった洞窟

価格の奪格

225. 「売る」「買う」動詞は、価格を奪格で表します。

servum quīnque minīs ēmit. 彼は奴隷を 5 ミナで買った。

1. 奪格 **magnō, plūrimō, parvō, minimō** (× **pretiō** を除く) は、「不定の価格」を表します。

aedēs magnō vēdidit 彼は家を高く売った。

2. 不定の価格の属格については §203,4 を参照。

指定の奪格

226. 指定の奪格は、「～に関して」という意味を表します。

Helvētīi omnibus Gallīs virtūte praestābant. ヘルベティア人はすべてのガッリア人より勇敢さの点で勝っていた。

pede claudus 足に不自由のある

1. 次の表現に注意

major nātū 年上の (=歳に関して大きい)

minor nātū 年下の

2. **dignus**(+ 奪格「～に値する」)、**indignus**(+ 奪格「～に値しない」)、**dignor**(+ 奪格「～にふさわしいと判断する」) も指定の奪格です。

dignī honōre 荣誉に値する

fidē indignī 信用に値しない

mē dignor honōre 私は自分が荣誉に値すると思う。

絶対奪格

227. 絶対奪格は英語の独立分詞構文に当たり、文の残りの部分と文法的に独立しています。名詞・代名詞を分詞で修飾したものが、絶対奪格のもっともよく使われる形です。

urbe captā, Aenēās fūgit 都市が陥落して、アエネアースは逃げ出した。

1. 分詞の代わりに形容詞や名詞が現れることがあります。

vivō Caesare rēs pūblica salva erat. カエサルが生きている限り、国は安全だった。

Tarquiniō rēge, Pythagorās in Italiam vēnit. タルクイニウスが王のとき、ピュタゴラスはイタリアにやってきた。

Cn. Pompejō, M. Crassō cōsulibus グナエウス・ポンペイユスとマルクス・クラッススが執政官だったとき

2. 英語で従属節を使うような場面でも、ラテン語では絶対奪格が広く用いられます。たとえば:

(a) 時期(上の例を参照)

(b) 条件

omnēs virtūtēs jacent, voluptāte dominante. 快樂が支配的になれば、すべての美德は引っ込む。

(c) 逆接

perditis omnibus rēbus, virtūs sē sustentāre potest. すべてが失われたが、美德は自身を維持できる。

(d) 原因

nūllō adversante rēgnū obtinuit. 誰も反対しなかったので、彼は王であり続けた。

(e) 付帯状況

passīs palmīs pācem petivērunt. 両手を広げて、彼らは和平を訴えた。

3. 不定詞や節が絶対奪格構文に現れることも時々あります。(特に Livius 以降)

auditō eum fūgisse 奴が逃げたという話が届いたとき

4. 名詞・代名詞が絶対奪格構文に立つのは、絶対奪格の現れる節の中のどの人・物ともその人・物が一致しないときに限ります。この原理の例外は非常に少ないです。

処格としての奪格

場所の奪格

A. どこで

228. どこで、は普通「前置詞 + 奪格」で表します。

in urbe habitat. 彼は都市に住んでいる。

1. しかし、以下の語は前置詞なしの奪格になります。

(a) 町の名前(第一・第二変化の単数形を除く (cf. §232,1))

Carthāginī カルターゴーにて

Athēnis アテーナイにて

Vejīs ウェイーにて

(b) 一般名詞 **locō, locis, parte**。また、**tōtus** やその他の形容詞に修飾された名詞。

hōc locō この場所で

tōtis castrīs 陣地全体で

(c) 次の特別な名詞: **foris**(ドアの外で)、**rūrī**(田舎で)、**terrā marique**(陸と海で)

(d) 詩では、場所を表す語はどれも前置詞なしで自由に使われます。

stant litore puppēs. 海辺に船が停留している。

B. どこから ^{*4}

229. どこから、は普通「前置詞 + 奪格」で表します。

ab Italiā profectus est. 彼はイタリアから出発した。

ex urbe rediit. 彼は都市から戻った。

1. ですが、以下の語は前置詞なしの奪格になります。

(a) 町の名前、小島の名前。

Rōmā profectus est. 彼はローマから出発した。

Rhodō revertit. 彼はロドス島から引き返した。

(b) **domō**(家から)、**rūre**(田舎から)

(c) 詩では自由です。

Italiā dēcessit 彼はイタリアから撤退した。

2. 町の名前に **ab** が用いられたときは、「~の近辺から」の意味になります。また、「距離を測る始点」のときも町の名前に **ab** を冠します。

^{*4} 「どこから」は厳密には本来の奪格の用法ですが、便宜上ここで扱います。

ā Gergoviā discessit. 彼はゲルゴウィアの近辺から撤退した。
ā Rōmā X mīlia aberat. 彼はローマから 10 マイル離れていた。

urbe, oppidō が町の名前と同格で現れるときは、前置詞を伴います。

Curibus ex oppidō Sabīnōrum サビーニーの町、クレスから

時の奪格

A. いつ

230. 奪格は、「いつ」を表すのに使われます。

quārtā hōrā mortuus est. 彼は 4 刻に死んだ。
annō septuāgēsīmō cōsul creatus 70 歳で選ばれた執政官

1. 期間を表す単語なら、どの語でもこの構文にできます。特に **annus, vēr, aestās, hiems, diēs, nox, hōra, comitia**(民会), **lūdī**(催し) など。
2. 時ではない単語は、修飾語を伴わない場合 **in** が必要です。
in pāce(平和時に)、**in bellō**(戦争時に)
secundō bellō Pūnicō 第二次ポエニ戦争で
3. **in eō tempore, in summā senectūte** のような表現では **in** を伴います。これらは、「時」よりは「状況」を表しているからです。

B. どのくらい

231. 「どれくらいの時間で」を表すのに、奪格を使います。前置詞を伴うことも、伴わないこともあります。

stella Sātūrnī trīgintā annis cursum cōnficit. 土星は 30 年で軌道を一周する。
ter in annō 一年で三倍

1. 奪格が「どのくらいの期間続くか」を表すこともよくあります。
bienniō prōsperās rēs habuit. 二年間彼は順境だった。

処格

232. 主に以下の単語で、処格が現れます。

1. 普通、第一・第二変化単数形の町・小島の名前が、「どこで」を表すとき:
Rōmae ローマで
Corinthī コリントスで
Rhodī ロドス島で
2. 次の特別な形で:
domī 家で
humī 地面に
bellī 戦争中に
militiae 戦争中に
vesperī 晩に
herī 昨日
3. **pendēre animī** 「心に引っかかる」という慣用句に注意。
4. 処格と同格に現れる **urbs, oppidum** については、§169,4 を参照。

第 15 章

形容詞の構文

233. 1. 形容詞が一致する単語を「主語」といいます。
 2. 限定的形容詞と叙述的形容詞: 限定的形容詞とは、その主語を直接修飾する形容詞です。
vir sapiēns 賢い人
 叙述的形容詞とは、その主語を動詞 (普通 *esse*) を介して修飾する形容詞です。
vir est sapiēns. その人は賢い。
vir vidēbātur sapiēns. その人は賢そうだった。
vir iudicātus est sapiēns. その人は賢いと判断された。
hunc virum sapientem iudicāvimus. 私たちはこの人を賢いと判断した。
 3. 分詞・形容詞的代名詞は、形容詞と同じ構文になります。

15.1 形容詞の一致

234. 一つの名詞との一致: 形容詞が一つの名詞を修飾するときは、その形容詞は名詞と「性」「数」「格」が一致します。
1. 単数形の二つの形容詞が、複数形の一つの名詞を修飾することができます。
prima et vicesima legiōnēs 第一・第二十隊
 2. 主語が男性・女性名詞であっても物を表しているときは、叙述的形容詞が中性で立つことができます。
omnium rērum mors est extrēmum. 死は万物の終わりだ。
235. 二つ以上の名詞との一致:
- A. 数の一致
 1. 形容詞が限定的であれば、その形容詞の「数」は普通一番近くの名詞に一致します。
pater tuus et māter 君の父と母
eadem alacritās et studium 同じ熱意と意気込み
 2. 形容詞が叙述的であれば、その形容詞は普通複数形になります。
pāx et concordia sunt pulchrae. 平和と友好は立派だ。
 - B. 性の一致
 1. 形容詞が限定的であれば、その形容詞の「性」は普通一番近くの名詞に一致します。
rēs operae multae ac labōris たくさんの努力と労力の事柄
 2. 形容詞が叙述的なときは:
 - (a) 名詞が全部同じ性ならば、形容詞はそれらの性に一致します。

pater et filius capti sunt. 父と子は捕まった。

ですが、女性抽象名詞のときは、形容詞は中性にすることのほうが多いです。

stultitia et timiditas fugienda sunt. 愚かさや臆病さは、追い出さねばならない。

(b) 名詞同士の性が違うときは:

(α) 名詞が人を表す場合、形容詞は男性です。

pater et mater mortui sunt. 父と母は死んだ。

(β) 名詞が物を表す場合、形容詞は中性です。

honores et victoriae fortuita sunt. 名誉と勝利は偶然のものだ。

(γ) 名詞が人も物も含んでいる場合は:

形容詞は男性だったり

domus, uxor, liberi inventi sunt. 家と妻と子供たちを手に入れた。

中性だったり

parentes, liberos, domos vilia habere 親と子と家を安っぽく扱う
もしくは一番近い名詞の性と一致します。

populi provinciaeque liberatae sunt. 国民と属州民は解放された。

(c) 意味に従った構文: 形容詞を厳密な文法形で名詞と一致させるのではなく、意味によって形を決めることが時々あります。

pars bestias objecti sunt. 一部(の人間たち)が獣の前に投げ出された。

15.2 形容詞の名詞的用法

236. 1. 名詞的用法の複数形容詞: 形容詞は複数名詞的にとても自由に使われます。男性なら人、中性なら物を表します。

docti 学者たち	parva 小さな物
 mali 悪者たち	 magna 大きな物
 Graeci ギリシャ人たち	 utilia 役に立つ物
 nostri 僕らの仲間	

2. この用法の中性複数形容詞は、主に主格と対格に限られます。**magnorum, omnium** や **magnis, omnibus** のような形は、普通はあいまいさを生みます。ですが、あいまいさがないところでは、これらの形が現れることも時々あります。

parvis componere magna 大きな物を小さな物と比べる

それ以外の場合では、**magnarum rerum, magnis rebus** などと言います。

237. 名詞的用法の単数形容詞: 形容詞が単数名詞的に使われるのは、複数の場合よりも限られます。

1. 単数の男性形容詞は、しばしば次のような使い方をされるだけです。

probus invidet nemini. 高潔な人は誰も羨まない。

(a) 普通は **vir, homo** やその他の似た単語を伴います。

homo doctus 学者

vir Romanus ローマ人

(b) ですが、代名詞に修飾される場合は、どの形容詞もこの使い方ができます。

hic doctus この学者

doctus quidam ある学者

2. 単数の中性形容詞も同じく頻繁には使われません。

vērūm 真実

jūstūm 公正

honestūm 誠実

- (a) この名詞的用法の中性単数形容詞は、「全体の属格」構文で、もしくは前置詞の後で使われることが最も一般的です。

aliquid vēri 何らかの真実

nihil novī 新しいことは何もない

in mediō 真ん中で

238. 形容詞が完全に名詞になっているものがあります。これらは上述のような、名詞的用法がしばしば許されるだけの形容詞とは注意して区別しなくてはなりません。

adversārius 敵 **hiberna** 冬営

aequālis 同年代の人 **propinquus** 親類

amicus 友 **socius** 仲間

cognātus 親族 **sodālis** 同志

vīcinus 隣人

15.3 副詞的な意味をもつ形容詞

239. ラテン語で形容詞になっているものを日本語に訳すと、副詞(句)のようになることもあります。

senātus frequēns convēnit. 元老院が大勢集まった。

fuit assiduus mēcum. 彼は私と絶えず一緒にいた。

15.4 比較級・最上級

240. 1. 比較級は、「いくぶん」「多少」「あまりにも」の意味になることがよくあります。

senectūs est loquācior. 加齢はずいぶん饒舌だ。

2. 最上級も同様に、「非常に」の意味になることが結構あります。

vir fortissimus とても強い男

3. 強調不変化詞: **vel, quam** は強調不変化詞として最上級とともに用いられることがあります。そのとき **vel** は「明らかに」、**quam** は「できる限り」の意味になります。

vel maximus 文句なく最大の

quam maximae cōpiae できるだけ大きな軍勢

4. 「～というよりはむしろ…」というときは、普通どちらも比較級にします。

exercitus erat ditior quam fortior. その軍隊は勇敢だったというよりは、金持ちだった(というほうが適切だ)。

15.5 そのほかの留意点

241. 1. ある種の形容詞は、「物の一部分」を表すのに使うことができます。主要なものは **primus, extrēmus, summus, medius, infimus, imus** です。

summus mōns 山の頂点

extrēmā hieme 晩冬

2. **prior, prīmus, ultimus, postrēmus** はしばしば関係詞節と同等の意味になります。
prīmus eam vīdi. 彼女を見た人の中で、私は一番初めだった。
ultimus dēcessit. 撤退した人の中で、彼は一番最後だった。
3. **multus** と別の形容詞が同時に同じ名詞を修飾するときは、一般に **et** を使います。
multae et magnae cōgitatiōnēs たくさんの偉大な思考

第 16 章

代名詞の構文

16.1 人称代名詞

242. 1. 動詞の主語として人称代名詞を使うのは、一般に「強調」「対照」「あいまいさの回避」の目的があるときだけです。通常は表示しません。たとえば、普通は

videō. 私は見る。

amat. 彼は愛する。

と言いますが

ego tē videō, et tū mē vidēs. 僕は君を見て、君は僕を見る。

となります。

2. 属格 **meī, tuī, nostrī, vestrī** は「目的語の属格」としてのみ使われます。**nostrum, vestrum** は「全体の属格」としてのみ使われます。

memor tuī 君を心に留めて

dēsiderium vestrī あなたたちに会いたい気持ち

nēmō vestrum あなたたちの中で一人も...ない

(a) ただし **nostrum, vestrum** は次の句で、通常、所有代名詞の代わりに使われます: **omnium nostrum, omnium vestrum**

3. 一人称単数代名詞・動詞の代わりに一人称複数が用いられることも多いです。英語の「編集者の we」のような感じです。

4. 二つの動詞が同じ目的語を支配するとき、ラテン語では二つ目を示しません(代名詞にして示すこともしません)。

virtūs amicitās conciliat et cōservat. 美德は友情をもたらし、(それを)維持する。

(× **eās cōservat** とは言わない)

16.2 所有代名詞

243. 1. 所有代名詞が使われるのは、あいまいさを避けるときだけです。通常は表示しません。

patrem amō. 私は(私の)父を愛している。

dē filiī morte flēbās. 君は(君の)息子の死に涙していた。

一方で:

dē morte filiī meī flēbās. 君は私の息子の死に涙していた。

(a) あいまいさ回避だけのときは、所有代名詞は名詞の後ろに置くのが普通です。しかし、強調や対照のときは名詞の前に置きます。

suā manū liberōs occidit. 彼は自分の手で子供たちを殺した。

meā quidem sententiā 少なくとも私の考えでは

2. 所有代名詞は、時に「目的語の属格」の意味で使われることもあります。

metus vester あなた方への恐怖

dēsiderium tuum あなたに会いたい気持ち

3. 所有代名詞は属格的な意味を持っていますから、特に強調するときは属格 **ipsīus, ipsōrum** を同格に用います。

meā ipsīus operā 私自身の力で

nostrā ipsōrum operā 私たち自身の力で

- (a) 他の属格が同格に用いられることもあります。

meā ūnīus operā 私ひとりの力で

16.3 再帰代名詞

244. 1. 再帰代名詞 **sē** と所有再帰代名詞 **suus** には二種類の使い方があります。

- I. それが使われている節(主節・従属節)の主語を指します。これを直接再帰と言います。

sē amant 彼らは自分を愛している。

suōs amīcōs adjuvat 彼は自分の友達を助ける。

eum ōrāvī, ut sē servāret. 僕は彼に、自愛するよう願った。

- II. 従属節の中で使われて、主節の主語を指します。これを間接再帰と言います。

mē ōrāvīt ut sē dēfenderem. 彼は自分を(=彼を)守ってくれと私に懇願した。

mē ōrāvērunt, ut fortūnārum suārum dēfēnsiōnem susciperem. 彼らは自分の(=彼らの)財産の防護を引き受けてくれと私に懇願した。

- i. 間接再帰は、主節の主語の考えを(書き手の考えではなく)言い表す節での使用にほぼ限られます。

2. 属格 **suī** は **meī, tuī** と同様、普通は「目的語の属格」にのみ使われます。**oblītus suī**(彼を忘れた)のようになります。しかし特に Augustus 以降、所有代名詞 **suus** の代わりにもしばしば使われるようになりました。

fruitur fāmā suī 彼は自分の評判を楽しんでいる。

3. **sē, suus** は誰か特定の人を指すのではなく、単に「自分」「自分の」の意味でつかわれることが時々あります。

sē amāre 自分を愛すること

suum genium propitiāre 自分の守護霊を鎮めること

4. **suus** は時々主語ではなく斜格を指して、「彼(ら)自身の」等を意味することがあります。

Hannibalem suī cīvēs ē civitāte ējēcērunt. ハンニバルを、彼(=ハンニバル)自身の市民が、市から追いやった。

- (a) この使い方は、特に **quisque** と一緒に出ることが多いです。

suus quemque error vexat. 自分(=個々)自身の間違いが、個々を苦しめる。

5. 第一・第二人称の再帰代名詞には、**ego, tū** の斜格を使います。(§85)

vōs dēfenditis あなた方は自分を守る。

16.4 相互代名詞

245. 1. ラテン語には、相互代名詞「互い」に当たる特別な語はありません。「互いに」を表すには **inter nōs, inter vōs, inter sē** で表現します。

Belgae obsidēs inter sē dedērunt. ベルガイ人たちは、人質を互いに差し出しあった。

amāmus inter nōs. 僕らは互いに愛し合っている。

Galli inter sē cohortātī sunt. ガリア人たちは互いに励ましあった。

(a) この種の文には、目的語が現れないことに注意してください。

16.5 指示代名詞

16.5.1 hīc, ille, iste

246. 1. **hīc** と **ille** を対比的に用いたときは、**hīc** は普通二つのもののうちの後者、**ille** は前者を指します。

2. **hīc** と **ille** は「これから述べるもの」の意味で使うことがよくあります。

Themistoclēs hīs verbīs epistulam mīsit. テミトクレースは、次のような言葉で(書かれた)手紙を送った。

illud intellegō, omnium ōra in mē conversa esse. 私はそれを理解する。皆の顔が私に向けられたのを。

3. **ille** はしばしば「かの有名な」という意味になります。

Solōn ille かのソロン

4. **iste** は不満を含ませて使うことがよくあります。

iste homō! あの野郎!

5. **hīc, ille, iste** と **is** は、述語名詞と性を一致させるのが普通です。

hīc est honor, meminisse officium suum. これが徳だ。自分の義務を忘れないことが、だ。

16.5.2 is

247. 1. **is** はしばしば関係詞 **quī** の先行詞になります。

Maximum, eum quī Tarentum recēpit, dilēxi. マクシムス、タレントゥムを取り返した男、を私は愛した。

(a) **is** を「それくらい」(= **tālis**)の意味で使う用法は、これと近い関係にあります。

nōn sum is quī terrear. 私は恐れられるような人ではない。

(b) **id quod** (**id** はある節全体と同格)という言い方に注意してください。

nōn suspicābātur (id quod nunc sentiet) satis multōs testēs nōbīs reliquōs esse. 私たちに十分な数の証人が残っているとは(もうすぐ気づくだろうことだが)彼は思わなかった。

id を使わず、**quod** のみでこの使われ方をすることがあります。

2. **is** は全ての格で第三人称の人称代名詞「彼(女)」「彼(女)ら」にも使われます。

3. 英語で同じ名詞の反復を避けて *that of...*, *those of...* という箇所は、ラテン語では代名詞を表示しません。

in exercitū Sullae et postea in Crassī fuerat. 彼はスラの軍隊にいたことがあり、その後クラッススの軍隊にいたこともあった。(下線部は英語なら *in that of Crassus*)

nullae mē fabulae dēlectant nisi Plautī. プラウトゥスの劇以外で僕が面白いと感じる劇はない。(下線部は英語なら *except those of Plautus*)

4. **et is, et ea** 「それも～」という言い回しに注意。

vincula, et ea sempiterna 拘束、それも永遠の拘束

16.5.3 **idem**

248. 1. **idem** は主語や目的語と同格に使われると、しばしば「また」「同様に」の意味になります。

quod idem mihi contigit 同様に私に起きた ~

bonus vir, quem eundem sapientem appellāmus 善い人、賢いとも僕らは言うが

idem atque (ac) 「~と同じ」については §341,1,c を参照。

16.5.4 **ipse**

249. 1. **ipse** 「自身」は、文脈によって特別な意味を帯びます。

eō ipsō diē まさにその日

ad ipsam ripam その土手の近くで

ipsō terrōre 恐怖だけで

valvae sē ipsae aperuērunt. 扉は勝手に開いた。

ipse aderat. 彼本人が出席した。

2. 再帰代名詞が **ipse** で強調されることがよくあります。しかしその場合、**ipse** は再帰代名詞と同格になるよりも、主語と一致するほうが一般的です。

sēcum ipsī loquuntur. 彼らは自分たちの中で話し合った。

sē ipse continēre nōn potest. 彼は自分自身を抑えることができない。

3. **ipse** は「対比」「あいまいさの回避」の目的で、間接再帰に用いられます。

Persae pertimuērunt nē Alcibiadēs ab ipsīs dēscisceret et cum suis in grātiā redīret. ペルサイ人は、アルキビアデース人が自分 (=ペルサイ人) に背き、自分 (=アルキビアデース人) の (同胞たち) とよりを戻すのではないかと恐れた。

ea molestissimē ferre dēbent hominēs quae ipsōrum culpā contrācta sunt. 人は (他人ではなく) 自分の過ちで引き起こされたことに非常に悩み苦しまなくてはならない。

16.6 関係代名詞

一致

250. 1. 関係代名詞は、その先行詞と「性」「数」「人称」が一致しますが、その「格」は、関係詞節の中で関係代名詞がどう使われているかによって決定します。

mulier quam vidēbāmus 僕らが見ていた女

bona quibus fruimur 僕らが享受している恵み

2. 先行詞が複数あるときは、叙事的形容詞の場合 (§235,B,2) と同様の原理で関係代名詞の数と性を決定します。

pater et filius, qui capti sunt 捕まった父と子

stultitia et timiditās quae fugienda sunt 追いつべき愚かさや憶病さ

honōrēs et victōriae quae sunt fortuīta 偶然の名誉と勝利

3. 関係代名詞を主語とする述語名詞 (主格・対格) があるときは、先行詞ではなく述語名詞と一致します。

carcer, quae lautumiae vocantur ラウトゥミアエ (切り出した石) と呼ばれる監獄

Belgae, quae est tertia pars 第三分隊のベルガイ人

4. 関係詞の性と数は、その先行詞の意味から取られることも時々あります。
pars quī bestiīs objectī sunt 獣に向かって投げだされた一部 (の人々)
5. 関係詞がその先行詞の格に引きつけられることもよくあります。
nātus eō patre quō dixī 私が言ったその父親の子供

先行詞

251. 1. 関係詞の先行詞は、時々省かれます。

quī nātūram sequitur sapiēns est. 自然に従う (人) は、賢明だ。

2. 先行詞は所有代名詞の中に暗示されることがあります。また、まれに形容詞の中に暗示されることもあります。
nostra quī remānsimus caedēs 生き残った我らの殺戮
servīlī tumultū quōs ūsus ac disciplīna sublevārunt. 経験と訓練に支えられた奴隷たちの蜂起によって
 (servīlī= servōrum)
3. 時に、先行詞は関係詞と一緒に繰り返されます。
erant itinera duo, quibus itineribus... 二つの道があって、その道によって...
4. 先行詞の関係詞節への埋め込み: 先行詞は、よく関係詞節に埋め込まれます。
 (a) 関係詞節が先に来るとき
quam quisque nōvit artem, in hāc sē exerceat. 各自が知っている技術を、各自訓練させよ。
 (b) 先行詞が同格語のとき
nōn longē ā Tolōsātium finibus absunt, quae civitās est in prōvincia. 彼らは属州のなかにある都市、トローサの境界から遠くないところにいる。
 (c) 論理的な先行詞が最上級のとき
Themistoclēs dē servis suis, quem habuit fidēlissimum, mīsit. テミストクレースは、自分が持っているもっとも信頼できる奴隷を使者にした。
 (d) 次のような形の表現で
quā es prūdentiā; quae tua est prūdentiā. 君の知恵なんてその程度だ。(= 君がそうである賢さによって、それが君の賢さだ)
5. 英語では関係詞を省くことができますが、ラテン語では決して省きません。
puer quem vīdī = the boy I saw 私の見た子
6. 英語では接続詞 + 指示詞のままにする場合でも、ラテン語では関係詞を自由に使います。特に文頭に多いです。
quō factum est = by this it happened これによってそれは起きた
quae cum ita sint = since this is so これがそうなので
quibus rēbus cognitīs = when these things (became) known これらのことが知られたとき
7. 従属節を導いている関係詞が、文法的には従属節の中の従属節に属していることがあります。
numquam dignē satis laudārī philosophia poterit, cui quī pāreat, omne tempus aetātis sine molestiā possit dēgere. 哲学はいくら褒めても足りることはない。なぜならそれに従う人は、生涯のすべての瞬間を、煩わしさなしに過ごすことができるからだ。
 この文において、**cui** は従属節 **possit** を導いて **philosophia** に接続しています。しかし、**cui** は **possit** そのものではなく、**possit** の従属節たる **pāreat** に支配されています。

16.7 不定代名詞

252. 1. **quis** 「誰か」は最も弱い不定代名詞です。 **sī, nisi, nē, num** と一緒に使われるのが普通です。
sī quis putat もし誰かが思うなら
2. **aliquis**(形容詞形 **aliquī**) は **quis** よりも確定度が高く、英語で言う *some one, somebody, some* に当たります。
nunc aliquis dicat mihi. さあ誰か私に教えておくれ。
utinam modo agatur aliquid. ああ何かが行われればいいのに。
3. **quīdam** 「ある人」は **aliquis** よりもさらに確定度が高いです。
homō quīdam とある (私が思い浮かべている) 人
 (a) **quīdam** は「一種の」という意味になることがあります。 **quasi** 「あたかも」をしばしば伴います。
cognātiō quaedam 一種の血縁関係
mors est quasi quaedam migrātiō. 死は例えるなら一種の引越しのようなものだ。
4. **quisquam** 「誰か」「誰か一人でも」(**quis** よりも対象が一般的) と、これに対応する形容詞 **ūllus** 「何かの」が使われるのは、ほとんどが否定文、条件文、否定を暗示する疑問文、比較の節の中です。
jūstitia numquam nocet cuiquam 正義は決して誰も傷つけない。
sī quisquam, Catō sapiēns fuit. もし誰か賢い人がいたとするなら、カトーこそが賢かった。
potestne quisquam sine perturbātiōne animī irāscī? 誰が心の取り乱しなしにに怒れよう？
sī ūllō modō poterit もし何らかの方法でそれが可能ならば
taetrior hīc tyrannus fuit quam quisquam superiōrum. この暴君は前任者のうちの誰よりも下劣だった。
5. **quisque** 「各々」は特に以下の状況で使われます。
 (a) **suus** と一緒に (§244,4,a)
 (b) 関係代名詞・疑問代名詞と一緒に
quod cuique obtigit, id teneat. 各自に降りかかったこと、それを (各自が) 把握せよ。
 (c) 最上級と一緒に
optimus quisque 各々最高のもの
 (d) 序数と一緒に
quīntō quōque annō 各々五年めの年に (=四年ごとに)
6. **nēmō** 「誰も...ない」は名詞的用法の形容詞と一緒に使われることがあります。
nēmō mortālis 一人の人間も...ない
nēmō Rōmānus 一人のローマ人も...ない

16.8 代名詞的形容詞

253. 1. **alius** 「もう一つ別の」と **alter** 「もう片方の」は、しばしば相関代名詞的に用いられます。
aliud loquitur, aliud sentit. 彼は或ることを言い、それとは別のことを考える。(彼は言うことと考えていることが別だ)
aliī resistunt, aliī fugiunt. 抵抗する人もいれば、逃げる人もいた。
alter exercitum perdidit, alter vēdidit. 一方の人は軍隊を壊滅させ、もう片方の人は軍隊を売った。
alterī sē in montem recēpērunt, alterī ad impedīmenta sē contulērunt. 一方は山に撤退し、もう一方は荷物の辺りに寄り集まった。

2. 「人それぞれだ」というのは次のように表現します。

alius aliud amat. 異なる人は異なるものを愛する。

aliud aliis placet 異なるものは異なる人を喜ばせる。

(a) 副詞でも同じ構文が時々できます。

alii aliō fugiunt みなバラバラのほうへ逃げる。

3. **alius** を二回繰り返すのは、「お互いに」の意味にもなります。

Galli alius alium cohortati sunt. ガッリア人は互いに励ましあった。

4. **ceteri** は「残りすべて」「その他のすべて」の意味です。

ceteris praestare ほかの何よりも勝っている

5. **reliqui** は「その他」「残り」「残っている人」の意味です。数値とともに用いるのは、普通これです。

reliqui sex 残りの六人

6. **nescio quis** は複合不定代名詞として「何らかの」の意味になります。

causidicus nescio quis 誰か弁護士

misit nescio quem. 彼は誰か使者を送った。

nescio quo pacto どうにかこうにか

第 17 章

動詞の構文

17.1 一致

17.1.1 主語が一つのときの一致

254. 1. 数と人称の一致: 定形動詞は「数」と「人称」が主語と一致します。

vōs vidētis. 君らを見る。

pater filiōs instituit. 父は息子たちを教育する。

2. 性の一致: 動詞が複合形の場合、分詞は普通、主語と「性」が一致します。

sēditio repressa est. 内紛は阻止された。

3. しかし述語名詞の性・数が主語と違う場合、動詞は普通一番近くの名詞・形容詞と一致します。

Tarquīnii māterna patria erat. タルクィニイーは母の故郷だった。

nōn omnis error stultitia est dicenda. すべての過ちが愚かと呼ばれるべきだというわけではない。

(a) 頻度は落ちますが、動詞が同格語と一致することもあります。

Corioli, oppidum Volscōrum, capitum est. ウォルスキー族の町、コリオリーは、奪われた。

4. 意味による構文: 動詞が主語と一致するときに、厳密な文法的形式ではなく、意味に従うことが時々あります。

(a) 数について

multitūdō hominum convēnerant. 大群の人が集まっていた。

(b) 性について

duo mīlia crucibus adfixi sunt. 二千人 (の男) が十字架に磔りつけられた。

17.1.2 主語が二つ以上のときの一致

255. 1. 数の一致: 主語が二つ以上あるときは、動詞は普通複数形になります。

pater et filius mortuī sunt. 父と子は死んだ。

2. しかし時折、動詞が一番近くの主語に一致することもあります。

(a) 動詞が主語の前に来るとき、もしくは主語の間に挟まるとき

mortuus est pater et filius.

pater mortuus est et filius.

(b) aut、aut ... aut、vel ... vel、neque ... neque で主語が繋がれているとき

neque pater neque filius mortuus est. 父も子も死ななかつた。

3. 別々の主語が一緒になって全体をなしていると感じられるときは、動詞は単数形になります。

temeritās ignōrātiōque vitiōsa est. 無謀と無知は悪だ。

(a) 特に **senātus populusque Rōmānus** という句ではいつも動詞が単数形です。

4. 人称の一致: 複数個の主語が違う人称のとき、その中に一人称が含まれていれば、動詞は常に一人称になります。二人称と三人称だけならば、動詞は常に二人称になります。三人称しか主語に含まれないときのみ、動詞は三人称になります。

sī tū et Tullia valētis, ego et Cicerō valēmus. 君とトゥッリアが元気なら、僕とキケローも元気です。

5. 性の一致: 主語の性が互いに異なるとき、複合時制の分詞の性は、叙述的形容詞のとき (§235,B,2) と一緒です。

17.2 態

256. 1. 受動態は、時折その原義たる中動態 (再帰動詞) の痕跡を見せます。

ego nōn patiar eum defendī 彼が自分の防御をすることを私は許さないぞ。

2. 詩人たちはギリシャ語を模倣して、多くの受動完了分詞を間接中動態として用います。間接中動態とは、主語が自分に対して行動するというより「自分のために」行動することです。

vēlātus tempora こめかみを隠して

(a) 受動完了分詞だけでなく、定形動詞もこの使い方をすることがあります。

tunicā inducitur artūs. 彼はトゥニカで体を覆っている。

3. 自動詞が受動態で、非人称的に用いられることがあります。

curritur (人々は) 走る

ventum est. (彼は・彼らは...) 来た。

17.3 時制

17.3.1 直説法の時制

257. 1. ラテン語の時制は、二つの観念を表します。

(a) その行動が行われた「時期」: 現在・過去・未来

(b) 行動の「様相」: 無相・進行・完了

ラテン語には時制が6つあり、これらで3時期・3様相 (= 9種類) を表現します。したがって、いくつかの時制は2つ以上の使われ方をします。

様相	時期		
	現在	過去	未来
無相	現在 scribō 書く	歴史的完了 scripsī 書いた	未来 scribam 書くだらう
進行	現在 scribō 書いている	未完了 scribēbam 書いていた	未来 scribam 書いているだらう
完了	現在完了 scripsī 書き終わった	過去完了 scripseram 書き終わっていた	未来完了 scripserō 書き終わっているだらう

2. 現在時制が無相と進行の両方を表せるのがおわかりでしょうか。未来時制もそうです。完了時制にも二つの使い方があります。現在の完了した行動 (現在完了) もしくは過去の無相の行動 (歴史的完了) です、

主時制と歴史的時制

258. 現在もしくは未来の時間を表す時制を主時制 (第一時制) と言います。過去の時間を表す時制を歴史的時制 (第二時制) と言います。

直説法の主時制は、「現在」「未来」「現在完了」「未来完了」です。

直説法の歴史的時制は、「未完了」「歴史的完了」「過去完了」です。

直説法現在

259. 上述の表に示した二つの使い方以外に、直説法現在は以下の特殊な意味を表します。

1. 「普遍の真理」を表します。すなわち、今だけでなく「常に」正しい事柄です。(「格言の現在」)
virtūs conciliat amicitās et cōservat. 美德は友情をもたらし、友情を維持する。(そしてそれはいつもそ
うだ)
2. 試みられている行動を表します。(「意欲の現在」)
dum vītant vitia, in contrāria currunt. 彼らは失敗を避けようとしている間に、反対に突き進んでいる。
3. 生き生きとした語り口の中では、現在時制が過去の行動を表すことがよくあります。(「歴史的現在」)
Caesar imperat magnum numerum obsidium. カエサルは数多くの人質を要求した。
4. **jam, jam diū, jam pridem** 等とともに用いて、現在時制は過去に始めて現在まで続いている行動をしばしば表
します。
jam pridem cupiō tē vīsere 以前よりずっとあなたにお会いしたいと願っておりました。

直説法未完了

260. 1. 未完了時制は主に「過去に進行中だった」行動を表します。

librum legēbam. 私は本を読んでいた。

(a) この意味のため、未完了時制は特に「描写」(単なる「叙述」に対して)の時制に適しています。

2. 「進行中」の観念から、「繰り返し」「習慣」の観念が簡単に派生します。

lēgātōs interrogābat. 彼は使節たちに質問し続けた。

C. Duīlium vidēbam puer. ガイウス・ドゥイーリウスのことを、僕は子供のころ、よく見ていたものだ。

3. 未完了時制は、試みられていた行動(「意志の未完了」)や行動開始(「起動の未完了」)をしばしば表します。

hostēs nostrōs intrā mūnitiōnēs prōgredi prohibēbant. 敵は我々(の軍)が防壁の内部に進入することを防ごうとした。(意志)

ad proelium sē expediēbant. 彼らは戦いの準備を整えつつあった。(起動)

4. **jam, jam diū, jam dudum** 等とともに用いられて、未完了時制は、一定の時間続けてきた行動を時々表します。

domicilium Rōmae multōs jam annōs habēbat. 彼はローマの住居を長年ずっと構え続けてきていた。

直説法未来

261. 1. ラテン語は英語より、未来時制の使い方が厳密です。たとえば英語では *'If he comes, I will be glad.'* (未来のことなのに現在時制 *he comes*) などと言いますが、ラテン語では普通その場合、未来時制を用います。現在時制が許されるのはまれです。

2. 時折、未来時制は命令の意味になります。

dicēs. 言え。

直説法完了

262. 1. 現在完了: いくつかの現在完了時制は、「完了した行動の結果の、今の状態」を表します。その場合、現在時制と同じようにみえます。

nōvī, cognōvī 僕は知っている (= 以前知った結果、今覚えている)

cōnsuēvī 僕は慣れている (= 以前慣れた結果、今慣れた状態にある)

2. 歴史的完了: 歴史的完了時制は、「叙述」(未完了過去「描写」に対して)の時制です。

Rēgulus in senātum vēnit, mandāta exposuit, reddī captīvōs negāvit esse ūtile. レーグルスは元老院に来て、指令を与え、捕虜が返還されることは有益でないと否定した。

(a) 歴史的完了が普遍的真理を表すことも多いです。(「格言の完了」)

直説法過去完了

263. 過去完了は、「過去の時点で完了していたこと」を表します。

Caesar Rhēnum trānsire dēcrēverat, sed nāvēs deerant. カエサルはレーヌス川を渡ることを決めていたが、船がなかった。

1. 完了時制が現在の意味をもつ動詞 (§262,1) では、過去完了は未完了時制の意味になります。

nōveram. 僕は知っていた。

直説法未来完了

264. 未来完了時制は、未来の時点で完了している行動を表します。

scribam epistolam, cum redieris. 君が帰ってきてから、僕は手紙を書こう。

1. 英語では未来完了の代わりに現在完了を使うことも多いですが、ラテン語は未来完了を必ず使います。

2. 完了時制が現在の意味をもつ動詞 (§262,1) では、未来完了は未来時制の意味になります。

nōverō 僕は知っているだろう。

書簡の時制

265. 手紙を書くとき、筆者が書いている時点では適切でないけれども、その手紙が届いた時点で適切になっているような時制を用いることがよくあります。つまり、現在時制のものを未完了時制や完了時制を用いて書き、現在完了時制のものを過去完了時制で書くのです。

nihil habēbam quod scriberem, neque enim novī quidquam audieram et ad tuās omnēs epistolās jam rescripseram. 何も書くことはありません。というのも、何も新しいことは聞いていませんし、貴殿のすべての手紙にはすでに返信したからです。

17.3.2 接続法の時制

266. 1. 独立節: §272–§280 参照。

2. 従属節: 従属節における接続法の時制は、時制の一致と呼ばれる規則に普通従います。

時制の一致

267. 1. 接続法では、主時制は「現在」「完了」で、歴史的時制は「未完了」「過去完了」です。

2. 「時制の一致」とは、主時制は主時制を従え、歴史的時制は歴史的時制を従えるということです。

• 主時制の一致

videō quid faciās. 君が(今)何をしているのか、僕はわかる。

vidēbō quid faciās. 君が(今)何をしているのか、僕はわかるだろう。

viderō quid faciās. 君が(今)何をしているのか、僕はすでにわかっているだろう。

videō quid fecerīs. 君が(以前)何をしたか、僕はわかる。

vidēbō quid fecerīs. 君が(以前)何をしたか、僕はわかるだろう。

viderō quid fecerīs. 君が(以前)何をしたか、僕はすでにわかっているだろう。

• 歴史的時制の一致

vidēbam quid facerēs. 君が(そのとき)何をしているか、僕は知っていた。

vidī quid facerēs. 君が(そのとき)何をしているか、僕は知った。

videram quid facerēs. 君が(そのとき)何をしているか、僕はすでに知っていた。

vidēbam quid fecissēs. 君が(その前に)何をしたか、僕は知っていた。

vidī quid fecissēs. 君が(その前に)何をしたか、僕は知った。

videram quid fecissēs. 君が(その前に)何をしたか、僕はすでに知っていた。

3. 直説法と同じで、接続法現在と接続法未完了はまだ完了していない行動を、接続法完了と接続法過去完了は完了した行動を、それぞれ表します。

時制の一致の留意点

268. 1. 直説法完了は普通歴史的時制です(たとえ現在時制のように訳せる場合でも、です)。ですから、接続法未完了か接続法過去完了を従えます。

dēmōnstrāvī quārē ad causam accēderem. 私はなぜ裁判を起こしているのか説明した。

2. 従属的な完了不定詞は、直説法に変換して歴史的時制になる場合、いつも歴史的時制として扱われます。

videor ostendisse quālēs deī essent. 私は神がどのようなものなのか、示したと思われる。(ostendisse は直説法歴史的完了 ostendī にあたる)

3. 「歴史的現在」は主時制として扱われることも、歴史的時制として扱われることもあります。

Sulla suōs hortātur ut fortī animō sint. スッラは、強い精神を持つように自分の軍を激励した。

Gallōs hortātur ut arma caperent. 彼はガッリア人たちを、武器を手取るよう駆り立てた。

4. 「事実に反する仮定」の条件文は、時制の一致を受けません。

honestum tāle est ut, vel sī ignōrārent id hominēs, suā tamen pulchritūdine laudābile esset. 誠実さとは、たとえ人がそれに気づかなくても、その美しさだけで賞賛に値する、そのようなものだ。

5. 「事実に反する仮定」の条件文においては、接続法未完了は、普通歴史的時制として扱われます。

sī sōlōs eōs dicerēs miserōs, quibus moriendum esset, nēminem tū quidem eōrum quī viverent exciperēs. もし君が彼ら死にゆくもののみを不幸だというならば、君は生けるものすらも除外できない。

6. 結果の節などでは、接続法完了は時折歴史的時制として使われます。

rēx tantum mōtus est, ut Tissaphernem hostem iudicārit. 王は非常に心を動かされ、ティッサベルネースを敵とみなした。

この構文はケケローではまれですが、ネポース以降の歴史家では頻出します。この用法の接続法完了は「行動の継続性に言及しない、事実としての」単なる結果を表現します。すなわち、直接文における直説法歴史的完了に相当します。たとえば上の例の *jūdicārit* は *jūdicāvit* 「彼は判断した」に当たるわけです。もし歴史的時制に続けて「継続性のあるものとしての」結果を表したい場合は、必ず接続法未完了を用います。

7. 意味を明確にするために、時制の一致の原則が全く無視されることも時々あります。

(a) 歴史的時制に続けて、接続法現在・接続法完了を使うことがあります。

Verrēs Siciliam ita perdidit ut ea restitūi nōn possit. ウェッレースはシキリアを(今も)修復できないくらい破壊した。(直接文: *nōn potest restitūi*)

ārdēbat Hortēnsius dicendī cupiditatē sīc, ut in nūllō flagrantius studium vīderim. 私が(今でも)それ以上燃え盛る情熱を誰の中にも見たことがないと言えるくらい熱心に、ホルテンシウスは火をつけていった。(直接文: *in nūllō vīdi* 私はだれの中にも見たことがない)

注意: この例は 6. で挙げた例とは異なります。こちらの例は、時制の一致を無視して「主時制の」接続法完了が用いられています。一方、6. の例は、歴史的時制としての接続法完了です。

(b) 主時制に続けて、歴史的時制としての接続法完了を続けることもあります。

nesciō quid causae fuerit cūr nūllās ad mē litterās darēs. 君が僕に一つも手紙をよこさなかったことにどんな理由があったのか、僕は知らない。

この例では、*nesciō* が主時制にもかかわらず *fuerit* は歴史的時制として使われています。それは、*fuerit* の後ろに接続法未完了 *darēs* が続くことからわかります。

接続法で未来を表す方法

269. ラテン語には×接続法未来・×接続法未来完了がありません。そこで、以下のような従属節で補われます。

1. (a) 主時制に続けて接続法現在、歴史的時制に続けて接続法未完了を用いて、未来時制を表します。

(b) 主時制に続けて接続法完了、歴史的時制に続けて接続法過去完了を用いて、未来完了時制を表します。

主節に未来時制が含まれていて、接続法が未来を指していることが文脈上明らかな場合、この用法は特によく使われます。

Gallī pollicentur sē factūrōs, quae Caesar imperet. ガッリア人は、カエサルが(この先)命令することを実行する、と約束する。

Gallī pollicēbantur sē factūrōs, quae Caesar imperāret. ガッリア人は、カエサルが(その先)命令することを実行する、と約束した。

Gallī pollicentur sē factūrōs, quae Caesar imperāverit. ガッリア人は、カエサルが(未来のある時点で)命令済みのことを実行する、と約束する。

Gallī pollicēbantur sē factūrōs, quae Caesar imperāvisset. ガッリア人は、カエサルが(その先のある時点で)命令済みのことを実行する、と約束した。

2. たとえ主節に未来時制が含まれないような文脈であっても、従属節で未来を表すのに接続法現在・接続法未完了が使われることは多いです。

timeō nē veniat. 彼が来るのではないかと心配だ。

Caesar exspectābat quid cōsiliī hostēs caperent. カエサルは敵がどんな計画を選ぶのか、待ち構えていた。

3. もっと明確性が必要な場合は、迂言形-*ūrus sim*, -*ūrus essem* を用います。結果の節・間接疑問文・*nōn dubitō quīn* の後ろに多いです。

nōn dubitō quīn pater ventūrus sit. 僕は父が来るのは疑いないと思う。

nōn dubitābam quīn pater ventūrus esset. 僕は父が来るのは疑いないと思った。

4. 動詞に能動未来分詞がなかったり、受動態だったりするときは、**mox, brevī, statim** 等の不変化詞を接続法現在・接続法未完了とともに用いて未来を表します。

nōn dubitō quīn tē mox hūjus rei paeniteat. 君はきっとすぐにこのことを後悔すると思う。

nōn dubitābam quīn haec rēs brevī cōnficerētur. このことはきっとすぐに成し遂げられると思った。

17.3.3 不定詞の時制

270. 1. 不定詞の時制は絶対的な時間ではなく、「それが従属する動詞に相対的な」時間を表します。

- (a) 現在不定詞は、それが従属する動詞の時間と「同時刻の」行動を表します。

vidētur honōrēs adsequī. 彼は(今) 尊敬を集めているようだ。

vidēbātur honōrēs adsequī. 彼は(そのとき) 尊敬を集めているようだった。

- (b) 完了不定詞は、それが従属する動詞の時間より「以前の」行動を表します。

vidētur honōrēs adsecūtus esse. 彼は(以前) 尊敬を集めていたようだ。

vīsus est honōrēs adsecūtus esse. 彼は(それより前に) 尊敬を集めていたようだった。

- (c) 未来不定詞は、それが従属する動詞の時間より「以後の」行動を表します。

vidētur honōrēs adsecūtūrus esse. 彼は(これから) 尊敬を集めるだろうと思われる。

vīsus est honōrēs adsecūtūrus esse. 彼は(それ以後) 尊敬を集めることになるだろうと思われた。

2. 「すべきだった」「かもしれなかった」は、**dēbui, oportuit, potui** や **dēbēbam, oportēbat, poteram** + 現在不定詞で表します。英語のように *ought to have done* とはしません。

dēbuit dicere. 彼は言うべきだった。

oportuit venīre. 彼は来るべきだった。

potuit vidēre. 彼は見たかもしれなかった。

- (a) **oportuit, volō, nōlō** (詩ではその他のいくつかの動詞も) は、現在不定詞の代わりに完了不定詞をとることができます。

hōc jam pridem factum esse oportuit. これはずっと以前にやっておかなければならなかった。

3. 迂言的未来不定詞: 分詞幹を持たない動詞は、**fore ut, futūrum esse ut** を接続法とともに用いることで、能動未来不定詞・受動未来不定詞の代わりにします。

spērō fore ut tē paeniteat levitātis. 君が軽率さを(これから) 後悔することを、僕は期待している。

spērō futūrum esse ut hostēs arceantur. 敵が撃退されることを、僕は期待している。

- (a) 迂言的未来不定詞は、分詞幹がある動詞であってもよく使われます。特に不定詞が受動態のときに多いです。

spērō fore ut hostēs vincantur. 敵に勝つことを僕は期待している。

4. 受動態や異態動詞は、未来完了不定詞を **fore** を使って作ることがあります。

spērō epistolam scriptam fore. 手紙が書けていたらいいなあ。

dicō mē satis adeptum fore. 僕は自分が(未来の時点で) 充分獲得していると述べている。

17.4 法

17.4.1 独立文の法

独立文中の直説法

271. 直説法は、「事実の陳述」「事実の想像」「事実の質問」に使われます。

1. 以下の慣用句的な使い方に注意してください。

(a) *possum* と一緒に:

possum multa dicere. 僕はたくさんしゃべるかもしれない。

poteram multa dicere. 僕はたくさんしゃべるかもしれなかった。(§270,2)

(b) *longum est, aequum est, melius est, difficile est, ūtilius est* などとともに:

longum est ea dicere. それを言うのは冗長だ。

difficile est omnia persequi すべてに言及するのは難しい。

独立文中の接続法

272. 接続法は独立文中で使われると、以下のことを表現します。

1. やろうとしていること — 意志の接続法
2. のぞんでいること — 願望の接続法
3. かもしれないこと — 可能性の接続法

意志の接続法

273. 意志の接続法は、「やろうとしている」行動を表します。必ず話者の側の権力を暗示します。意志の接続法には、以下の種類があります。

A. 奨励の接続法

274. 奨励の接続法は、「奨励」を表現します。一人称複数現在のみで使われます。否定は *nē* を使います。

eāmus. (僕らは) 行こう。

amēmus patriam. 祖国を愛しましょう。

nē dēspērēmus. 諦めないでいこう。

B. 命令の接続法

275. 命令の接続法は、「命令」を表現します。命令の接続法は普通、現在時制です。

1. 三人称単数・三人称複数で使われることが最も多いです。
 - dicat.* 彼に言わせてやれ。
 - dicant.* 彼らに言わせてやれ。
 - quārē sēcēdant improbi.* だからあの下郎どもを退かせろ。
2. 二人称で使われることもあります。不定の人をさすことが多いです。
 - istō bonō ūtāre.* その利点を活用しなさい。
 - modestē vivās.* 慎み深く暮らしなさい。

C. 禁止の接続法

276. 禁止の接続法は、二・三人称の単・複数で *nē* とともに使われて、「禁止」を表します。現在時制でも完了時制でもあまり意味の違いなく用いられます。

nē repugnētis. 抵抗するな。

tū vērō istam nē reliquerīs. お前は本当にその女を見捨てるな。

impīi nē plācāre audeant deōs. 不信心どもに神を鎮めるようなまねをさせるな。

1. 禁止の接続法は、古典の散文ではあまり出てきません。

2. 二人称で禁止を表現するには、**nōlī (nōlite)** + 不定詞や、**cavē** もしくは **cavē nē** + 接続法を使うことのほうが、より一般的です。

nōlī hōc facere. (君は) これをしてはいけない。(=これをすることを望むな)

nōlite mentīrī. (お前ら) 嘘をつくな。

cavē ignōscās, cavē tē misereat. 許してはいけない。自分を憐れませてはいけない。

cavē nē haec faciās. これをしてはいけない。(=これをしないように気をつける)

D. 審議の接続法

277. 審議の接続法は、「疑問、不満、不可能、強制、正当性」を暗示する疑問文・感嘆文に使われます。現在時制で現在の時間を指し、未完了時制で過去の時間を表します。否定は **nōn** です。

quid faciam? どうしよう？

ego redeam! 俺は帰るぞ！

huic cēdamus! hūjus condiōnēs audiāmus! こいつに頭をさげるのか！こいつの提案を聞くのか！

quid facerem? 僕に何ができただろう？

hunc ego nōn diligam? 私はこの男を尊重するべきではないか？

1. 審議の接続法は、普通純粹に修辭的で、返答は期待しません。

E. 讓歩の接続法

278. 讓歩の接続法は、何かを「議論のために仮定・讓歩」するときに使います。現在時制で現在の時間を表し、通常完了時制で過去を表します。否定は **nē** です。

sit hōc vērūm. これが正しいと (仮定) しよう。

nē sint in senectūte vīrēs. 老年には力がないとしよう。

fuerit malus civis aliis; tibi quandō esse coepit? 彼が他のひとにとって悪い市民だったとしよう。それで、彼は君にとっていつからそう (悪い市民に) なり始めたのかね？

願望の接続法

279. 願望の接続法は「願う」表現に出てきます。否定は通常 **nē** です。

1. 願望が実現可能だと思われるときは、現在時制 (しばしば **utinam** をともなって) を使います。

dī istaec prohibeant! 神々があなたのいうそれを防ぎますように！

falsus utinam vātēs sim! ああ偽の預言者になりたい！

nē veniant! 彼らが来なければいいのに！

2. 未完了は願望の形で「いまそうでないことについての後悔」を表します。過去完了は「過去にそうでなかったことについての後悔」を表します。未完了・過去完了ともに、通常 **utinam** をともないます。

utinam istud ex animō dicerēs! それをあなたが心から言っているのであればよかったのに！(心からの言葉でなくて残念だ)

Pēlidēs utinam vītāset Apollinis arcūs! ペーリーデースがアポロの矢を避けられていたらよかったのに！

utinam nē nātus essem! 僕は生れてこなければよかった！

可能性の接続法

280. 可能性の接続法は、「かもしれない」ことを表します。否定は *nōn* です。以下のことが挙げられます。

1. かもしれない可能性: 可能性の接続法は、「単なる可能性」を表すことがあります (英語では *may* に当たります)。現在時制も完了時制も使われ、両者に意味の違いはあまりありません。

dicat aliquis. 誰かが言うかもしれない。

dixerit aliquis. 誰かが言うかもしれない。

(a) この構文はほとんど出てきません。主に例に挙げたような句でわずかに使われるだけです。

2. 条件次第の可能性: 可能性の接続法は、「明示的・暗黙的な条件次第の」可能性を表すことがあります (英語では *would*)。現在時制も完了時制も使われ、両者に意味の違いはあまりありません。

fortūnam citius reperiās quam retineās. (もし試してみるならば) 幸運は維持するより見つけるほうが早いだろう。

crēdiderim. 私ならば信じるだろう。

(a) *velim, mālim, nōlim* を *volō, mālō, nōlō* の穏やかな言い方として使うやりかたは、これの一種です。

velim mihi ignōscās. (もし僕の望みを言うなら) 君に僕を許してほしい。

nōlim putēs mē jocārī. 僕が冗談を言っていると知らないでほしい。

(b) もしその条件が明示されれば、普通の条件文の一種になります。(§303)

diēs dēficiat, sī cōner ēnumerāre causās. もし僕が理由を列挙しようとするれば、時間が足りないだろう。

3. 自発の可能性: 可能性の接続法は、「気づく・わかる・思う」などの動詞の現在時制・未完了時制の二人称単数の形で使われます。そのとき、二人称単数は不定の人を指します。(§356,3)

videās, cernās 人にはわかる、人には見分けがつく

crēderēs 人には信じられた。

vidērēs, cernerēs 人にはわかった。人には見分けがついた。

putārēs 人には想像できた。

4. 事実に反する仮定の条件文の帰結節で使う未完了時制・過去完了時制も、可能性の接続法の性質を持っています。そのような帰結節が、条件節なしで単独で現れることがあります。特に *vellem, nōllem, māllem* がよく出てきます。

vellem id quidem. (もし僕に勇気があれば) 確かにそれを望んだかもしれないね。

命令法

281. 命令法は、「命令」「勧告」「懇願」に使われます。否定は *nē* です。

ēgredere ex urbe. 町から出ていけ。

mihi ignōsce. 僕を許してください。

valē. お元気で。(別れの挨拶)

1. 命令法の時制は、現在時制が最もよく使われますが、以下の場合には未来時制が使われます。

(a) 未来を明確に指す言葉が含まれている場合。特に条件文の帰結節で:

rem vōbis prōpōnam; vōs eam penditōte. その物をあなた方にお見せしますから、あなた方はそれを評価してください。

sī bene disputābit, tribuitō litteris Graecis. もし彼が上手に討論できるようになれば、それはギリ

シャ文学のおかげだと思いなさい。

(b) 法律、条約、遺言、格言などで:

cōnsulēs summum jūs habentō. 執政官は最高の権力を持たなくてはいけない。

hominem mortuom in urbe nē sepelitō 死者を町の中に埋めてはいけない。

amīcītia rēgī Antiochō cum populō Romanō hīs legibus et condiōnibus estō. アンティオコス王とローマの民の間に、以下の協定と契約のもとで、友好関係あれ。

quārtae estō partis Mārcus hērēs. マルクスは四分の一 (の遺産) の相続人となれ。

ignōscitō saepe alterī, numquam tibi. 他人はしばしば許しなさい。自分は決して許してはなりません。

2. 古典の散文では、否定が用いられるのは接続法未来だけでした。禁止は通常、別のやり方で表現されていました。(§276,2)

3. **quīn** + 直説法の疑問文 (なぜ...ないのか) は、しばしば命令法や奨励の接続法と同じ意味になります。

quīn abis? 去れ! (=どうして君は去らないのか)

quīn vōcem continētis? みなさん静粛に。(=どうして君たちは声を抑制しないのか)

quīn equōs cōnscendimus? 馬に乗ろう。(=どうして僕らは馬に乗らないのか)

17.4.2 従属節の法

目的の節

282. 1. 目的の節は、**ut (utī)**, **quō** (~のために) か **nē** (~しないために) に接続法で続けることが最も一般的です。

edimus ut vivāmus. 僕らは生きるために食べる。

adjūtā mē quō hōc fiat facilius. これがもっと簡単にできるように僕を助けてくれ。

portās clausit, nē quam oppidānī injūriam acciperent. 町の住民が何か損害を受けないように、彼は門を閉じた。

(a) **quō** は目的の節が比較級や比較の意味を含んでいるときだけ用いられるのが原則ですが、例外も多いです。

haec faciunt quō Chremētem absterreant. 彼らはクレメースを脅して追い出すために、これを行っている。

(b) **ut nē** が **nē** の代わりに使われることも時々あります。

ut nē quid negligenter agāmus 何かを不注意にやっしまわないように

(c) **ut nōn** (× **nē** ではない) は、否定が目的の節全体ではなく、何か一単語だけを否定するものであるときに用いられます。

ut nōn ējectus ad aliēnos, sed invitātus ad tuōs videāre. 君が知らない人の中に投げ出されたのではなく、君の(知り合い)に招待されたように見えるように。

(d) 「そして~しないために」「もしくは~しないために」は、通常 **nēve (neu)** を使います。

ut eārum rērum vīs minuerētur, neu pontī nocērent. これらの物の力が弱められるように、そして橋が傷つけられないように。

profūgit, nē caperētur nēve interficerētur. つかまったり殺されたりしないように、彼は逃げた。

(e) **ut** が一つめに来的时候は、二つめの目的の節は **neque (nēve** ではなく) が使われることも時々あります。アウグストゥス以降は、一つめの節が **nē** で始まるときも **neque** が使われるようになりました。

(f) 目的の節は、先行する名詞・代名詞と同格に使われることもあります。

hāc causā, ut pācem habērent この目的、彼らに平和がもたらされるようにという目的のために

2. 関係代名詞 (*quī*) や関係副詞 (*ubi, unde, quō*) が目的の節を導くことが頻繁にあります。
- Helvētīi lāgātōs mittunt, quī dicerent.** ヘルウェティア人はものを言うための使節を送った。
haec habuī, dē senectūte quae dicerem 僕は老年について、これらの言いたいことがあった。
nōn habēbant quō sē reciperent. 彼らは撤退するための場所がなかった。
- (a) このような節では、*quī* は *ut is, ut ego* などと等価です。また *ubi* は *ut ibi*、*unde* は *ut inde*、*quō* は *ut eō* と等価です。
3. **dignus, indignus, idōneus** は目的の関係代名詞節を従えます。
- idōneus fuit nēmō quem imitārere.** 君が真似をするのに適した人はいなかった。(cf. **nēmō fuit quem imitārere.** 君が真似をすべき人はいなかった)
dignus est quī aliquandō imperet. 彼はいずれ支配者になるのにふさわしい。
4. 目的の節がその文中の主動詞に従属するのではなく、文脈から与えられるものに従属していることがよくあります。
- ut haec omnia omittam, abiimus.** これら全部を省略するために(言うならば、つまるところ) 僕は出発した。

特徴の節

283. 1. 一般的・不定の先行詞を修飾して、その性質や特徴を表現するために使われる関係詞節を「特徴の節」と呼びます。特徴の節は普通、接続法です。
- multa sunt, quae mentem acuant.** 知性を磨くようなたくさんの物がある。
- 特徴の節は、明確な先行詞について単に何がしかの事実を述べるだけの関係詞節とは区別されます。そちらの場合は、直説法になります。
- Catō, senex jūcundus, quī Sapiēns appellātus est** カトー、感じのいい老人で、賢者様と呼ばれていた人、は
- 特徴の節は「何かをするような(だれでもいい)人」という意味合いになります。一方で、直説法の関係詞節は「何かをする(特定の、その)人」という意味合いになります。
2. 特徴の節は、特に次のような表現の後に出てきます: **est quī, sunt quī, nēmō est quī, nūllus est quī, ūnus est quī, sōlus est quī, quis est quī, is quī** などです。
- sunt quī dīcant.** 言う人がいる。
nēmō est quī nesciat. 知らない人はいない。
sapientia est ūna quae maestitiam pellat. 知恵は悲しみを追い出す唯一のものだ。
quae civitās est quae nōn ēvertī possit? 滅ぼせない都市がどこにあるか?
nōn is sum quī improbōs laudem. 僕は不正を褒めるような人ではない。
- (a) (キケローとカエサルでごくまれに) 特徴の節が比較級の後に続くことがあります。
- nōn longuis hostēs aberant quam quō tēlum adigī posset.** 敵は槍が投げつけられないほど遠くには離れていなかった。
3. 特徴の節は、しばしば原因(～なので)や逆接(～なのに)の意味を帯びます。
- (a) 原因: 関係詞はよく **ut, quippe, utpote** を伴います。
- ō fortunāte adulēscēns, quī tuae virtūtis Homērum praecōnem invēneris.** ああ、ホメーロスを自分の勇気の告知人と知った(ために) 幸運の若者よ。
ut quī optimō jūre eam prōvinciam obtinuerit その属州を最高権力で支配していたので
- (b) 逆接:

egomet quī sērō Graecās litterās attigissem, tamen complūrēs diēs Athēnis commorātus sum.

私がギリシャ文学に触れたのは後年になってからだったが、それでも私は数日間アテネに滞在した。

4. 特徴の節は、**quīn = quī (quae, quod) nōn** で始まることもあります。

nēmō est quīn saepe audierit. しばしば噂を聞かなかった人はいない。

nēmō fuit mīlitum quīn vulnerārētur. 兵隊の中に傷ついていない人はいなかった。

5. 特徴の節に関連する句は、以下のようなものがあります。

quod sciam 私が知っている限り

quem (quam, quod) audierim 私の聞いた限り

結果の節

284. 1. 結果の節は普通 **ut** 「～なので…」 **ut nōn** 「～なので…ない」で始まり、接続法です。主節にはしばしば **tantus, tālis, tot, is (=tālis), tam, ita, sic, adēo** やそれと似た単語が使われます。

quis tam dēmēns est ut suā voluntāte maereat. 自分の意志で嘆き悲しむほどの馬鹿がどこにいる (いない) ので 誰も自分から進んで悲しむことはない。

Siciliam ita vāstāvit ut restitūi in antīquum statum nōn possit. 彼はシキリアをひどく破壊したので、今も昔の状態に再建できていない。

mōns altissimus impendēbat ut facile perpaucī prohibēre possent. 非常に高い山が押しかかってきたので、簡単に止められた人は非常に少なかった。

nōn is es ut tē pudor umquam ā turpitūdine āvocārit. 君は、恥が君を醜行から呼び戻したことが一度でもあるような人ではない (ので、君は恥を感じたことがない)。

2. 結果の節は、関係代名詞・関係形容詞 (**quī (= ut is), quō (= ut eō)** など) で始まることも多いです。

nēmō est tam senex quī sē annum nōn putet posse vivere. 一年生きられないと思っているくらいの年寄りはいない (ので、みんな一年以上生きられると思っている)。

habētis eum cōsulem quī pārere vestrīs dēcrētīs nōn dubitet. 君たちには、君たちの決定に従うことをためらわないような執政官がいる (ので、執政官は君たちに従ってくれる)。

- (a) これら結果の関係詞節は特徴の関係詞節と近い関係にあり、二つの構文を区別することが難しいこともあります。このような関係詞節は、結果を意味することが明確で間違いのないとき以外は、特徴の節に分類することを奨めます。

3. 結果の節は **quīn = ut nōn** で始まることもあります。

nihil tam difficile est quīn quaerendō invēstīgārī possit. 探すことで手に入らないくらい難しいものは一つもない (ので、探せば見つかる)。

nēmō est tam fortis quīn rei novitāte perturbētur. 物の新奇さに混乱させられないほど強い人は一人もいない (ので、みんな混乱する)。

4. **quam ut** (時に **quam** 単独で) が比較級の後ろで結果の節を表す使い方に注意してください。

urbs erat mūnitior quam ut primō impetū capī posset. 町は強固で、最初の攻撃では陥落しなかった。

(= 陥落され得るよりは強固だった)

原因の節

285. 原因の節は、主に以下の不変化詞で始まります。

1. **quod, quia, quoniam**

2. **cum**
3. **quandō**

286. 法の使い分けは以下のようになります。

1. **quod, quia quoniam** は、原因が「筆者・話者のもの」であるとき直説法をとります。原因が「他人のもの」とみなされるときは、接続法になります。

Parthōs timeō quod diffidō cōpiis nostris. 僕はパルティア人が怖い。だって僕は自分たちの軍隊を信用してないから。

Themistoclēs, quia nōn tūtus erat, Corcyram dēmigrāvit. テミストクレースは安全でなかったの、コルキュラに逃げた。

neque mē vīxisse paenitet, quoniam bene vīxī. 僕は生きてきたことも後悔していない。だって申し分なく暮らしてきたから。

Sōcratēs accūsātus est quod corrumpet juventūtem. ソクラテースは若者を墮落させているといて訴えられた。(訴えた理由が筆者のものではなく、訴えた人によるものなので、接続法になります)

Haedūi Caesarī grātiās ēgērunt quod sē periculō liberāvissent. アエドゥイー人はカエサルに危機から解放してもらったので、感謝した。(アエドゥイー人の理由なので接続法)

quoniam Miltiadēs dicere nōn posset, verba prō eō fēcit Tisagorās. ミルティアデースはしゃべれなかったの、ティーサゴラスが彼の代わりに言葉を紡いだ。

noctū ambulābat Themistoclēs, quod somnum capere nōn posset. テミストクレースは(彼の言では)寝付けないとのことで、夜に出歩いた。

- (a) 「思う」「言う」動詞は原因の節内でしばしば接続法になります。その場合、思ったり言ったりする内容ではなく、あたかも思う・言う行為自体が原因になっているかのような構文になります。

Bellovacī suum numerum nōn complēvērunt quod sē suō nōmine cum Rōmānīs bellum gestūrōs dicerent. ベッロワキー人は自分たちに多くを補給しなかった。というのは、自分たち自身の名においてローマ人と戦争を起こそうとしているからだと言った。(= 彼らは言ったからだ)

- (b) **Nōn quod, nōn quō** (**nōn eō quod** につられて)、**nōn quia** 「～だからではない」と、**nōn quod nōn, nōn quō nōn, nōn quīn** 「～でないからではない」の後ろに続く原因は、普通、仮想でしかありません。ですから接続法になります。

id fēcī, nōn quod vōs hanc dēfēnsiōnem dēsiderāre arbitrārer, sed ut omnēs intellegent.

私がそれをしたのは、あなた方がこの守備を望んでいると思ったからではなく、みんなが気付くようにです。

Crassō commendātiōnem nōn sum pollicitus, nōn quīn eam valitūram apud tē arbitrārer, sed egēre mihi commendātiōne nōn vidēbātur, クラッススへの推薦を私が約束しなかったのは、それがあなたの役に立つと思わなかったからではなく、彼が推薦をのぞんでいるとは私には思えなかったからです。

- (c) しかし **nōn quod, nōn quia** の後ろに続く節が「事実であるならば」、たとえその事実が原因でないと述べるのであっても、直説法にします。

hōc ita sentiō, nōn quia sum ipse augur, sed quia sic exīstimāre nōs est necesse. 僕がそう考えるのは、僕自身が予言者だからではなく(予言者であることは確かだが)僕らがそう判断する必要があるからだ。

2. **cum** の原因節は、通例接続法をとります。

quae cum ita sint それがそうなので

cum sis mortālis, quae mortālia sunt, cūrā. 君はいつか死ぬ運命なのだから、移ろいゆくものを気にかけなさい。

- (a) **cum praesertim (praesertim cum)** 「特に...なので」という慣用句に注意。

Haeduōs accūsāt, praesertim cum eōrum precibus adductus bellum suscēperit. 彼がアエドゥイー人を非難するのは彼らの懇願に促されて戦争を引き受けたことが特に原因だ。

3. **quandō** (ほかの原因詞よりは頻度が低い) は直説法を支配します。

id omittō, quandō vōbis ita placet. そうすれば君たちが喜ぶから、僕はそれを捨てる。

時の節

postquam, ut, ubi, simul ac などで始まる時の節

287. 1. **postquam (posteāquam** (~のあとで)、**ut, ubi** (~のとき)、**cum primum, simul, simul ac (simul atque)** (~のすぐあとで) が「過去の一回きりの行動」を指すときは、直説法完了時制をとります。

Epaminōndās postquam audivit vīcisse Boeōtiōs, 'Satis' inquit 'vixī.' エパメイノンダースはポイオーティア人が勝ったことを聞いたのち、「俺は十分生きた」と言った。

id ut audivit, Corcyram dēmigrāvit それを聞いたとき、彼はコルキューラへ移り住んだ。

Caesar cum primum potuit, ad exercitum contendit. カエサルはできる限り早く、軍隊のところへ急いだ。

ubi dē Caesaris adventū certiōrēs facti sunt, lēgātōs ad eum mittunt. カエサルがやってくることに付いて知らされたとき、彼らは彼に使者を送る(送った)。

- (a) この構文では、完了時制の代わりに歴史的現在時制が使われることがあります。

2. **ut, ubi, siml atque** (~したときはいつも) が歴史的時制に続いて「何度も繰り返される行動」を表すとき、直説法過去完了時制をとります。(§288,3, §302,3 と比べてください)

ut quisque Verris animum offenderat, in lautumiās statim coniciēbātur. ウェッレスの心を怒らせたときは、誰もがいつもただちに石切り場へ投げ込まれた。

hostēs, ubi aliquōs ēgredientēs cōspexerant, adoriēbantur. 敵は、人が下船してくるのを見つけると、いつも攻撃した。

- (a) Livius 以降の歴史家においては、このような反復行動(「不定の繰り返し」)は接続法未完了と接続法過去完了で表すようになりました。

id ubi dixisset hastam mittēbat. それを言った後で、いつも彼は槍を投げたものだ。

3. 上記 1,2 の接続詞の後に直説法過去完了が続いて、一回きりの出来事を指すことも多いです。特に **postquam** が明確な時間間隔(日、月、年など)の表現の中で使われるときは必ず直説法過去完了になります。例:**post tertium annum quam, trienniō postquam.**

quīnque post diēbus quam Lūcā discesserat, ad Sardiniam vēnit. ルーカを出発して五日後に、彼はサルディニアに到着した。

postquam occupātae Syrācūsae erant, profectus est Carthāginem. シュラクーサイが占領されたあと、彼はカルターゴへ出発した。

4. 直説法未完了も時折現れることがあります。その場合は「継続した状態」を表します。

postquam Rōmam adventābant senātus cōsultus est. 彼らがローマに近づいてきた後で、元老院は助言を求められた。

postquam strūcti utrimque stābant 彼らが両側に配置され、持ち場についた後で

5. **postquam, posteāquam** は、まれに **cum** の類推から接続法をとることがあります。ですが、それは歴史的時制

に限られます。

posteaquam sūmptuōsa fieri fūnera coepissent, lēge sublāta sunt. 葬儀は贅沢になりだしたあと、法にゆだねられた。

cum で始まる時の節

A. 過去を指す **cum**

288. 1. **cum** が過去を指すときは

A. もし直説法 (未完了・歴史的完了・過去完了) ならば、何かが起きた「時点」を表します。

B. もし接続法 (未完了・過去完了) ならば、何かが起きた「状況・環境」を表します。

• 直説法

an tum erās cōsul, cum in Palātiō mea domus ārdēbat. あるいは君は、パラティウムで私の家が燃えたそのときに、執政官だったのかい？

crēdō tum cum Sicilia flōrēbat opibus et cōpiis magna artificia fuisse in eā insulā. シキリアが富と資源で栄えていたその頃は、その島にはすごい技術があったのだと僕は信じている。

eō tempore pārui cum pārere necesse erat. 彼は従う必要があったそのときは、従った。

illō diē, cum est lāta lēx dē mē その日、僕に関する法律が提案された日

• 接続法

Lysander cum vellet Lycūrgī lēgēs commūtāre, prohibitus est. リュサンドロスはリュクールゴスの法律を変えようとして、阻止された。

Pythagorās cum in geōmetriā quiddam novī invēnisset, Mūsīs bovem immolāsse dicitur. ピュタゴラスは幾何学について何か新しいことを発見したあとで、ムーサ神へ牛を生贄にささげたといわれている。

(a) この節で直説法が使われることは、接続法よりずっと少ないです。直説法が用いられるのは、通例主節が **tum, eō diē, eō annō, eō tempore** など **cum** と相関する語を含んでいるときだけです。直説法を使うべきか接続法を使うべきかが、書き手の視点に全てゆだねられることもあります。

2. **Cum Inversum**: **cum** 節と主節の論理的な順番が逆転していることがあります。その場合の **cum** は、直説法完了か直説法歴史的現在を伴って、「そのとき (突然)...」という意味になります。主節は **jam, vix, aegrē, nōndum** を含むことが多いです。

jam Galli ex oppidō fugere apparābant, cum matrēs familiae repente prōcurrērunt. ガッリア人が町から撤退する準備をしていると、突然主婦たちが突っ込んできた。(cum の前後が、意味内容と逆転している)

Trēvirī Labiēnum adorirī parābant, cum duās legiōnēs vēnisse cognōscunt. トレーウィリー人がラビエヌスを攻撃する準備をしていると、(不意に) 二人の兵士がやってきたのに気づいた。

3. 過去に繰り返された行動を表すときは、**cum** のあとに直説法を続けます。特に直説法過去完了が多いです。(§287,2,§302,3 と比べてください)

cum ad aliquod oppidum vēnerat, eādē lecticā ad cubiculum dēferēbātur. 彼がどこかの町に到着したときは、いつも同じ輿で寝室へ運び込まれた。

cum equitātus noster sē in agrōs ējēcerat, essedāriōs ex silvīs ēmittēbat. 我々の騎兵隊が耕地に突進したとき、彼はいつも森から戦車兵を放った。

(a) 接続法未完了や接続法過去完了が使われることも時々あります。

saepe cum aliquem vidēret minus bene vestītum, suum amiculum dedit. しばしば彼が誰かもっ

とみすばらしい格好の人を見たときは、いつも自分の上着をやった。

cum prōcurrissent, Numidae effugiēbant. ヌミディア人は出撃しても、いつも逃げ出した。

この構文は Livius 以降の歴史家によく見られます。

B. 現在・未来を指す cum

289. **cum** が現在・未来を指すときは、通例直説法をとります。

tum tua rēs agitur, pariēs cum proximus ardet. 隣の家の壁が燃えていたら、そのときはあなたのものも危ない。

cum vidēbis, tum sciēs. 見ればわかるよ。

1. 現在・未来の直説法は、繰り返される行動を表すこともできます。

stabilitās amicitiae cōfirmārī potest, cum hominēs cupidinibus imperābunt. 人々が欲望を制御すれば、いつでも友情の安定性は強固にすることができる。

C. 他の cum の用法

290. 1. 解説の **cum**: **cum** + 直説法は、一つの行為が別の行為と等しいことを表すために、しばしば使われます。

cum tacent clāmant. 彼らが黙るときは、叫んでいるのと同じだ。

2. **cum ... tum**: **cum ... tum** ~ が「...だけでなくとりわけ~も」という意味のとき、**cum** 節は直説法になります。

しかし **cum** が逆接の意味合いを帯びているときは、接続法になることもあります。

cum tē semper dilēxerim, tum tuis factis incēsus sum. いつも僕は君のことを愛してきたけれど、それと同時に、君のふるまいに駆り立てられたんだ。

antequam, priusquam で始まる時の節

A. 直説法とともに

291. **antequam** と **priusquam** (**ante ... quam, prius ... quam** と書かれることもある) は、直説法をとると「事実」を表します。

1. 現在時制・未来完了時制が使えます。

prius respondēs quam rogō 僕が質問する前に、君は答える。

nihil contrā disputābō priusquam dixerit. 彼がしゃべるまで、僕は反対意見を言わないだろう。

2. 完了時制も使えます。とくに否定文に続いて使われます。

nōn prius jugulandī finis fuit, quam Sulla omnēs suōs divitiīs explēvit. スッラが自分の(手下)全員を富で満たすまでは、殺戮が終わることはなかった。

B. 接続法とともに

292. **antequam** と **priusquam** は、接続法をとると「予測」を表します。

1. このことから、接続法は以下のような意味になります。

(a) 前準備を行う目的。

priusquam dimicārent, foedus ictum est. 彼らが戦闘する前に(することを想定して)、協定が結ばれた。

この使い方からの拡張で、接続法が「一般的な真実」を表すことも時折あります。その場合、予測の意味は消えてしまいます。

tempestās minātur antequam surgat. 嵐は起きる前に脅迫する。

(b) 予測されて未然に防がれる行動。

priusquam tēlum adici posset, omnis aciēs terga vertit. 槍を投げられる前に、全軍が背を返す。

(c) 予測されてとがめられる行動。

animum omittunt priusquam locō dēmigrent. 辞職するくらいなら彼らは死ぬ。

2. 予測の意味合いがほとんど消えている場合、人によっては、歴史的時制の後ろでは接続法未完了を使います。

sōl antequam sē abderet fugientem vidit Antōnium. 太陽は、沈む前にアントーニウスが逃げているのを見た。

dum, dōnec, quoad で始まる時の節

293. 1. **dum** 「～の間に」は通例、直説法の歴史的現在をとります。

Alexander, dum inter primōrēs pugnat, sagittā ictus est. アレクサンデルは、最前線で戦っている間に、矢に打たれた。

dum haec geruntur, in finēs Venellōrum pervēnit. これが行われている間に、彼はウェネッリー領へ着いた。

2. **dum, dōnec, quoad** 「～の限りは」は直説法をとります。

dum anima est, spēs est. 命がある限り、希望はある。

Lacedaemoniōrum gēns fortis fuit, dum Lycūrgi lēgēs vigēbant. リュクールゴスの法律が有効である限り、ラケダイモン族は強かった。

Catō, quoad vīxit, virtūtum laude crēvit. カトーは生きている限り、美德の名声が高くなった。

3. **dum, dōnec, quoad** 「～まで」は:

(a) 「事実」を表すときは直説法になります。

dōnec rediit, fuit silentium 彼が帰ってくるまでは、静寂だった。

ferrum in corpore retinuit, quoad renūntiātum est Boeōtiōs vīcissee. ボイオーティア人が勝ったという知らせを受けるまで、彼は武器を携帯し続けた。

i. Livius 以降の歴史家では、この意味の **dum, dōnec** はしばしば直説法でなく接続法をとります。

trepidatiōnis aliquantum ēdebant dōnec timor quiētem fēcisset. 恐怖で静かになるまで、彼らはかなり狼狽した。

(b) 「予測」「期待」を表すときは、接続法になります。

exspectāvit Caesar dum nāvēs convenirent. カエサルは船が集まるまで待った。

dum litterae veniant, morābor. 手紙が来るまで私は待つつもりだ。

名詞節

294. 名詞節は、節が全体として動詞の主語・目的語になります。またその他の格としても使われます。

A. 意志法から派生した名詞節

295. 意志法から派生した名詞節は、以下のような動詞と一緒に用いられます。

1. 「忠告」「要求」「命令」「急き立て」「説得」「勧誘」などの動詞¹。 **ut, nē, ut nē** を伴います。

postulō ut fiat. それがなされるように僕は要請する。(命令の接続法 **fiat** が従属節になったもの)

¹ 特に **moneō, admoneō; rogō, orō, petō, postulō, precor, flāgitō; mandō, imperō, praecipio; suādeō, hortor, cohortor; persuādeō, impellō.**

orat, nē abeās. 彼は君が去らないように願っている。

militēs cohortātus est ut hostium impetum sustinērent. 敵の突進に持ちこたえるよう、彼は兵隊を励ました。

Helvētiīs persuāsit ut exirent. 彼はヘルウェーティイー人に進軍するよう説得した。

(a) *jubeō* 「命令する」は、不定詞しかとりません。

2. 「承諾」「譲歩」「容認」「許可」などの動詞²。 *ut* を伴います。

huic concēdō ut ea praetereat. 私は彼に、それを見逃すことを許可する。(命令の接続法 *ea praetereat* の従属節形)

cōnsulī permissum est ut duās legiōnēs scriberet. 二つの軍団を登録することが執政官へ許可された。

3. 「妨げる」「阻む」動詞³。 *nē, quōminus, quīn* を伴います。

nē lūstrum perficeret, mors prohibuit. 彼が五年の任期を全うすることを、死が妨げた。(*nē lūstrum perficiat* が歴史的時制に従属した形)

prohibuit quōminus in ūnum coīrent. 彼は彼らが一か所に集まることを妨げた。

nec quīn ērumperet, prohibērī poterat. 彼が突進することも、止められなかった。

(a) *quīn* が使われるのは、「妨げる」動詞が否定文で使われているときか、否定を暗示する疑問文で使われているときに限られます。また、その場合に必ず使わなければいけないというわけでもありません。

4. 「決定」「決意」の動詞⁴。 *ut, nē, ut nē* を伴います。

cōstitueram ut prīdiē Īdūs Aquīnī manērem. イドゥスの前日 (=12 日) にアクイーヌムに滞在することを私は決めていた。

dēcrēvit senātus ut Opīmius vidēret. 元老院はオピーミウスが(それを)見ることを決定した。

convēnit ut ūnīs castrīs miscērentur. 彼らが一つの陣地にまとめられることが同意された。

5. 「努力」の動詞⁵。 *ut, nē, ut nē* を伴います。

fac ut eum exōrēs. 奴を説き伏せるようにせよ。

cūrā ut vir sis. お前が男らしい男であるよう取り計らえ。

labōrābat ut reliquās civitatēs adjungeret. 残りの国を味方にしようと彼は努力した。

(a) *cōnor* は不定詞しかとりません。

注意: 上記の動詞は、すべて不定詞もとることが可能です。特に詩では不定詞が多いです。

6. その他いくつかの表現。 *necesse est, reliquus est, sequitur est, licet, oportet* など。

sequitur ut doceam. 次は僕が説明する番だ。

licet redeās. 君は帰っても構わない。

oportet loquāmur. 僕らは言わなくてははいけない。

licet, oportet に *ut* がいないことについては 8. を参照。

7. 同様の表現に *nūlla causa est cūr, quīn* や *nōn est cūr* や *nihil est cūr* などが含まれます。

nūlla causa est cūr timeam. 僕が恐れる理由はない。(もともとは審議の接続法「どうして恐れる必要があるのか」)

nihil est quīn dicam. 僕が言わない理由はない。

8. 上記の動詞のうちの多くが、単純な接続法を時々 *ut* なしでとります。その場合、*ut* が省かれた、と考えるのは間違いです。これらは、*ut* 節が現れる以前に存在した、より初期的な表現形なのです。 *necesse est, licet, oportet*

² 特に *permittō, concēdō, nōn patior*。

³ 特に *prohibeō, impediō, dēterreō*。

⁴ 特に *cōstituō, dēcernō, cēnseō, placuit, convenit, paciscor*。

⁵ 特に *labōrō, dō operam, id agō, contendō, impetrō*。

(6. 参照) は必ず **ut** なしで使います。他の例を挙げると:

eōs moneō desinant. 僕は彼らにやめるよう警告する。

huic imperat adeat civitatēs. 彼は奴にその国々を訪ねるよう命令する。

B. 願望法から派生した名詞節

296. 願望法から派生した名詞節は以下の動詞とともに使われます。

1. 「願望」「欲望」の動詞、特に **cupiō, optō, volō, mālō. ut, nē, ut nē** を伴います。

optō ut in hōc iudiciō nēmō improbus reperiātur. この法廷に一人も悪人が見つからないことを願います。(ここで **ut reperiātur** は、直接文における単純な願望の接続法 **reperiātur**。(見つかりますように)に当たります)

cupiō nē veniat. 彼には来ないでほしい。

(a) この種の動詞は、時々 **ut** なしで単純な接続法をとることがあります (§295,8)。

velim scribās 君が書いてくれたら嬉しい。

vellem scripsisset. 彼が書いてほしかった。

2. 「恐怖」の動詞。 **timeō, metuō, vereor** など。この場合は、**nē** だと「~するのが怖い」、**ut** だと「~しないのが怖い」という意味になります。

timeō nē veniat. 彼が来るのではないかと心配だ。(= 心配だ、来ないでほしいなあ！)

timeō ut veniat. 彼が来ないのではないかと心配だ。(= 心配だ、来てほしいなあ！)

(a) **nē nōn** を **ut** の代わりに使うことがあります。特に「恐怖」の動詞が否定されているとき、もしくは書き手が従属節の中の特定の語を強調したいときに多いです。

nōn vereor nē hōc nōn fiat. 僕はこれが起こらないのではないかと心配していない。

vereor nē exercitum firmum habere nōn possit. 彼が強い軍隊を持つことができないのではないかと心配だ。

C. 結果の名詞節

297. 結果の名詞節は **ut, ut nōn** で始まります。結果の名詞節は純粋な結果節の発展形で、以下のような動詞と一緒に使います。

1. 「する」「達成する」動詞の目的語として (特に **faciō, efficiō, cōficiō**):

gravitās morbī facit ut medicīnā egeāmus. 病気の深刻さは、私たちが薬を必要のようにしている。

2. いくつかの非人称動詞の主語として (特に **fit, efficitur, accidit, ēvenit, contingit, accēdit, fierī potest, fore, sequitur, relinquitur**):

ex quō efficitur, ut voluptās nōn sit summum bonum. そのことから言えることは、快樂が最高の善とは限らないということだ。

ita fit, ut nēmō esse possit beātus. 結局誰も幸せになれない。

accēdebat ut nāvēs deessent. さらに (=**付け加えることには**) 船がなかった。

3. 以下のような表現の述語名詞もしくは同格語として: **jūs est, mōs est, cōsuētūdō est**、中性代名詞 **hōc, illud** など

est mōs hominum ut nōlint eundem plūribus rēbus excellere. 同じ人が複数のことに秀でていてほしくないと思うのは、人の常である。

D. quīn で始まる名詞節

298. **quīn** で始まる名詞節は、否定文・疑問文で「疑い」「怠慢」のような動詞とともに使います。主語か目的語になります。特に **nōn dubitō** 「私は疑わない」、**quis dubitat** 「誰が疑おうか?」、**nōn (haud) dubium est** 「疑いはない」などです。接続法になります。

quis dubitat quīn in virtūte dīvitiae sint? 美德の中に富がないなどと、誰が考えようか?

nōn dubium erat quīn ventūrus esset. 彼がやってくることに疑いはなかった。

1. Nepos, Livius, Augustus 以降の作品では、**nōn dubitō** の後ろで、**quīn** 節の代わりに不定詞が使われることが時折あります。

nōn dubitāmus inventōs esse. 彼らはきっと見つかったと僕らは思う。

2. **nōn dubitō** 「私はためらわない」は通例不定詞が続きますが、**quīn** が続くことも時々あります。

E. **quod** で始まる名詞節

299. 1. **quod** 「～ということ」は、直説法の名詞節を作ります。特に次のような使われ方をします。

(a) **hōc, id, illud, illa, ex eō, inde** など、先行する指示詞と同格に。

illud est admirātiōne dignum, quod captivōs retinendōs cēnsuit. そのことは、すなわち、囚人は留め置かれるべきと彼が考えたことは、賞賛に値する

hōc ūnō praestāmus vel maximē ferīs, quod colloquimur inter nōs. 僕らは互いに話をしあうという、この一点において、明らかに野獣に勝っている。

(b) **bene fit, bene accidit, male fit, bene facere, mīrror** などに続いて

bene mihi ēvenit, quod mittor ad mortem 死へと運ばれることは私にとって幸いだ。

bene fēcistī quod mānsistī. 君は良く残ってくれた。

2. **quod** が文頭で使われると、時々「～ということ (に関して) は」という意味合いになります。

quod multitudinē Germānōrum in Galliam trādūcō, id meī mūniendī causā faciō. 大勢のゲルマニア人たちを私がガッリアへ率いていくことは、私は自分を鍛えるために行っている。

quod mē Agamemnona aemulārī putās falleris. 君は僕がアガメムノンのまねをしていると思っているようだが、間違っている。

F. 間接疑問

300. 1. 間接疑問とは、「尋ねる」「質問する」「教える」などの動詞とともに使われる名詞節です。間接疑問の中では、動詞は接続法になります⁶。直接疑問文 (§162) と同様に、以下のような語で始まります。

(a) 疑問代名詞・疑問形容詞。

dīc mihi ubi fueris, quid fēceris. 君がどこにいて、何をしたのか私に教えてくれ。

oculīs jūdicārī nōn potest in utram partem fluat Arar. アラル川がどちらの向きに流れているのか、目では判断できない。

bis bīna quot essent, nesciēbat. 二かける二がいくつになるのか、彼は知らなかった。

注意: 間接疑問と関係詞節は注意して区別してください。両者の違いは以下の例文に明らかに見ることができます。

effugere nēmō id potest quod futūrum est, 来るべきことから逃れられる人は誰もいないが、**saepe autem ne ūtile quidem est scīre quid futūrum sit.** 逆に、どうなるのか知ることが役にすら立たない

⁶ 感嘆文も、間接話法になるときは接続法をとります: **cōsiderā quam variae sint hominū cupīdinēs** 人の欲望がなんと多様なことか、考えよ (直接話法: **quam variae sunt hominū cupīdinēs**)。)

ことも多い。

(b) **num, -ne**. どのような回答を期待しているかの方向性はありません。

Epamīnōndās quaesīvit num salvus esset clipeus. もしくは

Epamīnōndās quaesīvit salvusne esset clipeus. エパメイノーンダースは盾は無事かと聞いた。

disputātur num interīre virtūs in homine possit. 問題は、美德が人の中で死ぬことがありうるかだ。

ex Sōcrate quaesītum est nōnne Archelāum beātum putāret. アルケラーオスは幸せだと思わないのかとソークラテースは訊かれた。

注意: 上の最後の例のように、**nōnne** は **quaerō** の後にもみ使われます。

2. 間接疑問は、しばしば直接話法における審議の接続法を表します。

nesciō quid faciam. 僕はどうしたらいいのかわからない。(直接話法: **quid faciam!** 何をしたらいいというんだ!)

3. 「期待」「努力」の動詞 (**exspectō, cōnor, experior, temptō**) の後ろでは、時々 **sī** で始まる間接疑問が使われます。

cōnantur sī perrumpere possint. 彼らは突破できるかどうか努力している。

(a) 間接疑問を支配する動詞が省略されることがあります。

pergit ad proximam spēluncam sī forte eō vēstīgia ferrent. ひょっとしたら足跡がそこへ続いているのではないかと(いうことを確かめるために)彼は一番近くの洞窟へと進んだ。

4. 間接二重疑問は、直接二重疑問文 (§162,4) と同じ不変化詞で始まるのが普通です。

- **utrum ... an**
- **-ne ... an**
- **— ... an**
- **— ... -ne**

例:

quaerō utrum vērum an falsum sit.

quaerō vērumne an falsum sit.

quaerō vērum an falsum sit.

quaerō vērum falsumne sit. それは本当か嘘かと僕は訊く。

(a) 二重疑問の二つめの部分が、「...か、あるいはそうでないか」というときは、**an nōn** も使われますが、それより **necne** を使うのが普通です。

dī utrum sint necne, quaeritur. 神がいるのかいないのかが質問される。

5. **haud sciō an, nesciō an** は、二重疑問の最初の部分を省略して使われて、「おそらく...と思う」という意味になります。接続法が使われます。

haud sciō an ita sit. 多分そうだと思う。

6. 初期のラテン語において、もしくは詩においては、時々間接疑問に直説法が使われることもあります。

条件文

301. 条件文は、「条件節 Protasis」と「帰結節 Apodosis」の二つの部分からなる複文 (§164) です。条件節は普通 **sī, nisi, sīn** で始まります。条件文には以下の種類があります。

第一型: 仮定の現実性について何も暗示しない場合

302. 1. この場合、条件節も帰結節も通例直説法になります。全ての時制が使われます。

sī hōc crēdis, errās. もし君がそれを信じているなら、間違いだ。

nātūram sī sequēmur, numquam aberrābimus. 自然に従うことにすれば、決して迷わないだろう。*sī hōc dixistī, errāstī.* もし君がこう言ったとするなら、君は間違っていた。

2. 条件文に接続法現在もしくは接続法完了の不定二人称単数 (§356) が使われることがあります。その場合も直説法の意味になります。

memoria minuitur, nisi eam exerceās. 記憶力は訓練しなければ落ちる。

3. 条件節が繰り返しの行動 (§287,2,§288,3) を表す場合も、ここに属します。

sī quis equitum dēciderat, peditēs circumsistēbant. もし騎馬隊の誰かが落ちたときは、歩兵隊が取り囲んだ。

(a) Livius 以降の作家は、条件節で繰り返しの行動を表すのに、直説法の代わりに歴史的時制の接続法を使いました。

sī dicendō quis diem eximeret もし誰かが抗弁で一日を無駄にしたら (いつも)

sī quandō adsidēret 彼が隣に座ったらいつも

4. 意味上必要ならば、第一型の条件文の帰結節に命令法を使っても構いません。同様に、独立文における接続法 (奨励・審議など) を用いることもできます。

sī hōc crēditis, tacēte. もしこれを信じるならば、みなさんお静かに。

sī hōc crēdimus, taceāmus. もしこれを信じるならば、みんな静かにしましょう。

第二型: 仮に、の場合

303. この場合は、条件節も帰結節も通例接続法 (現在・完了) にします。

sī hōc dicās, errēs. もしくは

sī hōc dixerīs, errāverīs. 仮に君がそういうなら、間違いだ。

sī velim Hannibalis proelia omnia dēscribere, diēs mē dēficiat. 仮にハンニバルの全ての戦いを描こうと思ったら、時間が足りないだろう。

mentiar, sī negem. 仮に否定すれば、僕は嘘を言うことになる。

haec sī tēcum patria loquātur, nōne impetrāre dēbeat? もし仮に故郷が君とこの話をするならば、故郷は当然 (要求したものを) 得るに値するのではないかね?

1. この種の条件文の帰結節における接続法は、一種の可能性の接続法です。

2. 第二型の帰結節の中で、直説法を使うことも時々あります。その場合は、接続法のときよりも帰結節の可能性がより確実だと筆者は訴えています。

aliter sī faciat, nūllam habet auctōritātem. 仮に別のことをすれば、彼は権威をすべて失う。

第三型: 事実と反する仮定

304. 1. この場合は通例、条件節も帰結節も接続法未完了 (現在 を指すとき)・接続法過去完了 (過去 を指すとき) を使います。

sī amīcī meī adessent, opis nōn indigērem. もし (実際にはここに居ない) 友達がここに居たら、助けが足りないことはないだろうに。(実際は足りない)

sī hōc dixissēs, errāssēs. もしこれを君が言ったなら (実際は言ってない)、君は間違っていたよ。(実際は間違わなかった)

sapientia nōn expeterētur, sī nihil efficeret. 知恵はもし何も生み出さないなら望まれないだろう。

cōnsilium, ratiō, sententia nisi essent in senibus, nōn summum cōnsilium majōrēs nostri appellassent senātum. 思慮、分別、思想がもし老人になれば、最高議会を僕らの先祖は元老院とは呼ばなかったろう。

2. 接続法未完了が過去を指していることも時々あります。特に、それが「継続する行動」「今もそうある状態」を指しているときに多いです。

Laelius, Fūrius, Catō sī nihil litterīs adjuvārentur, numquam sē ad eārum studium contulissent. ラエリウス、フーリウス、カトーはもし読み書きに(今も継続的に)助けられていなかったら、決してその勉学に専念することはなかったろう。

num igitur sī ad centēsimum annum vīxisset, senectūtis eum suae paenitēret? それではもし彼が百年まで生きていたとしたら、かれは自分の老年を(今も)後悔しているとも？

3. この型の条件文の帰結節は、時々直説法(未完了・完了・過去完了)になります。

- (a) しばしば「可能性」「義務」「必要」の表現で。

nisi fēlicitās in sōcordiam vertisset, exuere jugum potuērunt. 幸福が怠惰に転じてしまわなければ、彼らはくびきをはずすことができたかもしれない。

注意: この種の文では、「可能性」が事実と反するものではありません。事実と反するものは、文脈から与えられる、頭の中にしかないものです。たとえば上の例文では、論理的な帰結は **et exuissent**(はずす可能性があって、「そしてはずしただろう」)です。もし「可能性」自体が事実と反するならば、接続法が使われます。

eum patris locō colere dēbēbās, sī ūlla in tē pietās esset. もし君に何か信仰心があるならば、彼を父として敬愛するべきだろう。

- (b) 両方に迂言的活用形が使われているとき。

sī Sēstius occisus esset, fuistisne ad arma itūrī? もしセースティウスが殺られていたら、あなたらは戦場へ行っていたかね？

sī ūnum diem morātī essētis, moriendum omnibus fuit. もし一日遅れていたら、君たちはみんな死ななくてはいけなかったろう。

sī なしの条件節

305. 1. 条件節は **sī** で始まるとは限りません。一単語や一句で示されたり、文脈から暗示されたりすることもあります。

aliōquī haec nōn scriberentur. そうでなければ、これらは書かれていないだろう。

nōn potestis, voluptāte omnia dirigentēs, restinēre virtūtem. 全てを快楽によって方向づけるなら、君たちは美德を保てない。

2. 命令文や命令の接続法が条件節として使われることがあります。

crās petitō, dabitur. 明日頼みなさい。そうすれば与えられるでしょう。

haec reputent, vidēbunt. 彼らにこれらを鑑みさせなさい。そうすればわかるでしょう。

rogēs Zēnōnem, respondeat. ゼノンに聞きなさい。仮にそうすれば、答えてくれるかもしれません。

nisi, sī nōn, sīn

306. 1. **nisi**「～でなければ」は、条件節全体の否定です。**sī nōn** は一つの単語を否定します。

ferreus essem, nisi tē amārem. もし君を愛していなければ、僕は残酷になれるのに。

ferreus essem, sī tē nōn amārem. もし君への気持ちが愛でなければ、僕は残酷になれるのに。

一つめの例では、否定されるのは「君を愛している」ことです。二つめの例では、「愛している」ことが否定されます。

2. *sī nōn* (*sī minus*) は通例、次のように使われます。

(a) 帰結節に *at, tamen, certē* が使われるとき。

dolōrem sī nōn potuerō frangere, tamen occultābō もし悲しみをかき消すことができなかつたら、僕はそれを隠すだろう。

(b) 肯定の条件節が、否定の形で繰り返される時。

sī fēceris, magnam habēbō grātiām; sī nōn fēceris, ignōscam, もし君がやってくれるなら、僕は深く感謝しよう。もし君がやってくれないなら、僕は許そう。

i. ですが繰り返しのところで動詞を省略するときは、使えるのは *sī minus, sīn minus* のみです。

hōc sī assecūtus sum, gaudeō; sī minus, mē cōnsōlor. もし達成できたら、僕は嬉しい。もしできなかったら、僕は自分を慰める。

3. *sīn*: 条件節の後ろにもう一つ、同様の形式で反対の意味の条件節が続くとき、二つ目の条件節は *sīn* を冠します。

hunc mihi timōrem ēripe; sī vērus est, nē opprimar, sīn falsus, ut timēre dēsinam. この僕の恐怖を取り払ってくれ。もしそれが真実なら、僕が押しつぶされないように。もしそれが嘘ならば、僕が怖さを忘れられるように。

4. *nisi* は否定詞 (*nōn, nēmō, nihil*) と一緒に使うことが好まれます。

nihil cōgitāvit nisi caedem. 彼は殺人のこと以外は何も考えなかった。

nōn と *nisi* は離して使うほうがラテン語らしいです。

5. *nisi forte, nisi vērō, nisi sī* 「ひょっとして...でないならば」(皮肉の意味のときが多いです) は、いつも直説法をとります。

nisi vērō, quia perfecta rēs nōn est, nōn vidētur pūnienda. ひょっとして違うならば、事は完了していないのだから、罰するには値しないと思われる。

比喩の条件節

307. 1. 比喩の条件節は *ac sī, ut sī, quasi, quam sī, tamquam sī, velut sī* で始まります。*velut, tamquam* だけで始まることもあります。動詞は接続法になり、通例省略 (§374,1) を伴います。以下の例をご覧ください。

tantus patrēs metus cēpit, velut sī jam ad portās hostis esset. 元老院議員たちは、あたかも門に敵がいる(ときに感じる)かのような恐怖にとらわれた。

sed quid ego hīs testibus ūtor quasi rēs dubia aut obscura sit. しかしあたかも事態が疑わしい、あるいはあいまいである(ときに証人を使う)かのように、どうしてこれらの証人を私が使うというのか。

serviam tibi tam quasi ēmeris mē argentō. 君が僕を金で買った(ときに僕がかしづく)かのように、僕は君にかしづく。

2. ラテン語のこの種の文においては、通常の時制の一致が行われます。つまり第二例・第三例のように、主節が主時制ならば従属節も主時制(現在・完了)になります。これは英語ならば過去形・過去完了 (*as if it were, as if it had been*) となるところです。

譲歩節

308. 「譲歩節」という用語は、「～と仮に認めよ」という意味あいの、命令の接続法 (§278) から発展した節を指します。

sit fūr, sit sacrilegus, at est bonus imperātor. 泥棒であろうが、背信者であろうが、彼は優れた指導者だ。

haec sint falsa これが嘘だとしても

nē sit summum malum dolor, malum certē est. 痛みは最たる悪ではないにせよ、悪であることは確かだ。

反意節 *quamvis, quamquam* など

309. *quamvis, quamquam, etsi, tametsi, cum* 「～ではあるが」で始まる節は、しばしば「譲歩節」に分類されますが、純粋な譲歩節とは確かな違いがあります。通例、これらの節は何かを「仮に認めなさい、それでも…」という意味ではなく、何か「～ではあるけれども、しかし」真実だ、という意味になります。したがってこれらの節は反対の意味を強調する本物の従属節であり、反意節と呼ばれます。反意節は、それを導入する不変化詞によって意味が違い、構文も違います。

1. *quamvis* 「どれだけ…しようとも、…であろうとも」は、事実を述べる節ではなく、頭の中にしかない行動を表す節を導きます。節の中では接続法が使われ、通常接続法現在になります。

hominēs quamvis in turbidīs rēbus sint, tamen interdum animīs relaxantur. 人はどんな混乱の中にあるろうとも、ときには心を緩ませる。

nōn est potestās opitulandī reī pūblicae quamvis ea premātur periculīs. どれだけ国が危険におびやかされようと、国を助ける機会がない。

2. *quamquam, etsi, tametsi* 「～ではあるが」は、事実の節を導きます。節の中では直説法が使われます。どの時制も使われます。

quamquam omnis virtūs nōs allicit, tamen justitia id maxime efficit. 全ての美德は僕らを惹きつけるけれど、公正さは特にそうだ。

Caesar, etsi nōndum cōnsilium hostium cognōverat, tamen id quod accidit suspicābātur. カエサルはまだ敵の目的に気付かなかったが、(実際に)起きるものは想定していた。

- (a) *etsi* 「～だが」と *etsi* 「たとえ～でも」は区別してください。後者は条件詞であって、*si* と同じすべての構文 (§302-§304) を取ります。

3. *cum* 「～ではあるが」は接続法をとります。

Atticus honōrēs nōn petiit, cum eī patērent. アッティカ人はその(=名誉の)影響は受けたが、名誉を求めなかった。

4. *licet* は、時々動詞としての意味 (§295,6) を失って、接続詞のように使われることがあります。そのときの意味は「～だが」になります。接続法現在・接続法完了をとります。

licet omnēs terreōrēs impendeant, succurram. 全ての恐怖が脅かしてくるが、僕は助けに行こう。

5. *quamquam* は「それにもかかわらず」という意味でしばしば主節を導きます。

quamquam quid loquor? それなのになぜ私は話すのか？

6. アウグストゥス以降では、*quamquam* が接続法をとったり、*quamvis* が直説法もしくは接続法をとって事実を言い表したりすることが、自由に行われました。

quamquam movērētur hīs vōcibus 彼はこれらの言葉に心を動かされたが

quamvis multī opīnārentur たくさんの人が想像したが

quamvis infēstō animō pervēnerās 君は敵愾心をもってやってきていたが

願望と但し書きの節: *Dum, Modo Dummodo*

310. これらの不変化詞には接続法が続きます(否定は *nē*)。そして二つの使い方があります。

1. 主動詞の主語が思っている「願望」を表す節を導きます。

multī honesta neglegunt dummodo potentiam cōsequantur. 多くの人が、力を手にするとなれば誠実さを捨てる。(「力を手に入れられたらなあ!」)

omnia postposuī, dum praeceptis patris pārērem. 父の教えにしたがおうとして、私は全てを後回しにした。

nīl obstat tibi, dum nē sit dītior alter. 隣人が(自分より)金持ちにならないようにするとなれば、君を妨

げるものは何もない。

2. 但し書き「～という条件ならば」を表します。

öderint, dum metuant. 彼らが怖がるなら、憎ませなさい。

manent ingenia senibus, modo permaneat studium et industria. 熱意と勤勉さえ続くなれば、老年にも能力は保たれる。

nūbant, dum nē dōs fiat comes. 持参金を伴わないなら、結婚させよ。

関係詞節

311. 関係詞節は関係代名詞・関係形容詞・関係副詞で始まります。

312. 1. 関係詞節は普通直説法にします。特に、重ねたり、後ろに**-cumque**をつなげて作る総称関係詞で始まる節は直説法です。

quidquid id est, timeō Danaōs et dōna ferentēs. それが何であれ、贈り物を持ってきてもギリシャ人は怖い。

quidquid oritur, quālecumque est, causam ā nātūrā habet. 何が生じても、それがどんな種類でも、その原因は自然にある。

2. §302-§304 の三つの型の条件文は全て、関係詞だけを使って作ることができます。関係詞の種類は問いません。

quī hōc dicit, errat. これを言う人は、間違っている。(第一型)

quī hōc dicat, erret. 仮にこれを言う人がいるなら、その人は間違っている。(第二型)

quī hōc dixisset, errāset. もしこれを言う人がいたとしたら、間違っていただろう。(第三型)

間接話法 (ŌRĀTIŌ OBLĪQUA)

313. ある人の発言や思考をそのまま再現するとき、それを直接話法 (*ōrātiō recta*) といいます。「カエサルは『サイは投げられた』と言った」は直接話法です。他方で、ある人の発言や思考が「言う」「考える」動詞に従属して表現される時、それは間接話法 (*ōrātiō obliqua*) といいます。「カエサルはサイが投げられたと言った」「カエサルは自分の軍が勝ったと思った」は間接話法です。

1. 間接話法を導くのによくつかわれる動詞は §331 を参照。

間接話法の法

平叙文

314. 1. 平叙文を間接話法にするときは、主節の動詞を不定詞に、主節の主語を対格に、全ての従属節を接続法にします。

Rēgulus dixit quam diū jūre jūrāndō hostium tenērētur nōn esse sē senātōrem. レーグルスは、敵への誓約を守ることにとらわれているあいだ自分は元老院議員ではないと言った。(直接話法: **quam diū teneor nōn sum senātor**)

2. 「言う」「思う」などの動詞は文脈から推測しなくてはいけないことが時々あります。

tum Rōmulus lēgātōs circā vicinās gentēs mīsīt quī societātem cōnūbiumque peterent: urbēs quoque, ut cētera, ex infimō nāscī. それからロームルスは周囲の隣接する部族に使者を送り、同盟と結婚を申し込んだ。都市が、他の都市と同じように、つましく始まります、と(使者は言った)。

3. 従属節が筆者の説明を表していて間接話法の本当の一部ではないとき、もしくは述べられている事実を強調するときは、直説法になります。

nūntiātum est Ariovistum ad occupandum Vesontionem, quod est oppidum maximum Sēquanōrum

contendere. アリオウストゥスはセークアーニー人の町のなかで最大のウェソンティオーを獲得するために、急いで向かっていると報告された。

4. 時折、従属節になっているのは形だけで、意味上は主節であることがあります。その場合、その節は不定詞になり、主語は対格になります。特に **quī** が **et hīc, nam hīc** などと同等な関係詞節に多いです。

dixit urbem Athēniēnsium prōpugnāculum oppositum esse barbarīs, apud quam jam bis classēs rēgiās fēcisse naufragium. アテーナイ人の都市は防波堤として野蛮人と対立し、その近くで (**apud quam = et apud eam**) 二度、王の艦隊が難破した、と彼は言った。

5. 不定詞の主語の対格は、主動詞の主語と同じとき省略されることが時々あります。また、文脈から容易に推測できる場合も省略されることがあります。

cum id nescire Māgō diceret. マーゴーがそれを知らないと言ったとき (**sē nescire** の **sē** が省略されている)

疑問文

315. 1. 直接話法での (普通の) 疑問文は、間接話法では通例接続法にします。

Ariovistus Caesarī respondit: sē prius in Galliam vēnisse quam populum Rōmānum. Quid sibi vellet? Cūr in suās possessionēs venīret? アリオウストゥスがカエサルに返答したことには、彼 (=カエサル) はローマ人より早くガッリアにやってきたが、それはどういう意図なのか? なぜ自分の領地にやってきたのか、と。(直接話法: **quid tibi vīs? cūr in meās possessionēs venīs?**)

2. 他方で修辞疑問文は、効果を狙って聞いただけであって、意味は強調の発言と同じですから、間接話法では通例不定詞になります。

(直接話法) **quid est levius?** これ以上些細なことがあるか?

(間接話法) **quid esse levius**

3. 直接話法での審議の接続法は、間接話法でも接続法のままです。

quid faceret (直接話法: **quid faciat?**) 彼に何をさせろというのだ、と

命令文

316. 直接話法における命令文や命令の接続法は、間接話法では全て接続法にします。

militēs certiōrēs fēcit paulisper intermitterent proelium しばし戦闘をやめるよう、彼は兵隊に指示した。(直接話法: **intermittite**)

1. この種の文の否定は **nē** です。

nē suae virtūtī tribueret. 自分の力のおかげと思わせるな、と

間接話法の時制

A. 不定詞の時制

317. 不定詞の時制は、§270 で述べた不定詞の通常の使い方にとります。

1. 完了不定詞は直接話法における全ての歴史的時制をあらわすことができます。たとえば:

sciō tē haec ēgisse. は

「私はあなたがこれをしてきたことを知っている」(直接話法: **haec agēbās**) かもしれないですし、

「私はあなたがこれをしたことを知っている」(直接話法: **haec ēgisti**) かもしれないですし、

「私はあなたが(そのときすでに)これをしてきたことを知っている」(直接話法: **haec ēgerās**) かもしれません。

B. 接続法の時制

318. 接続法の時制は、通常の時制の一致の原則にのっとりします。すなわち、「言う」動詞が主時制ならば話の節も主時制、「言う」動詞が歴史的時制ならば話の節も歴史的時制になります。ですが、意味を明確にするために歴史的時制に接続法現在を続けることもあります (Repraesentātiō)。

Caesar respondit, si obsidēs dentur, sēsē pācem esse factūrum. カエサルは、もし人質をくれたら、自分は和平に応じると返答した。

1. 完了不定詞の後の時制の一致については §268,2 を参照。

間接話法での条件文

第一型の条件文

319. 1. 帰結節: 帰結節は不定詞になり、直接話法での直説法の時制は、不定詞の対応する時制に変換されます。
(§270;§317,1)

2. 条件節: 条件節は接続法になり、時制の一致にしたがって時制を決めます。

- 直接話法: si hōc crēdis, errās.

間接話法:

dicō, si hōc crēdās, tē errāre.

dixī, si hōc crēderēs, tē errāre.

- 直接話法: si hōc crēdēs, errābis.

間接話法:

dicō, si hōc crēdās, tē errātūrum esse.

dixī, si hōc crēderēs, tē errātūrum esse.

- 直接話法: si hōc crēdideris, errābis.

間接話法:

dicō, si hōc crēdideris, tē errātūrum esse.

dixī, si hōc crēdidissēs, tē errātūrum esse.

- 直接話法: si hōc crēdebās, errāvistī.

間接話法:

dicō, si hōc crēderēs, tē errāvisse.

dixī, si hōc crēderēs, tē errāvisse.

1. 直接話法での直説法未来完了は、間接話法では通例接続法完了 (主時制に続くとき) もしくは接続法過去完了 (歴史的時制に続くとき) になることに注意してください。

第二型の条件文

320. 1. 帰結節: 直接話法での接続法現在は、間接話法では通例未来不定詞になります。

2. 条件節: 条件節は、時制の一致で要求される時制の接続法になります。

- 直接話法: si hōc crēdās, errēs.

間接話法:

dicō, si hōc crēdās, tē errātūrum esse.

dixī, si hōc crēderēs, tē errātūrum esse.

第三型の条件文

321. 1. 帰結節:

(a) 直接話法における接続法未完了は、未来不定詞になります。

i. ですがこの構文はまれで、ラテン語の古典では一例しか見つかりません (Caesar, V.29.2)。この規則が本当かどうか疑う学者もいます。

(b) 直接話法における接続法過去完了は:

i. 能動態ならば、**-ūrus fuisse** の形の不定詞にします。

ii. 受動態ならば、**futūrm fuisse ut + 接続法未完了** の形になります。

2. 条件節: 第三型の条件節は、常にそのまま保たれます。

• 直接話法: **sī hōc crēderēs, errārēs.**

間接話法:

dicō (dixī), sī hōc crēderēs, tē errātūrum esse.

• 直接話法: **sī hōc crēdidissēs, errāvissēs.**

間接話法:

dicō (dixī), sī hōc crēdidissēs, tē errātūrum fuisse.

• 直接話法: **sī hōc dixissēs, pūnītus essēs.**

間接話法:

dicō (dixī), sī hōc dixissēs, futūrum fuisse ut pūnirēris.

322. 過去を表す第三型条件文の帰結節が、結果の節や **quīn** 節 (**nōn dubitō** の後ろなど) にもなっているとき、**-ūrus fuerim** の形の接続法完了になります。

ita territī sunt, ut arma trādītūrī fuerint^{*7}, nisi Caesar subitō advēnisset. 彼らはとても怖がったので、カエサルが突然やってこなければ、武器を投げ出すところだった。

nōn dubitō quīn, sī hōc dixissēs, errātūrus fueris^{*7}. 君がもしこれを言ったなら、きっと間違っていたところだったと思う。

1. これは能動態に限ります。受動態なら、このような場合でもそのままの形になります。

nōn dubitō quīn, sī hōc dixissēs, vituperātus essēs. 君がもしこれを言ったなら、きっと怒られていたところだったと思う。

2. 間接疑問が第三型条件文の帰結節になるときは、**-ūrus fuerim** (まれに **-ūrus fuissēm**) が使われます。

quaerō, num, sī hōc dixissēs, errātūrus fueris (または fuissēs).

3. **potuī** が使われている第三型条件文の帰結節が従属節になるときは、接続法完了になるのが普通です。

conkursū tōtius civitātis dēfēnsī sunt, ut frīgidissimōs quoque ōrātōrēs populī studia excitāre potuerint. 全ての市民が結集することで彼らが追いやられたので、どんなに冷淡な弁論家をも人々の熱意は高揚させることができたろう。

暗黙の間接話法

323. 接続法が従属節のなかで用いられていて、それが間接話法であることが文脈からしかわらないことがよくあります。

dēmōnstrābantur mihi praetereā, quae Sōcratēs dē immortālitate animōrum disseruisset. 加えて私に説明

^{*7} trādītūrī fuerint, errātūrus fueris は、直接話法の trādītūrī fuerunt, errātūrus fuisti を表しているものとして扱われます (§304.3,b 参照)。

されたのは、ソクラテースが精神の不死について表明した(という)議論だ。

Paetus omnēs librōs quōs pater suus reliquisset mihi dōnavit. パエトゥスはお父さんが自分に残した(んだ、と言って)僕に全部の本をくれた。

接続法の引きずり

324. 1. 接続法に従属する節は、しばしばつられて接続法になります。特にその従属節が事実を表すのでなく、「ある一つのまとまった概念の中の、切り離せない部分」であるときに多いです。

nēmō avārus adhūc inventus est, cui, quod habēret, esset satis. 持っているものに満足しているような強欲な人が見つかったためしはない。

cum dīversās causās afferrent, dum fōrmam suī quisque et animī et ingeniū redderent 各人が自分の心や性向の形を報告している限りは、別々の議題を持ち込む(だけ)だったので

quod ego fatear, pudeat? 僕が告白していることは、恥すべきだろうか？

2. 同じように、不定詞に従属する節は、その不定詞とその従属節が密接につながって一つの全体をなす場合、接続法になります。

mōs est Athēnīs quotannis in contiōne laudārī eōs quī sint in proeliīs interfectī. アテーナイ人には、毎年戦闘で死んだ人が公の場で称えられる慣習があった。(「戦闘で死んだ人が公の場で称えられる」ということが、分割できない全体をなしています)

17.5 動詞の名詞形・形容詞形

325. 動詞の名詞形・形容詞形とは「不定詞」「分詞」「動名詞」「目的分詞」のことです。これらは全て、動詞の性質と名詞・形容詞の性質をあわせもちます。すなわち

・動詞として:

1. 副詞に修飾されます。
2. 目的語をとります。
3. 態と時制をもちます。

・名詞・形容詞として:

1. 曲用します。
2. 名詞・形容詞としての構文をとります。

17.5.1 不定詞

主語の対格をとらない不定詞

326. この不定詞は、主に主語・目的語として使われますが、述語名詞や同格語として使われることもあります。

注意: 不定詞は元々与格でした。詩では不定詞を「目的」を表すために用いますが、ここにその名残を見てとれます。

nec dulcēs occurrent ōscula nātī praeripere. そして愛しの子供たちが、くちびるを奪うためにやってくることもない。

A. 主語として

327. 1. 主語の対格をとらない不定詞は、esse やその他さまざまの非人称動詞の主語として用いられます。特に **opus est, necesse est, oportet, juvat, dēlectat, placet, libet, licet, praestat, decet, pudet, interest** など。

dulce et decōrum est prō patriā morī. 祖国のために死ぬことは、甘くて美しい。

virōrum est fortium toleranter dolōrem pati. 我慢強く痛みに耐えることは、強い男のものだ。

senātūi placuit lēgātōs mittere. 元老院は使節を送ることを決定した。(使節を送ることは元老院の気に入った)

2. 不定詞自身は主語なしで使われていても、述語名詞・形容詞が対格で現れることがあります。

aliud est irācundum esse, aliud irātum. 怒りやすいことは一つのことだが、怒っていることはそれとは別のものだ。(怒りやすいことと怒ることは別のことだ)

impūne quaelibet facere, id est rēgem esse. とがめられることなくなんでも好きなことをする、それが王たるということだ。

- (a) ですが **licet** に人の与格が使われているとき、**esse** + 述語名詞・形容詞はそれにつられて与格になります。

licuit esse otīōsō Themistoclī テミストクレスは休暇をとることを許された。

他の非人称動詞でも、ときどき同じことが起きます。

B. 目的語として

328. 1. 主語の対格をとらない不定詞は、たくさんの動詞の目的語として用いられます。そのとき不定詞は、同じ主語の別の行動を表します。特に以下のような動詞とともに用いられます。

- **volō, cupiō, mālō, nōlō**
- **dēbeo** (～すべきだ)
- **cōgitō, meditor** (～するつもりだ)
- **statuō, cōstituō** (～に決める)
- **neglegō** (無視する)
- **audeō** (思い切って～する)
- **vereor, timeō** (恐れる)
- **studeō, contendō** (努力する)
- **mātūrō, festinō, properō, contendō** (急いで～する)
- **parō** (用意する, **parātus** も同じ)
- **assuēscō, cōnsuēscō** (慣れる, **assuētus, īnsuētus, assuēfactus** も同じ)
- **incipiō, coepī, īstituō** (～し始める)
- **discō** (学ぶ)
- **pergō** (続ける)
- **sciō** (しかたを知る)
- **dēsīnō, dēsistō** (やめる)
- **soleō** (習慣にする)
- **possum** (～できる)
- **cōnor** (～してみる)

tū hōs intuērī audēs? 君はこの男たちを見る勇気があるか？

Dēmōsthenēs ad flūctūs maris declāmāre solēbat. デーモステネースは海の波のそばで演説するのを習慣にしていた。

2. これらの不定詞の述語名詞・形容詞は、主格につられます。

beātus esse sine virtūte nēmō potest. 勇気なしでは誰も幸せになれない。

Catō esse quam vidērī bonus mālēbat. カトーは、善人に見られるよりも、善人であることをむしろ好

んだ。

主語の対格をとる不定詞

329. この不定詞は、主に主語・目的語として使われますが、述語名詞や同格語として使われることもあります。

A. 主語として

330. 主語の対格付きの不定詞は、(不定詞だけのときと同様に) *esse* や非人称動詞の主語として使われます。特に *aequum est, ūtile est, turpe est, fāma est, spēs est, fās est, nefās est, opus est, necesse est, oportet, cōnstat, praestat, licet* などです。

nihil in bellō oportet contemnī. 戦場ではなにも見下すべきでない。

apertum est sibi quemque nātūrā esse cārum. みんな生来自分が可愛いのは、明らかだ。

B. 目的語として

331. 主語の対格付きの不定詞は、以下のような動詞の目的語になります。

1. 「言う」「思う」「知る」「感じる」のような動詞 (*verba sentiendī et declārandī*) と一緒に使われることがとても多いです。間接話法の主節は、通例この構文にするのでした。この構文をとる動詞を挙げると、たとえば *sentiō, audiō, videō, cognōscō; putō, jūdicō, spērō, cōnfidō; sciō, meminī; dicō, affirmō, negō* (~でないと言う), *trādō, nārrō, fateor, respondeō, scribō, prōmittō, glōrior* などです。また、*certiōrem faciō* (知らせる), *memoriā teneō* (覚えている) などの句でも使われます。

Epicūrēi putant cum corporibus simul animōs interire. エピクローロス派の人たちは、心は体と同時に死ぬと思っている。

Thalēs dixit aquam esse initium rērum. タレースは、水は物質の原初だと言った。

Dēmocritus negat quicquid esse sempiternum. デーモクリトスは、永遠のものはなにもないと言う。

spērō eum ventūrum esse. 彼が来てくれるのを僕は期待している。

2. *jubeō* (命令する)、*vetō* (禁止する) と一緒に使います。

Caesar militēs pontem facere jussit カエサルは、兵士たちに橋を作るよう命令した。

- (a) 行為を命令・禁止される人の名前が省略されるときは、*jubeō, vetō* とともに使われる不定詞は受動態になります。

Caesar pontem fierī jussit.

3. *patior, sinō* (許可する) と一緒に使います。

nullō sē implicārī negōtiō passus est. 彼はどんな面倒事に関わることも自分に許さなかった。

4. *volō, nōlō, mālō, cupiō* とともに使われる不定詞の主語が、主節の動詞の主語と違うとき。

nec mihi hunc errōrem extorquērī volō 私からこの過ちがもぎ取られることも、私は望まない。

eās rēs jactārī nōlēbat. 彼はそれらの事柄を議論してほしくなかった。

tē tuā fruī virtūte cupimus. 君に自分の男らしさを喜んでほしいと僕たちは願う。

- (a) 不定詞の主語と主節の主語が一致するとき、不定詞には通例主語の対格を用いませぬ (§328,1)。しかし特に *esse* や受動不定詞のとき例外が生じます。

cupiō mē esse clēmentem. 僕は穏便になりたい。

Timoleōn māluit sē diligī quam metuī. ティモレオンは、怖がらせられるよりも大事にされるほうが好きだった。

- (b) *volō* は (*ut* +) 接続法も使えます。また *nōlō* は *ut* なしの接続法が使えます。 (§296,1,a)

5. 感情 (「喜び」「悲しみ」「後悔」など) の動詞と一緒に。特に *gaudeō, laetor, doleō; aegrē ferō, molestē ferō,*

graviter ferō (苦しむ); **mīror, queror, indignor.**

gaudeō tē salvum advenire. 君が無事到着して僕は嬉しい。

nōn molestē ferunt sē libīdinum vinculis laxātōs esse. 欲望の束縛から解き放たれることを彼らは不快に思わなかった。

mīror tē ad mē nihil scribere. 君が僕にちっとも手紙をよこさないからびっくりしてる。

(a) これらの動詞は、不定詞の代わりに **quod** 節を目的語にすることがあります。(§299)

mīror quod nōn loqueris. 君が話さないから僕は驚いている。

6. 人と物の二つの対格をとる動詞 (§178,1) の中には、物の対格の代わりに不定詞を使えるものがあります。

cōgō tē hōc facere. これをやるよう僕は君に強制する。(cf. **tē hōc cōgo**)

docuī tē contentum esse. 満足することを僕は君に教えた。(cf. **tē modestiam docuī.** 僕は君に節度を教えた)

主節の動詞を受動態にする構文

332. 能動態で主語の対格付きの不定詞をとる動詞は、普通、受動態の人称構文にすることができます。以下のような動詞にこれが当てはまります。

1. **jubeor, vector, sinor**

mīlītēs pontem facere jussī sunt. 兵士たちは橋を作るよう命令された。

pōns fierī jussus est. 橋を作るように命令が下った。

mīlītēs castrīs exire vetitī sunt. 兵士たちは陣営から出ることを禁止された。

Sēstius Clōdium accūsāre nōn est situs. セースティウスはクローディウスを訴えることを許されなかった。

2. **videor** (見られる・見える)

vidētur comperisse. 彼は見つけたように思われる。

3. **dicor, putor, existimor, jūdicor** (全ての人称で)

dicitur in Italiam vēnisse. 彼はイタリアに来たと言われている。

Rōmulus p̄rimus rēx Rōmānōrum fuisse putātur. ロームルスはローマの最初の王だったと思われている。

4. **fertur, feruntur, trāditur, trāduntur** (三人称のみ)

fertur Homērus caecus fuisse. ホメーロスはめくらだったと言われている。

carmina Archilochī contumēliis referta esse trāduntur. アルキロコスの詩は、罵詈に満ちていると報告されている。

注意: 複合時制や迂言形のときは、最後の二つの種類の動詞 (3,4) は非人称構文をとることのほうが多いです。

trādītum est Homērum caecum fuisse. ホメーロスはめくらだったと言われている。

形容詞に伴う不定詞

333. **parātus, assuētus** など (§328,1) を除けば、不定詞を形容詞に伴わせる構文は詩の中か、もしくはアウグストゥス以降の散文にのみ現れます。

contentus dēmonstrāsse 証明したことに満足して

audāx omnia perpeti 全てに耐える勇敢さ

感嘆文における不定詞

334. 不定詞を感嘆に用いると、「軽蔑」「憤慨」「後悔」を暗示します。強意辞-ne が、節の中のどれかの語にくっつくことが多いです。

huncine sōlem tam nigrum surrēxe mihi. 今日の太陽がこんなに不吉に私のほうへ昇ってきたとは！
sedere tōtōs diēs in villā. 全日を牧場で過ごすとは。

歴史的不定詞

335. 不定詞はよく、直説法未完了の代わりに歴史的な言及に用いられます。主語は主格になります。

interim cottīdiē Caesar Haeduōs frūmentum flāgitāre. その間毎日、カエサルはアエドゥイー人に穀物を要求した。

17.5.2 分詞

分詞の時制

336. 1. 不定詞 (§270) と同様に、分詞の時制は相対的で、主節の動詞の時制に依存します。

2. 現在分詞は、主節の動詞と「同時の」行動を表します。

audiō tē loquentem. 君が(今)しゃべっているのを僕は聞く。

audiēbam tē loquentem. 君が(そのとき)しゃべっているのを僕は聞いた。

audiam tē loquentem. 君が(この先)しゃべっているのを、僕は聞くだろう。

(a) 現在分詞は、時折意欲の意味合いで使われます。

assurgentem rēgem resupīnat. 王が起き上がろうとしているところを、彼は押し倒した。

3. 受動完了分詞は、主節の動詞より「以前の」行動を表します。

locūtus taceō. 僕は(さっき)しゃべったので、今は黙っている。

locūtus tacuī. 僕は(それ以前に)しゃべったので、黙っていた。

locūtus tacēbō. 僕はしゃべってから、黙ろう。

4. ですから分詞の行動の絶対的な時刻は、主節の定形動詞を見ないと完全には決まりません。

5. 異態動詞の受動完了分詞のなかには、現在分詞として使われるものもあります: **arbitrātus, ausus, ratus, gāvīsus, solitus, ūsus, cōnfisus, diffisus, secūtus, veritus.**

分詞の使い方

337. 分詞は形容詞として、名詞・形容詞を限定的・叙述的に修飾します。

1. 限定用法: 特記することはありません。

glōria est cōsentiēns laus bonōrum. 名声は、誰もが認める善への褒賞だ。

Conōn mūrōs ā Lysandrō dīrutōs reficit. コノーンはリュサンドロスに壊された壁を修復した。

2. 叙述用法: この場合、分詞は従属節と置き換え可能なことが多いです。以下のようなことを表せます。

(a) 時間:

omne malum nascēns facile opprimitur 全ての悪は、生じたと同時に簡単につぶれる。

(b) 条件:

mente ūtī nōn possumus cibō et pōtiōne complētī. 食べ物と飲み物で満たされてしまったら、僕らは頭を使うことができない。

(c) 様態:

Solōn senēscere sē dicēbat multa in diēs addiscentem. ソロンは毎日たくさんのことを学びながら歳をとっていると云った。

(d) 手法:

sōl oriēns diem cōnficit. 太陽は、昇ってくることによって昼を作る。

(e) 逆接 (~だが):

mendāci hominī nē vērum quidem dīcentī crēdimus. 嘘つきの人を、たとえ本当のことを言っても、僕らは信じない。

(f) 原因:

perfidiam veritus ad suōs recessit. 裏切りを恐れたので、彼は自分の(部隊の)ところへ戻った。

3. **videō, audeō** は述語名詞の位置に不定詞のほか、分詞を使えます。

videō tē fugientem 僕は君が逃げているところを見た。

(a) **faciō, fingō, inducō** も同様です。

eīs Catōnem respondentem facimus. 彼らにカトーが返事をしているところを僕らは描写している。
Homērus Laërtem colentem agrum facit. ホメーロスはラエルテスが地を耕しているところを描写している。

4. 能動未来分詞 (**futūrus** を除く) は通例、迂言的活用でのみ使われます。しかし詩や後世の作品においては、独立して用いられました。その場合、特に「目的」を表します。

vērunt castra oppugnātūrī. 彼らは陣地を攻撃するためにやってきた。

5. 受動完了分詞はしばしば等位節と等価です。

urbem captam diruit. 彼は都市を奪って、破壊した。(彼は奪った都市を破壊した)

6. 受動完了分詞 + 名詞 は、抽象名詞 + それに従属する属格 に等価であることがあります。

post urbem conditam 都市の(属格) 建設(抽象名詞) のあとで

Quīnctius dēfēnsus クィンクティウスからの(属格) 防衛(抽象名詞)

quibus animus occupātus それによる心の(属格) 占領(抽象名詞)

7. **habēō** が述語名詞の位置に受動完了分詞をとるとき、その分詞は直説法完了か過去完了と同じような意味であることがあります。

equitātus quem coāctum habēbat. 彼が集めた騎兵隊

8. 動形容詞は「義務」「必要」などを表します。他の分詞と同様に、限定用法にも叙述用法にもなります。

(a) 限定用法は、叙述用法に比べて少ないです。

liber legendus 読まれるべき本

lēgēs observandae 遵守されるべき法律

(b) 叙述用法のほうが多いです。

i. 受動態迂言的屈折 (**amandus est** など) として。この用法では、自動詞は非人称的にのみ使われますが、普通の格(属・与・奪) 構文が使えます。

veniendum est. 来ることが必要だ。

obliviscendum est offensārum. 傷は忘れられなければならない。

numquam prōditōri crēdendum est. 裏切り者を決して信じてはいけない。(crēdo は自動詞なので非人称構文)

suō cuique ūtendum est iūdicīō 各々が自分の判断を用いるべきだ。

ii. **cūrō**(配慮する)、**dō, trādō**(引き渡す)、**relinquō**(放置する)、**concēdo**(譲る) などの動詞の、目的節の代わりに、もしくは目的を表すために用います。

Caesar pontem in Ararī faciendum cūravit. カエサルは、橋がアラル川に架けられるよう取り計らった。

imperator urbem militibus diripiendam concessit. 司令官は、兵士たちに町を略奪されるままに甘んじた。

9. 動名詞と等価な動形容詞については、§339,1 を参照してください。

17.5.3 動名詞

338. 動名詞は動詞的な名詞として以下のような構文で使われます。

1. 属格: 動名詞の属格は以下のように使われます。

(a) 目的語の属格もしくは同格の属格 (§200, §202) として使われ、名詞を修飾します。

cupiditās dominandī 支配欲

ars scribendī 書く技術

(b) 形容詞と一緒に。

cupidus audiendī 聞きたいと思って

(c) **causā, grātiā** と一緒に。

discendī causā 学ぶために

2. 与格: 動名詞の与格は以下のように使われます。

(a) 形容詞と一緒に。

aqua ūtilis est bibendō. 水は飲むのに有用だ。

(b) (まれ) 動詞と一緒に。

adfuī scribendō. 私は書くのに参加した。

3. 対格: 動名詞の対格は、必ず前置詞を伴います。主に **ad, in** を伴い、目的を表します。

homō ad agendum nātus est. 人は行動するために生まれてくる。

4. 奪格: 動名詞の奪格は、以下のように使われます。

(a) 前置詞を伴わず、手段・原因の奪格などとして (§218, §219)。

mēns discendō alitur et cōgitandō 頭は学び考えることで育つ。

Themistoclēs maritimōs praedōnēs cōsectandō mare tūtum reddidit. テミストクレースは海賊を追い詰めることで、海を平和に戻した。

(b) 前置詞 **ā, dē, ex, in** を伴って。

summa voluptās ex discendō capitur. 最高の快樂は学ぶことから得られる。

multa dē bene beatēque vivendō ā Platōne disputāta sunt. 健康に幸せに生きることについて、たくさんの方がプラトーンに議論された。

5. 動名詞は、属格と (前置詞なしの) 奪格のときだけ直接目的語がとれます。

動名詞の代わりに動形容詞を用いる構文

339. 1. 属格・奪格の動名詞 + 直接目的語 の代わりに、別の構文を使うことができます。非常に頻繁に使います。その構文とは、まず直接目的語を元々の動名詞の格 (属・奪) に変え、動名詞のほうはそれと一致する動形容詞に変えるというものです。これを「動形容詞構文」と呼びます。

- 動名詞構文: **cupidus urbem videndī** (都市を見たいとおもって)

動形容詞構文: *cupidus urbis videndae*

- 動名詞構文: *dēlector ōrātōrēs legendō*. (僕は弁論家を読むのが楽しい)

動形容詞構文: *dēlector ōrātōribus legendīs*

2. 与格の動名詞 + 直接目的語 になりそうなときは、必ず動形容詞構文を用いて、そうなることを避けます。また、前置詞の付いた動名詞に直接目的語を使いたいときも、必ず動形容詞構文を使います。

locus castrīs mūniendīs aptus 陣営を敷くのにふさわしい場所

ad pācem petendam vēnērunt. 和平を請うために彼らはやってきた。

multum temporis cōsūmo in legendīs poētīs. 僕は詩を読むことにたくさんの時間を費やす。

3. 中性形容詞の名詞的用法を使う場合 (§236,2)、あいまいになりますので、動形容詞構文を用いてはいけません。

philosophī cupidī sunt vērum invēstigandī. 哲学者たちは真理を探求することに貪欲だ。(まれ: *vēri invēstigandī*)

studium plūra cognōscendī もっとたくさんのことを知りたいという熱意 (× *plūrium cognōscendōrum* とは言わない)

4. 動形容詞構文は、直接目的語をとらない自動詞では用いられませんが、*ūtor, fruor, fungor, potior* (元々他動詞) は通例、動形容詞構文にしても構いません。

hostēs in spem potiundōrum castrōrum vēnerant. 敵軍は陣地を獲得することを期待していた。

5. 属格 *meī, tuī, suī, nostrī, vestrī* は動形容詞構文において、性も数も通例無関係に用いられます。これらは元々中性単数形容詞の名詞的用法だからです。

mulier suī servandī causā aufūgit. 女は自分を守るために逃げた。

lēgātī in castra vēnērunt suī pūrgandī causā. 使節たちは、自分たちの潔白を証明するために陣営にやってきた。

他にも、*nostrī servandī causā* (自分を守るために) などと使います。

6. 属格の動形容詞構文は、しばしば「目的」を表します。

quae ille cēpit lēgum ac libertātis subvertundae. それを彼は法律と自由を破壊するために受け入れた。

7. 与格の動形容詞構文は、定型句のような場合が時々あります。

decemvirī lēgibus scribundīs 法律を書くための十人委員

quīndecimvirī sacrīs faciundīs 神事を行うための十五人委員

17.5.4 目的分詞

340. 1. -um で終わる目的分詞は、移動の動詞とともに使われて「目的」を表します。

lēgātī ad Caesarem grātulātum convēnērunt. 使節たちが祝辞を述べるためにカエサルに会いに来た。

- (a) -um で終わる目的分詞は、目的語をとることができます。

pācem petitum ōrātōrēs Rōmam mittunt 彼らは和平を乞うために弁論家たちをローマに送った。

- (b) 次の句に注意:

dō (collocō) filiam nūptum. 私は娘を嫁にやる。

2. -ū で終わる目的分詞は、指定の奪格として使われます。*facilis, difficilis, incredibilis, iucundus, optimus* や *fās est, nefās est, opus est* などとともに用いられます。

haec rēs est facilis cognitū このことは学びやすい。

hōc est optimum factū. これが最善のやり方だ。

- (a) -ū で終わる目的分詞として一般的に用いられる動詞は、限られています。主に *auditū, cognitū, dictū,*

factū, visū です。

(b) -ū で終わる目的分詞は決して目的語をとりません。

第 18 章

不変化詞

18.1 等位接続詞

341. 連結接続詞: 連結接続詞は、単語同士・句同士・節同士をつなぎます。

1. (a) **et**: 単純につなぎます。

(b) **-que**: **et** よりつなぎ方が緊密です。特に二つのものが内的なつながりを持っているときに使われます。

parentēs liberique 親と子供

cum hominēs aestū febrīque jactantur 人々が熱情と興奮に振り回されているときに

(c) **atque (ac)**: 通常、つないだもののうち後にくるほうを強調します。「さらに」「～もまた」のような意味です。「類似」「差異」の単語の後ろに **atque (ac)** が現れると、「～と(同じ・違う)」という意味合いになります。

ego idem sentiō ac tū. 僕は君と同じことを思っている。

haud aliter ac ～と違う

(d) **neque (nec)**: 「そして...ない」「～もない」の意味です。

2. (a) **-que** は前接語です。必ず、つなぐ語のうち二つめのほうにくっつけます。句や節をつなげるときは、二つめの節の最初の語にくっつけます。ただし二つめの節の最初の語が前置詞のときは、通例その次の語に **-que** をつけます。

ob eamque rem そしてそのことのために

(b) **atque** は母音の前にも子音の前にも使われますが、**ac** は子音の前のみです。また **ac** が **c, g, qu** の前で使われることもほとんどありません。

(c) **et nōn** は、否定の強調を特定の語に落としたいとき、**neque** の代わりに使われます。

vetus et nōn ignōbilis ōrātor. 年寄りだが無名ではない弁論家

(d) 「どこにもない」「決してない」「一つもない」は、通例 **nec ūsquā, nec umquā, nec ūllus** などと言います。

3. 相関用法: 連結接続詞はしばしば相関的に用いられます。

et ... et ～も～も

neque (nec) ... neque (nec) ～も～もない

cum ... tum ～と同時に～

tum ... tum ～だけでなく～も

頻度は落ちますが、次のような言い方もあります。

et ... neque; neque ... et

(a) 注意: ラテン語は対照関係を強調することが多いので、英語では普通につなげるだけのところを、特に **et ...**

et, et ... neque, neque ... et を使ってよく相關的に表現します。

4. 列挙のしかた

(a) 一連の物事は、連結接続詞なしでつないで列挙していくことができます (連辞省略 §346)。

ex cupiditātibus odia, discidia, discordiae, sēditionēs, bella nāscuntur. 欲望から憎悪、離間、不和、軋轢、戦争が生まれる。

(b) 列挙中にところどころ **et** を挟んでもかまいません (連辞豊用)。

hōrae cēdunt et diēs et mēnsēs et annī. 時間も日も月も年も過ぎてゆく。

(c) 連結接続詞なしで列挙して行って、最後の二つだけを **-que** (まれ: **et**) でつなぐこともできます。

Caesar in Carnutēs, Andēs, Turonēsq̄ue legiōnēs dēdūcit. カエサルはカルヌートイ人、アンデース人、トゥロネース人 (の領地) へ部隊を率いていく。

342. 離接的接続詞: 離接的接続詞は「選択肢」を表現します。

1. (a) **aut**: 選択肢が排他的のとき、**aut** を使わなくてははいけません。

cita mors venit aut victōria laeta. 迅速な死か、幸福な勝利がやってくる。

(b) **vel, -ve**(前接語): 選択肢のうちのどちらでも、という意味です。

quī aethēr vel caelum nōminātur 天上もしくは天国と称される

2. 相関用法: 離接的接続詞はしばしば相關的に用いられます。

aut ... aut ~ ... やら ~ やら

vel ... vel ~ ... やら ~ やら

sive ... sive ~ ... もし...か、あるいはもし~か

343. 反意接続詞: 反意接続詞は「逆接」を表します。

1. (a) **sed** 「しかし」は、単純な逆接です。

(b) **vērūm** 「しかし」は、**sed** より意味が強いです。**sed** のほうがよく出てきます。

(c) **autem** 「しかし一方で」は、話題を移行します。常に後置型です。

定義: 後置型とは、文頭に來ることができず常に一つ以上の語の後ろに置かれる単語のことです。

(d) **at** 「しかし」は、特に口論で、反論を述べるときに使います。

(e) **atquī** は「それにもかかわらず」の意味です。

(f) **tamen** 「それでも」は普通強調したい語の後ろに使いますが、常にというわけではありません。

(g) **vērō** 「だがしかし」「実際には」「本当は」は常に後置型です。

2. 以下のような相関用法があります。

• **nōn solum (nōn modo) ... sed etiam ~ ...** だけでなく ~

• **nōn modo nōn ... sed nē ~ quidem ...** でないのみならず、~ですらない

nōn modo tibi nōn irāscor, sed nē reprehendō quidem factum tuum. 僕は君に怒っていないばかりか、君の行為を非難することもない。

(a) ただし、文に一つの動詞しか含まれず、その動詞が後ろの節にあるときは、**nōn modo nōn** の代わりに **nōn modo** を使ってもかまいません。

adsentatiō nōn modo amicō, sed nē liberō quidem digne est. お世辞は友のみならず、自由民にもふさわしくない。

344. 推論の接続詞: 推論の接続詞は、「前の節『によって』後ろの節」「前の節『にもとづいて』後ろの節」という表現を作ります。

1. (a) *itaque* 「だから」「したがって」
 (b) *ergō* 「それゆえ」「したがって」
 (c) *igitur* (通常後置型¹) 「それゆえ」「したがって」
2. *igitur* は決して *et, atque, -que, neque* と一緒に使いません。

345. 原因の接続詞: 原因の接続詞は、「原因」を表したり「説明」を与えたりします。*nam, namque, enim* (後置型), *etenim* 「というのは」

346. 連辞省略 *Asyndeton*: 対等なものをつなぐとき、接続詞は時々省かれることがあります。特に生き生きした語りや熱のこもった語りが多いです。

1. 連結接続詞が省略される例:

avāritia īfīnīta, īnsatiābilis est. 貪欲には果てがなく、満たされることがない。

Cn. Pompejō, M. Crassō cōsulibus グナエウス・ポンペイユス、マルクス・クラッススが執政官のとき執政官の名前の「名」のほう (*Mārcus, Gaius* など) を表示するときは、接続詞は通例省略されます。

2. 反意接続詞が省略されることもあります:

ratiōnēs dēfuerunt, ūbertās ōrātiōnis nōn dēfuit. 理性は欠けていたが、言葉の豊富さが欠けることはなかった。

18.2 副詞

347. 1. 以下の不変化詞は接続詞に分類されることもありますが、正しくは副詞です。

- *etiam* 「～もまた」「～さえ」
- *quoque* (常に後置型) 「～もまた」
- *quidem* (常に後置型) 前の語を強調します。「実際」「本当に」などと訳せることもありますが、口調で強調するしか訳しようがないことのほうが多いです。
- *nē ... quidem* 「～ですらない」強調される語句は常に間に挟みます。
nē ille quidem 彼ですら...ない
- *tamen, vērō* は接続詞としての用法のほか、副詞として使われることもよくあります。

2. 否定詞: 否定を二回続けると、通例肯定と等しくなります。*nōn nūlli* (～の人もいる) のようにです。しかし、*nōn, nēmō, nihil, numquam* などに *neque ... neque, nōn ... nōn, nōn modo, nē ... quidem* が伴うときは、後者の不変化詞は単に否定を表し、否定であることを強調しています。

habeō hīc nēmīnem neque amīcum neque cognātum. ここには僕は友達も、親類も、誰もいない。

nōn enim praetereundum est nē id quidem. それすら、無視すべきでない。

- (a) *haud* が修飾するのは、キケローとカエサルでは形容詞と副詞と *haud sciō an* の句にほぼ限定されます。それよりのちの作家は、動詞と一緒ににも自由に使いました。

¹ サルスティウスと白銀期のラテン語を除く。

第 19 章

語順と文構造

19.1 語順

348. ラテン語の文の普通の並び順では、主語が最初に立ち、述語が最後に来ます。

Dārīus classem quīngentārum nāvium comparāvit. ダーリーウスは五百隻の艦隊を集めた。

349. ただし、強調のために普通の語順を崩すことがよくあります。その場合、強調したい語は文の最初に持ってきます。頻度は落ちますが、最後に持ってくることもあります。

magnus in hōc bellō Themistoclēs fuit. テミストクレースはこの戦争ですごかった。

aliud iter habēmus nūllum. 僕らに他の道はない。

19.1.1 特殊な原則

350. 1. 名詞: 属格や他の斜格は、通例それがかかっている単語の後ろに来ます。

(a) 名詞にかかるとき

tribūnus plēbis 護民官

filius rēgis 王の息子

vir magnī animī 高貴な心をもった人

ただし **senātūs cōsultum, plēbis scītum** は常にこの順です。

(b) 形容詞にかかるとき

ignārus rērum 物を知らない

dignī amicitīa 友達甲斐がある

plūs aequō 公平(な分)より多い

2. 同格語: 同格語は、通例その主語の後ろに来ます。

Philippus, rēx Macedonum ピリッパス、マケドニアの王

adsentātiō, vitiōrum adjūtrix おべっか、悪の助手

ただし、**flūmen Rhēnus** (レーヌス川) です。また、上手な散文では必ず **urbs Rōma** (ローマ市) と言います。

3. 呼格: 呼格は、普通一つ以上の語の後ろに来ます。

audī, Caesar! 聞け、カエサル!

4. 形容詞: 形容詞の位置については、一般的な法則はありません。ただ、概して形容詞は名詞の前に来ることのほうが、後ろに来るより多いです。

(a) 「量」(「数」を含む)の形容詞は、通例名詞の前に来ます。

omnēs hominēs 全ての人

septingentae nāvēs 七百の船

(b) 語順によって意味が変わることがあります。

media urbs 町の中心部

urbs media 中心の都市

extrēmum bellum 戦争の最後

bellum extrēmum 最後の戦争

(c) **Rōmānus, Latīnus** は通例後ろに来ます。

senātus populusque Rōmānus ローマの元老院と民衆

lūdī Rōmānī ローマの競技

fēriae Latīnae ラティーナの祭日

(d) 形容詞と属格が両方名詞を修飾する場合、形容詞、属格、名詞の順が好まれます。

summa omnium rērum abundantia すべての物の、最高の豊かさ

5. 代名詞

(a) 指示代名詞、関係代名詞、疑問代名詞は、通例名詞の前に来ます。

hic homō この人

ille homō あの人

erant duo itinera, quibus itineribus 二つの道があって、その道で

quī homō? どんな人?

(b) ただし、**ille** を「あの有名な」の意味で使うときは、普通名詞の後ろに来ます。

testula illa あの有名な村八分の風習

Mēdēa illa かのメーデーア

(c) 所有代名詞、不定代名詞は普通、名詞の後ろに来ます。

pater meus 僕の父

homō quīdam とある人

mulier aliqua ある女

ただし、対比のために所有代名詞が名詞の前に来ることもよくあります。

meus pater 僕の父 (君のでも彼のでもなく、「僕の」)

(d) 二つ以上の代名詞が一つの文に出てくるとき、それらを近くにまとめるのが好まれます。

nisi forte ego vōbīs cessāre videor. もしたまたま僕が何もしていないように君に見えなければ

6. 副詞や副詞句は、通例修飾する語の前に来ます。

valdē diligēns はなはだしく注意深い

saepe dixī. 僕はしばしば言った。

tē jam diū hortāmur. 僕らは長いこと君を励ましてきた。

paulō post 少しあと

7. 前置詞: 前置詞は、通例支配する語の前に来ます。

(a) ただし、修飾語が前置詞と名詞の間に挟まることがしばしばあります。

dē commūnī hominū memoriā 人の共通意識について

ad beātē vivendum 幸せに生きるために

(b) 名詞が形容詞に修飾される場合、形容詞は前置詞の前に置かれることも多いです。

magnō in dolōre 大きな悲しみの中で

summā cum laude 最大限の賞賛とともに

quā dē causā その理由で

hanc ob rem この件のために

(c) 倒置法によって前置詞が名詞の後ろに来ることもあります。(§144,3)

8. 接続詞: **autem, enim, igitur** は通例、文の二番目に来ますが、**est, sunt** がいる場合は、三番目になることも多いです。

ita est enim だってそうだから

9. 前の文を指す語句や、前の文の一部を指す語句は、通例文頭に来ます。

id ut audīvit, Corcyram dēmigrāvit. それ (=前文の内容) を聞くや否や、彼はコルクューラに移住した。

eō cum Caesar vēnisset, timentēs cōfirmat そこ (=前文で言った場所) にカエサルがやってくると、彼は臆病者を励ます。

10. 語源的に関係のある単語は、隣同士に並べるのが好まれます。

ut ad senem senex dē senectūte, sic hōc librō ad amicum amīcissimus dē amicitia scripsī. 年寄りに向けて、(僕自身が) 年寄りとして、年寄りに関して(書いた)、つまりこの本には、僕は友に向けて、親友として、友情に関して書いたということだ。

11. 強調を表すための、修辞上の特殊な工夫を以下に挙げます。

(a) 倒置 **Hypēbaton**: 普通一緒にして使われる単語を、離して使います。

septimus mihi Orīginum liber est in manibus. 七巻目の我が「オリーギネース」が執筆中だ。

receptō Caesar Ōricō proficiscitur オーリクスを奪還したあと、カエサルは出発した。

(b) 首句反復 **Anāphora**: 同じ語を繰り返したり、同じ語順の句を繰り返したりします。

sed plēnī omnēs sunt librī, plēnae sapientium vōcēs, plēna exemplōrum vetustās. しかしすべての本が(それで)満ちており、賢者の言葉が(それで)満ちており、古い言い伝えが(その)例で満ちている。

(c) 交差対句 **Chiāsmus**¹: 対句になっている二つの句で、語の順序を変えます。

multōs dēfēndī, laesī neminem 僕は多くの人を退けたが、傷つけたのは一人もいない。

horribilem illum diem aliīs, nōbīs faustum 他の人にとっては恐ろしい、僕らには幸運な、その日を

(d) 破格 **Synchysis**: 句同士を絡め合わせて並べます。ほぼ詩にのみでてきますが、修辞的な散文にも、特に帝国時代にはよくでてきます。

simulātam Pompejānārum grātiam partium ポンペイウス派への見せかけの好意

12. 文末の韻律: 文末において、避けられる韻律とよく使われる韻律があります。

(a) 避けられる韻律

— ∪ — ∪; 例: **esse vidētur** (六歩格の終端)

— ∪ ∪; 例: **esse potest** (六歩格の終端)

(b) よく使われる韻律

— ∪ —; 例: **auxerant**

— ∪ — ∪; 例: **comprobāvit**

— ∪ ∪ — ∪; 例: **esse videātur**

∪ — ∪ —; 例: **rogātū tuō**

¹ 下のようなたすき掛けを、ギリシャ文字 X(キー chi) に喩えた呼び名です。

multōs	×	laesī
dēfēndī		nēminem

19.2 文構造

351. 1. 主語の同一性: 複雑な文では、各々の節の主語は通常同じものにします。

Caesar primum suō, deinde omnium ex cōspectū remōtis equīs, ut aequātō periculō spem fugae tolleret, cohortātus suōs proelium commisit. カエサルは最初に自分の、次に全員の馬を視界から遠のかせ、危険性を同じにし、逃走の希望を取り上げることで、自軍を励まして戦闘を開始した。

2. 主節と従属節で共通の主語や目的語は、両者より前に置きます。

Haedui cum sē dēfendere nōn possent, lēgātōs ad Caesarem mittunt. アエドゥイー人は自分を守ることができないので、使節をカエサルに送った。

ille etsi flagrābat bellandī cupiditāte, tamen pāci serviendum putāvit. 彼は戦いの欲望に燃えていたが、それでも和平に尽力しようと思っていた。

- (a) 以下の場合も同じです。

- i. 主節の主語が、従属節の(直接・間接)目的語である場合

Caesar, cum hōc eī nūntiātum esset, mātūrāt ab urbe proficisci. カエサルは、これが彼(カエサル)に伝えられた後、都市から出発するのを急いだ。

- ii. 従属節の主語が、主節の(直接・間接)目的語である場合

L. Mānliō, cum dictātor fuisset, M. Pompōnius tribūnus plēbis diem dixit. ルーキウス・マーンリウスは独裁官だったのに、護民官のマルクス・ポンポーニウスは一日の仕事をマーンリウスに指示した。

3. 従属節のうち、時・条件・反意の節は主節の前に来ることのほうが多いです。間接疑問と目的・結果の節は、後ろに来ることのほうが多いです。

postquam haec dixit, profectus est. 彼はこれを言った後、出発した。

sī quis ita agat, imprūdēns sit. もし仮に誰かがそうするならば、その人は思慮が足りない。

accidit ut ūnā noctē omnēs Hermae dēicerentur. 一夜のうちにすべてのヘルメス(像)が倒されるということが起きた。

4. 主節の動詞が従属節の中に置かれることも時々あります。

sī quid est in mē ingenī, quod sentiō quam sit exiguum. もし僕の中に何らかの才能があるとすれば、僕はそれがどれだけ小さいか知っている。

5. 掉尾(とうび)文: 主節の中に従属節が埋め込まれるような複文を、掉尾文(英語:Period)といいます。周期のPeriodと同じ語なので、外国語の教科書を読む場合注意してください。

Caesar etsi intellegēbat quā dē causā ea dicerentur, tamen, nē aestātem in Trēveris cōsumere cōgerētur, Indutiomārum ad sē venīre iussit. カエサルは何の理由でそれらが発言されたのか理解していたが、しかしトレウエリーで夏を過ごすことを強いられまいと、インドゥティオマルスに自分のところへ来るよう命令した。

掉尾構文では、文の最後に至るまで、話者の意図がわかりません。ローマの書き手たちは、この構文を非常に好みました。また、ラテン語の屈折語的な性質にもよくあっていました。英語においてはこのような構文は避けられるので、対照的です。

6. 一つの掉尾文の中にたくさんの従属節がある場合、動詞が連続しないようにそれらを並べます。

At hostēs cum mīsissent, quī, quae in castrīs gererentur, cognōscerent, ubi sē dēceptōs intellēxerunt, omnibus cōpiīs subsecūtī ad flūmen contendunt. しかし敵は、陣営で何が行われているか知るための隊を送ったとき、自分たちが騙されていると気付いて、全軍を率いて川へと急いだ。

第 20 章

ラテン語的なスタイル

352. この章では、正式な文法というよりもスタイルというべきな、ラテン語の特徴をいくつか解説します。

20.1 名詞

353. 1. 複数の人・物を別々に指す場合、ラテン語は英語よりずっと複数形の使い方が厳密です。

domōs eunt. 彼らは家に帰る。(英:*They go home*)

Germānī corpora cūrant. ゲルマーニア人は体を大切にする。

animōs militum recreat. 彼は兵士たちの士気をたてなおす。

diēs noctēsque timēre 日夜恐怖する

2. 中性代名詞や形容詞の名詞的用法では、英語で単数のところがラテン語では複数になることがよくあります。

omnia sunt perditā. 全てが失われた。(英:*Everything is lost.*)

quae cum ita sint. それがそうなので(英:*since this is so.*)

haec omnibus pervulgāta sunt. このことは全ての人に知られている。(英:*This is very well known to all.*)

3. ラテン語は普通、英語よりずっと具体的です。特に抽象的なものを個人を用いて表現することにさほど抵抗がありません。

ā puerō, ā puerīs 男の子だったころから

Sullā dictātore スッラが独裁官だったとき

mē duce 僕の指導下で

Rōmānī cum Carthāginiēnsibus pācem fēcērunt. ローマ 人 はカルターゴー 人 と和平を結んだ。

liber doctrīnae plēnus 含蓄に富んだ本

prūdentiā Themistoclis Graecia servāta est. テミストクレースの知恵でギリシャは守られた。

4. 行為者名詞-tor, -sor (§147,1) は、永続性のある、もしくは特徴的な活動を表します。

accūsātōrēs (職業的な) 訴訟人

ōrātōrēs 弁論家

cantōrēs 歌手

Arminius, Germāniae liberātor ゲルマーニアの解放者、アルミニウス

(a) 一回だけの行為を表すには、他の表現を使うのが一般的です。

Numa, quī Rōmulō successit ロームルスの後継者、ヌマ

quī mea legunt 私の読者

quī mē audiunt 私の聴衆

5. 前置詞句で名詞を修飾することは、避けられます。英語で *the war against Carthage* などなるような表現は、普

通以下のように別の言い方をします。

(a) 属格を使う

dolor injūriārum 不正への憤り (英: *resentment at injuries*)

(b) 形容詞を使う

urbēs maritimae 海に面した都市 (英: *cities on the sea*)

pugna Salamīnia サラミスでの戦闘 (英: *the fight at Salamis*)

(c) 分詞を使う

pugna ad Cannās facta カンナイでの戦闘 (英: *the battle at Cannae*)

(d) 関係詞節を使う

liber quī in meis manibus est 僕の手の中にある本 (英: *the book in my hand*)

注意: 前置詞句が名詞を修飾することが絶対にはありません。一定の制限の下であり得ます。特に修飾先の名詞が動詞の派生形であるときに多いです。典型例を以下に挙げます。

trānsitus in Britanniam ブリタニアへの旅行

excessus ē vitā 生からの旅立ち

odium ergā Rōmānōs ローマ人への憎悪

liber dē senectūte 老年についての本

amor in patriam 故郷への愛

20.2 形容詞

354. 1. ラテン語では別の形ですが、日本語に訳すと形容(動)詞になるものがあります。

(a) 属格

virtūtēs animī 精神的な美德

dolōrēs corporis 肉体的な痛み

(b) 抽象名詞

novitās reī 新しい環境

asperitās viārum 荒れた道

(c) 二詞一意 (§374,4)

ratio et ordō 手順通りの順番

ardor et impetus 熱烈な攻撃

(d) 副詞も時々形容詞的に訳せることがあります。

omnēs circā populi 周辺の全ての部族

suōs semper hostēs 自分の永遠の敵を

2. ラテン語の名詞は、日本語に訳すと形容(動)詞 + 名詞 になることがよくあります。

doctrīna 理論的な知識

prudentia 経験的な知識

oppidum 城壁で囲まれた町

libellus 小さな本

3. 形容詞が固有名詞を直接修飾することはありません。ただし、固有名詞と同格に用いられた **vir, homō, ille** 等を形容詞が修飾することはありません。

Sōcratēs, homō sapiēns 賢いソークラテース

Scipiō, vir fortissimus 最強のスキープオー

Syrācūsae, urbs praeclārissima 有名なシュラークーサイ

4. 形容詞が、所有の属格・主語の属格と等価なことがあります。

pāstor rēgius 王の羊飼

tumultus servīlis 奴隷の一揆

20.3 代名詞

355. 1. 複文では、関係代名詞は主節より従属節に結合することが多いです。

ā quō cum quaererētur, quid maximē expēdīret, respondit. そして、何が一番役に立つかと聞かれると、彼は返答した。(quī, cum ab eō quaererētur, respondit. よりも一般的)

2. **uterque, ambō**: **uterque** は「二つとも各々」、**ambō** は「二つとも両方」の意味です。

uterque frāter abiit. 兄弟は二人ともそれぞれ(別々に)出ていった。

ambō frātrēs abiērunt. 兄弟は二人一緒に出ていった。

- (a) 以下の場合、**uterque** は複数形になります。

- i. 複数形でのみ使われる名詞 (§56) と一緒に使うとき

in utrīque castrīs 各々の陣営で

- ii. 二つにわかれたものが、それぞれ複数のとき

utrīque ducēs clārī fuērunt. 両陣営の指揮官たち(どちらにも複数いる)は有名だった。

20.4 動詞

356. 1. 欠如動詞・異態動詞の受動態は以下のように作ります。

- (a) 対応する名詞形 +**esse** 等で表します。

in odiō sumus. 僕らは憎まれている。

in invidiā sum. 僕は羨まれている。

admīratiōnī est. 彼は感心されている。

obliviōne obruitur. 彼は忘れられている。(忘却に覆い隠されている)

in ūsū esse 使われる

- (b) 似たような意味の動詞の受動態を使います。

persequī 受動態 **agitārī** (追跡される)

adorīrī 受動態 **temptārī** (試される)

2. ラテン語には能動完了分詞がないですから、以下のようなもので代用されます。

- (a) 異態動詞の受動完了分詞は時々能動完了の意味になることがあります。

adhortātus 激励して

veritus 畏怖して

- (b) 絶対奪格を用いて

hostium agrīs vāstātis Caesar exercitum redūxit. 敵の領地を破壊したのち、カエサルは軍隊を撤退した。

- (c) 従属節を用いて

eō cum advēnisset, castra posuit. 彼はそこに着いてから、陣営を設置した。

hostēs quī in urbem irrūperant 都市になだれ込んで来た敵

3. 不定の人を指すために二人称単数を使う用法が、英語と同様に存在します。(英: *You can drive a horse to water, but you can't make him drink.* 人は馬を水場へ連れていくことはできるが、飲ませることはできない「説明まではできるが、説明を受けた人がその通りにするかはわからない」) ただしラテン語では、この用法はある種の接続法に限られています。特に可能性 (§280)・命令 (§275)・審議 (§277) の接続法、それから §302,2, §303 の条件文です。

vidērēs. 人には見えるだろう。

ūtāre vīribus. 力を使え。(不定の人への命令)

quid hōc homine faciās? この人をどうする気だ?

mēns quoque et animus, nisi tamquam lūminī oleum īnstillēs, exstinguuntur senectūte. 頭と心も、たとえばランプに油を注がなければ、加齢によって衰えていく。

tantō amōre possesiōnēs suās amplexī tenēbant, ut ab eīs membra divelli citius posse dicerēs. 彼らはすごい愛着心で自分の所有物に抱きつきしがみついていたので、余計に早く彼らから四肢が引きちぎれてしまったと言えるだろう。

20.5 対格の注意事項

357. 1. 「～年後、～年前」等を表すのに、差異の度合の奪格 + **post, ante** (§223) を使うほか、以下のような表現も使えます。

post quīnque annōs 五年後

paucōs ante diēs 数日前

ante quadriennium 四年前

post diem quārtum quam ab urbe discesserāmus 僕らが都市を出て四日後に

ante tertium annum quam dēcesserat 彼が死ぬ三年前に

2. 一つの不定詞に主語と目的語が両方結合することはまれです。

まれ: **Rōmānōs Hannibalem vīcisse cōnstat.**

このような文はあいまいです。「ローマ人がハンニバルに勝った」のか「ローマ人にハンニバルが勝った」のかわかりません。このような場合、受動態不定詞を用いると意味が明確になります。

Rōmānōs ab Hannibale victōs esse cōnstat. ローマ人がハンニバルに征服されたのは、確かだ。

20.6 与格の注意事項

358. 1. 英語の *for* はラテン語の与格にだいたい当たりますが、必ずしもそうではありません。*for* は **prō** に相当することも多いです。すなわち以下の場合です。

- (a) 「～をまもるために」

prō patriā morī 祖国のために死ぬ

- (b) 「～の代わりに」

ūnus prō omnibus dixit. みんなを代表して一人が言った。

haec prō lēge dicta sunt. これらは法の代わりに言われた。

- (c) 「～に比例して」

prō multitudīne hominum eōrum finēs erant angustī. 人口の割には、彼らの土地は狭かった。

2. 英語の *to* も、移動を意味する場合は **ad** になります。

- (a) ただし、*scribere ad aliquem* と *scribere alicui* は、どちらも言えます。前者は移動の意味合いが強い場合、後者は弱い場合に用います。同様の表現がいくつか存在します。
3. 詩では、「～と混ぜる」「～と対立する」「～に参加する」「～に掴まる」等の動詞が時々与格をとります。この構文はギリシャ語由来です。

sē miscet virīs. 彼は人々に混じっている。

contendis Homērō. 君はホメーロスと論争する。

dextrae dextram jungere 手に手をとる。

20.7 属格の注意事項

359. 1. 所有の属格は「所有者」に重きをおきます。所有の与格は「所有しているという事実」に重きをおきます。

hortus patris est. 庭園は父のものだ。

mihi hortus est. 僕は庭園をもっている。

2. ラテン語では *stultī est dicere* と *stultum est dicere* (言うのは馬鹿げている) とも言えます。ただし、単数主格語尾が一種類だけの形容詞は、属格のみが使えます。

sapientis est haec sēcum reputāre. これを自分で考えることは、賢い(ひとのすることだ)。

第 VI 部

韻律論

360. 韻律論の部では、拍子と韻律形式を学びます。

第 21 章

韻律論

361. ラテン語詩: ラテン語の詩は、英語の詩とは本質的に異なります。英語の詩は「強弱」に基づきます。そして詩の形式の本質は、「強い」「弱い」音節の並び方にあります。一方で、ラテン語の詩は強弱ではなく「長短」に基づきます。ラテン語の詩形は、「長い」「短い」音節の並び方、時間間隔の長短の並び方で決まるのです。このように詩の形式が英語とラテン語で根本的に異なるのは、二つの言語の性質の違いからくる自然な帰結です。英語は強弱アクセントの言語です。音の長短はあまり意味をなしません。一方でラテン語には音の長短があります。そして音の強弱はあまり意味をなさないのです。

21.1 母音の長さ・音節の長さ

21.1.1 一般的な規則

362. 母音の長さ・音節の長さの一般的規則については、§5 に述べました。詩において注意すべき事項を以下に述べます。

- 母音の後ろに母音が続くとき、はじめの母音は普通短いです (§5,1,b)。ただし以下のような例外があります。
 - 属格の語尾 *-ius* (*alterius* を除く): *illius, tōtius*。ただしこの *i* は、詩では短いことがあります: *illius, tōtius*。
 - 第五曲用の属格・与格: *diēi, aciēi*。ただし *fidēi, rēi, spēi* です (§52,1)
 - fiō* の変化形。ただし *fit* と *fier-* を除く: *fiēbam, fiat, fiunt*。 (*fieri, fierem*)
 - その他少数の語。特にギリシャ語由来の語: *dīus, Aenēās, Dārīus, hērōes* 等。
- 二重母音は普通長いです (§5,2,a,ii)。ただし複合語の中の前置詞 *prae* が母音の前に来るときは、短くなることが多いです: *prāēcūtus*。
- 短い母音を含み、後ろに二つの子音が続く音節は長いです (§5,2,a,iii)。二つめの子音が別の単語のものであっても、です: *terret populum*。後続の子音が二つとも別の単語のものであっても、その音節は長いことが多いです: *prō segete spicās*。
- iaciō* の複合語は、*inicit, adicit* 等と書かれていても、*inji-, adji-*と書かれるのと同じで、最初の音節は長いのです。
- ā, ē* は後ろに *j* が続くとき、長い音節になります: *major, peior, ejus, ejusdem, Pompejus, rejēcit* 等。これらは *mai-jor, pei-jor, ei-jus, Pompei-jus, rei-jēcit* 等と発音されたからです。 *i* が続くときも時々同じこととなります: *Pompei* (*Pompei-i* と発音)、 *re-iciō* (*rei-iciō* と発音)。

語末の音節の長さ

A. 母音で終わる語末の音節

363. 1. 語末の **a** はたいてい短いです。ただし以下の場合は長くなります。
- (a) 第一曲用の単数奪格: **portā**。
 - (b) 命令形: **laudā**。
 - (c) 無曲用語 (**itā, quīā** を除く): **trīgintā, contrā, posteā, intereā** など。
2. 語末の **e** は普通短いです。ただし以下の場合は長くなります。
- (a) 第五曲用の単数奪格: **diē, rē, hodiē, quārē** もです。 **famē** (§59,2,b) もここに分類されます。
 - (b) 第二活用の命令形: **monē, habē** 等。ただし **cavē, valē** のように短いこともよくあります。
 - (c) 第二曲用の形容詞から派生した副詞: **ferē, fermē**。ただし **benē, malē, temerē, saepē** は短いです。
 - (d) **ē, dē, mē, tē, sē, nē** 「～でないように」, **nē** 「確かに」。
3. 語末の **i** は普通長いです。ただし **nisī, quasī** では短いです。 **mihi, tibi, sibi, ibi, ubi** は通例短い **i** ですが、時々長い **ī** になります。また、 **ibidem, ibique, ubique** では常に長いです。
4. 語末の **o** は通例長いです。ですが以下の場合短くなります。
- (a) **egō, duō, modō** 「だけ」, **citō**
 - (b) 動詞の一人称単数と第三曲用の主格は、まれに短くなります。 **amō, leō**
 - (c) **pro** で始まる複合語で、短いことがたまにあります。特に **f** の前で多いです: **prōfundere, prōficisci, prōfugere**。
5. 語末の **u** は常に長いです。

B. 子音で終わる語末の音節

364. 1. **s** 以外の子音で終わる語尾の音節は、短いです。ただし以下の語では長くなります: **sāl, sōl, Lār, pār, vēr, fūr, dīc, dūc, ēn, nōn, quīn, sīn, sic, cūr**。また副詞 **hic¹, illic, istic** でも長くなります。
2. **-as** の形の語尾の音節は、長いです: **terrās, amās**
3. **-es** の形の語尾の音節は、通例長いです。ですが以下の場合は短くなります。
- (a) 第三曲用歯音幹で、かつ属格の後ろから二番目の音節が短いものの単数主格・呼格: **segēs (segetis), obsēs (obsidis), milēs, divēs**。ただし、長いものも少数存在します: **pēs, ariēs, abiēs, pariēs**。
 - (b) **ēs** 「君は...だ」, **penēs**。
4. **-os** は普通長いです。ただし **ōs (ossis), compōs, impōs** は短いです。
5. **-is** は普通短いです。ただし以下の場合長くなります。
- (a) 複数形: **portīs, hortīs, nōbīs, vōbīs, nūbīs** (対格)。
 - (b) 接続法二人称単数完了能動態: **amāverīs, monuerīs, audiverīs** 等。しかし例外もよく出てきます。
 - (c) 第四活用の直説法二人称単数現在能動態: **audīs**。
 - (d) **vis** 「力」, **īs** 「君は行く」, **fis, sīs, velis, nōlis, vīs** 「君は望む」 (**māvīs, quamvīs, quīvīs** 等も)
6. **-us** は普通短いです。ただし以下の場合長くなります。
- (a) 第四曲用の単数属格と、複数主格・対格・呼格: **fructūs**。
 - (b) 第三曲用の名詞のうちで、**u** が語幹に属するものの単数主格・呼格: **palūs (-ūdis), servitūs (-ūtis), tellūs**

¹ 代名詞 **hic, hoc** と副詞 **huc** の母音は、おそらく短かったと考えられます。音節が長いのは、**hicc, hocc, huce** のように発音されていたためです。

(-ūris)。

365. ギリシャ語の名詞はラテン語でも元の長さを保ちます: *Aenēa, epitomē, Dēlos, Pallas, Simoīs, Salamīs, Dīdūs, Parīdī, aēr, aethēr, crātēr, hērōās*。ただしギリシャ語の名詞でも $-\omega\rho$ (-ōr) で終わるものは、通例語尾の音節の母音が短くなります: *rhētōr, Hectōr*

21.2 詩の構造

21.2.1 一般的な規則

366. 1. 詩においては、短い音節が韻律の一単位になります。その単位を専門的には「拍」*mora* (˘) と呼びます。長い音節 (—) は二拍と等価になります。
2. 韻脚は音節の集まりです。もっとも重要な基礎韻脚を以下に挙げます。
- | | |
|------------|--------------|
| 三拍の韻脚 | 四拍の韻脚 |
| —˘(トロカイオス) | —˘˘(ダクテュロス) |
| ˘—(イアンボス) | ˘˘—(アナパイストス) |
3. 詩行は韻脚を連続させたものです。
4. 詩行は、その構造の基礎をなす韻脚の種類によって、トロカイオス調、イアンボス調、ダクテュロス調、アナパイストス調と呼ばれ、分類されます。
5. 強音 *Ictus*: 基礎韻脚の各々において、長い音節は他の短い音節より自然と目立ちます。このように目立つところを強音^{*2}と呼びます。˘˘; ˘˘と表記します。
6. 抑音部 *Thesis* と揚音部 *Arsis*: 強音になる音節を抑音部、韻脚のうち残りの部分を揚音部と呼びます。
7. 母音脱落: 語尾が母音・二重母音もしくは *-m* で、次の単語が母音が *h*-で始まっているときは、語尾の音節は通例脱落します。読み上げるときは、脱落する音節を完全に無視して読みます。このことを次のように表示します:
corpor^e in ūnō; mult^{um} ill^e et; mōnstr^{um} horrendum; caus^{ae} irārum。
- (a) 母音脱落を起こさないことを母音接続 *Hiatus* と言います。特に短音節の間投詞に見られます: *Ō et praesidium*。
8. 韻脚の中で単語が切れることを、中間休止 *Caesūra* と呼びます。どの詩行にも、目立つ中間休止が普通一つ存在します。単語の切れ目と韻脚の境目が一致することを一致切 *Diaeresis* と言います。
9. 詩行は不完全か完全かで分類されます。不完全な詩行とは、最後の韻脚が不完全で、一つ以上の音節を欠くものです。完全な詩行とは、最後の韻脚が完全なものです。
10. 詩行の末尾では、小さな休止が入ります。ですから最後の音節は長くても短くてもかまいません (*syllaba anceps*)。また、次の詩行が母音で始まっても、末尾が母音や *-m* で終わることもあります。
11. イアンボス調、トロカイオス調、アナパイストス調の詩行は、さらに二歩格、三歩格、四歩格と分類されます。これは、韻脚二つで一歩と数え、それが詩行にいくつ含まれているかによるものです。ダクテュロス調の詩行は韻脚一つで一歩と数え、四歩格、五歩格、六歩格と分類されます。

21.2.2 注意事項

367. 1. 母音融合 *Synizēsis* (*Synaéresis*): 単語の内部で二つ連続する母音は、一つの長い音節にまとめられることがよくあります。

^{*2} 強音は、アクセントではありません (強弱アクセントでも高低アクセントでもない)。基礎脚韻 (トロカイオス、イアンボス、...) の中の長い音節が、長いことによって目立つ、という長さの効果を表しています。

aur{ei}s, d{ei}nde, ant{ei}re, d{ee}sse

2. 音節延長 *Diástole*: 普段は短い音節が、時々長くなることがあります。

vidēt, audīt

3. 音節収縮 *Sýstole*: 普段は長い音節が、時々短くなることがあります。

stetērunt

- (a) 音節延長・音節収縮は、単なる気まぐれの変化ではありません。これらは普通、標準発音の波に押されて消えてしまった、初期の発音を表しています。

4. 子音の後ろの i,u は、時々 j,v に変わります。その場合、前の音節は長くなります。

abjete abiete; genva genua

5. v が u になることもあります。

silua silva; dissoluō dissolvō

6. 詩行に一つ余分な音節が含まれることがあります。そのような詩行を音節過剰 *Hypérmeter* と呼びます。余分の音節は母音が -m で終わり、次の詩行の初めの母音が h-と融合します (格調連繫 *Synaphéia*)。...

... ignārī hominumque locōrum^{que}

errāmus

7. 分語法 *Tmesis*: 複合語は、よくその要素に分割されます。

quō mē cumque rapit tempestās quōcumque

8. 語中音脱落 *Sýncopē*: 二つの子音に囲まれた短母音は、時々脱落します。

repostus repositus

21.2.3 ダクテュロス六歩格

368. 1. ダクテュロス六歩格は英雄詩形とも呼ばれ、理論的には六つのダクテュロスからなります。しかし五つめを除くすべての韻脚は、ダクテュロスの代わりにスpondeios (—) になってもかまいません。六つめの韻脚はスpondeiosかトロカイオスのいずれかになります。どちらでもかまいません。なぜなら、詩行の最後の音節は長くて短くてかまわないからです (*syllaba anceps*)。以上を図にすると下のようになります。

⏏, ⏏, ⏏, ⏏, ⏏, ⏏.

2. 五つめの韻脚がスpondeiosになっている詩行も時々あります。そのような詩行はスpondeios調と呼ばれます。普通、四つめはダクテュロスになり、五つめ・六つめの韻脚は一般的に四音節語になります。

armatum^{que} aurō circumspicit Ōrīōna.

cāra deum subolēs, magnum Jovis incrēmentum.

3. 中間休止

- (a) ダクテュロス六歩格の中間休止の位置は、三つめの韻脚の抑音部の後ろが好まれます。

arma virumque canō || Trōjae quī primus ab ōris.

- (b) 中間休止の位置は、四つめの韻脚の抑音部の後ろに来ることもあります。そのときは普通二つめの韻脚にも中間休止があります。

inde torō || pater Aenēās || sic ōrsus ab alt^o est.

- (c) 中間休止の位置は、三つめの韻脚の二つの短音節の間に来ることもあります。

Ō passi graviōra || dabit deus hīs quoque finem.

この中間休止を女性的と言います。それに対して、長音節の後ろの中間休止 (上記 a,b) を男性的と言います。

- (d) 四つめの韻脚の終わりに休止が入ることが時々あります。これを牧歌的一致分切と呼びます。ギリシャの牧

歌詩をローマ人がまねたものです。

sōlstitium pecorī dēfendite; || jam venit aestās.

21.2.4 ダクテュロス五歩格

369. 1. ダクテュロス五歩格は二つの部分からなり、どちらもダクテュロス二つと長音節一つからなります。前半部においては、ダクテュロスはスpondeiosに置き換わってもかまいません。しかし後半部はダクテュロスのみが使われます。前半部の最後の長音節は、常に単語の終わりと一致します。図にすると下のようになります。

⏑ ⏑ ⏑ ⏑ ⏑ || ⏑ ⏑ ⏑ ⏑ ⏑

2. ダクテュロス五歩格が単独で使われることはありません。常に六歩格と一緒に使われます。ダクテュロス五歩格と六歩格が交互に並ぶことを、哀歌二行連句と言います。

Vergilium vidī tantum, neo amāra Tibullō

Tempus amicitiae fāta dedere meae.

21.2.5 イアンボス調の韻律

370. 1. イアンボス調の詩行で一番重要なのはイアンボス三歩格 (§366,11) で、六詩脚 *Sēnārius* とも呼ばれます。六詩脚は完全詩行です。六個のイアンボスからなります。純粋な形は以下のようになります。

beātus ille quī procul negōtiis

中間休止は普通三つめの韻脚に現れます。四つめに來ることもあります。

2. 最後の韻脚以外では、イアンボスの代わりにトリブラキユス (⏑⏑) が現れることがあります。奇数番目 (1,3,5) の韻脚は、スpondeios・ダクテュロス・アナパイストスになってもかまいません。ただしダクテュロス・アナパイストスはあまり出てきません。プロケレウスマティコス (⏑⏑⏑) が現れることもあります。
3. 喜劇 (プラウトゥス・テレンティウス) には大きな自由度がありました。ダクテュロス・アナパイストス・スpondeios・トリブラキユス・プロケレウスマティコスが、最後の韻脚を除けば、どれも自由にイアンボスにとって代わることができました。

第 22 章

文法への補足事項

22.1 ユリウス暦

371. 1. ローマの月の名前は、*Jānuārius*, *Februārius*, *Mārtius*, *Aprīlis*, *Majus*, *Jūnius*, *Jūlius* (紀元前 46 までは *Quīntilis*^{*1}), *Augustus* (帝国以前は *Sextilis*), *September*, *Octōber*, *November*, *December* です。これらの語は正しくは形容詞で、暗黙の *mēnsis* と一致しています。
2. 日付は、一か月の中の三点を基準に数えます。
- (a) *Kalendae*: その月の一日目。
- (b) *Nōnae*: *Īdūs* の (*Īdūs* を一と数えて) 九日前。普通その月の五日。*Mārtius*, *Majus*, *Jūlius*, *Octōber* では七日。
- (c) *Īdūs*: 普通その月の十三日。*Mārtius*, *Majus*, *Jūlius*, *Octōber* では十五日。
3. 日付は、この三点から逆に数えます。ということは、*Īdūs* より後の日付は、すべて次の月の *Kalendae* から数えて何日前、という数え方になります。
4. *Kalendae*, *Nōnae*, *Īdūs* の前日は、*prīdiē Kalendās (Nōnās, Īdūs)* といいます。二日前は *diē tertio ante Kalendās (Nōnās, Īdūs)* です。同様に、三日前は *diē quartō ante ...* です。この言い方は計算が間違っているように見えますが、ローマ人は順番を数えるとき両端を一と数えたのでこうなっています。したがってローマ人の日付は、*Kalendās*, *Nōnās*, *Īdūs* までの実際の日日にちより常に一だけ大きくなります。
5. 日付を表すとき、月の名前は形容詞として、*Kalendae*, *Nōnae*, *Īdūs* と一致する形で付加されます。以下のようにいろんな言い方ができますが、d. が最も一般的です。
- (a) *diē quīntō ante Īdūs Mārtiās*
- (b) *quīntō ante Īdūs Mārtiās*
- (c) *quīntō (V) Īdūs Mārtiās*
- (d) *ante diem quīntum Īdūs Mārtiās*
6. これらの言い方は、名詞として扱って前置詞 *in*, *ad*, *ex* を冠することができます。
- ad ante diem IV Kalendās Octōbrēs* 九月二十八日まで
- ex ante diem quīntum Īdūs Octōbrēs* 十月十一日から
7. うるう年は、二月の二十五日目に余分に日を挿入します (二月二十四日を二回数えます)。二月二十四日は *ante diem VI Kalendās Mārtiās*、二月二十四日 (うるう日) は、*ante diem bis VI Kal Mārt* といいます。

372. カレンダー:

^{*1} ローマの年は、もともと *Mārtius* から始まっていました。 *Quīntilis* (第五の月), *Sextilis* (第六の月), *September* (第七の月), ... が現在の七月、八月、九月にあたるのは、そのためです。

日付の呼び方

日	Mārtius, Majus Jūlius, Octōber	Jānuārius, Augustus December	Aprīlis, Jūnius September, November	Februārius
1	KALENDĪS	KALENDĪS	KALENDĪS	KALENDĪS
2	VI Nōnās	IV Nōnās	IV Nōnās	IV Nōnās
3	V "	III "	III "	III "
4	IV "	Prīdiē Nōnās	Prīdiē Nōnās	Prīdiē Nōnās
5	III "	NŌNĪS	NŌNĪS	NŌNĪS
6	Prīdiē Nōnās	VIII Īdūs	VIII Īdūs	VIII Īdūs
7	NŌNĪS	VII "	VII "	VII "
8	VIII Īdūs	VI "	VI "	VI "
9	VII "	V "	V "	V "
10	VI "	IV "	IV "	IV "
11	V "	III "	III "	III "
12	IV "	Prīdiē Īdūs	Prīdiē Īdūs	Prīdiē Īdūs
13	III "	ĪDIBUS	ĪDIBUS	ĪDIBUS
14	Prīdiē Īdūs	XIX Kalendās	XVIII Kalendās	XVI Kalendās
15	ĪDIBUS	XVIII "	XVII "	XV "
16	XVII Kalendās	XVII "	XVI "	XIV "
17	XVI "	XVI "	XV "	XIII "
18	XV "	XV "	XIV "	XII "
19	XIV "	XIV "	XIII "	XI "
20	XIII "	XIII "	XII "	X "
21	XII "	XII "	XI "	IX "
22	XI "	XI "	X "	VIII "
23	X "	X "	IX "	VII "
24	IX "	IX "	VIII "	VI "
25	VIII "	VIII "	VII "	V (bis VI) "
26	VII "	VII "	VI "	IV (V) "
27	VI "	VI "	V "	III (IV) "
28	V "	V "	IV "	Pr. Kal. (III Kal.)
29	IV "	IV "	III "	(Pr. Kal.)
30	III "	III "	Prīdiē Kalendās	
31	Prīdiē Kalendās	Prīdiē Kalendās		

(括弧内はうるう年のときの呼び方)

22.2 固有名詞

373. 1. ローマ市民の名前は、通例三つの部分からなっていました。praenōmen (名)、nōmen (氏族名)、cognōmen (家名) です。典型例を挙げれば、Mārcus Tullius Cicerō (Mārcus が praenōmen、Tullius が nōmen、Cicerō が cognōmen) です。二つめの cognōmen が付されることも時々あります (後期のラテン語では agnōmen と呼ば

れました)。特に軍功をたたえて付されました:

Gāius Cornēlius Scīpiō Āfricānus

2. 固有名詞の略称は次のように書かれます:

A. = Aulus	Mam. = Māmercus
App. = Appius	N. = Numerius
C. = Gāius	P. = Pūblius
Cn. = Gnaeus	Q. = Quīntus
D. = Decimus	Sex. = Sextus
K. = Kaesō	Ser. = Servius
L. = Lūcius	Sp. = Spurius
M. = Mārcus	T. = Titus
M'. = Mānius	Ti. = Tiberius

22.3 文法と修辞法の変則

22.3.1 文法の変則

374. 1. 省略 (ellipsis): 一つ以上の語を省略すること。

quid multa どうして多くを (語らないといけないのか)?

2. 要語省略 (brachylogy): 表現を簡潔に凝縮すること。

ut ager sine culturā fructuosus esse nōn potest, sic sine doctrinā animus. 地は耕さなければ実らないように、精神は学ばなければ (実らない)。

要語省略には特別な変種があります。

(a) くびき語法 (zeugma): 一つの動詞が二つの役割を担います。

minis aut blandimentis corrupta 脅しにやられたか、お世辞に (やられた) か

(b) 簡潔比較: 物そのものの代わりに、その物の修飾語に言及します。

dissimilis erat Charēs eōrum et factis et mōribus. カレース (の行動と性向) は、彼らの行動やら性向やらと違っていた。

3. 冗語法 (pléonasm): 表現を不必要に冗長にすること:

prius praedicam. 最初に前もって言うておこう。

4. 二詞一意 (hendiadys, ἔν διὰ δυοῖν): 二つの名詞を接続詞でつないで、名詞 + 属格 (形容詞) の意味を表すこと。

febris et aestus 発熱の熱さ

celeritate cursūque 速い走り

5. 予弁法 (prolepsis): 何かの行動の結果を表す修飾語を、その行動の前に用いること。

submersās obrue puppēs. 沈没した船を打ちのめせ (= 船を打ちのめして沈める)

(a) 従属節の主語となるべき名詞・代名詞を、主節の目的語として用いるときにも、予弁法の名は使われます:

nōsti Mārcellum quam tardus sit. お前はマールケッルスがどれだけのろまか知っている。

どちらの予弁法も、使われるのは主に詩だけです。

6. 破格 (anacolúthon): 文法的に矛盾した構文のこと。

tum Ancī filii ... impēnsius eis indignitās crēscere. そこでアネクスの子供たちは……より激しく彼らへの憤慨は大きくなった。

7. 前後倒置 (hýsteron próteron): 二つの語句を、自然な順とは逆に並べること。

moriāmur et in media arma ruāmus. 戦場の只中に突進して死のうぞ。

22.3.2 修辞法の変則

375. 1. 緩叙法 (*litotes*): あることを、その対義語を否定することで表現すること。

haud parum labōris 少なくない苦役 (= たくさんの苦役)

nōn ignōrō. 僕は知らなくはない。 (= 僕はよく知っている)

2. 矛盾語法 (*oxymoron*): 矛盾した観念の組み合わせ。

sapiēns īnsānia 分別ある狂気

3. 頭韻法: 同じ文字 (語頭であることがほとんど) を頻繁に繰り返す単語列を使うこと。

sēnsim sine sēnsū aetās senēscit. 少しずつ気づかぬうちに生涯は終わりに近づいていく。

4. 擬音法 (*onomatopœia*): 意味と音を似せること。

quadrupedante putrem sonitu quatit ungula campum. 馬は疾駆して荒野を騒音で震わせる。